
心から

オオトリページ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心から

【Nコード】

N7486C

【作者名】

オオトリページ

【あらすじ】

駄目ダメな兄が愛する妹達の幸せを守るために四苦八苦するお話。ただ、愛する妹達は何やら兄である自分を蔑んだり、テロリストは世界に戦争を仕掛けてきたり、友人知人は変人ばかりで困った事にもかかわらず、兄自身、威厳は無いわ、金は無いわ、平和は無いわの三拍子！？とりあえず、バトルアクションラブコメディって事で…？

とまあ、前半はそんな感じのあらすじでオツケーだったんですけど…。後半部分は、主に不思議SF系バトルアクションになりつつあります（笑）とにかく、興味のある方は是非、

足を止めて御覧になって下さい。少しでも、これを読んで楽しんで頂ければ幸いです！！ 更新休止中

第一話：朝の出来事

心って、なんだと思う？

進化してきた人の脳が作り出す、ただの思考回路？それとも、パソコンみたいに電気信号を送って作り出す演算システム？

・・・いずれにしろ、俺にとって心とは一生を費やして理解しなければならぬ重要な課題だ。

「ふむっ…朝だな。また…また、寝むれなかった」

さて、乗っけから意味のわからない事を言ったが。まあ、つまり所、俺が人と心を通わせる事が苦手という事だ。だから、俺は常に人と心を通わせる方法を考えているのだ。

そして、この寝不足もそれが関係している。

俺には二人の妹がいる。それは、それは目に入れても痛くないほどの可愛さである。・・・なんなら、鼻の穴でも良い。

いや、まあ、「冗談は置いとくが。最近、その二人の妹の内一人が冷たいのだ。

何か俺に対する態度や視線が痛い。しかも、お兄ちゃんと呼んでくれなくなった。

俺は…寂しい。ウサギは寂しいと死んでしまうというが、その俗説は嘘だ。野生のウサギは縄張り意識が強いため一人の事が多い。大体、寂しくて死ぬなら密猟や森林伐採を平気でするこの世の中だ、ウサギは既に絶滅しているよ。

・・・まあ、寂しくて死んでしまうのは俺だな。妹に嫌われた・
・死のうかな？はははっ・・・（泣）

「邪魔!!」

「うおっ？」

洗面所で歯を磨いていた所。噂の妹が俺の後方で汚物を見るかのような視線で睨みつけていた。

「おはっ、おはよう!!」

とりあえず、朝の挨拶だ。まあ、返してくれんと思うがね・・・。

彼女、今日は機嫌が良いらしい。彼女から俺に話かけてくれるなんて…最近は美味いと評判のケーキ屋で彼女の好物のいちごケーキ

を買ってきた時以来だ。

「……………はようっ」

「……………ほらーっ！！いつもは、挨拶しても返事すら返してこないのにー。今日はおはようって言ったよ。なあ？なあ、なあ、なあ！？アンタも聞いただろ？」

ああー、今日はもう良い日だ！！まだ、朝だけど、良い日だよー。

「うざっ！！ボケツとしてないで早く、どいてよ」

「あつ、ああ、スマン」

いかん！！せっかく彼女の機嫌が良いのに、俺とした事が…………。

「姉、兄をいじめるな」

また、俺の後方から声がした。

「ん？柊か。おはようー。…別にいじめてないわよ。ただ、このオジさんが邪魔だったから邪魔って言っただけよ」

俺まだ、二十代なんだけど…………。

「兄、兄も姉に言い返さないと駄目だ。兄は威厳を示すものだ…」

この娘はまだ幼いというのにすっかりしている。そのすっかりは、若干10歳だというのに既に立派なお母さんだ。炊事・洗濯・掃除にゴミ出し、完璧なのだ。

・・・ゴミ出しは俺の仕事だが。

「兄、そのように馬鹿な顔でばーっとしているから姉に嫌われるのだ。ちゃんとしろ、兄!」

あつ、それが原因だったのか?寝ずに考えたのに思いもしなかったよ…。よし、ちゃんと…

「いや、存在自体が嫌いだから」

そんざいいー!?どうしようもないじゃないですか?存在を否定されたら、もう、死ぬしかないじゃないですか!?

「兄が…兄の顔が、もの凄い事に…」

「・・・朝からウザイ奴」

・・・トドメですか!?

第一話：朝の出来事（後書き）

こんにちは。

これは、もう一方の物語が煮詰まったため、息抜き？として書いたショート連載のつもりの小説です。

まあ、やはり下手なのですがね…（笑）

お馬鹿な兄と今時な？妹と小さいのに大人びた妹のお話です。もう一つの物語同様、暖かく見てやって下さい。…すぐ、完結しそうですが（笑）

では、失礼致します。ありがとうございました。

兄の名は未だに無し…どうかの誰かさんみたいだ（笑）

第二話：朝ご飯

朝食ってなんだと思う？

俺は、今日一日を頑張るための重要な・・・

「何その顔？別に食べてくれなくても良いんだけど？何！？文句あるの？」

ありません。はい、全くありません。・・・例えば、真つ黒のトースト & amp; 白玉焼きでも・・・。

食べますよ、僕は。発ガン性物質だろうとね。

「・・・姉、私は無理だ。別の物を要求する」

ええっ？俺の頑張りには！？

「はい、柊。ちゃんと出来たやつ・・・」

えええーん？何それ？なら、最初からそれを出せば良いじゃん！？

「あ、アンタはそれだから。上手に出来たの二人分だけだし」

嫌がらせかい！！やっぱ、嫌われてる？

「兄、私のを少し分けてあげよう」

まあ、何て良い子に育ったんでしょ？どこかの娘とは大違いだわ
！？

「じゃ、アスパラのベーコン巻きのアスパラを兄に…」

嫌いな物を俺に押し付けしないで下さい。

「コラッ、柊！！好き嫌いしない！！って、お兄ちゃん！！アンタ
もしぶしぶと受けとるな！！」

いやだって、柊が……。んっ？いま、お兄ちゃんって！？

「聞いてんのオジさん！？」

聞き間違いでした。……。いや、だから、俺まだ二十代だよ！！

「兄、あ〜ん。トマトを食べさせてあげよう」

・・・嫌いな物を俺に押し付けないで下さい。

「柊いっつ!!」

もぐもぐっ。

柊が無理矢理に野菜類を食べさせられている……。必死の抵抗も空しくひよいひよいと彼女の口に野菜類が入っていく。……。てか、逆効果では？

「ふー、妹に野菜を食べさせるのにも一苦労だわ」

もぐもぐっ。

「ご苦労様、桜子。」

柊は、青い顔で止まってるけど。暫くしたら、口の中の物を飲み込むだろうさ。ホント、ご苦労さん。

「!?!?・・・アンタ、私の分…食べたわね!?!」

へっ？何を言ってるの？俺はちゃんと俺の目の前の皿から。

・・・あれ、何か。確認してなかったから桜子の皿から取ってたみたい・・・。ヤバイよね、コレ？

「このっ！！馬鹿兄がああああっ！！」

ぎゃゃゃゃゃあっ！！顔面にマジパンチイッ！？
ていうか、ていうかあ！！俺が悪いのか、コレEEEEエッ！？

第二話：朝ご飯（後書き）

こんにちは。

なんかこつちの物語の方が思い付きます。一個一個が短いからでしょうか？

この物語の兄は愛すべき馬鹿野郎ですね。でも、妹想いの良い兄です。：私もこんな馬鹿で優しい兄が欲しかったです。（そんな思いが物語に反映してたり？）

では、今回はこの辺で失礼します。ありがとうございました。

兄の名はまだか！？（笑）

第三話：行つて来ます

さて、朝飯食つたし仕事に行くか！！

ん？何だ、仕事って何だと思つて聞かないのかだつて？

・・・正直、毎回は面倒だよ。たまに、たまにするよ。
というわけで、今度からたまにの方向で・・・。
て言つても二回しかやってないけどね（笑）

「兄、ネクタイをちゃんとしないと駄目な大人だと思われるぞ」

つと、確かに。さすが、小さいお母さんの柊だ。

「いや、既にそいつは駄目な大人だよ、柊」

オイッ！？

…本当、最近俺に対してきついよな。マジで嫌いなのか俺の事？

「姉、兄は駄目なんじゃない！！」

そつだ！！駄目なんじゃないぞ！！流石、柊だ。本当、良い子だよ。

「子供なんだ!!」

いや、もう、ホント、すいません!!それくらいで勘弁して下さいよ!?

「まあ、どっちでも良いけど…さっ、学校行こう柊」

「はい」

そう言い玄関へと向かう二人。

「じゃあ、兄。行って来ます」

「はい、行ってらっしゃい」

毎回、柊は俺に行って来ますをする。どうやら、これをしないと学校に行く気にならないらしい。

まあ、普通の家庭なら当たり前なんだろうけどね。でも、可愛らしいし、言われた俺も嬉しいよ、なんか…。

「ほら、柊。行くよ」

それに比べて桜子は、俺に挨拶どころか目も合わさないし。・・・

どこで間違えたかな？

「・・・きます」

小さい頃は、それは、それは可愛いくて。いや、今も充分可愛いけど。いやいや、そうじゃなくてね。昔はお兄ちゃん、お兄ちゃんって俺の後を・・・

「行ってきますって、言っでんしょうがあああっ!!」

「うわっ!？えっ?えっ?…行つてらっしい?」

何?何が起こったの?桜子がいきなり大声で行ってきますって、ええっ?・・・かなり、嬉しいんだけど!?

とりあえず、二人を見送った後、後片付けなどをする俺・・・。
実質、お母さんは俺?

参ったなあ。まだ、結婚もしてないのに俺ったら、炊事・洗濯・

掃除に裁縫・ゴミ出しまで完璧だよー！？

これは、もう、あれだね。良い所にお嫁さんに行くしかないね・・・。

「...あつ、もう俺も行かないと」

くだらない事を考えていたら、いつの間にか、9時過ぎになっていた。

急がないと遅刻する。

柊に言われた通りにネクタイをちゃんと締めてつと・・・

「行つてきまーす」

で、言っても、誰も居ないんだけどねえ。

・・・ふむつ、行つてらっしゃーい、俺！！みたいな？

第三話：行つて来ます（後書き）

こんにちは。

書き溜めしてたので少し多く投稿します。

ただ、本当に手早く書いてしまつて、物語りのに大丈夫なのか不安です。

…まあ、何を基準にして大丈夫なのか意味不明なんですがね（笑）

では、失礼します。ありがとうございました。

…と言つても直ぐに次話を投稿？

第四話：授業参観

最近の学校ってハイテクなんだね…。

今日は授業参観です。妹の普段の学校生活を見に来ましたよ。ちなみに小学4年生の柊の方です。

てか、この学校おかしいだろ？いくら防犯だからって隠しカメラや赤外線センサーはやりすぎだろ！？…引っ掛かつちゃったじゃないか。

「えゝ、であるから…」

「先生、そこは式1に式2を代入するんじゃないんですか？」

最近の小学生って、頭良いんだね…。俺には何をしているのか解らないよ。

「あゝ、じゃあ、空海さん」

おっ！！柊が指された。…あゝ、うちは空海と書いて『うつみ』って呼ぶんだよ？

えっ？今更、名字紹介はないだろだって？いやいや、俺に関しては未だに名前を名乗れてねえ！！という事よ、コレ！？

「先生、私はまだ未熟者ゆえその問題は荷が重すぎます…」

…柊君？何か頭良さげな返答だけと言ってる事はつまり、自分は頭が良くないよって事だね？…お兄ちゃん、悲しいよ。

「…では、この問題は？」

「それは、数学が得意な黒木君が解く方が良いと思います」

「ええっ！？空海さん、僕はさっき違う問題を答えたよ！？」

妹よ。潔く、散って来なさい…。

「じゃ、藍川さんが良いです」

「ふえええっ？柊ちゃん、私もさっき別の問題解いたよ？」

「沙希、人間とは色々な事を反復する事によって己を鍛えなければ

ならない存在なんだ…。さあ、藍川沙希！！もう一度解け！」

何を力説しとるか！？いい加減に諦めて問題を解かんかい！！

「…先生、後ろの保護者が怖いです。即刻、我が兄を退場させて下さい」

「うおいつ！！お兄ちゃん、悲しいぞ？柊は良い子だと思っていたのに。そんな、そんな、桜子みたいな事を言うなんて！？」

「ああー、空海さん、それから、お兄さんも今は授業中ですので…」

「…すみません」

全く、今日はどうしたんだ、柊？いつもより、口数が多いし性格も桜子みたいだ…。緊張かな？

「…できました」

「全く、今日はどうしたんですか、空海さん？いつもならパパッと難問すら解いてしまうのに」

えっ？ そうなの柊？ やっぱり緊張？

「いえ、若輩者ですから」

…今日の朝飯に何か悪い物でも入ってたかな？

第四話：授業参観（後書き）

こんにちは。

はい、直ぐに次話を投稿しました（笑）

やっと、彼等の名字が出ました。第四話目にして…遅っ！？

まあ、しかし、兄の名前が出てこないよりはましな方ですね。
…
頑張れ兄！！（笑）

では、この辺で失礼します。ありがとうございました。

…さらに、直ぐ次話投稿！？

第五話：二日酔いな兄

二日酔い、それは現代に置ける悩ましき病気である。・・・生活習慣病、又の名を成人病という病気達の一種と考えてもよい病気だ。

「兄…臭い」

すいません、昨日の酒が未だに抜けなくて…。

「全く、いい歳して何やってんのよ？馬鹿？」

いい歳だからですよ…。逆にいい歳じゃなかったらもつと駄目ですよ？

「うおっ！？うつっ、うえええっ…」

まずい、何かヤバイよ…。あ、死んだ親父が見える。おおー…

「てか、借金返してから死ねよな糞親父いいいいうつええええっ！？」

「兄、錯乱してる?」

「自業自得よ」

マジでヤバイ。死んだ親父にツッコミを入れちまったよ…。あ、なんか、柊の視線が痛い。まずい、兄としての威厳を…

「ひ、柊。兄が何故このような事になっているか分かるかな?」

「…自己管理がなくてなく、お酒を飲む量をセーブ出来なかったからですか?」

「…ずばり、そうだね（泣）」

「いやいや!! 確かに、確かに、それもある。しかし、男には誘われて断れない時もあるのだよ。特にヤクザ顔の上司が怖い顔で誘って来た時とか…」

「…要するに兄はヤクザ顔が恐かったと?」

「うん!!」

「…兄の威厳も糞もねえな、はははっ（泣）」

「…でも、兄はヤクザから逃げなかったのですね…カッコいいです。兄を尊敬します。えらいです」

あれ？何か結果オーライ？いや、純真な柊だからこそかな？

「はい、薬。付き合いも良いけど、体。大事に下さいよね…一応、我が家の大黒柱なんだから」

・・・はい、すみませんでした。ありがとう。

「兄、ヤクザと知り合いという事は借金があるという事か？」

・・・上司ね、上司。

「借金あるの？」

「いや、いや。桜子まで何を言ってるの？無いよ借金なんて…」

「しかし、兄。さっき、借金を返してから死ねよな親父、と言って

いたではないか…？」

あー、言っただけそんな事？

「その借金はね、もう、返したからもう良いの」

「でも、あつたんだ借金。…知らなかった」

うわー、桜子が暗くなってる。だから、隠してたのに、俺の馬鹿。

桜子は人一倍こういう事気にするからなあ。うわあー、暗くなつたよー、雰囲気が一…。たぐ、お前達は気にする事ないのに…。

俺はお前達、妹には楽しく、おかしく、幸せでいて欲しいんだよ。金の心配なんかなくて良いんだよ。

「いくら？いくら借金あつたの？」

家一軒建つぐらい…で、言えるわけねえー！！話題を、話題を変えなければ…

「桜子、最近太った？」

「はあああつ！？いきなり、何を言い出すのアンタ？」

よし、話題が変わった。ここから、一気に！！

「いや、だって何かウエスト辺りが太くなっ…」

「ガッデム！！死ねえ、馬鹿兄がああああつ！！」

「ひつ、ぶええええつ！！」

「兄が、素敵顔で崩れていく…しかも、何か口から吐き出してるよ？」

ぐふっ、話題を変えたのは良いが…二日酔いだっただ事を忘れて…
た。

第五話：二日酔いな兄（後書き）

こんにちは。

これで、一日連続投稿終了です。早く完成した話なので至らぬ所が多々見られたと思いますが、何卒、御容赦の程を・・・。

第五話は少しシリアス？ですね。死んでしまった父親と借金・・・まあ、馬鹿兄が一生懸命にやりくりしているのでしょうね・・・。愛すべき馬鹿野郎ですが（笑）

次の話は兄の職業が一体何なのかわかる話です。・・・ヤクザ顔の上司の正体とか。

それでは、今回はこの辺で失礼致します。ありがとうございました。

妹（上）の名前・桜子、妹（下）の名前・柊、兄の名前・・・？（笑）

第六話：休日ですよ（前編）

今日は休日。平日なのに休みなのさあゝ。

しかし、何をしたものの。今日は本当に暇だ。

「へえ、教育テレビって面白いんだねえ」

…なんか俺、朝からやること無くて、教育テレビを見てる事しかない不登校の中坊みたいだな。

「はあ、早く桜子が柊が帰って来ないかなあ」

俺は寂しいと死んでしまふ…。まさに直ぐ壊れる硝子のハートなのだ。

「おつ、これスゲーな。良く考えてあるよ、このピタゴなんか…」

…虚しい…空しい？あつ、どっちも同じ意味だ。

面白い人間はいかね。折角の休日なのにやる事がないとは。

「ぴんぽん」

何だ？この間の抜けたインターホンは…というか口で言ってる？

「ピン、ポン、パン、ポン。日本のアイちゃん、素晴らしい攻防？
…そりゃ、ピンポンだ！！」

変態だ。ぜえーったい、変態だ。

「うおおい、開ける。開けないと、夜が明けるぞ？」

誰が開けるか！！我が家の平和は俺が守る！！

「むっ？…おかえり、柊ちゃん」

「おかえり、柊いいっ…っ…いつ？」

「にひん」

だあああっ！！しまった、つい条件反射で…てか、にひんて笑う

な！！ああ、こんな時間に柊が帰ってくるはず無いのに、何をやってんだよ俺わあー！！

「お邪魔します」

意外と礼儀正しいな、おいっ！？

「て、勝手に入んな。何しにきたんだよ？帰ってくれ」

「切手にはりやがれ？カエルにやってくれ？…先輩、馬鹿ですか？」

煩いよ。出てけよ、何だよカエルにやるって？切手を貼って手紙をカエルにやる？…意味がわからん。

「何ですか、ここん家は？お客にお茶の一杯も出ないんですか？」

勝手に人の家の茶菓子をバリバリ食ってるような奴を客とは言わない…。

「お前何しに来たんだよ！？俺には、今日は健全なる休日過ごす予定が…」

「朝から教育テレビを見る事ですか？」

ぐつ、凶星だよ。そうだよ、休みだというのに俺には何もする事
ないよ、悪いかよ!？」

「先輩、折角だからデートしましょう」

何がデートだ。何が悲しくてお前とデートせにゃなんのだ。

「てか、お前仕事は？」

「…昼休みです」

「嘘つけ、ゴラァ!!こんなに早い昼休みがあるか!?!まだ、
10
時前だぞ!?!」

コイツ、絶対、仕事中に抜け出して来たな…。

「ほ、本当ですよ?捜査で近くに来たケド、意外と早く終わったか
ら昼休みを貰って先輩の所に来たんですよ」

「なら、署に帰れ。昼休みつてのは嘘だろ。ヤクザに怒られるぞ」

「松居警部は、署に帰りました」

「なら、お前も帰れよ」

たく、コイツの考えてる事が一つも理解出来ない。…こんなだから、警察は世間で税金ドロボー呼ばわりされるんだよ。

「先輩、休日はやる事ないでしょ？」

「…何でそう言いされる？」

「だって、先輩は仕事命の人ですから。趣味とか無いでしょ？妹さん達もいないし、手持ち豚さんですね」

手持ち無沙汰な。豚さんって『ぶさた』だから…。

「さあ、デートを…」

「帰れ」

「じゃあ、お別れのキスを…」

「帰れえええっ!!」

第六話：休日ですよ（前編）（後書き）

こんにちは。

前回、兄の職業がわかると言いました。はい？分かりにくいですか？すいません。

でも、何となく分かりますよね？まあ、近いうちに兄の職場を書きます。その時に、はっきり職種と役職が分かります！！

では、この辺で失礼します。ありがとうございました。

次話は『休日ですよ』後編です。空海家の家庭事情がほんの少しわかります。

第七話：休日ですよ（後編）

今日は休日…。何もやる事がない。

さっき、仕事の後輩が来たがウザイ奴なので速攻でお帰り願いました。

「はぁ、疲れた。休みなのに疲れるって…何かオジさんぽいな、俺」

ガツカリだ。まだ、20代だからとか妹に言っていたのに…やっぱ、オジンなのか？

そういえば、最近俺の枕がオジさん臭いような…うわぁ、へこむなぁ。

「はぁ、掃除でもして夕飯の買い物にでも行こう…」

商店街。スーパーとかも良いが俺はこの義理と人情溢れる場所が大好きだ。

「あら、なつちゃん。今日はどうしたの？こんな時間にいるなんて、休み？」

「ええ、平日なのに休みですよ。何もする事なくて早めに夕飯の買い物に来ました」

「はははっ、そうねえ。警察は忙しいから、趣味とか作れないわよねえ？」

八百屋の女将さん。元気で逞しい人だ。俺がガキの頃から何度もお世話になっている恩人だ。

「おおっ！？なつ坊じゃねえか？どうだ？この鮭いらねえか、安くしとくぞ？」

「ん、じゃあ、三切れ下さい」

「へい、毎度ー！！」

魚屋の親父さん、うちの親父の幼馴染みで、やっぱりガキの頃からお世話になっている。

幼い頃から世話になって、母さんが死んでしまった時も親父が死んだ時も色々良くしてくれた商店街の皆…。

この商店街は俺の、プロパティPropertyであり故郷なのだ。

「兄、魚は嫌だ。今日はパスタが食べたい」

「うおっ！？ 柊？」

びつくりした。いつのまに横に？

「柊、学校は？」

「もう終わりました。兄、魚じゃなくパスタ」

「いや、でも…」

「柊ちゃん、魚も美味しいぞ？」

「魚屋は全員、同じことを言う…」

コラ、柊。止めなさい。

「はははっ、確かに、魚屋は魚が美味いって言うよなあ？ あはははっ」

「兄、パスタ」

何？この子のこのパスタへの飽くなき執着心は！？

「なつ坊、なら、パスタに鮭を入れるのはどうだ？鮭フレークに
てよ？」

「魚屋！！良い案だ。それは、とても良い案だ！！」

…柊さん、年上の人には敬語を…。

「兄？…兄はパスタ…嫌？」

むっ、訴えるような上目遣い…可愛い。

「じゃ、鮭フレークパスタにしよう」

「やった」

さて、あと台所用洗剤が切れてたな。これは、スーパーだな。

第七話：休日ですよ（後編）（後書き）

こんにちは。

またまた、直ぐに次話投降を試みました。

空海家の家庭の事情、分かりました？第六話の兄の職業よりは分かり易いかと…？

さて、兄の名前がやっと出ました。いや、妹達に比べかなり引つ張りましたよ。

えっ？…でも、まだ愛称？フルネームでは無い！？

…何なんでしょうねえ、全く（笑）

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

次話にて、兄のフルネームが…まだ、引つ張るし（笑）

第八話：兄と仕事

仕事って、何だと思う？

俺的には、自分又は家族を養うための手段だと思うんだ…。

だから、俺はどんな仕事だろうと頑張って取り組もうと思う。大好きな家族のため、妹達が何も不自由しないように…。

例え、どんな仕事でも…。

「だから、刑事さん。食い逃げなんだって。ちよこつと見ない内に居なくなってたんだよ」

食い逃げ…今時？

「成程、背は140センチぐらいで性別は女性ですか…」

食い逃げ…。何を食べたんだろう？

「ふむ、水色のＴシャツに桃色のスカート…」

あ、肉うどんか！？…ああ、俺も肉うどん食いてえー。

「貴様！！真面目に仕事しろっ！！」

「うわっ！？びっくりした！！」

「びっくりした…ではない！！真面目に仕事をしないか！！」

「いやだつて、食い逃げでしょ、氷川警部補。そんなの交番勤務の奴らがやる事じゃないですか…？」

「馬鹿者！！どんな事件だろうと真面目に取り組む、警察官として常識だ！！」

てっ、言われましても…。俺達は県警のデカですよ？刑事と書いてデカと読む、あれですよ？それが、食い逃げ犯って…。

「はあ、では空海巡查。聞き込みに行ってます…」

さて、そのアンタ…突然で何の事が分からないだろうが…。

俺は、いま仕事なのだ。何の仕事かというと…刑事さんだ。ちなみに階級は巡査だ。

空海夏樹・27歳・職業・刑事ってね。はあ、早く帰りたい。仕事なんて地獄だ…。

前に俺は仕事命の人間だ、とか言われたけど、別にそんな事は無い。ていうか、むしろ俺は仕事したくない派だ。

ほら、よく『僕はねえ、今自分にあつた職業を探しているんだ。えっ？どんな職業が良かった？…そうだなあ、楽してお金が儲かるやつかな？』って、いう奴らがいるじゃん？…俺は、そんな奴らに近い存在だ。だから、仕事の合間を見つけてはよくさぼっている。

ただ、俺が仕事をしないと家族が路頭に迷う事になるので、とりあえずそれなりの仕事はしている…。

「とは言つものの、食い逃げ犯人を追うはめになるとは…はあ」

ああ、帰りたい。こんな仕事嫌だ。俺は、実は引きこもりなんだぞ？あれだぞ？あの、日の下を歩くと数分で肌が焼ける生物なんだぞ？

つまり、こんな真つ昼間から外を歩くななんて自殺行為だつての！

！……、言っても自分から聞き込みするって外に出てきたんだだけ
ね。

「んっ？」

何やら下から俺の服をチヨイチヨイと引っ張る奴がいるんだけど。

「……………」

「……………」

俺も服を引っ張っている相手も口を開かない……。何故、俺が口を
開かないかと言うと、何かこの子がめっちゃ俺の顔を凝視してくる
からだ……。

「あの何かな？お兄さんに何か用？」

……プレッシャーに負けた。ていうか、何でこの子は俺の服から手
を離さないんだ？

「あの？……もしもーし？」

あれ？無反応？おーい、お兄さん、何が何だか訳がわからないよ
ー？

「コロッケ…」

キャベツに人参、玉ねぎ、なりー！！…このギャグがわかる奴が
何人いる事やら（笑）

「…コロッケ？」

「コロッケ…」

そう言い服を引っ張る少女？は、コロッケを売っている精肉店を
指さした。

ああ、コロッケか…、て何が？

「…あの、もしかして俺に…買えと？」

まさか、そんな理不尽な。てか、非常識だろ？道行く他人に物を
ねだるのは…

「買え」

非常識いいいつ！？

たかがコロッケされどコロッケだよ？…意味わからんけど。

第八話：兄と仕事（後書き）

こんにちは。

これ、続きます。もしかしたら長くなるかも…？

最初の方で『息抜きで書いてみたウンタラ、カンタラ』と言っていたのに最早、影も形も…ははっ。

話は長くなり、文章はガタガタになるかもしれません。

しかし、もう少しこのまま、この物語にお付き合い下さい。よろしくお願い致します。

さて、第八話目です。兄の仕事、わかって頂けたと思います。

しかし、まあ、刑事とは…馬鹿兄にしてはまとも過ぎですね（笑）

ただ、あまり、警察関係は詳しくないので27で平巡査はありなのか無しなのか良くわかりません…。どうなのでしょう？

まあ、何にしろ兄の仕事っぷりはちよくちよく書いていきたいと思っています。お楽しみに！？

それでは、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

名無しの兄！！改め、空海家・長男・空海夏樹^{うつみなつき}！！

やっと、名乗れた兄。…でも、何か今更って感じが…（笑）

第九話：兄とコロッケ少女と…

1200円…。

いや、別にね。良いんだよ？

ただ、80円のコロッケにして…15個。お腹、壊さなきゃ良いんだけど…。

「ご馳走さま」

このコロッケ少女の服装は水色のシャツにピンクのスカートだ。
別段、おかしな点は無いのだが…あれ、何かどこかで聞いたような？

49

「お礼する」

「え？お礼？…いや、別に良いよ」

どうやら、この少女はコロッケをご馳走して貰った代わりに何かお礼をしたいようだ。

まあ、確かに1200円は小遣いの少ない俺にしてみれば痛い出費だが、別に少女にコロッケを奢ったくらいでお礼だなんて…ねえ？

「私、殺し屋…」

は？殺し屋？

「お礼…嫌い人殺す」

…つまり、お礼として君が俺の嫌いな奴を葬り去ると？

いやいやいや、君は何を言っているのかな？…て、何それ？妙に見慣れた物なんだけど？

「ん？…コレ、銃」

銃だね。うん、間違いなくリボルバー式の拳銃だね…

「て、駄目えええっ！！なんて物を持っているですか、君は！？」

意味がわからないよ…。何故、このような少女が拳銃などを持っているんだ？

「と、ととと、とりあえず、その銃はお兄さんに渡そうね？ほら、コッチ…こら、逃げるな」

俺が無理矢理に銃を没収しようとした所、少女は抵抗した。いや

いやと頭を振り、一向に銃から手を離さない。

「なああっ！！いい加減にしろおおっ！！お兄さん、本気で怒るからなあっ！！」

子ども、お年寄り、女性には比較的優しい俺だが、遂に憤怒した！！

だって、危ないだろ。こんな幼い少女が拳銃を持っているなんて、平和なこの国には有り得ない事なんだ！！

「だから、お兄さんに拳銃を…」

「…バン！！」

ぎゃあ、撃たれたあ！？死ぬうう！？

「て、んな訳がねえだろ！！早く渡せええっ！！」

この後…こんなやりとりが1時間近く続いたのだった。

「はあ、はあ… な、なあ。 いい加減、渡さない？」

疲れた…。 なんなんだこの子のこの体力は、ちょっと普通じゃないぞ？

「嫌っ。 これ… 大事」

大事って、拳銃だぞ？ 一体、どんな代物だってんだ。

「とにかく、そんな危険な物、人の多い商店街で…、！？」

何だ…！？ 少女とのやりとりで気が付かなかったが、いつの間にか商店街から人の気配が消えている…。

少女が拳銃を所持していたので、とりあえず裏路地に移動して話していたのだが…。

その裏路地まで聞こえていた商店街の賑わいが、先程から聞こえなくなっていた。 一体、何がどうなって…

「こんにちは」

！？、いつの間に…？

不意に声をかけられ俺は驚いた。声をかけてきた男は至近距離だったというのに全く気付けなかったのだ。

黒服の男…。温暖化が激しく、日中にて30 を超す暑さだというのにこの男は汗すらかいていない。

しかし、さつきから気付けない事だらけだ。

静かさを保ったままの商店街に、気配すら感じられなかったこの黒服の男。

「ふふつ、どうかしましたか？」

「いや、別に…」

男は不気味な笑みを浮かべている。

刑事をやっていると何かしらわかる事があるのだが、この男は…ヤバイ！！

もちろん、理屈などはない。ただ、俺の直感がそう告げるのだ…

この男は危険だ!!

アラート!アラート!...アラート!...だど。

第九話：兄とコロッケ少女と…（後書き）

こんにちは。

第九話目です。話数だけ見ると『葉月君』を超えました…。息抜きが本気に？（笑）

さて、コメディなんですがシリアス路線に乗ってしまいました。自称殺し屋のコロッケ少女と謎の黒服男…。

この話…兄が、というか空海家が大変な事になる予定です。ただ、行き当たりばったりなのでどうなる事やら…。

では、今回はこの辺で失礼致します。ありがとうございました。

コロッケ少女と黒服男の正体とは？

…しかし、コロッケ少女は無かったかな？（笑）

第十話：激動の流れにて、始まり（前書き）

シリアス編、完・全・始・動！？

…ああ、待って引き返さないでえ！！

第十話：激動の流れにて、始まり

大学を出て、親父と同じ警官の道を選び進んで約五年…。曲がり形にもそれなりにやってきたつもりだ。

それでも手柄は大きい物から小さい物まで数々取ってきた。

…まあ、同じ数だけのヘマもやらかしたので未だに平巡査なのだが。

しかし、これまで培ってきた足で稼ぐ捜査や直感による事件解決といった刑事に必要とされる能力は、どんな刑事にしろと負けはしない。

そして、今まさに俺の直感は冴えに冴えわたり…。この場から逃げ出す事を提案してきている。

「七号。あなたは、このような場所で何をしているのですか？件の任務は果たしたのですか？」

七号…。どうやら、このコロッケ少女の事を差しているようだ。

「…予定、早く終わった。だから…コロッケ」

俺が先程この少女にコロツケを買い与えたのだ。仕事で食い逃げ犯を捕まえるため商店街をウロウロしていた所、少女が俺にコロツケを買うよう懇願してきたからだ。

「良くわかりませんが…そちらの方は、お知り合いですか？」

「いや、俺はただ、この少女を補導した警官だ」

迂闊だっただろうか？この黒服の男は、銃を所持していたコロツケ少女の仲間だ。そして、何より『任務』と言う所から何やら危険な匂いがする。

もし、俺の勘が当たっていればこの手の手合いは警官に対し良い印象を持っていないはずだ。

不気味な程に静けさが際立ち、俺の全身から汗が吹き出す。日中にて30 前後、だが、そういう訳じゃない。

目の前にいる一人の男。この黒服の男、この男からの異様な威圧感が俺を襲っているのだ。

異様な空間に俺の全感覚が麻痺をする。

男は俺を見据えたまま、不気味な笑みを浮かべる。だが、それが上辺だけだと感覚が麻痺している俺にもわかる。笑みを浮かべている筈の男、しかし、彼からは俺に対する敵意しか感じられないのだ…。

「ふふふっ、まあ、そう固くならず…」

彼が口を開いたと同時に麻痺していた感覚は戻り、先程まで金縛りにでもあったかのようにがちがちだった体は力が抜け今にも倒れそうになった…。

一体、何が起きたのだろうか…。俺には全くわからない。

彼は最初から同じ笑みを浮かべていたというのにさっきは、体がこわばり汗が吹きだした。そして、頭がぼーっとし、俺は…死をも連想させられた。

ふらふらっ、と体が揺れる。足下がおぼつかない。

「しかし、あなたも運が…無かった。これから、始まる新世界を見られないとは…」

新世界？この男は何を言っているのだろう。思考が追い付かない…。今度は、酔っぱらった様な感覚が俺を襲う。

「まあ、しかし、多大な犠牲の上に成り立つこの作戦ですから…さようなら異国の人よ」

ああ、そうか。冴えに冴え渡る直感が俺に告げる…お前はここで死ぬのだと。黒服の男が鈍い光を放つナイフを取り出し段々と近付いてくる。まるで、殺し慣れた殺戮者のように、いや、正にこの男がそうなのだろう…。

27年…。27年間も生きた筈なのに俺にはこの殺戮者に対しての対処法を知らない。ただただ、死を受け入れる。それしか無い。

男の間合いに俺が入ったのか彼は一瞬にして消える。この殺戮者は左下から鈍く光るナイフで俺の喉を掻っ切るつもりだ。

ヒュン！！

風切り音が妙に耳に付く。痛みは無い…。プロとはこういうものなのだろうか、あまりにも巧く相手に痛みすら感じさせず殺すのだろうか…？

否…否、否、否！！

27年間、何も無かった？…ざけんな！！俺の人生を甘く見て貰っては困る。殺戮者に対する対処法を知らない？ああ、知らないさ。知らないが何だ？…俺には、もっと格上の相手と戦った経験がある。それに、俺は死ぬ訳にはいかない。だから、だから！！

「馬鹿な？このタイミングで、避ける！？」

一瞬だが死を受け入れた俺は男の攻撃に対し数秒のタイムラグが

ある。つまり、出遅れたという事だ、が…俺は奴のナイフを避け、更には奴の腕をも掴んだ。

「これは…よろしくないですね」

「だあはっ！！やべえ、お前の術にやられる所だった…」

一級の殺戮者は、その眼光、仕草、喋りを以って相手を惑わし、そして、死を受け入れさせるといふ。つまりは、一種の催眠術。そして、今まさに俺も同じ事をされたのだ。

「がああっ！！何か頭きた！！この俺に死を受け入れさせようとしやがって、喰らいやがれ！！」

死ぬ事を連想させられ、死ぬ事を受け入れさせられた…頭にくる。俺は怒りに任せて男の顔面をおもいきり殴り飛ばした。

ドスン、と奴は宙を舞い地面に叩き付けられる。俺の渾身の一発、人間さえもブツ飛ばす！！

「ぶふうっ、ぐふあっ！？」

殴り飛ばされ、地面に叩き付けられ、奴は悶絶する。妙な威圧感

も今となっては皆無に等しい……ていうか、もう慣れた。

「くっくく」

クソか？　コノヤロウか？　まあ、どちらでも良いが、言った瞬間さらにブツ飛ばす！！

切れた俺はいつも増して凶悪だ。妹達の前では良い？兄を演じているため、最近では穏やかな性格が板に付いてきたが…。

実際は、どちらかというと粗暴に近い。

[illegible]

「!？」

不気味。口から血をダラダラと流し、犬歯を剥き出しに、目を見開き俺を凝視し笑う。先程の冷静さの欠片も無い黒服の殺戮者…。

「面白い。実に興味深い人物だ……」

いや、冷静は保っている。あれだけの大声で笑っていた男と同じ男とは思えないぐらいに冷静だ。ゆっくりと立ち上がり、今度は静かな瞳で俺を凝視する。

「素晴らしい！！いや、本当に素晴らしい！！是非、貴方に見て貰

いたい…。これから始まる新世界を！！」

「新世界、ねえ…」

先程から繰り返し、この男が言っている『新世界』という言葉…。

…心あたりが無くも無い。3年前のエントランスビル事件。

階にして60階の大型ビルが爆破された事件。その犯人が何度も繰り返して言っていた言葉…それが『私は新世界を創成する』という言葉だった。

「何を…するつもりだ？」

模倣犯…。また、あの悪夢を繰り返すというのか？そんな事は許さない、絶対に…だ！！

「ふふつ。貴方は頭も良いよう…。新世界というフレーズ、気になるですか？」

どうやら、俺の心が奴に見透かされたようだ…。

「よろしい！！では…始めましょう。新世界へのカウントダウンです。さあ、耳を澄ませて…」

何がよろしい、だ。こっちは全然良くないんだよ。だが、そんな俺の思いに反し、男はカウントダウンを始める。

「…五、…四、…三、…二、…一、…」

一体、何が始まるというのか？全く見当もつかない。そして、黒服の男が『零』とカウントダウンを終えた。

瞬間！！ドオオオンと爆音が辺りに木霊する…。

「！？、テメエ…何しやがった？」

男に聞くが俺は理解している。この状況でこの爆音…模倣犯。まさに、あの悪夢がまた繰り返されるといふのだ…。

「くくくつ、いや何。ビルをね、ちょっと…爆破させて貰ったんです」

予想通りというか、何と云うか…許せねえ、本当に許せねえ。何の罪も無い人達を傷付ける行為。例え、それが、神だとしても、俺は…許せない！！

「さて、私達はまだやる事が沢山あります。貴方ばかりに付き合っ
てはいられない。さあ、七号。行きますよ」

先程から俺達のやりとりを静観していたコロツケ少女。

俺に至っては、目の前の黒服男に気を取られ存在すら忘れていた
…。が、彼女と一緒に連れて行かせる訳にはいかない。そして何よ
り、この男を今逃がしては、大変な事になる。だから、俺は立ち
はだかった。

「俺が行かせると…思っているのか？」

少女を抱き寄せ、男に銃を向ける。忘れているかもしれないが俺
は刑事なのだ。だから拳銃を所持していても変ではない。

コルト デティクティブ38口径・回転式拳銃。使い勝手は良い
とは言えないが、殺傷能力は充分にある。

「止められますか？この偽りの平和に毒された、愚国の民の貴方に
…」

眼光が鈍く光る。これが殺戮者の瞳。全てを破壊し消しさるテロ
リストの瞳だ。だが、引き下がらない、理由が無い。逆に止める理
由ならば沢山ある。だから、俺は戦う。この国を戦場にする訳には
いかないから…。

誰でも無い、俺の大切な家族のために！！

「止めてみせるさ」

戦後、平和を貫いて来たこの国で…戦争から最も遠いこの国で…。
世界の全てを巻き込んで事件が始まる…。

運命と言うには、あまりにも酷で…必然と言うにはあまりにも突
然の出来事。

どうやら世界は、俺が思っている以上に激動に流れつつあるよう
だ…。

第十話：激動の流れにて、始まり（後書き）

こんにちは。

…前書き不要！？（笑）

まあ、さて置き。大分、書くのに時間がかかりました。しかし、私的には優・良・可の内…良、に入る出来栄かと？

ていうか、小心者なのでいくら自信があろうが口が裂けても優とは言いません！！大体、他の作者さんと自分を比べたら…ぎゃあっ！！

と、半日もしくは三日間はヘコみますよ、ええ。

さらに、さて置き（笑）

第10話目です。完全に『葉月君』に圧勝ですが。コメディ路線が見えません。シリアス路線まっしぐら…。

今回は、話に深く入り込みましたね。兄の職業紹介が遂には、テロリストとの対決に。

普段は妹達に優しく、お馬鹿な兄ですが…やはり、刑事といった所でしょうか。ただ、兄に何かダークな一面が…？

それでは今回はこの辺で失礼致します。ありがとうございました。

まだまだ、続くシリーズ編！！

第十一話：エントランスビル事件

静けさが木霊する商店街の裏路地…。

生暖かい風が俺の体にまとわりつく。日中にて30 前後…嫌な汗が頬を伝い流れる。

「どうしました？ああ、弾切れですか？」

余裕をかます、黒服の男。狙いを定めて撃っているのに、男に向に弾丸が当たる気配がない…。

俺の射撃の腕は悪くない。いや、悪くない所か県警じゃ1、2を争う腕前だ。だが、当たらない。

有り得ない。いや、本当に有り得ない事なのだが…奴は弾丸を目測して避けてやがる。

この男を止めると宣言して約30分弱。弾も連射している内に、残り5発…。マズイ、非常にマズイ状況だ。

弾が無くなった所で、さっきみたいに格闘戦に持ち込めば良いと考えていたのだが。

「さて、あなたの弾数が減った所で…このナイフで四肢を分断させて頂きましょうか」

そう。奴にはナイフがある。正直、二度もあのナイフから逃げられるとは思えない。怒りに任せてなどと、毎度毎度は上手くはいかない。

このままでは、間違いなく殺られる。しかし、だからといって逃げ出し背を向けた所で、また、同じ結果であろう。

日中にて、30 前後。嫌な汗が頬を伝い流れる…。

じりじりと奴と俺の間合いが狭まっていく。最初に攻撃を仕掛けたのは…俺！！

先手あるのみ！！ 高く足を上げ、こめかみ辺りにハイキックを繰り出す。

しかし、ガシッ、と奴は俺の足を受け止め。

「いけませんねえ。不用意に攻撃を仕掛けて…はあっ！！」

奴は俺の足を跳ね上げ体制を崩す。俺が慌てて体制を立て直そう

と立ち上がった瞬間。

まさに、一閃！！

「があああ！？」

左肩を切られた。俺自慢の一張羅の黒スーツは、横一閃にスパツと切れ。切れ口からドバドバと大量の血液が流れ出る。俺は痛さのあまりに、叫びをあげて左肩を反対の手で押さえる。

「くそっ、止めてみせるって言ったんだ…っ！！」

痛みで額に脂汗がにじむ。何だか目の前が歪む？…また、奴お得意の催眠術だろうか？足がフラフラで意識が朦朧とする…。

「気絶して…しまいましたか。失礼、このナイフには痺れ薬が塗られていてまして。一度でも切られると…ご覧のとおり。と言ってももう意識がありませんか？」

倒れて、どれ位時間が経過したんだろうか。場所がわからない。
商店街に居たはずだが、ここは何処だ？

「…両手が縛られてる。足も…同じか…」

見た所、よくあるビルのオフィスの様だが。人が一人も居ない。
それ以前に電気すら付いていない。

カチツ、カチツ、カチツ、カチツ…。

何やら一定で機会的な音が何処から聞こえてくる。

電気がついていない上、夜になっているのかオフィスは真つ暗闇だ。しかし、俺の目は既に暗闇に慣れており、辺りを確かめるくらいには見えている。

音のなる方向を縛られているため、体全体で向き確認する。

「!？」

時計。デジタルの時計がそこには10…いや、20個、床に置いてあった。

オフィスなのだから時計があってもおかしくはないのだが、20は異常だ。カチツ、カチツ、カチツ、と20もの時計が不気味に音を奏でる。

「デジタル時計なのに…なんで音が鳴ってるんだ？」

不気味。まさに、文字通りである。デジタルである筈の時計からアナログ特有であろうカチツカチツという音が鳴っているのだ。不気味に思わないはずが無い…。

「雰囲気…ですかね」

「うおっ!？」

誰も居ないと思っていた所に不意に声をかられ俺は体をビクッと

強張らせた。

「ふふつ、失礼」

暗闇に紛れ一人の男が窓側の部長席である椅子に座っていた。

「黒服…」

そう奴だ。先程、商店街の裏路地で死闘を演じた相手…黒服の男。

「月影…」

「あっ？」

「名前ですよ、名前。私の名前は、月の光にできる影…月影」

本名だろうか、いや、違っだろう。月影…漢字だ。確かに、男はこの国の人種のような感じだが。初めにコイツは、俺に対し『異国の民』と発言した。つまりは、別の国の人種。

だから、漢字の名前は有り得ないのだ。

「貴方は？」

そんな事を考え黙っていると月影と名乗る男は俺の名前を聞いてきた。

「…空海、夏樹」

暫く考えていたが俺は名前を教える事にした。別段、匿名にする理由もないし、ここで偽名にする意味がわからないので…そうした。

「空海…」

俺の名前を聞いた月影は、ぼつりと『空海』と言い黙りこんだ。

「それは、実名ですか？」

「ぶつ殺すぞ？何でここで偽名を使わにやならん？本名だ！！」

たく、何だ？俺が空海って名前じゃイカンと言っのか？ふざけんな！！そりゃ、俺だってもっと普通の名前が良かったよ。田中とか佐藤とか…いや、地味過ぎかな？…あつ！！全国の田中& amp; 佐藤さん、ごめんなさい。別に悪気は無いから…許してっ！！

「そうですか。…ああ、何故にデジタル時計なのに音が鳴るか、で

したね」

なんか無理矢理、話の流れを変えられた感が…。

「一言に、雰囲気です。ほら、時限爆弾という物はカチカチと言う物でしょう？」

何それ。馬鹿？何がカチカチと言う物だあ？アホか！？テロリストが雰囲気とか言ってるじゃ…

「爆弾？」

「ええ、爆弾です」

ドツカンのバツカン？赤と青の配線とか、水銀式のあれとか？

「言ったでしょう。ビルを爆破したと…次のターゲットはここ。この、ニュー・エントランスビル…3年前に爆破された旧エントランスビル跡地に建て直された65階建ての高層ビルですよ」

…ざけんな！！なんで、何で

「何でここなんだ！？何でお前らはこのビルに執着する！？何でこ

の国をテロの標的に選ぶ？もつと別の…あの、あの年から年中戦争をやってる大国とかがあるじゃねえか？何でだ！？」

一気に不満が吹き出した。刑事である前に俺は人間だ。完璧ではない。このビルをまた爆破する。それを聞いただけで胸が苦しくなるのを感じた…。

「やはり、貴方は…3年前、自分の命を引き換えに事件を解決した英雄。空海玄治のご子息でしたか…」

刑事として十何年もの先輩にあたる親父。常に、正義の心を忘れず優しさと強さを兼ね備えた男だった。

俺にとつてはただのウザイ親父だったが妹二人は常にベツタリで良くなついていた。親父もそんな妹達が可愛かったらしく、いつも妹達に笑顔を与え幸せを与え続けていた。

唯一、俺が親父を尊敬した場所。それが、妹達二人を幸せにしていたという所。昔の…いや、今の俺にだって出来ない事やっていた親父。

3年前…親父は、ビル爆破を阻止するために単独でテロリストが何十人もいるビルに突入していった。驚く事に親父は何十人もものテロリスト相手に圧勝、そして、主犯格の男を追いつめたのだ。

これは逐一、無線で当時、相棒だったヤクザ顔の上司・松居さんと親父が連絡を取り合っていたためにわかった事だ。

主犯格の男を追い詰めた親父。説得を試みるが男は承諾せず周りのビルを爆破し始めた。親父は、それを止めるため主犯格の男と取っ組み合いになり…そして、時限式だった爆弾が爆破。ビルは、向かい側の海に崩れ落ち…親父と主犯格の男も一緒に。

勘違いしないで貰いたいのだが。…別に俺は、親父のために胸を痛めている訳ではない。

親父が死んで、一番悲しんだのは妹達だ。ベツタリとなついていた親父は、もう居ない。あんなにも哀しい二人はもう二度と見たくなかった。

だが、旧エントランスビルを取り壊すニュースを見た時もニュー・エントランスビルが再建されたニュースを見た時も、二人は親父の事を思い出したのか再び、あの日の様に哀しげになっていた。

悔しかった。俺には彼女達を慰める手段を持ち合わせていなかったのだ。

それなりに兄として、やってきていたつもりだったのだが…。昔から俺は他人と心を通わせる事が極端に苦手で周りから良く外れていた。つまりは、どことなく暗く、他人に対し壁を作るタイプだったのだ。

だが、どうにかして彼女達に笑って欲しかった。悲しみを越えられる幸せを与えられないかもしれない…。だけど、笑顔だけは与えたかった。だから、俺は道化を演じた。それまでのどこか暗かった物を棄て、ピエロの如く。…せめて、彼女達が刹那にでも悲しみを忘れてくれるよう…精一杯、馬鹿をやってみたのだ。

時間はそうかからなかった。馬鹿をやる事で会話を産みだし、さらに、輪をかけてみせる事で悲しみを呆れに代えさせた。次第に笑顔も増え親父の事も『尊敬出来る英雄』として話題に上がる様にもなった。

だが、しかし、どうだろう？再び、このビルが爆破されたら彼女達はどう思うだろう？

悲しみは、俺への呆れに代わっただけ…。再び、あの思いが甦り彼女達はまた、あの悲しみを…

「殺す。…俺は、お前を、絶対につ、殺す…！」

ギチギチツと縛られた両腕から嫌な音が聞こえる。だが、関係ない。皮が剥げようが、肉が削げ落ちようが…腕を自由に足を自由に、奴を殺す！！

「…貴方がどのようなお気持ちかは、存じません。…が、わかりました。ゲームをしましょう」

ゲーム、だとお！？

「ふふふつ、睨まないで下さい。別に、テロ行為がゲームとは言っていないせん。…私達的にもゲームでは、困るんですがね！！」

鋭く睨む俺を、さらに、鋭く睨む月影。そして、黒く鈍い眼光を放ち一つの提案をしてきた。

「既に、一つビルを爆破し商店街に微弱の毒ガスをばら撒いている私達ですが。目的は、このビルの爆破です。そして、この旨は警察にもマスメディアを使い知らせてあります。」

月影は、『ほら、ビルの下にあんなにもパトカーが…』と窓の外を指差し言った。

確に、ビルの下には何十という数の赤い光が辺りを照らしており、そして、バババツとヘリがビルを迂回しながら飛び、有像無像の人混みが所狭しとひしめきあっていた。

「この国の公的機関では我々を止められはしない」

他人の為出かした不祥事より、自分達で為出した不祥事を始末するので手一杯なこの国の公的機関：確に、月影という男を、そして奴、率いる組織を止められないだろう。

「そこで、貴方です。私は、この腐敗した国で反比例して光る。貴方とゲームがしたい。」

嘲笑う月影。但し、目が笑っていない。真剣な眼差し…一体、何だというのだ？

目的がニュー・エントランスビルの爆破だというのなら、俺などに構わず目的を果たしてしまえば良いのに…。

まあ、俺としては爆破が遅れて助かるけどな。コイツが余裕ぶっこいてる間に、どうにかして爆破を阻止してやる。

「ゲームって、何をするんだ？」

「そうですね。…爆破阻止、でもやって貰いましょうか？」

な！？マジで何考えてんだコイツ。

「私はこれから屋上に行き、ヘリでこのビルから脱出します。つまり、私をヘリに乗る前に捕まえたら貴方の勝ち。…その場合、ただちに爆破を中止いたしましょう」

「……………」

「どうかしましたか？」

「何故だ。さつさと爆破すればいいじゃねえか…。なんで、わざわざこんな意味のない事をしようとする」

少なくとも、このテロは世界に向けた警告及び制裁のはず。なら何故、月影はこんな作戦を不利な方向にするゲームを持ちかける？コイツの意図が読めない。

「ふふつ、深く考えないで下さい。至極、当然の事です…。3年前の事件、あれは我が師にあたる方が行った事。その師を超えるた

めの儀式…と、いった所でしようか。師が死に私は組織の長と成りました。しかし、それは本当の意味での長ではない…。だから、師を倒した『空海の者』を倒す事で大成しよう…と、いう事ですよ」

「成程な…周りに自分は、幸運で長に成ったんじゃない、実力で成ったんだ…そう認めさせるためのゲームか…」

「ええ、今の組織は、私が弟子であつたための優遇された長と認識している者達がいるのでね。彼等を黙らせる為…空海夏樹、貴方を倒したい。そういった理由ですよ」

運命？因縁？どちらにせよ、俺は運が良い。すぐ弱気になる俺だが、これには武者振いがする。だってそうだろう？

刑事としてテロを止められる。それどころか、あの時のやり直しが出来るなだから。歓喜せずにいられない。

「いいぜえ、受けてやる。後悔しやがれ…!!」

「ふふつ、では、私は屋上に参るとしますか。貴方も、どうにか縄を解き、早くこちらに向かわないと…爆破に巻きこまれて、死にますよ。では、ご武運を…」

…え？縄は解いて行けよ。あら？おい、おーい…行っちゃった。

ああ…拝啓、親父さま。あんたと違って俺、いきなりピンチなん
ですけど？

第十一話：エントランスビル事件（後書き）

こんにちは。

今回は、一番長いです。話を適当な所で切れず、まとめて書いてしまいました。しかも、本当だったらもっと長くなる筈でした。

ただ、補足を書くと話自体がまとまらなくなるのでカットさせて頂きました。まあ、そのせいで展開が有り得ないほど急ですが。気にしない方向で（笑）

さて、第十一話目です。親父、出てきました。宿敵出てきました。

シリアスにするため無理矢理に出しました。月影ですが、コイツは至る所に出て来る予定です。目指せレギュラー？いずれは主役！？…まあ、そんなキャラです（笑）

内容的には、今現在、現実にあるテロリズムと、とある者達の人類への不満がテーマですね。

月影達の組織は、テロをする事で人類全体に人類の愚かさを警告し、制裁を行うという物です。彼等は、たぶん戦争や地球汚染を駄目だとわかっているのに止めない人類に並々ならぬ不満を持っているのです。ですから、テロをする事で何かしら見出し出そうとしているでしょう。

ちなみに、この組織…最終的に色々な所に関わってきます。

では、今回はこの辺で失礼致します。ありがとうございました。

空海玄治、最強のオヤジの予定…。死んじゃてるけど（笑）

第十二話：44階にて死闘

手が痛い。俺の腕は無理矢理に縄抜けをしたため皮が剥げ血がにじんでいた。

ゲーム開始から20分程度のロス。爆発まで残り3時間…。さて、屋上に行くまでどれくらいかかるかな？

相手はテロリストだ。そう簡単にいかないだろう…。

「てか、何階？」

とりあえずはエレベーターで…。

しかし、デケエなあ、このビル。65階建てねえ…どこにそんな金があるんだ？

廊下に出て辺りを調べる。人が一人もない。まあ、当たり前か…テロリストがいるビルをウロウロしてる奴なんて俺ぐらいだろう

からな。

30階か…。エレベーターホールにて階を確認する。このエレベーターホールには大理石がこれでもかっ…という位に使われ、逆に下品な物になっている。どうやらこのビルのオーナーは金にものを言わせるタイプらしい。…何かな。

「あれ？動かねえじゃん？マジかよ、階段で行くの？35階も上なんだよ？」

しょっぱなから、ダルツ！！

黒くて固くて筒状の物つてなあーんだ？…第二のヒント！！それは、小さいけど人を殺すには充分の威力があります。

…正解！！拳銃です。そして、今まさに俺はその拳銃で狙われます。あはははっ！。

「ひゃあはははっ！！逃げねえと死んじまうぜえ！？」

エレベーターが使えず、階段で44階まで登って来た所。この気狂いが待ち伏せしており、いきなり発砲してきやがった。こつちといえは武器は無いし、度胸も無いので立ち向かう事も出来ません…。

ちくしょー！こんな奴なんか放っておいて直ぐに上の階に行けば良かった。

律儀な俺は、わざわざ階段からフロアに入り奴と対決する事にしたのだ。今思えば本当、さっさと行けば…。

[illegible]

だあつ！？クソがあ、二挺拳銃で乱射して来やがった…。クソ、あんなメチャクチャな撃ち方なのに何でこんなに正確に弾丸が跳んでくるんだ？月影といいコイツといい、何だってこんな強えんだよ！！！！

逃げて逃げて、逃げまくる俺。

「テメエ、逃げまくってんじゃねえ！！臆病もんがあつ！！さつさと、俺に殺されなあつ！！」

うるせえええっ！！人の気も知らねえで、なに吐かしてやがる
！！こつちとら、武器一つねえんだぞ！！？

「と、何だ？鉄パイプ？…ああ、改装中だったのかこの階は…」

どうやら、このビルはオフィスだけでなく店舗としても貸し出し
しているらしい。改装中のためか至る所に工事現場で良く見掛ける
鉄パイプが見当たる。どうやら鉄パイプで作った土台等も、沢山あ
るようだ。

「…使えるか？」

奴がこつちに来ない間に仕掛けを作ろう。えーと、ロープ、ロー
プと。

「…よし。こんな所か？…後は運次第だな」

ああ、神様。信じちゃおらんけど…助けて！！

「ひゃあっ！？どこだあ？早く諦めて俺に殺されなあっ！！」

来た！！

「おおおおおっ！！」

鉄パイプを持ち、気狂いの男に立ち向かう。奴はそんな俺に気が付き銃を向ける。だが、遅い！！ガギイイン、と奴の持つ銃を鉄パイプで跳ね上げる。

「しゃああああっ！！」

「ぐあっ！？」

駄目だ…。銃を一つ弾いた所で、奴にはもう一つの銃がある。

ドンッ、ドンッ、ドンッ！！

鉛玉が俺の体をいくつも貫通していく。最早、痛いなどでは済まされない。苦しい、悶絶が止まらない。

「ガアアアアッ！！」

無様…。悲痛に叫びをあげ、バタバタとのたうち回る。死ぬ、死ぬ、死ぬ…？

「ひやあああつー！」

ドンッ…！！

一回…。銃撃音が鳴り、辺りは静まり返る。

「ひやつ？…ひやはははっ！…びっ、びびりつたぜえ。テメエ、これ狙いだっただのか？」

鉄パイプで銃を跳ね上げたのも、黙って銃撃されたのも、無様にのたうち回ってみせたのも…全てこのため。

この最初に弾き跳ばした銃を使い奴を倒すためだ！！

「ひやつひやつひやつ。だあがぁ、失敗に終わったなあ…。やっぱ、

こんなチンケな国の警官じゃあ、射撃の腕も知れた事だあなあー？」

言葉を返す気力も無い。ダルい、血が足らんよ。

「あーあ。んだあ？お前、もお、死ぬのか？ぎやははははっ！！
何で隊長は、こんな下らねえゲームを始めたんだあ？なあ？」

知るかい。俺が聞きてえよ。…自分を組織に認めさせるため。冷静に考えれば、この作戦を成功させれば事足りる筈…。じゃあ、何だってこんな付加価値を付ける？

「はあ、聞けよ、ボンクラ。俺たちや、後はこのビルのオーナーで
国会議員の兼元を殺しや、作戦終了だった筈なのに何だあ？隊長は
いきなり、テメエと取引をしたと来たもんだ…。テメエ、何者？」

兼元？国会議員の？確か、他国の外交と国内の治安維持なんかを
やってる大物だったな。でも、実は裏で何やらかがわしい事をや
ってるって噂があっただけ…。

確かに、こんな金をかけてそんなビルのオーナーだっていうなら、
何か悪い事やってそうだな。

「でよお、兼元って奴あ。仕舞にや、金で命乞いしてきやがった。

笑ったね、テメエがどんだけ悪い事してきたか理解してねえでやんの。武器の密売に薬の横流し…他国への裏金操作。けっ、俗ブタ野郎が…テメエのせいで、どれだけの罪の無い人間が苦しんだ事が…」

何だ？コイツら只のテロリストじゃ、無い？やってる事は犯罪だけど、言ってる事はまるで聖職者並じゃないか。

「戦争をしたく無いガキ達は沢山いる。でも、それをしなきゃ生きてはいけない。…悲しいねえ、同じガキでもこの国のガキはっ…不登校だのニートだの、あれだろ？直ぐ、何もかも捨てちまうんだろお前ら？贅沢だあねえー。ウチの国は食うに困ってる奴らが、ごまんといるってえのに…なあっ！？」

ドンッドンッドンッドンッドンッドンッドンッ…。

股下、脇の間、顔を弾丸が掠める。怒り、なのだろう。物も金も欲望も、全てにおいて飽和した国への、何もかもが無い国からの怒り…。

傷口からドクドクと血が流れるが、そんなものより胸の痛みが俺を襲う。

悲しいな、何で俺はコイツの気持ちが解らないんだろう。一体、どんな人生なんだろうか。生まれた時から戦争をする世界。食べ物さえ無く飢えに苦しむ者達。

無関心…。一番に悔やむべき所だ。

この国の人間は、ニュースや新聞などでチラツと聞いた事はあつても『自分とは関係の無い世界』と決めつけて彼等が同じ世界の人間である事を知ろうともしない。

『戦争をしていないから良いだろう？』そんな甘い考えが彼等からしてみれば、一番に頭に来る事なのだろう。だから、怒り、叫び、このようなテロ行為を行う。

もし俺が、同じ立場ならどうだろうか？

あの歴史的戦争が尾を引き、未だに戦火の巻きおこる国としたら…未だに飢えと不幸に苛まれているとしたら。

「あつ？」

涙が頬を濡らす。一筋だけ、つうーと流れる。

「ひやあははははははははははっ！？んだあ？死のがそんなに怖いかあ？安心しなあ、俺ん所じゃ死は神様からの最高の贈り物さあつ！！」

銃口が俺に向けられる。今度は本気で殺す気だ。股下でも脇の間でも顔の横でも無い…眉間。わかる、奴は今、俺の眉間を正確に狙い定めている。

[illegible]

耳が痛くなる程の大音量での騒音。…だが、銃撃音では無い。

「ひゃあ？ぎゃあああああああああつ！？」

氣狂い男の悲鳴。奴の後ろから大量の工事作業道具が流れ落ちてきたのだ。鉄パイプから、それで作った土台。セメントにその他諸々……。

先程の仕掛けはコレである。ロープで色々な物を括り付けて置いたのだ。そして、銃を奪い、奴をその下まで誘き寄せて弾丸でロープを断ち切る……。

ロープが切れれば、後は御覧の通り…。言つたろ？俺の銃の腕は県警で1・2を争うつて…。まあ、なかなかロープが切れずにヒヤヒヤしたがね。

あっ！という間に奴は、下敷となり見えなくなる。

「…わりい。お前の悲しみがわからない訳じゃ無い。いや、全部理解できる訳じゃねえけど…。でも、不幸を知らない訳じゃないから…少しは、わかる」

それでも、それでも俺は。大切な人達を守りたいから。お前達がそうしている様に…俺は俺の世界を守りたいから！！

「さあて、血が足りないからなあ。さつさと、片付けねえと」

弾丸が体を突抜ている。右足、右脇腹、左腕…

「痛い！？クソツ、背中からも撃たれたらしいな…貫通してねえて事は体ん中って事か…」

まずいな。早く鉛を取り出さないと…。

フラフラである。きつい、ダルい、熱がある。人間こんだけ撃たれて、まだ生きているなんて…不思議だ。呆れるくらい、俺は生に執着しているらしい。

死にたくは無い。死にたくは、無いが…。大切な人達が苦しむ姿を見るくらいならっ！！

… あっ！？まずい、力んだら目眩が…。 い、意識が遠くなる。 あ
ふぁ？

… あぁ、今日はこれで何回…め？

第十二話：44階にて死闘（後書き）

こんにちは。

シリアス編、まだまだ続きます。

何と言うか…コメディが消えて無くなってしまいそうです。なのでシリアス編に少しでもコメディをつ、と今回入れてみたのですが…どうなんでしょう？（笑）

さて、十二話目ですね。とりあえず、テロリストは、こんな不満もあるんじゃないかな？と新キャラを出しました。まあ、戦わせるためのキャラが必要だっただけです…。笑う笑う、何でそんなに笑うのか？私もよく（笑）とか使っていますが、それ以上…まさに、気狂い。

しかし、組織のくせに出番のある人数はコロッケ少女を入れて三人。少な過ぎやしないだろうか？…いや、でも、あんまり出すと話的に…

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

残り21階。兄の残りHPも…そのくらいだったたり！？

第十三話：暫しの休息にて、再びコロッケ少女…

んんっ…。んー。うー…うつ！？

「起きた…」

あん？何だっけ？あー、何か体中が痛いんですけど。

「うー。変？…頭打った？」

頭は打ってないと思うけど。…ああ、コロッケ少女か。

「にー、起きる」

『にー』とは？てか、何で倒れて…

「痛だだだっだ！？何だぁ！？」

ガムテープ？何でか知らないが、ガムテープが俺の体をグルグル巻きにしている。…そういや、銃で何回も撃たれたんだっけ。

「…で、何でガムテープ？」

「…にい。撃たれた。血が…ドドババ？…包帯ない…ガムテープ！
」

長いセリフを言い終えたからなのか、包帯の代わりにガムテープを代用した事が自分自信で良いアイディアだったと思ったのか…コロッケ少女は、エッヘンとその小さな胸を前につき出す。

「ああ、にいつて俺の事か…」

「ひいう…。良い、アイディア…。包帯…ガムテープ。包帯…ガム
…」

やはり、彼女は包帯の代わりにガムテープを使った事に対しエッヘンとしたらしい。…が、俺が気にせず『にい』という言葉の方に気をやったため…もの凄く落ち込んでいる。

「ガムガムガムガムガムガムガムガムガムガム…」

うおっ！？壊れた？何かガムガム言ってるよ…でも、怖いと言うより…可愛い。」

「…ああ、うん。ガムテープとは良いアイディアだ。包帯が無い中でこんな止血の仕方があったなんて…、うん、君は頭が良いな…」

…駄目？やっぱ、こんな取って付けた様なもんじゃ…。

「みふうー」

あ、効いたみたい。何かスゲエ恍惚な表情してるよ…。

「…てか、何で君がここに？」

当然の疑問であろう。彼女はテロリストの仲間だ。まあ、このビルに居てもおかしくないが…何故、このフロアに居るのだろうか？しかも、敵である筈の俺を助けるなんて。

「イシユ…44階で…にいと戦うって言った…に、傷付く…私嫌」

…なんだろう。この事件で黒くなりつつある俺の心が、浄化されていく気がする。心が…。

「あれ？でも、良いの？君の仲間だろ？月影とか、その…イシュ？
とかいう奴は…」

「月影…恩人…でも、仲間違う…一緒にこの国…来ただけ」

「…そうなんだ」

良かった…。俺はこの娘を敵にしなくてよくなったのだ。安堵の溜め息が出る。

「ふー…」

「みふうー」

どうやら彼女は普段あまり喋らないらしく、沢山喋って疲れたらしい。俺と同時に溜め息をつきコテツと俺の体にもたれ掛った。

「みゆう…にい、良い匂い」

「ぶっ！？匂い？いやいやいや、こんなおじさん捕まえて何を…」

「にい…おじさん、違う」

…「うおおっ！？おじさん違う？だあぁっ！？妹に、桜子に『オジン、オジン』と言われ続けて、自分でも『俺って、オジンなのか？』って、思い始めてたのに」にい…おじさん、違う？

ああ、可愛い。何て良い子なんだ？ああ、良かった、良かったよお。本当に敵にならず良かったぁー！！

「みふー…みふー…」

あれ？寝ちゃった？…可愛い。寝顔とか本当に可愛いらしい。ああ、生きているって素晴らしい！！

「みふー…みふー…」
「……………」

「みふー…みふー…」
「……………」

「みゆうー…」
「……………」

ああっ、デラ可愛いっ！！ナマラ可愛いっ！！ホンマ可愛いっ！！ホソナコソ可愛いっ！！

「あれ？…何か大事な事を忘れて…あっ！！」

しまった！？俺は一体どれくらい気絶していた？残り時間はどれくらいなんだ！？

「君、君！！起きてくれ！！一体、今どうなっているんだ！？」

可愛い寝顔のコロッケ少女を無理矢理に起こす。そんなコロッケ少女は『ふゃあ？』と目を擦りながら俺を見る。

「爆破まで、残りどれくらいなんだ！？」

マズイマズイマズイ！！

「にい…大丈夫だよ…後30分ある…」

30分！？ギリギリだろ！？残り21階も上なんだ。いや、しかも、俺は怪我をしている…クソオツ！！

「…にい…エベレーター…使える…大丈夫！！」

ガンッ！！と床を握り拳で叩いた俺に対し、彼女はニコツと笑い俺の強打して赤くなつた手を優しく包む。

「エレベーター？…エレベーター！！本当に？本当にエレベーターが使えるのか？」

「うん…にいのため…私…頑張った」

ああ、何て良い娘なんだ…。どうしてここまで俺に優しくしてくれるんだ？ううっ、なんか胸がドキドキする。…はっ！！何を考えた今？馬鹿か俺は？まだ、少女だぞ？いかにいかに。

「君はエレベーターで下に行くんだ。ほら、俺の警察手帳…これを見せればヤクザ顔の人が保護してくれる」

急がねばならない。彼女を下まで送っていく事さえも出来ないくらいに…。

「でも…にい…月影強い…私…にいと一緒に…」
「駄目だっ！！」

激しく吠える俺。彼女はビクツと体を強張らせ泣きそうな顔になる。だが、彼女を連れてはいけない。月影が強いなら尚更！！爆破を止められるか、わからない。爆発に彼女を巻き込む訳には…。

「大丈夫…だから、ね？下で待っていてくれ」

「…ふゆ…」

コクンと彼女は頷く。瞳に涙をいっばいに溜めながらも素直に下
行きのエレベーターに乗る。彼女の真つ白な頬に指で触れ涙を拭
てあげる。

「終わったら…また、コロツケ…買ってあげるね」

彼女を乗せたエレベーターは1階へと向かい降下していく。俺の
いる44階はとても静かだ。精神を研ぎ澄ます。深呼吸を繰り返す。

チーン！！

どうやら、コロツケ少女を乗せたエレベーターとは別のもう一つ
のエレベーターが44階に着いたようだ…。

「よっしやああっ！！」

バッチイイン！！と両頬を叩く。目が覚める。気合いだ。これ
から、俺は本当に死ぬかもしれない。体が震える。足がガクガクだ。
だから、気合いだ！！

再び、バチィィン！！と静けさを保つ44階のエレベーターホールで痛いたしい音が木霊する…。

…さあ、決戦だ！！

第十三話：暫しの休息にて、再びコロツケ少女…（後書き）

こんにちは。

やあー、コロツケ少女がやっと出てきました。出したいなあ、と思っていたんですが出すタイミングが無く、こついった形で出る事になりました。

コロツケ少女は、いたく兄を気に入っている様で…まあ、ラブラブですね（笑）

さて、次話にて再び月影登場！！決戦ですね。でも、兄は根性無しです。しかも、コロツケ少女が言った通り月影は強いです。…さて、どういう事になるのでしょうか…？

次話、『シリアス編』改め『エントランスビル事件編』…クライマックス予定！！

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

クライマックス…小学校にて『話の山場』って習いました。でも、山場って…何？（笑）

第十四話：最上階にて、月影

エントランスビル・65階展望…。

「そうですか。では、ガナン…貴方も退却して下さい。イシュは、私が回収しておきましょう。…おや？お客さんのようですから交信を終わりますね…ご苦労さまでした」

月影…。この65階建てのビルを爆破しようとする組織のリーダー。まだ、仲間がいる様だが、まずはこの男を倒し爆破を中止させねば…。

「お早いお着きで…」

…何が早いものか。ゆうに3時間はあつた筈のタイムリミット。しかし、今では残り約30分。

「皮肉か…？」

「いえ、本音ですよ。イシュと…戦ったのでしょうか？彼は我々組織の中でもトップクラスの暗殺者なんですよ」

確かに、強かった。あちらこちらが痛い。銃弾が3発も俺の体を貫通している。もう、ボロボロでクタクタだ…。

「た、助けてくれえ」

「!？」

俺でも月影でもない声。…驚いた。ここには、俺達以外にも人がいたのか。

頭の頂点がハゲ、いつも美味しい物を食べているのか、体はダルダルのメタボリックの男だ。

「ああ、この方はこのビルのオーナーです」

月影は俺の疑問を察したのかメタボリックの男について説明をする。

「彼は、酷い男でしてね。国会議員だというのに自分の私腹を肥やすために色々な事を行っているのですよ」

淡々と喋る月影。だが、口調とは裏腹に彼の表情からは、嫌悪……いや、怒りにも似た感情が伺える。

「貴方が来る前に殺しておきたかったのですが……案外、しぶといもので」

『ひいい』と脅える小太りの男。月影が一步一步、歩み寄る度に彼は、泣き、喚く。

「たす、助け助け、助けてくれええっ！！私は死にたくない。まだ、死にたくないいいっ！！」

俺に助けを求めているのか、それとも、月影に命ばかりはと懇願しているのか……。小太りの男、国会議員にしてこのビルのオーナー・兼元には、最早、国会議員という立派な肩書きは跡形も無いように思える。

「こいつがどんな事をしてきたか……俺には、わからない。でも……」

でも、ここにいるのは、一つの命だ。どんな罪を犯したのか、本当に検討がつかないが、俺には助ける理由がある。公務として、人間として……。それに、この男を裁くのは、死などでは無く法のはずだ。

人が人である為に創った社会。そして、その社会で罪を犯したの

ならば、やはり、社会のルールに則り…法で裁かねばならないのだ。

「立ち…はだかりますか」

薄く目を閉じ、こちらを凝視してくる月影。言わずもがな…邪魔を、するなという事なのだろう。

月影との距離は3メートルもない。走れば、直ぐに間合いに入り奴と対峙できる。

思案…。先手を打つべきか、後手に回るべきか…。

「……」

「……」

ええい！！先手必勝！！

奴のナイフから逃げ出すのは容易ではない。ならば、先に月影をぶっ飛ばして…はい、終了！！思案を切り上げ、俺は奴、目掛けて走り出す。

「とおっ、ありゃあああ!!」

どうだオラッ!? 面食らったか? 気合いの顔面パンチを喰らえり
やつ!!

「貴方もつくづく面白い方だ…」

余裕なのか、月影はニヤリと笑う。顔面すれすれに俺の拳が近づく。避けられない。鼻先を捕えた!! 月影の顔面に拳が食い込む!?

「甘いですねえ」

グルン!! と月影は体を回転させる。しまった…いなされた!!
軽やかに拳を避ける月影。そして…

ザクッ!!

左脇腹…。痺れる感覚と覚めるような痛み。

「あぁっ」

ダクダクと流れる血液を静観してしまう。光る鉄の板を伝い、月影の腕へと流れゆく。もちろん、床にも夥しく流れる。

「痛みを知り、人は気付く…。この作戦も、愚かな者達に痛みを教える重要な作戦なのです」

痛みを知り気付く。…確に、想像を絶する痛さだ。

「貴方はこの国の者にしては、輝いている。だから、もし、貴方に私が止められたのなら…まだ、救いがあると思っただのですが」

痛い。月影が何か喋っているが理解不能だ…。痛い。…なんだろう。いつにも増して冷静でいられる…。？血の氣が多いのか、いつもはもっと、キレイやすい体質なのだが…。

「…あつ。そうか、血が流れてるからか…！？余分な血が流れて、逆に冷静になってるんだ」

「はっ？」

意味不明。混乱しているのか馬鹿なのか…。いやに冷静な自分に妙な解釈で納得してしまった。しかし、冷静のため、今自分が何を

すべきかハッキリと頭の中にあるようだ。

未だ俺の左脇腹にナイフを刺したままの月影。馬鹿な奴。最初に一発で体を吹っ飛ばされたのは何処のどいつだ…。

「うつ！？」

月影はたじろぐ。それもそうだろう、自分でも分かる。今、俺は不気味に笑っているのだろう…。

「っつきいっ！」

鈍い音が65階建て高層ビルの最上階で響き渡る。

声もなく月影は部屋の端まで飛んでいた。笑える。まるで、コメディ映画のワンシーンの様だ。

「ぬううつ…うりゃ！」

ズポッ！と俺は左脇腹からナイフを抜く。血がドバドバとそこから中に飛び散る。

何が？また、意味がわからない。だが、月影はひたすらに笑う。
『やはり、やはりやはり！！』とブツブツと独り言を言い笑う。

そして、すうー、とナイフを忍者の様に逆手に持ち、構える。

「…ああ、まあ、なんだろう。兼元をどう裁くとか、ビルを爆破させるとか、させないとか…」

「ええ、今はどうでも良い事…ですね」

後どれくらいで爆破されるのだろうか…。

気にはなる。気にはなるが、今はそれ所ではない。雑念を捨て戦う。でなければ、死を意味する。この男を倒す。頭のネジが飛んだから、そう思うんじゃない。この男を倒さなければビル爆破の阻止もクソも無い。だからだ…。月影が、俺と同等の事を考えているかは知らない。知らないが、奴もこう思っている筈である。

「ふふふっ…」

「はははっ…」

「「さあ、殺し合おう!!」」

覚悟を決めた。死ぬだけの事をしてやろう。

静けさが、最後の死闘を前にして最高のBGMに聞こえ始めた。

第十四話：最上階にて、月影（後書き）

こんにちは。

クライマックスです。兄と月影の死闘です。…でも、どうみても兄の方がダメージがデカイ！！

さて、エントランスビル事件編も終わりに近づいてきました。どのような終わりになるのか…全くもって案がありません！！（笑）

でも、どのように終らせても兄にとってトラウマになる事は間違いないかと思えます。兄は色々と悩む人間なので、今後どのような事になっていくのか私自信、考えていて楽しみです。

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

最早、コメディは…一切無し！！（笑）

第十五話：高さ65階にて、決着…

どれくらいの時間が経ったのだろうか…。いや、実際には10分も経っていないのだろうが…。それだけの時間、フルに命の取り合いをしていたのだ…。疲れないはずがない。

「はあ、はあ、はあ」

俺は左脇腹から抜いたナイフを右手に装備し、月影はストックなのか別のナイフを忍者刀のように装備し構えている。

俺も月影も一步も引かない。雄雄しく、ライオン同士のケンカの様子にぶつかり合う俺達二人。

『おおおっ！！』、『があああっ！！』、『グオオオオッ！！』

悲痛の叫びにも聞こえる俺達の叫び。

「はあああっ！！」

月影が気合いの叫びと共に走り、近付いてくる。……右！？

ヒュン！ヒュン！と幾度もナイフが俺の体をかすっていく…。

「はあ、はあ、はあ。…なかなか当たってくれませんか」

「ぜええ、ぜええっ…ごほっ、ごほっ…！」

クソがつ…！当たってくれない、だど…？

確かに、月影のナイフは俺に当たらない。当たらないが、俺は避けるので精一杯で月影に攻撃をほとんど加えられない。これでは、何のためにナイフを奪ったのか…。

「…ふふっ。攻撃は当たらないですが、ダメージには…なっているみたいですね」

「！？」

月影のその言葉に俺はハツとする。汗？

俺の全身は有り得ない程に汗だくになっていた。血液が流れているのだと思っていたのだが…いや、それもマズイのだが…。とにかく、汗だくの俺。経験した事のない不快感が襲う。

頭痛、吐気、鼻水、寒気、体の至る所から悲鳴が聞こえてくる。

「辛いですか？」

辛い…。アドレナリンが分泌されている筈なのに、異常に動きが鈍くなる。

「遅い！！」

ああっ？

よるめいた俺に月影は容赦なくナイフを突き立てる…。マズイ、避けねば…駄目か？

「ひゅーっ…ぐっ、があああああああっ！！」

ガギイイイン！！

避けられないと思っただ俺は月影に対し真っ向から対峙する事にした。つまりは…

「ぐっ！？馬鹿な？ナイフをナイフで受け止めた！？」

と、いう事だ。ガチガチガチッと、俺と月影の力が拮抗しナイフ同士が震える。

拮抗を保ったままの俺達…。しかし、段々と俺の方に力が入らなくなる。血が足りない？ガチガチと震えるナイフだが、震えているのは俺も同じだった。

「ふふふっ…。段々とナイフが、貴方に近付いていっていますよ…？」

月影の言葉通り、力に押されて2つのナイフが俺の顔辺りに近付いてくる。

苦しい。息が出来ない。何が何だか分からない。手が、体が、ジンジンと痺れていく。このままでは押し切られる！？

「……………夏樹さん……………」

「？」

不意に月影が語りかけてきた。今まさに、この死闘の決着がつこうという所に、何故？

「…ここで負ければ…貴方の家族がどうなると思います？」

「な、に！？」

ピクツと俺の眉が動く。

「我が組織は最早、空海家を黙って見過ごすわけにはいかない。だから、もし、貴方が負ければ…私は、空海家を潰します。…もちろん、貴方の身近な人達から…」

はっ！？何が！？潰す？誰を？空海家？俺の身近な人達？…俺の大切な人達？…大切な妹達を…？

「どうします？…差し当たって、まず、貴方の妹さん達から…」

ブッチイイツツ！！

聞こえた。俺には、その時、確かに血管のキレる音が聞こえたのだ…。

「つう、きい、かああ…げええええええつ！！」

バキイイン！！と俺の力で両方のナイフの刃が、同時に碎け散る。

月影の…。奴の胸ぐらを掴み、ゴツチイインと俺の額を月影の額にぶつける。

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す、殺すうっ!!」

ゴン!ゴン!!ゴン!!ゴン!!

幾度も幾度も、幾度も俺は月影に頭突きを繰り返す。奴の額が割れたのか俺の額が割れたのか、俺達の頭は、俺達の顔は、鮮血に染まりグチャグチャになる。

「ぐっ、はあっ!？」

遂に耐えきれず、月影が顔をあげる。それを、区切りに俺は拳を挙げ…!!

「がああああああああっ!!」

おもいつきり月影の顔面を殴り飛ばした…。

聞いた事の無い音が辺りに鳴り響き、月影が後ろへと吹っ飛ぶ。

まだ、殴った感触が拳に残っている。ジンジンと痛む拳、しかし、あの感触は月影の鼻がグニヤリと曲がった感触だ。奴の鼻の骨を砕いた事は、まず、間違いない。…だが、まだだ!!まだ、足りない。妹達を傷付けると言ったこのクソ野郎は、まだ、許せない!!

「ぐあっ…!?あああっ…。うふっ。うふふふふっ…。まだ…まだ、私は生きていますよ?早く殺さないと、貴方の大切な妹さ、んぐっふああああっ!？」

「喋んな糞カスが」

月影がガクガクと立ち上がり、しつこく妹達の話をしようとしたので言い終わる前に奴の顔面を再度、強打してやった。

ガコンと窓側に倒れ込む月影。奴は何度も頭突きをされ、二回も殴られ、フラフラだ。しかし、フラフラのはずの月影は立ち上がる。

「はっ！！冷めねえなあ！！まだまだ、殴り足りねえ。テメエがさっき言った事は、万死に値する！！」

だから、何度立ち上がろうが関係ねえ……。倒れねえなら、倒れるまでと突き回すだけだ。

「あああつ！？ゴフツ？ぶっひつ、ぶふふふつ。私を殺さない限り、貴方の妹達は組織が狙う！！それが、嫌なら……！！」

「ああっ！！じゃあ、テメエをここで殺して組織も潰す！！」

最後だ！！怒りで立ち上がり、怒りで月影を殴り飛ばしたが……次で最後。もう、力が湧いてこない。だから、これが、最後の一発！！

ゴツキン！！と三度目を月影に叩き込む。どこをどう殴ったのかさえ分からない。ただ、月影は吹っ飛び、俺は勢い余って前に倒れ込む。

バリイン！！

「！？」

ガラスの割れる音…。俺に殴り飛ばされた月影が窓を突き破り、外に出てしまったのだ…。

「…貴方の…勝ちです。…ありがとう。やっと…やっと、死ねる…」

死ねる？

「！？」

忘れて、いた。階にして高さ65階の超高層ビル！！ここは、その、最上階だ。その最上階の窓を突き破って外に放り出されたという事は…！？

「つ、月影えええええつ！？」

第十五話：高さ65階にて、決着…（後書き）

こんにちは。

兄と月影の対決…一応の決着が付きました。エントランスビル事件編も次話で終わり。…やっと、やっとコメデイ編に！！

あつ！でも、面白くなかったらどうしよう。てか、また暗い方向に物語を持って行きそうかも…（笑）

とりあえず、第十五話目です。兄は無敵超人なのでしょうか？だいぶ、痛めつけてやったんですが（笑）…まだ、生きていらつしやいます。

兄は大丈夫なのか、月影は果たして…？まあ、とにかく、次話でエントランスビル事件編は終了の予定！！

では、今回はこの辺で失礼致します。ありがとうございました。

兄に妹達を傷付ける、もしくは、侮辱する言葉は…禁句！！

第十六話：此を以って、第一幕とす（幕引き）

幼い頃の記憶……。誰かが俺を殺しに来る記憶……。死にたくなかった。死にたくなかったから俺は……

「うおっ？……いかん、あまりの高さに気が遠くなってしまった。……月影、大丈夫か？」

階にして高さ65階の超高層ビル。その超高層ビルの最上階で俺と月影は割れた窓から身を乗り出している。気が遠くなる程の高さ、あまりの高さに耳鳴りまで聞こえてくる始末だ。

「……何故だ？何故、私を助ける？」

散々、殺し合いをした俺たち。理由は、月影がテロリストで俺が警官だから……。いや、因縁だろうか？とにかく、その死闘の末、月影は俺に殴り飛ばされビルの外に放り出されてしまった。普通なら、ハイそこで終了、という所なのだが……俺は助けてしまった。

外に放り出されて何百メートルも下に落ちていくであろう月影に手を差し伸べたのだ。必死に落とすまいと体全体で踏ん張る俺。しかし、月影は体の全てが高層ビルの外だというのにダラリと力を抜いている。もし、俺の手が月影の手を離したら……コイツは、死ぬ。

「はっ！！テメエにや、爆破を中止して貰わにやならんからな…死なれちゃ困るんだ」

そうだ…。それ以外に何がある。倒すべき敵を己の命を危険にまで晒して助ける理由…それ以外に何があるっていうんだ！？

「……3年前…」

「はっ？」

「3年前の事件…、旧エントランスビルに私もいたんです」

突然の告白。しかし、だから何だ？組織という位だから3年前の事件にも月影が関与していた事ぐらい別に驚く事ではない。

「…だから？」

ギチギチと腕から嫌な音がした。月影の体が高層ビル特有の強風によって揺れる。

「…貴方のお父様、と会っているんです私…」

はぁーん……。それは、ちょっと驚いた。でも、やっぱ……。だから？

「ふふふつ。貴方にとても似ていらした……。あの方は3年前の事件の首謀者、つまり私の師に色々な事を言い説得を試みていました」

その事は松居警部から聞いて知っている。親父は、最後まで犯人を信じ続けた……。しかし、結局犯人はビル爆破を決行し親父共々、海の藻屑と……

「師を諫めるための説得……。はははっ」

その時の親父の説得がおかしかったのか月影は思い出し笑う。

「あはははははははっ……。いやいや、本当に……。あの方の言葉は、私の心に響いた……」

「はぁっ！？」

何をいきなり？てか、響いたんなら何でまた、こんな事件を……！！

「私は幼い頃を戦争の真っ只中の国で過ごしましてね。親はどこにもいなかった……。分かっていたのは、国籍と自分が事故でその国にいたという事……。聞いて下さい、私は本来は……貴方と同じ国の人間

「なんですよ？」

「なっ!？」

マジかよ……。確に、最初は同じ国の人間かと思ったけど……。でも、こいつが俺を異国の民って言ったからてっきり俺は……。

「殺さなければ、殺される……。そんな国でした。気付けば私の手は血で赤く染まり、憎しみで全てが黒く見えて……」

月影はぼつりぼつりと昔話を語る。幼かった自分は、クーデターを起こすレジスタンス側に拾われ、育てられた事や、その後、組織化したレジスタンスに着いていき各国でテロ行為を行ってきたという事などを……。

「ふつ。世界はなんと醜いものなのでしょう……。戦争を食い物にする政治家や商人達。我々の苦しみなど知らず……。いや、知っていて、尚、彼等は自分の私利私欲のために戦争を起こした。憎い、憎い、憎い!!! 私は全てが憎い。私をあんな戦争の真っ只中に置いていた親。その戦争を金のために激化させる政治家。何より、自分さえ良ければと汚れ役を一边に発展途上国に押し付ける先進国の愚民どもがっ!!!」

熱い……。ビル最上階の風は冷い。しかし、その冷たい風に揺られる月影の手からは、とても高い熱が伝わってくる。

「…と、思っていたんですがねえ…」

月影から伝わっていた熱が急に消えた。ふうー、と月影は溜め息をつき…。

「人には人の守る世界がある…。貴方のお父様に言われた事です。誰もが皆の世界を守るスーパーマンになれるとは限らない…自分の世界を守る事に必死で精一杯なんだ」

…親父の口グセだ。

「お前がしているテロ行為だって、必死に自分の世界を守ろうとしているためにやっている事だろう？…同じなんだ。発展途上国とか、先進国とか関係無い。人は誰もが自分の世界を守るために必死なんだ！…」

淡々と親父の言葉を繰り返す月影。うつすらと涙を浮かべているようにも見える。

「ははっ。当たり前ですよ…。誰だって自分の世界が大切だ。むしろ、それをぶち壊して己の望みを叶えようとする我々テロリストの方が不条理だ…」

…俺の守る世界。桜子と柊…。俺が俺でいられる世界。なくなっ
てしまえば、それは俺の死を意味する。だから、必死。それを守る
ために命がけなんだ。

「…と、とにかくさ。親父の説得が心に響いたんなら、もう一度や
り直そう？きつと、こんなテロ行為とかじゃなくて別の手段がある
よ。なっ？戦争を止めるなんて立派な事じゃないか。皆が協力して
くれるよ」

幾度の死闘と普通なら致命傷の傷。流石に力が入らなくなっ
てきた。月影を引つ張りあげる。早く、外からフロアにあげないと…

「無理ですよ…。何故、3年も経って私が突然テロを決行したと思
います？」

そう言い月影は、フロアにあがる事を拒否する。このっ！！と力
ずくで引つ張りあげようとするが、力が入らない。

「じつくりと観察しました。3年前の事件が、どのような結果を産
み出すのかを…。はっ！変わらない。変わらないんですよ、世界は
！！相も変わらず、人間はあっ！！」

「だからっ！！お前が変えようとしたんだろっ！！いいじゃねえか

っ、そりゃ、やり方は間違ってるけど、いいじゃねえか！！今度は、ちゃんと犯罪とかじゃなくて正攻法でやれば…」

そうだよ。いいんだよ。月影は間違ってる。やり方は間違ってるけど、思想はこの誰よりも間違ってる。正攻法でやっていけば…

「だから、無理なんです。私は貴方とは違う。私には、このやり方しか無いんです。…でも、もう疲れた。武器を持ち、制裁という暴力を奮う。…教えて下さい。私は、私は…私はあと何人、人を殺したらいい！？教えて…下さい…」

月影…。苦しいのだろう。悔しいのだろう。何よりも辛いのだろう。武力でしか解決を知らないテロリスト。しかし、優しい故にテロを起こす彼にとって争うという事は、最もしたくない事。だけど、それでも武力でしか解決を知らないから…。

「…貴方がいて良かった…」

「えっ？」

憎しみも、悲しみも無く、月影はニッコリと笑う。

「貴方を商店街で見た瞬間、私には分かったんです。貴方が…私の『pull up』なんだって…」

ぶーるあつぷ？…自動車教習所の車に搭載されてる、助手席の人が車を止めるためのブレーキだっけ？

「て、俺はお前の教官じゃねえ！！」

「じゃ、シルバーブレット？」

何でそこは、カタカナかな？てか、それじゃ、物語が違ってくるんだけど？探偵ものになるんだけど？

「はあ、もう。とりあえず、こっちに…ぐっ！？」

急に脇腹が異常な痛みを訴える。ズキンズキンと呼応するように痛み始める。

「ぐがあああつ！！は、やく…早く、上がれ月影え！！」

力が抜ける。力が入らないんじゃない。力が抜ける。このままじゃ、月影がっ…

「離して下さい。もう、いいのです。私は、苦しい。この醜い世界を見ていたくないのです。生きていれば、私はまた同じ事を繰り返す。また、罪の無い人を殺してしまふ。私はそれが嫌なんです。だから。だから、離しなさい！！私を、死なせてくだ…」

「ざけんなっ！！」

俺は月影が言い終わる前に言葉を遮る。

「ざけんな、ざけんな、ざけんな…ふっ、ざっ、けん、なっ！！テメ、黙って聞いてりやあっ！！殺すのが嫌で死ぬだと？変わんねえだろうがあ！！結局、テメは自分を殺してんじやねえかあっ！？認めねえ、認めねえぞ。いいかあ、良く聞けえよお！！」

何が何だか分からなくなってきた。頭に血が上り。いや、もう残り少ないが…。とにかく、叫ぶ。痛みが周り、呂律が回る？

「お前にや、愛が足りねえ。お前のやってる事には愛が足りねえんだよ！！俺は、そんな結末絶対に認めないっ！！絶対に…だっ！！」

苦しい。きつい。やってられん！！…気付いたんだが、どうやらこの痛みは一定周期にやってくる物みたいだ。そして、周期が増せば増すほど痛みは倍増していき…。たぶん、次は死ぬ。

「…優しいですね。まさか、貴方が空海の人間だとは思いませんでしたよ。まあ、確に、息子が一人と娘が二人って言っていました…。断罪の、家系なのですかね？…ふふつ、やはり、運命なのでしょう」

月影？お前…何を？

「…貴方は先程、組織を潰すと言いましたね？約束、ですよ？必ず、組織を潰して下さい。組織の名前は、crown^{クラウン}。世界に…戦争を仕掛けるつもりですよ、彼等は…」

月影はそう言い俺の手を振りほどこうとする。

「ぶざけんな…。ああ？くそ…力が…。はうつ！？…そうだ、兼元！…兼元さん、どこだ？助けてくれ、人がビルから落ちそうなんだ。早く上げないと、俺の力が抜けて…。かね、も…と？」

いない…。先程まで、そこでガタガタと震えいた国会議員の兼元。しかし、その姿はどこにもない。…逃げた？

「っあっ！？」

ビクッ！…と痛みで体が反応する。そして…

「ふふっ、さようなら…。そして、ありがとう夏樹さん」

離してしまった。不意にやってきた痛みに耐えきれず、月影の手を離してしまった。

「あ？あ…あ…ああ？」

落ちていく。何百メートルもの高さから…。みるみる内に小さくなっていく月影…。体の形が次第に点となり…。ボチャン。

「ああ、あああつ」

ビルの向かい側は海。月影は、3年前の親父と同じく海へと…。

「うえっ？うっうっ？げええええっ！？」

ドバドバと胃から昼に食べたものが胃液と共に吐き出される。

死んだ？死んだ、死んだ、死んだ、死んだ、死んだ！？

「あああああああああああああつ！！」

死んだ死んだ死んだ？…ころ、した？

「あああっ？うあっ？うあああああああああああ
っ！？」

殺した。殺した殺した殺した殺した殺した！！

「俺が、月影を、殺した！！俺が殺した俺が殺した俺が殺した俺が、
殺した。また？また、殺した！！」

分からない。嫌、嫌嫌！！何で？何で僕を殺すの？何でナイフで
僕を刺すの？何で首を絞めるの？

「があああああっ！！」

ナンダロウ？クラクラする。落ちる、俺も落ちる。吸い込まれる。
窓の外へと俺も落ち…

『何をしているのですか？』

「！？」

聞こえた。そんなはず無いのに聞こえた。俺を呼ぶ声。さっきまで聞いていた声…

「月、影？」

フラフラ、と俺は声のする方へと移動する。そして『月影。月影。月影』と、何度も何度も彼の名前を連呼する。

エレベーターホール。声に導かれて俺がやって来た場所。すると、声が聞こえなくなり。声に突き動かされていた俺の体は、瞬間にドスンと倒れこむ。力が湧かない。もう、どうでもいい。このまま…。

チーン！！

どうやら1つのエレベーターが最上階に着いたようだ。ガァーと俺の前のトビラが開く。

「…乗れって、いつのか？」

ははっ。もう、どう、でもいいや…。寝られるのなら、ここでもエレベーターの中でも…

「…海？空…？空海！！」

あっ！！ヤクザだ。

「誰がヤクザだ！？」

スンマセン、松居警部でした。…あれ？生きてる？…あれ？

「大丈夫か？たく、無理しやがって…。お前、エレベーターで倒れてんの見てびつくりしたぞ？」

松居警部が言うには、爆破時刻になってもビルが爆発しないので、警官隊が突入した所…テロリストは一人しか居らず、俺がエレベーターで倒れていたらしい。

「大丈夫か？お前、助け出されて直ぐ目を覚ましたから、まだ傷の手当てをしておらんだ。医者と救急車はもうすぐ来ると思うんだが…」

月影…。やっぱり、死んだのだろうか…？…俺が殺した。

「がっはははは！！天下の兼元に手を出すからこういう事になるんだよ。いやいや、皆さん、聞いて下さいよ。テロリスト共に私は言ってやったんだ。このクズ共が、私はお前たちなんぞに屈しない！徹底的に戦うぞつ。とねえ、がっははははは」

近くで兼元が報道陣に取材を受けている。あれだけの醜態をみせた男が何を言っているのか…。武器や麻薬の密売…本当にこの男を助けて良かったのか？本当にテロリストが悪かったのだろうか？…分からない。

「断罪の…家系か…」

「あ？なんだそりゃ？」

俺は気だるい体を起こし、松居警部にビルであつた一部始終を告げる。月影の事、兼元の事、本当にこれで良かったのかという事を全て…。

「…断罪の家系、ねえ。確かに、空海家は罪を裁く家系かも…。親父といい息子といい…」

罪を裁く家系。何だよそれ？何で俺がこんな損な役回りをしないといけないんだ！？断罪？なら何故、俺は兼元を裁く事が出来ないんだ！！

苛立ちがフツフツと沸く。兼元に対し、自分に対し…

「っ！？ゴホッ、ゴホッ」

「おい、大丈夫か？服とか何か泥泥だし…何だ、この赤黒い塊は？」

血ですね。改めて考えてみると…銃弾3発が貫通、1発が体の中。ナイフによる軽傷が数箇所…そして、左脇腹を深く…。よ、良く生きてんな俺、はははっ？

「兄いゝ！！」

「いた！！たく、何をやってんのよ馬鹿兄がっ…」

「ふゆ…にい」

桜子に柊にコロッケ少女？無事だったのか…

「…はっ！？なんだお前、妹達を見た途端、死にそんな面だったのに急に生き返った面しやがって…」

『ほら、行つて来い。とりあえずは帰ってきた幸せを噛み締めろ』と松居警部が俺を妹達のいる場所へと促す。

ああ、俺の大切なもの。俺の居場所。俺の大事な宝物。俺が必死に守ったもの。血生臭い戦場から、やっと脱け出し、俺は幸せの世界へと向かう。妹達との日常。これが俺の…

「があああつ、ひゃひゃああああつ！！兼元おつ！！」

「ぐわっ？気を付けろ！！そいつ、まだ銃を隠していやがった！！」

「馬鹿野郎！！だから、あれほど気を付けろって言っただろうが！！」

「早く、皆さん。避難をして。銃弾が当たらないように…！！」

イシュ！？44階で俺と死闘をした、二挺の銃を乱射してくる気狂いの男。捕えられたテロリストとはコイツの事だったのか…。しかし、まだ、銃を所持していたらしく警官をはね除け、兼元へと銃を向ける。

「いひゃ？や、やめてくれ！？わた、私はまだ死にたくない！！こ、こらっ、警察！！早く、早く私を助けないかああああっ！！」

その言葉と同時に警官たちが一斉にイシュへと向かう。警官の一人がイシュに触れ、兼元から銃の狙いが外れる。兼元から狙いが離れたからか周りから安堵の溜め息が漏れた…。

「！？」

…ちょっと、待て。ちょっと待て！！銃口が、奴の持つ銃の狙いが妹達の方に！？

ドン！！

鈍い轟音…。

「夏樹いいいっ！！」

空海ではなく下の夏樹という名で俺を呼び、叫ぶ松居警部。分か
ってますよ、クソッ！！誰だ？誰に当たった！？

「兄い？」

柊か？

「嫌っ、嫌ああ」

！？、桜子！？

「にいゝ…」

コロッケ少女！？

「な、夏樹！！」

っ！？誰だ？誰が撃たれた！？早く、早く病院に…

「あれ？…何だ、これ？」

また、血が流れ始めた。せつかく、ガムテープで止血したのに…。
と？足がもつれて。て、何を座り込んでいるんだ俺は！？

「……あ、なんだ…そうか。撃たれたのは…」

撃たれたのは俺か!?

「夏樹っ!!大丈夫か?夏樹!？」

「兄い」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん!!」

「にい…」

何だよ。そんな顔をするなよ。大丈夫だって…。

「…なっ!?!何だコレは!?!夏樹、何でお前コレで動けるんだ?何なんだよコレはあああっ!?!」

松居警部が俺の服を脱がし撃たれた所を調べる。そして、44階での死闘や月影との死闘で傷ついた体を見て叫ぶ…。

へへっ、銃弾が5発に、左脇腹をグサリ…。なあに、松居警部…
何て事は…

「おいっ!!夏樹?夏樹?...目を開けろ、目を開けないか!!医者だ、医者はまだか!?!早く、早く、医者と呼ばないかああっ!!」

第十六話：此を以って、第一幕とす（幕引き）（後書き）

こんにちは。

終わりました…。結構、かかりましたね…。まあ、とりあえずは、第一幕・終てことで…。

……………えっ！？まだ、続きますよ？まだ、第二幕、三幕と続きますよ！？てか、兄があのままじゃ不敏でしょ？続けさせて下さい、お願いします！！

相も変わらず、ど下手ですが。どうぞ、もう暫く私めにお付き合下さい。よろしくお願い致します。

さて、第十六話目です。詰めて、詰めて、詰めました。話の件が長くなり、読者様に「迷惑とは思ったのですが…」ここで終らせておきたかったので、こうなりました。本当にすいません。

とりあえずは、兄と月影の友情？やら、兄のこれからの苦悩やら、トラウマやら書いてあります。組織の名前も出てきましたし、かなり、伏線いっぱいのお話になったのではと思います。

これら伏線を使い、もっと面白い物語が書けたら良いなっと思えますので応援のほどよろしくお願い致します。

それでは、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました！！

…でも、次話はたぶん番外のお話（笑）

番外：柊の日常

うい……うつ？どうも、空海^{うつみ} 柊^{はな}と言います。

えっと、私には、6歳と17も歳が離れた兄弟がいます。

うい？性別？…私は女の子です。6歳上の兄弟も女の子です、姉ですね。…17も歳の離れた兄弟は兄なので男です。

その兄は、いつもだらしく、馬鹿な事ばかりをしているのでよく姉に怒られています。でも、反省などしません。前の日に怒られたばかりだというのに、翌日はまた同じ事をして怒られています。…馬鹿ですね。

でも、良いのです。それが、兄の持ち味、とても良いのです。

馬鹿でスケベであけすけで優柔不断で馬鹿で…うい？馬鹿が二回？…だって、本当に馬鹿なんだもの…。

「おおい、ご飯出来たよー」

噂をすれば何とやら？兄です。…エプロン姿で、お玉を持って。
男だというのに、そのスタイルはもうお母さんです。心のお袋さん
なのです。

「あ、あの柊さん？まじまじとお兄さんを見ないでくれる？…恥ずかしい〜」

そう言い、クネクネと体をくねらせる兄…。ねっ、馬鹿でしょ？

「ちよっ、気持ち悪いからクネクネしないでくれる？」

うい、6歳上の姉がやって来ました。最近、姉は兄対してやたらと厳しく。兄をいじめます。

「き、気持ち悪いって何かな？お兄ちゃんは、気持ち悪くないよ？むしろ、気持ち良い系だよ？」

「意味がわからん」

うい、同じく。…気持ち良い系って、何を基準として気持ち良いのか…馬鹿ですよ兄…。

「…うう…と、とりあえず、ご飯出来たから…ぐすっ…食べよ…ぐすん…」

…泣いてしまわれた。兄は極端に心が弱く、こっぴどい風にいじめられると直ぐに泣いてしまう。…泣く兄は、どこか可愛い。

「うん…！」

「ひいひいっ!?!」

…姉はそうでもないらしく、兄にとどめを刺してダイニングへと消えていった…。

「…ド、ドメスティック・バイオレンス!? はっ!! みのさん、みのモンチャに電話しなきゃ!…」

兄…。泣きながら電話をしないで下さい。てか、もう夜なのでみのさんはスタジオにいないと思いますよ?

番外：柊の日常（後書き）

こんにちは。

番外編です。この番外は、一番下の妹・柊にスポットを当ててみました。

とりあえず、兄以外を書いてみようと思ったのですが…。何か、他人の目線で見える兄が本当に馬鹿に見えるのは私だけでしょうか？
（笑）

では、今回はこの辺で失礼致します。ありがとうございました。

…柊は、兄より大人かも？

番外：柊の日常・うい2

柊です。うい…、今日は兄と外にいます。

「らん、らん、らん」

…うい、先に言っときますがこの馬鹿な鼻唄は私ではありません
…兄です。

「柊い、どこに行こうかあ？あはははっ 今日休日、しかも、
柊とデートだよ」

…デート？…デート…うふっ。

「…ひ、柊さん？ど、どうしたの？…もしもし？」

「……………」

「あれ？お兄ちゃんは、アウト・オブ・眼中？」

「……………」

「……えええん、柊が無視をするー!!」

はっ!! 駄目でした!! 兄とデートという言葉に舞い上がってしまつて…あれ? 何を泣いているのですか、兄?

「ぐすつ。いいもん、いいもん。お兄ちゃんはどうせ、そういう役回りだもんっ!？」

…何やら訳が分からないけど、どうやら、私が兄を傷付けてしまつたようです…。

「うい…兄、ごめんなさい」

そう言つて頭をなでなでしてあげる。そうすれば兄はたちまちに元気になる。…うい、これ…兄を操縦する方法・その1なのです。

「あはっ!! いいんだよ、うん。お兄ちゃんが勝手に落ち込んだだけだから、うん。やっぱり、柊は良い子だよ」

ほらね? 兄は単純なのです。優しくしてあげると直ぐニッコリになるのです。

…でも、心配です。兄は少しでも優しくされると、直ぐに、その優しくした相手に気を許してしまいます。いや、それが兄の良い所ではあるんです。良い所では…。

でも、こんな兄だから、もし悪い女にでも引つ掛かってしまったら…。

それで、それで…メツタメツタのギツタギツタにされて捨てられでもしたら…うい、心配です。

「んー、何でこんなにキャベツが高いんだ？ん、グリーンボールのが安い？…何だ、いつもは逆なのに？はっ、今年はキャベツが不作なのか！？」

あれ？兄、デートだったのでは…？あれ？なんでスーパーに…？
…あれえ？

「むむむっ、いや、2、3ヶ月もすればまたキャベツが安くなるだろうっ…たぶん。」

コラッ、何を真剣に悩んどるか！？デートはどうしたデートは…！？むう、この馬鹿兄めえっ！！

「…グリーンボールで良いか。俺、グリーンボールのが好きかもだし…いや、グリーンボールのが好き！！絶対好き！！…煮たり焼い

たりするとキャベツのが美味いけど…。なっ？柊もグリーンボールのが好きかもだよな？」

「…誰がお前なんか好いているか、馬鹿兄めっ！！」

「…えっ？」

番外：柊の日常・うい2（後書き）

こんにちは。

番外編、2つ目です。そのままですね。柊の日常です。

たぶん、兄はあの後、泣きました（笑）『妹に嫌われたあ』とか
言って泣いたと思います（笑）

番外編の兄は、どことなく子供？…主婦っぽくもあるかも？

では、今回はこの辺で失礼致します。ありがとうございました。

番外編は、短くて書きやすいかも（笑）

番外：桜子の心情

皆さん、こんにちは。私の名前は、空海桜子うつみ さくらこと言います。

私には、2人の兄弟がいます。1人は妹なのですが。とても、可愛い妹です。頭も良く、気が利いていて、もう、可愛い一言です。

…あと、一番上に兄がいます。……まあ、そいつは置いときましよう。話たつてくだらないですから…。

「たっただいいまあー!!」

くっ!!…はい、そうです。これが兄です。馬鹿です。アホです。スケベだし、優柔不断だし…あと、ネクタイをいつもだらしなく締てるし…そのくせ、料理は上手なのよ?炊事、洗濯、掃除に裁縫…全て完璧。むう、…ルックスとかも悪くないし…。てか、むしろ何かキラキラが見えるし。…とにかく、何か苛つく!!

「うつさい!!ただいま、ぐらい普通に言えないの!?!」

「ひゃっ！？」「ごめんなさい……」

むう……。何よ、何をそんなにビクビクしてるのよ！？そんなに私が嫌か？そんなに私が嫌いであつ！？

「馬鹿兄があつ！！」

たく、何よ。いつも、いつも、私に対しビクビクして……。柊には、あんなに可愛い、可愛いってしてるくせに……。

「ひ、柊……。桜子、今日なんかあったの？」

「いえ、兄が帰ってくるまで普通でした」

「えっ？俺？原因は俺！？」

「かもです……」

……むう。また、2人だけで会話してえ。仲が良いなあ、もう。むう、何を話してんのかな？

「むむむつ、桜子は俺の事が嫌いなのだろうか？」

「うい？嫌いではないかと…」

「ええっ！？嫌いでしょ、あれ？いきなり、怒鳴るんだよ？…むむむつ…とにかく、好きになって貰う方法を考えねば…」

…聞こえない。何を喋ってるのかな？…えっと、好き？嫌い？そうじゃない！？なんの会話かな？…はっ！…まさか…

『柊、お兄ちゃんの事好きかい？』

『はい、大好きです』

『そうか…じゃあ、今夜…』

『そつ、そんな…兄、恥ずかしいです』

『柊、俺の事好きなんだろ？』

『…はい…』

『じゃあ…』

『はい』

きやあああつ！？駄目えええつ！？な、なななな、何を、何をやっているのよおつ！？

「こおおのつ、馬鹿兄があああつ！！」

「へっ！？…えっ？えっ？…ひっ、ぎゃiiiiiiいつ！？」

この馬鹿兄が、馬鹿兄が、馬鹿兄が！！何を妹に強要しとるかあああつ！！

「姉っ！姉っ！！姉ええっ！！」

「はっ！？柊？…あつ」

また、やってしまった。また…暴走してしまった。私にボコボコにされてしまい、お兄ちゃんはピクリとも動かない。

「あう…どうしようっ…」

ただでさえ嫌われている？というのに…これじゃ、ますます、お兄ちゃんに嫌われてしまう…。

「…姉。姉は兄の事が…嫌い？」

えっ？何で？何でそんな事になるの？

「えっと、き、嫌いじゃないよ？…な、何で？」

「うい。兄が自分は、姉に嫌われているのではないか、と心配していたから…」

えっ？うそ？…心配をして、くれてた？私に嫌われていないかを…？馬鹿…。嫌いなはず、ないのに…。

「うっつ？」

「あ、兄が気付きました！！流石、兄です。直ぐに気が付きましたよ、姉…」

「お兄、ちゃん…」

そつ、とお兄ちゃんの頭を抱きかかえる私。久しぶりに、お兄ちゃんの顔を間近で見た。やっぱり、かつこいい…。

「はっ…」

「お兄ちゃん…」

「ひい、ひいひいひいひい！！」

「はっ？」

「うい？ちよつ、兄？私の後ろに回らないで下さい。うい！…ど」を触って…」

「鬼が、鬼がお兄ちゃんを食べにくるうつつ！！」

…鬼？

「うい！？あ、姉…？あ、兄はただ錯乱しているだけで…。兄ほら、謝って…はやく、姉に謝罪を…」

いの…

「きゃああつ！…ごめんなさい、ごめんなさい」

馬鹿…

「……ひっ？…さ、桜子、さん？」

「このっ、馬鹿兄があああっ！！！」

番外：桜子の心情（後書き）

こんにちは。

この番外は、桜子にスポットを当ててみました。

結構、色々と考えていますね…桜子。兄に対して厳しい部分があるのですが、これは愛情の裏返しでしょうか？勘違いも何かあらぬ方向に…。

まあ、何にせよ。意外と…いや、結構、兄大好きっ子？愚痴が途中から褒めになっている辺りとか（笑）

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

とりあえず、空海家は暖か家族！！

番外：とある家庭の、事情…

いや、暗い訳でして…。暑い訳でして…。汗だくの訳でして…。

「てか、花の高校生が何で警察の留置所にいるのかなあ？」

俺の名前は空海夏樹・16歳。花も羨む青春真っ只中の高校生なのですが…。

「ガハハハッ！！親父様を怒らすと後が恐いのだ、夏樹よ！！」

こちら、ウチの馬鹿親父…。県警の捜査3課・特殊係に所属する刑事…。

「デメエ、何が怒らすと後が恐いだ！！俺が何をしたってんだ！？てか、寝てる間に留置所にぶち込むとはどういう見だ、ああ！？」

「ああん！？デメエ、覚えてねえてのか？ふざけんな！！お前は、お前はなあ…：昨日の晩御飯で母さん特製ハンバーグを俺より一個多く食べたろおおがあっ！？」

馬鹿かああっ！？何を言つとるんだ、この馬鹿親父は？俺が、母さんの特製ハンバーグを一個多く食べたあ？

だから、息子である俺を留置所にぶち込んだんだとお！？

「母さんの、母さんの…あの愛情ハンバーグはなあ。…俺のだったんだよおおっ！…うおおおーん！！」

馬鹿親父は意味の分からない事を言い、子供の様に泣き叫ぶ。しかし、その泣きっぷりを見ていると何だか…

「おろろーん！！だから、だからあー。テメエをデストロイ！！」
ふざけんなああっ！！何を考えてんだ、馬鹿親父がああっ！！

「うつふつふつふつ…」

あー、…何をしているのかな？てか、何かな？それ…

「うつふつ。こりはねえ、親父様が丹念に改造を施した銃でねえ。オートマグ3改・ゲシュペンストIIイーガーって言うんだよあー？うつふつふつーっ？」

うふふふふーっ？そんな事を聞いているんじゃないんだよー？
その銃をどうするつもりかと、聞いているんだよー？あははーっ…。
「最近、手入れをサボってたからなあ…。暴発しちゃうかもなあ…。
」？」

だれかあああつ、助けてええっ！！てか、警察はこいつを逮捕しろよおおっ！！

「よいしょつと…」

「銃口をこっちに向けんなあああつ！！」

ヤバイよ、ヤバイよ、ヤバイよこの人！！目がめっちゃマジなんですけどおおっ！！？

「こらああっ！！玄ちゃん！？夏くん！？」

うおおおおっ！！天の…いや、母の助けだああっ！！

「むう。どうして、君たちは私のご飯を食べずに朝早くからいなくなるのかなあー？」

ぶんぶんという擬音が似合うような怒り方をする俺の母親…。

「ひい、ごめんなさい、母さん！..」

えっ？何その反応？..親父って、馬鹿？母さんなんて全然怖くないのに…。

「むっ…ふむ、分かればよろしい…」

「ふー…」

…なんだこの夫婦？

「あれ？夏くん、そこで何してるの？」

いま気付いたんですか母さん？..遅いよ。

「そおだ。丁度、良かった。あのねえ、夏くんはあ…弟、妹、どっちが良いい？」

…ええと、どこをどうみて丁度が良いのかな？てか、そんな相談は夫である親父にして下さい…。

「…母さん。また、その話を蒸し返すのか？」

なんだ？いつものおちゃらけた親父が…何かシリアスな顔に…。

「夏樹を産んだだけ良しとしようって…あの時、決めただろう？お前の体は…そんなに、丈夫じゃないんだから」

…あー、いきなり、シリアスなんだけど？てか、俺…置いていかれてる？

「うう。でもでも…！」

「でもも、かもも、ない…！…頼むよ、母さん。わがママを…言わないでくれ。もし、子供をまた産むことになったら…今度は本当に死ぬんだぞ？…俺を、俺を置いていかないでくれ…！」

…シリアス過ぎ…！何をこんな警察の留置所で語らっているの！？てか、早く俺をここから出せえっ…！！

「なあああっ…！夏樹、うるせえ…！何をガンガンと鉄格子を蹴ってんだ？警察の留置所で遊ぶなっ…！」

お前が連れて来たんだろがああっ！！俺だってこんな所で遊びたく無いわぁっ！！

「ぐすん、玄ちゃんの馬鹿…」

「ええっ！？何で馬鹿？どこら辺が馬鹿？直すよ？母さんが嫌だっ
て言うなら即効で直すからああ！！」

うおおおんとガキみたいに泣く馬鹿親父…。正直、いい気味だ
と思う。でも、…クソッ！！母さんが、まだ暗いままだ…。折角、邪
魔して話を逸らそうとしたのに…。

「…母さん？」

「うおおおん、母さぁん！！！」

「だぁぁあつ、五月の蠅！！いや、うるさい！！！」

母さんの顔が見えない。…泣いているのか？クソッ、泣くなよ…
泣かないでくれよっ！！

「ぐすつ。別に…産むから親なんじゃないもん。そりゃ、産んだら
親だよ？でも、育てたって親だもん」

「…母さん…」

そつと母さんを包み込ように抱く親父…。

「だからね…。親って、決めるのは愛だと思うの！！愛があれば、皆、幸せなんだよ！？…ねっ？そうでしょ、玄ちゃん？」

愛が有れば…。母さんがいつも口する言葉…。いつも、ニコニコで我が家の太陽の母さん…。愛か…。確に、愛、されてるよな…俺…親父、どうすんだ？ここで、養子縁組を拒んだら…

「分かったよ、母さん…。そうだよな、そんな考え方もあったよな」

「えへへっ。あのね、もう調べてあるの。県内に結構あるみたいなの養護施設って…」

ちっ、やっぱ…親父が一番か…。まあ、そりゃそうなんだがね…。

「よしよし、じゃ、あっちで話をしよう。なんかここ暗いし、環境悪いし…」

「うん！！」

はあ……。とにかく、やっと出られる。さっさとこんなジメジメした所とはおさらばだ……。

「はあ、おい、早く鍵を……て、あれ？親父？母さん？……えっ？あら？ちよつと？ちよつとおおっ！？」

あは？あははっ？ええと、何というか……置いていかれた？話的にとかじゃなくて……物理的に、置いていかれたのかな？は、はははっ

……

「ここの、馬鹿夫婦がああああっ！！」

番外：とある家庭の、事情…（後書き）

こんにちは。

番外を次々に載せていきましたが…。今回、番外編にて、一番シリアスかも？

兄が16歳の時の、空海家の面々ですが。兄・夏樹と親父とお母さん…あれ？シ、シリアスです…。

さて、親父と兄の関係…。どこかの神話を匂わせます。この時の兄はマザコンだったんですね。そして、同族嫌悪でもあった…。

お母様は、親父より位が上。つまり、母親最強説？（笑）

とりあえず、ちょっと？昔の話…。空海家の昔話でした。

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

兄の口グセ？は母親譲り。主婦的な所とかも、ここから…（笑）

番外：夏樹

どうも、空海夏樹です。

「はい、じゃあ…今日の授業はここまで…」

ここは、中学校です。ああ、自分、中学2年ですから。

「こら、貴様。次は移動教室だぞ？早く、用意をしないか…」

さて、この生意気な女子は、俺の幼馴染みである氷川 凜ひかわ りんという厄介な奴だ。小さい頃から、事あるごとに何か突っ掛ってきます。…正直、ウザイです。

「むっ、今なんか…ウザイとか思ったろ？」

有り得ない程、鋭いな…。

「…まあ、良い。…サボるなよ!？」

無理だな。俺はこれから、用事があるからな。だいたい、俺は義務より権利の方が好きなんだ。

「……サボるなよ!？」

……有り得ない程、鋭いな。

「はっ、こんちわっす夏樹さん!？」

「ちいーす!」

「ちゃーす!!!」

「うーす!!!」

「夏樹さん、ご苦労様ツス!」

「こ、ここ、こんにちはツス!」

「夏樹さん、はよっす」

「ちいす、夏樹さん」

さて、学校の授業をサボってやってきた俺。ここは街からやや外れた場所に位置する某廃ビル。ここには、長年放ぼっておいて事も

あつて何十人も不良達が集まる。いわゆるたまり場。その中で、会う奴、会う奴に挨拶をされる俺…。それもそのはず、俺はここにたまる不良たちが組するグループのリーダーなのだ。

「ああ、皆…おはよ」

実際はもう昼近くなのだが…まあ、不健康な生活をしている奴らの集まり。大抵の人間が昼起きが普通なのだ。

「夏樹さん、隣町の族の話なんですがね…」

今日もまた、抗争の話。別段、争いが好きという事ではない。実際の所は人と絡む事さえ億劫で、このグループにしても、ただただム力つく奴らをシバキ回していたら…。いつの間にか、こんな大所帯になってしまっていたのだ。

「ふーっ…」

いつからだったか、こんなにも気だるい感情を抱き始めたのは…。別に、不幸な訳では無い。飯も食べられない奴らに比べたら、学校にも通え、飯も好きなだけ食べられ、何事にも縛られていないのだから、不幸な訳が無い。ただ、何か分からないが、いまは何もかもが全て無意味に思えてしまうのだ。そう、いまここに自分が存在する事さえも…

「まあ、こんな事を言っていたら…母さんは、泣くし…馬鹿親父は鉄拳を飛ばしてくるんだろうな…」

「貴様、あれ程サボるなっと言っておいたのに…」

……おい、有り得ない程、鋭すぎやしないか？

「テメエら、コイツは集会所に入れるなって言っておいただろうがっ…！」

ビルのとある一室。その奥のソファにドカツと座っている俺に対して、ギロツと睨む凜…。

「いや、駄目って言ったんですが…姉さんが無理矢理」

「ウチの奴らで夏樹さんと姉さんに意見できる奴なんて居ませんぜ？」

「そうそう」

いや、あの、姉さんって…。何でコイツ、こんなに皆から上位に位置付けされてんだ？

「来い！！中学校は義務教育だ！！良い大人になれないぞ！！……こ
ら、お前達もだ！！こんな不健康な生活を続けず、ちゃんとした生
活をしろっ！！」

凜の説教から逃れるように散々になる不良達……。だが、逃がすま
いと彼女も不良達を追い掛ける。

「逃げるな！！お前達を修正してやる！！」

「ぎゃああっ！！」

「姉さん、勘弁して下さい」

「助けてえ」

「姉さん、やめて」

「いやあああーっ！？痴漢よ強姦よ、いや、強……男？」

……はあ、これじゃ、おちおち考えもしてられんよ……まったく。

「凜……」

「むっ？何だ、夏樹……？」

……
ありがとう。

番外：夏樹（後書き）

こんにちは。

とりあえず、時間が許す限り、投稿しています。まあ、番外編なので書き溜めが多くあるだけなのですが…（笑）

兄の過去話ですね。トラウマは既にあるようで、どことなく暗いですね。てか、不良です…（笑）

さて、幼馴染みが出てきました。…この幼馴染み、別に番外編だけのキャラではありません…。なんと、既に本編に出ています。…えっ？どこに？…えっと、どこだろう？（笑）

では、今回はこの辺で失礼致します。ありがとうございました。

番外編…そろそろ、本編？

番外：夢現（ゆめうつ）

…あ、れ？どこでしょう、ここ…？

「…むむむつ、何だ？」

目が覚めてみたら、そこは知らない場所だった。

「紫の壁？…いや、クリスタル？」

どうやら、洞窟のような、そうじゃないような所のようだ…。壁はクリスタル調で紫色。どこかの洞窟のように見えるのだが…。

「扉だよな、これ？」

洞窟にして扉…。あつれえ？何か訳が分からなくなってきた…。

「…おつ邪魔しまーす」

とりあえず、俺はガチャリと扉を開けた。この扉以外に出口が無さそうだったため、躊躇いは無い。

「……………あつ、こんにちは」

「…こんにちは…」

…人が居たよ？…何だこの展開は？

「へえ、妹さんがいるんですか。しかも、2人」

「そうなんだよ。いやー、2人とも可愛いくてねえ…」

見知らぬ土地にいつの間にか来てしまった俺。扉向こうのこの男の子も同じようで、この見知らぬ土地に来てしまったらしい…。

とりあえず、仲良くなった俺達。お互いの境遇を話す事になったのだ。

「俺は、一人っ子でして。羨ましいなあ……」

少年は、高校性ぐらいだろうか……。背は俺よりやや小さいが……。ことなく俺と雰囲気似ているような気がする。

「まあ、居候がいるんですけど……そいつがまた……」

「へえ、居候？」

『ええ』と、その居候の話をする少年。何やら居候の人に対して不満が多多あるらしく。

「たく、それですよ？最初に会った時は、玄関を爆破しやがったんですよ？……信じられます？爆破ですよ？」

と、凄い勢いで語り始めた……。しかし、玄関爆破ねえ……凄いな！？

「ことある事に銃を乱射するし……。何を考えてんですかね！？」

…何考えてんだろうねえ…。銃の乱射か…。

爆破に、銃の乱射…。あれ？何か…頭をよぎった？

「痛っ！？」

「えっ？どうしたんですか？」

痛い。何だ？急に脇腹とか背中とかが…！？

「あれ？何だ？俺の体が…消えて？」

「！？」

な、何だよこれ！？俺達の体が透明になっ…

「…な、何か、消えてしまっ…みたいですね」

「痛たたっ、みたいだね。…名前、言ってなかったね、そういえば…」

「あ、確に」

良く分らないが、どうやら時間らしい…。もう、彼とは会えない。その事だけがはつきりと頭にあった。何故だろうか、そう思っているのだ…。そして、たぶん彼も…

「俺の名前は、夏樹…。空海夏樹て言うんだ…君は？」

もう、俺の体は肩から下が無い。そのため、脇腹と背中 of 痛みも消えていた。ただ、もうすぐ残りの体も消えてしまふ、その前に彼の名前を聞きたい。どことなく俺に似ている少年…。一体、君は誰なんだ…？

「なっ！？は、ははっ…。そうか…、すいません。何で俺達がいるのか分かりましたよ…」

「？」

少年は笑う。俺の名前を聞いた事で俺達がここにいる理由が分かったと笑う。

「俺が貴方を呼んだんだ…。俺が一番会ってみたいと思ってた人…」

「君が、俺を呼んだ？」

どういう事だろうか。彼の言葉が理解出来ない。てか、顔だけに
なっ…

「あっ！！待って、聞いて下さい！！俺の名前！！俺のなま…は…」

駄目だ…。もう彼の声が聞き取れない…。消えていくと同時に、
意識も…

「…の名前…うつ…そ…ま…です」

混濁の意識の中…結局、俺は彼の名前を聞き取れなかった…。

あ、れ？どこでしょうか、ここ…？

白塗りの壁…。なんか、病院のベッドみたいなの…。ベッド？…匂いとかモロに病院だし…。

「きゃあああつー！」

…おい、おい。人を見るなり叫び声をあげるとは…何て看護婦さんなのかな？

「せんせえー！！307号の空海さんが目を…目を覚ましましたー！！」

…看護婦さんよ、病院はお静かに…。て、本当に病院かよ…。

「ああ、そっか…。いっぱい、撃たれたんだっけ。脇腹もグツサリと…」

外はまだ暗い…。しかし、夜ではないと思う。まあ、なんだ…朝

早くからテンションの高い看護婦さんだったな。

うーっと、体を伸ばす…。帰ってきた…。何か良く分からん世界だった…。一体、何だったのだろうか…？

「少年の名前…。うつ、そ、ま？」

断片的に聞き取れた声。…うつ、うつ、うつ…うつみ？

不意に俺の頭に自分の名前が浮かんだ…。いや、いやと否定はしてみるものの…どこか自分に似ていた少年。

「…まさか、ね」

番外：夢現（ゆめうつつ）（後書き）

こんにちは。

番外編を一気に載せていきました。まだ少し残っているのですが……とりあえず、今回はこれで終了。

次からは本編です。こちらは、まだ書けていないので頑張って早めに完成させたいと思います。

番外編では兄の補足って事で兄の過去の話をもつて書きました。だいが、兄のキャラ設定が固まってきたのでは？と思います。

さて、この番外の話では謎の少年が出てきました。……いや、少年は謎のままですよ？しかも、本編にも登場しません。とりあえず、兄の妄想って事で……（笑）

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

兄、生きてました。……あつ、この番外編……本編に繋がってます。

第十七話：病院では、お静かに…

病院って、退屈だ。何だこの退屈さ…。はあ、さっきまでは桜子と柊がいたのに…。

超高層ビル、ニュー・エントランスビルを爆破しようとしたテロリストに立ち向かい、怪我をしてしまった俺。

銃弾が3発貫通し、2発が体内に残っていたらしい。そして、ナイフによる軽傷及び脇腹の深い傷…。普通なら血液が足りずに死ぬという所なのだが…。

「やはり兄は無敵です!!」

そう言ってニコニコと俺に笑いかける柊。

「私は信じていました。兄は…兄は、絶対に大丈夫だって…」

そんな事を言う彼女だが…目の辺りが赤く染まっている。泣いてくれていたのだろう…。彼女の泣く姿が容易に想像できる。

「兄…？」

柊が『どうしたの』と心配そうな声で話かけてくる。

「あ、いや…何でもないよ」

言葉ではそう言っているが…心は違う。自分への苛立ちで胸がいっぱいだ。妹達を泣かさないと決めていたのに…。

「ちょっと、柊…。お兄ちゃんは疲れてるんだから…」

「うい…そうでした…ごめんなさい、兄…」

しまった。また、妹達にいらん心配をさせてしまった…。

「じゃ、私達帰るから…。ゆっくり、休んで、ね？」

そういつて彼女達は、俺のいる病室を後にした…。

で、いまに至る…。

「退屈だ…。ううー、桜子お…柊い…」

寂しいよー。1人は嫌だよー…1人は…嫌だ…。

「いつよおー!!…なんだ空海? 撃たれたってえ? あはははっ、馬鹿だなあ、お前」

あまりの孤独感に鬱に入ろうとした俺。しかし、その瞬間ドツパンと病室のドアが勢い良く開いた…!!

「ぎゃはははっ!!…うけるぜっ、だから言ったら、高橋? 絶対、こ

いつ痛めに合うって？ぎゃはははーっ！！」

「駄目ですよ、黒田先輩…。静かにしないと、病院なんですから…」

入ってきたのは、県警の捜査1課・強行犯係、黒田秋人…。俺の2年先輩でいやみな奴だ。

そして、同じく1課・強行犯係の高橋君だ…。彼の方は、俺の3年後輩である。

「空海いーっ…。ぷっ、ぎゃははははっ！！」

マジでムカつく！！いくら2年先輩だからって笑いすぎだろ？

「病院内はお静かに！！」

馬鹿みたいに笑う黒田さん。しかし、あまりの大声に通りかかった看護婦さんに怒られてしまった。はっ、良い気味だ…。

「いや…申し訳ない…。僕とした事が、病院で大声を出すなんて…。ああ、なんて馬鹿な事を…」

…確かに、馬鹿だな。何だ、そのキャラの変わりようは…？

「……ところで、看護婦さん。どうですか？一度、僕とお食事でも……」

口説き始めたよ、この人…。てか、何しに来たんだよ、この人？

「お断りします。それに、今は看護婦ではなく、看護師です」

「あ……すいません」

[illegible]

看護婦：いや、看護師の女性は『では、お静かに』と言い部屋から出ていたのだが、その後に残された黒田さんの姿がかなり傑作で、笑いを堪えられずにはいらなかった。

「ひーっ、ひひひひっ… あはははははははっ」

「テメ、笑い過ぎだろおがつ！！」

黒田さんが何か言っているが構わない。お腹が…お腹がよじれる…。

「まあ、黒田先輩って署内じゃモテモテの部類に入りますからねえ。フラれる所なんて、滅多に見られるものじゃないですし…」

高橋君の言う通り。この腹黒の男のどこが良いのか、意外と黒田さんはモテる。本人もそれを鼻にかけ、よく俺に自慢をしていた。…が、フラれた…。ぷっ、ナルシストに『僕と一度、お食事でも…』とか言ってフラれてやんの…。これが、笑わずにいられるかっ!?

「があああっ!!消去しろ!!今すぐ脳内からデリートしろおおっ!!」

うわっ!?!お見舞いの果物を投げてきたよこの人!?

「バナナぶどうにさくらんぼおおっ!!」

果物の名前を叫び、それらを投げってくる黒田さん…。こ、この人、子供だ。

バシユッ!!

「ぎゃはははっ！…りんごピットー！…けーっけっけっ！…」

「ちよっ、黒田先輩？やり過ぎですよ？…空海先輩？だ、大丈夫で
すか？」

はっはっはっ…。いや、いや、いや…。何、何…。

「う、空海？」

「空海…先輩？」

いやあー、子供だなあ…。りんごかあ…。あははっ…………。

「デメエ、ふざけんなあっ！…この馬鹿があーっ！…いてえよ、い
てえんだよおおっ！…てか、りんごって何だああああっ！…」

遂にぶちギレた俺！…りんごが顔面を直撃したのだ、キレない訳
がない…。ベッドの上にズアッとしち上がり、黒田さんを見下す。

「う、空海…。待て。わ、悪かった。マジで！！マジで悪かった！！」

今更…おつそーい！！あつはつはつ！！

「空海、悪かった、悪かったから…その、その、メロンをこっちに投げないでくれええつ！！」

黒田さんの言う通り、俺の手にはメロンがある。実がギッシリで固いメロンだ。うふふつ、コイツは痛いぞお！。あははははっ、りんごなんて比じゃないぜええつ！！

「ひいひいつ、こええつ！？空海の顔が笑ってるけど笑ってねえええつ！！」

「うふふふふーっ！！テメエを、テメエをおお…何が何でも、デストロイー！！」

俺は、ズオオツとプロ野球選手ばりに振りかぶる。ターゲット、ロックオーン！！

「だあああつ！？た、高橋いつ、助ける。俺を助けるおおーっ！
」

「無理です。…黒田先輩、成仏して下さいね」

「高橋いいいいいつ！？」

あつはははっ！！日頃の行いの賜だなあ、黒田さあーん？

本当にメロンを黒田さんにぶち当てようとしている、俺…。しかし、今まさに、といった所で…

「病院内はお静かにいいーっ！！」

と、先程の看護師さんが乱入してきたため…。

ガンッ！！

「ぎゃあああああっ！？」

いや、やっぱり勢いが止められず…メロンは黒田さんにぶち当たった…。

「ぎゃああつ、看護婦さん。血が、頭から血がああつ!!」

黒田さんは看護師の女性にすぐるように頭から血がでていると訴える。

「大丈夫です。血なんか出てません。丈夫な石頭です!!」

しかし、看護師の彼女はそう言って一蹴する。黒田さんは『そんなあああ?』と叫ぶのだが、やはり『お静かに』と一蹴するのだつた…。

「空海さん!?!?どんな理由があろうと他人にメロンを投げるのは感心しませんねえ…!?!」

うわっ、とばっちりがっ!?!ズンズンと俺の方に近づいてくる看護師さん。

「えっと…その…はっ、はははっ?俺とした事が…。いや、すいません。こんな美しい看護師さんを困らせるなんて…どうですか?—

度、お食事でも…?」

…だあぁっ!?何を言っただ、俺はぁっ!?てか、これじゃ、黒田さんの二の舞にいいっ!?

「おい、高橋。アイツ馬鹿だぞ?しかも、真性の馬鹿…」

「く、黒田先輩!」

クソッ!!黒田さんの奴、好き勝手言いやがって。大体、アンタにだけは言われたくねえよっ!!アンタも同じ事をしただろうがっ!!

「えつと…。その…」

ああー!?看護師さん引いてるよー?うわー、俺も黒田さんの様に…

「や、夜勤が無い日なら…いつでも」

ほらーっ!!やっぱ、俺も同じく…

「「「えっ!?!」」」

……その後、俺が黒田さんにボロボロにされたのは言うまでもない。
い…。

第十七話：病院では、お静かに…（後書き）

こんにちは。

番外編を一気に載せて、今日はもう良いかなと思ったのですが…。

でも、まあ、書き上げたのだから、さっさと載せておこうかなつという訳で…本編です（笑）

さて、第十七話目です。奇跡的生還の兄！！退屈な病院生活を満喫中かと思いきや同僚がやって来て…（笑）

黒田秋人…結構、好きなキャラです。兄とは違う勤務場所なのですが仲が良い？同僚のようですね。高橋君と三人で三馬鹿トリオかな…？

では、この辺りで失礼致します。ありがとうございました。

…兄は、意外とモテる！？

第十八話：脳天気な彼女と凜然な彼女…

病院は、退屈…。安静にしているのは良いのだが、あまりにもする事が無いので退屈だ…。

「ぴんぽーん…」

はあ、桜子が柵が来ないかなあ…。いや、どうせなら2人とも一緒に来て欲しいかも…。

「ぴんぽーん…」

でもって、2人に看病をして貰う…うふっ。うふふっ、いやあ…最高じゃん？幸せ過ぎますーう、うふふふーっ！？

「ぴんぽーん…」

あはははーっ？桜子が、りんごを食べさせてくれて…。柊は、本を読んでくれる…。きゃああーっ！！し・あ・わ・せえーっ！？

「ぼんぴん…」

「ご使用の際は、用法、用量をお確かめ下さい…？」

「いや、風邪薬のCMじゃないんだから…」

「やあーと、反応してくれましたねえ？さつきから、呼んでいるっていうのに…」

「はあ、誰か来ないかなあ…。桜子と柊と一緒に来てくれたら最高なのになあ。」

「また、無視！？先輩、先輩、せんぱーいつ！！」

「あつ、そういえば、今日は桜子が俺の着替えを持って来るって言ってたな…。はーやく、来ないかなーあ？」

「…あれ？これって逆にチャンス？先輩が私を気にしないって事なら…私が先輩にチュウしても気にしないって事じゃん…？よし、

先輩、キスキスキス!!」

「いや、気にするし…」

「あああん、急に正気に戻らないで下さいよぉー? せめて、私のキスが終わってから…」

ゴスッ!!

「ぎゃっ!?!」

意味の分からない事を言っているので、とりあえず、殴っておいた。

「いったーい、先輩は関白主義ですかぁー? そんな事は許しませんよぉー? 結婚したらお互いが同等の関係なんですからねえー!?!」

いや、結婚してないし…。

… 先程から、俺と会話をしているコイツ。 名前は木下きのした 日陰ひかげとい

う。馬鹿げた名前だが本名だ…。俺の4年後輩で、小さい頃から近所に住んでいるお騒がせ女だ。

「先輩、大丈夫ですか？テロリストとやりあうなんて…馬鹿ですか？」

うるさいよ。てか、お前の頭が大丈夫か？馬鹿はお前だろ？

「…先輩、いま失礼な事を思いませんでしたか？」

うおっ、何だ？やけに鋭いな…。

「凜お姉ちゃんから、先輩の制御法は、みつちりと教えて頂いてますからねえ…。うふふふ、逃げられませんよお…？」

「こわっ！？コラッ、近寄るなっ！！…ぎゃあっ？服を脱がすなっ！？」

『うえへえっ』と俺に近寄り、服を脱がそうとする日陰…。マズイ、こいつ意外と力が強い…？

「こらっ…。君達は何をしているんだ、何を…？」

危うく服を全部脱がれそうになった瞬間…。病室の扉が開き、
1人の女性が入ってきた。

「助け、助けてう？きやうーっ！？変態が…変態が俺を手込めにするうーっ…！？」

「手込めだぁー！！手込めだぁーっ！！先輩を手込めだぁーい！！」

きやぁぁあうっ！？いやぁぁあっ？ちよっ、マジ、ぁぁああっ！？

「…君達…」

「いやぁぁあっ？」

「手込めだぁ」

「…いや、君…」

や、やめて。もう、離して…。蝶々は、翔ぶ姿が1番美しいんだ

よ…？だから、だからあ…

「ひゃああっ！？」

「手込めって何だあ？」

ブチッ！！

きゃあああ。…ってブチッ？…何だ…今の音…？

「き、貴様らああっ！！そこに、直れえええっ！！修正してやるう
ううっ！！」

ぎゃあああっ！！？何か知らんが怒ってらっしゃるー？

「うわわっ？凜お姉ちゃん？落ち着いて…落ち着いてえっ…」

日陰の言葉など聞かずズンズンと近寄ってくる女性…。あ、死ぬんだね…。僕は今日…死ぬんだね…？

「…むう。夏樹…君は安静にしないか…」

「ひいっ、ごめんなさい。氷川警部補、ごめんなさい…て、あれ？」

殴られない？あれ？いつもなら『貴様、安静にしないと…強制的に落とすぞっ！』とか言ってヘッドロックとかするのに…？

「貴様…今、変な事を考えただろう？」

「いへっ…めっそもございせん！！」

じろーっとな凝視してくる氷川警察補…。彼女の眼力は、有り得ないほど強力だ…。その強力さは、犯人を自供に追い込む率100%なのである…。

「まっ、良い。それより夏樹…。勤務中じゃないんだ、から…その…」

何だ？急にしおらしくなったぞ？

「その…だな。役職ではなくて…名前、で…だな…」

「凜お姉ちゃん、かわいいー!!」

「ばっ、馬鹿？日陰、何を言って…」

おお？何だ？今度は、日陰をばこ殴り始めたぞ？何か、いつもの警部補じゃない？

「だから、いま私は、幼馴染みとしてだな…お見舞いに…」

あ、警部補の自己紹介がまだだった…。えっと、彼女の名前は氷川^{かわ}凜^{りん}だ。ちなみに、俺の幼馴染みである。昔から何故か俺に突っ掛ってくる奇特な方だ…。

「むっ、いま失礼な事を考えたな…？」

「いや、別に…」

そして、有り得ない程に鋭い…。そのため、子供の頃から彼女に嘘をつけた試しがない。

「まったく、人が心配しているというのに…。失礼な奴だ、君は…」

「心配…してくれたんだ…」

「ふえっ？いや、その…あ、当たり前だろ！？」

…昔から彼女といると心が休まる。何故かは分からないが、彼女の二つ二つが俺を包み込んでくれる様で…。

「わわっ！？ちよっ、何を良い雰囲気になっっているんですか？先輩？凜お姉ちゃん！？」

「ふえっ？なななっ！？何を馬鹿な…あう、あうあう？」

おお？スゲエ、氷川警部補の顔が真っ赤だ…。

「…て、痛い？いだだだだっ！？ちよっ、氷川警部補？な、何故にヘッドロック？くるっ、苦しい…」

し、死ぬ、死ぬよっ！？ぐえっ？…だ、駄目だ。い、意識が…？

「凜、お姉ちゃん…先輩、白眼になってますけど…？」

「ふ、ふえっ…？」

第十八話：脳天気な彼女と凜然な彼女…（後書き）

こんにちは。

今回は、女の子2人！！しかも、どちらも既に前の話にて登場済み！！

さて、第十八話目です。幼馴染み…出てきました。番外の彼女です。ただ、兄より階級が上です（笑）まあ、彼女はエリートですし、兄は何かと問題を起こすのでね…。

後、後輩も出てきましたね。こっちは、前に家に来た後輩と同じ人です。

では、今回はこの辺で失礼致します。ありがとうございました。

兄、人生に3度はあるという…モテ期に突入！？

第十九話：塞翁が、馬？

退屈、退屈、退屈退屈退屈退屈…鯛と靴…。

「鯛が靴を履いてる…？」

………はっ！？あまりにも退屈過ぎて、意味の分からん事を考えてたよ。

「しかし、暇だなあ…。…あ、そういえば、日陰が何か面白いゲームだからって、ハードとカセットを置いていったな…」

何なに？『燃えろ！？デーブインパクトの馬主は君だ！！』

「…変なタイトル…」

えっと、つまり…馬を作るゲームか？ほう、そして、自分の馬を競馬に出して賞金を稼ぐのか…。

「えっと、とりあえず…日陰のデータを使うか…」

ジャジャーンと盛大なBGMが鳴り、無意味に凄いCGグラフィックが画面に写しだされる…。

「…何だ、これ？日陰様牧場！？」

日陰のセーブデータから始めた俺。しかし、ロードを終え、出てきた画面には『日陰様牧場』という名前の場所にいと書いてあった。何というか…あいつのネーミングセンスを疑う…。

「とりあえず、馬を買ってみるか…」

『馬を買う』というコマンドを押す。画面が変わり、何やら変なじっちゃんが語りかけて来た。

「た、高い？3千万円？う、馬1匹でこんなにするの…？」

この馬を売るお爺さん、曰く…3千万の馬を買えという事らしい。高い…。いや、確に、この日陰のデータは金を沢山持っている。持っているが…高い。

「こつちの、3百万の馬で良いや…」

あまりにも、高かったので俺は3百万円の馬を買う事にした。すると、『ちつ、貧乏人がつ…』とお爺さんが暴言を吐いていった。…なんて、ゲームだ。

ゲームを始めて4時間…。だいぶ、ゲームに慣れてきた。

この間、俺が育てた馬は2匹…。名前は勿論…桜子と柊だ。

いや、実際にはカワイイサクラコとプリティヒイラギと言うのだが…。いや、分かってる、分かってるよ？確かに、俺のネーミングセンスもどうかと思うが…。

「だって、本当の事だもん！！」

さて、ダービーだ…。競馬の世界のワールドカップ、もしくはオリンピック…。それが、ダービー！！我ながら凄いと思う。ゲームを始めて数時間…。たった数時間でゲームの佳境に差し掛かっているのだから…。

「うふふつ、スゲエぜ、カワイイサクラコ！！君は、もうダービーに出場出来るまでに成長したんだね…。しかも、ダービーにて一番人気！！！」

ああ、やっぱり。カワイイサクラコは素直な子なんだ。いつもは俺に敵しいけど…。やっぱり、俺の事を…。あはっ、あははははーっ！？

『ゴオオオル！！何と今回のダービーを制したのは…ナニヲシヨット！！ナニヲシヨットだあああっ！！！！』

「なにいいいつ!？」

ウオオオツとテレビから大音量の歓声が聞こえる。そして、ゲームの実況がダービーを制したのは『ナニヲシヨット』という馬だと告げていた。

「あれ?カワイイサクラコは?あれ?」

信じられない…。一番人気の馬だったカワイイサクラコ…。それが、負けただと?

「ふざつ、ふざけんなつ!!何だ、このナニヲシヨットとか言う駄馬はっ!？」

ナニヲシヨット…ナニヲシヨットだとおっ?…げっ、最低の人気じゃん…大穴じゃん?なのに、俺のカワイイサクラコが負けたあっ!?!うそだ、嘘をつくなああっ!!

…あれ、画面が変わって…あつ、最初の馬を3千万で売りつけて来たじいさん…。

『ふおっ、ふおっ、ふおっ……。だから、言っただじやろ？この馬を買えと……。何じゃ、その駄馬は？ひょーほっほっほっ！！まあ、どんな馬もワシのナニヲシヨットに勝てる訳ないがなあっ！！』

ジジイイイツー！！テメエー！！ぶっ殺す！！ふざけんなっ！！俺のカウユイサクラコを馬鹿にすんなああっ！！

『ひよっひよっひよっ！！何なら、別の馬で勝負するかね？』

ぐおおおおっ！！上等だああっ！！後悔させてやるうううっ！！行けえ、プリティヒイラギイイ！！

『ふおっふおっふおっ……。口程にも無い。馬主が馬主なら馬も馬だなっ……。！！』

悔しい…。くっ、ボロ負けだつ。全く歯が立たない。クソッ！

「クソッ、不本意だが…。日陰の育てた馬で！」

『ふおっ？まだ、勝負をするかね？良からう、だが次はお互いの全財産を賭けた勝負だ…。負ければ相手に全ての財産を譲る…。良いなあっ！！』

知るかあっ！！全財産だろうが、何だろうがカワイイサクラコとプリティヒイラギはやらん！！…勝つ、ぜえったいに勝つ！！

強い馬、強い馬…。おっ、スタミナ・スピード・パワー、全て完璧？何てポテンシャルを持った馬なんだ…！！？

「よおおし、コイツで…勝負だ！！」

日陰の馬とナニヲショットがゲートにはいる。ぱっ、ぱっ、ぱつとカウントが始まり…スタート！！

「よし、日陰の馬がリード―!」

バカラツ、バカラツ、バカラツとナニヲショットの前にでる日陰の馬…。強い、強過ぎる―!何て馬なんだ…? どんどんナニヲショットを引き離して行く…。

「スゲエ…スゲエよ、日陰え…!?!」

さあ、最終コーナーを曲がる。ラストスパートだつ…。ははっ、でも、勝ったも同然だな? だって…あんなにもナニヲショットが離れ…えっ?

「なっ? なにいいいいっ!? こ、こいつ今、ワープ…ワープしたぞ!?!」

有り得ない…。なんてゲームだ!? 不正を、不正をしやがった!!

ワープをして、一気にゴールに近づくナニヲショット…。

「ふざっけんなあっ！！カワイイサクラコの時もコレをやりやがったなあっ！！」

接戦…。ワープをしてゴールに近付くナニヲショットだが…日陰の馬も負けていない。こちらは、正攻法で走ってきたため疲れがみえる…だが、負けない。ダダダダッとさっきよりスピードが上がる。何て強い奴なんだ！？クソ、なんて健気に頑張るんだよ、この馬はっ！？

「頑張れ、頑張れ頑張れ！！…おっ？おお！！やった、勝った！！やったあああっ！！」

勝ったのだ。不正をしてきたナニヲショットとその馬主のジジイ…。しかし、勝った…何て馬なんだ。強いぞ、いや、マジで強い、ワープした馬より速いなんて！！

ウオオオツと歓声が大音量で鳴り響く…。そして、実況がアナウンスをする。

『なんと、勝ちました！！勝ったのです！！なんという事でしょう。あの、あの非道の馬主、阿久篤に日陰様牧場が勝ったのです！！』

な、何て実況をするんだよ…。しかし、ストーリー仕立てだったのか…。

ふひーっ、と一息をつく俺。よく分らないが、このじいさんに勝つ事がゲームクリアという事らしい…。盛大に花火が打ち上げられ、パレードみたいなものが画面に写しだされる…。

「な、なんて無駄なCGグラフィック…」

しかし、満足感が俺を心地よくする。変なゲームだったが、クリアするとそれなりに良いゲームと思えてくるから不思議だ…。

「しかし、日陰の馬…。強い馬だったなあ…。何て名前だったんだ？…え」と…」

ラブラブナツキ…！？

第十九話：塞翁が、馬？（後書き）

こんにちは。

今回は競馬ゲームのお話…。しかし、私はその手の物に詳しくなく、知っている方から見ると『いや、違うんじゃないかな？』という指摘などがあると思いますが、とりあえず、流して頂けると幸いです（笑）

さて、第十九話目…。少し、新しい？手法にチャレンジ！…兄しか出てきません。ゲームにツツコミを入れてます。…兄、本当に暇なんだね（笑）

しかし、この話を見る所、兄は競馬に少し詳しいみたい？有馬とか菊花とか…、少なからず買ってそうです…？

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

塞翁が馬の意味…、人生何があるのか分からない、と解釈…？

第二十話：腐れ縁のある関係！！

いま俺は手術後の診察を受けてます。んで、目の前には…

「はい、じゃあ、あーんして…」

「…やだ…」

「はっ？…いやいや、嫌じゃなくて…」

…いま俺の事、ワガママだと思った人…手を挙げなくて良いから、
謝れ！！

「ごめんなさい」

お前もかよっ！？…ああ、コイツは俺の主治医の…

「ドクタアアッ…さあ、くう、まあああっ！…！…です」

…うん。分かってくれた？俺が駄駄をこねる理由…。嫌でしょ？
こんな奴が主治医だと…。口とか…開けたくなくなるでしょ？

「夏樹は、子供だなあ。大丈夫だって、別に実験台にしようなんて
思っていないから…今更…」

「今更って、何だあああつ！？おまつ、お前はそうやって中学の時
から…」

「ん、はい終了…口閉じて良いよ」

主治医は、大口を開けた俺にそう告げる。やられた、どうやら口
を開けさせる方便だったようだ…。

「まあ、夏樹は本当にワガママだなあ。次期、医院長の僕に手術や
診察をして貰えるなんてVIPクラスじゃないと有り得ないんだよ
ー？」

別に好きでお前に手術や診察をして貰ってるんじゃないよ…。て
か、本来は俺が病院に運び込まれた時、別の先生が手術する筈だっ
たのに…。無理矢理に交代させたのは何処のどいつだよ…！？

「経過は順調…。相変わらずの超人っぷりだねー。体に風穴が数箇所も開いてたんだよー？しかも、左脇腹とか凄かったし…」

「別に、俺の生命力だけのお蔭じゃねえよ…。お前の医者としての腕は知ってるからな…」

「えええっ…？」

ニコニコと屈託のない笑顔で笑う主治医。こいつとは腐れ縁で中学からの知り合いである。

佐久間 さくま 只太郎 ただたろう 通称・太郎

彼は、世界有数の名医でどんな手術もこなす神の子とも言われる。自分は、ただのマッド・サイエンティストだから、などと言っているが、俺から見ても太郎の凄さは歴然である。

「褒めすぎだよー。僕は夏樹ほどバケモノじゃないからー…」

「はははっ…。バケモノって何だ、バケモノって!？」

とりあえず、アイアンクローをしとく…。

「いだだだっ！！夏樹、夏樹！！指っ、指が顔に食い込んで、食い込んでるよーっ！？」

太郎は、俺の腕を掴みバタバタと足をばたつかせる。…あっ、動かなくなった…。

「佐久間先生、患者さんのカルテを……」

「あっ……」

ええと、まずい…。俺のアイアンクローで気を失った太郎を見て看護師の人が絶句している。

「た、太郎は寝てるだけで…。っ、疲れてるからコイツ…はっ、はっ」

「きゃああああっ、人殺しいいっ！？」

死んでねえええっ！？アンタ、何勝手に太郎を殺してんのよ？

「いやいやいや…。ヒドイめに合ったよ」

ああ、俺もな…。あの後、看護師の皆さんが団体で追い掛けてきて俺は、ボコボコにされた。顔などに青アザが増えた。

「あははっ。夏樹は馬鹿だなあ。病院で怪我を増やすなんて…。あははっ」

「ははっ、もう一回アイアンクローをされるか？」

「そしたら、また、顔に青アザが増えるね？」

ぐっ……。にぱつと屈託のない笑顔……。くそっ、こいつはあー！

「はあ、しかし……。個室とは生意気だね、夏樹……」

「悪かったな……。て、お前が個室にしたんじゃない？」

『あれ、そうだったけ？』と、とぼける太郎。……なんか、扱いにくい。

「あ、なんか眠くなってきたよ、夏樹？」

あーそうかい。じゃあ、とっとと帰れよ。俺も一息つきたいし……。

「ふあああつ……。夏樹、電気消して……。僕、寝るから……」

をおいっ！……ここで寝るのかよ！？うおっ、何、人の布団に入ってきてんだよ……！？

「でんきーっ。夏樹いー、電気消してええっ！！」

「いやいや、電気ついてないから、太陽だから……」

「じゃあ、太陽消してえ」

えっ、何者！？太陽を消すって、俺…何者！？

第二十話：腐れ縁のある関係！！（後書き）

こんにちは。

祝・第二十話！！いや、ここまで来ました（笑）正直、五〇六話で終わると思ってました。最初の後書きを見て貰えれば分かって頂けると思いますが、当初はその程度のお話だったんです…。ですが、読者様、皆様の応援のお陰で、遂に第二十話目！！番外も入れるとそれ以上！！

皆様、本当にありがとうございます。これからも、頑張つて面白い話？を書いていきたいと思えます。これからも、応援のほどよろしくお願い致します！！

では、第二十話のお話…（笑）

変な奴が登場しましたね…（笑）ドクター・佐久間、通称・太郎…。

兄とは、腐れ縁です。ドクター、良い性格をしますね。兄の親友といった所でしょうか？かなり、お気に入りキャラです。これから、ドクターは隙有らば、ちよくちよく出そうと思ってます（笑）

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

第二幕は、新キャラがいっぱいです!!

第二十一話…土下座の出来る男の素晴らしき事かな（笑）！？

こんにちは…柊です。今日は兄のお見舞いに来ています。

…つい、聞いて下さい。私の兄はなんとテロリストと戦ったのです。つい、びっくりです…。

正義の為に悪と戦った兄…。怪我をいっぱいして…目の前で、撃たれました…。兄は、私達をかばってテロリストの一人が放った銃弾に…。

「兄…、ぐすっ」

「ふえっ！？な、ななな、な！？ど、どうしたの、柊？お腹？お腹が痛いのか？ふえ？ふええええっ！？」

…つい、しまった。兄を見ていて思い出し泣きをしてしまいました…。私の涙を見てうるたえる兄…くすっ、健気です。

「お、おおお兄ちゃん？お兄ちゃんが悪いの…？だ、大丈夫！？」

「うい…そうですね。兄が悪いですね…」

「はあああーん！？何故にいいいいっ！？柊、ゴメンよよよっ！！」

おおっ？土下座です…。兄が病室の冷たい床に…頭を一生懸命に擦りつけてます…。なんか可愛いです…。

「…そ、そうですね…。わ、私のお願い…聞いてくれたら…うい、許してあげても良いですね…」

意地悪く、一生懸命に謝っている兄に条件を突き付ける私…。

「聞く！…聞く聞く聞くう！…だから、だから…ゆゆゆ、許してううっ」

あら、泣いちゃいました…。うい、凄いい勢いで泣いちゃってますよ…？

「お願いって、何？何でも言っ、何でも言っ、て良いよ！？」

…うい、そでした。お願いを聞いて貰うんです…。

「あのですねえ…、お願いはですねえ…」

「あの…、柊？本当に、こんなお願いで良いの？」

「はい…」

「そ、そう…」

うい、気持が良いです。はふう、兄好きですう…。

「何をやってんの、あんた達…」

うい、姉がやって来ました…。でも、今は…。

「はううつ…」

「いや、何をつて…。柊が一緒の布団で寝たいって言うから…いや、別に変な意味じゃなくてね？普通に一緒に寝てるだけでね…」

「はあっ！？…て、コラ。何を悦に入ってるのよ、柊…」

うい、だって兄の匂いがとても良いので…。あう、ねむネムです。

「やあ、昔はよく一緒に寝てたけど。最近は離れ離れだからなあ…」

「…何か、気持ち良さそうに寝てるわね…」

「うい、気持ち良いですよ…。これ絶対、兄からマイナスイオンが出てますよ。うい…、最高です…。」

「ああ、可愛いなあ…柊はあ…」

「柊は…?」

「へっ?」

「ひ・い・ら・ぎ・はって、何?」

「うい、兄はまた地雷を踏みました…。」

「どう言っ事かなあ?」

「ち、違う。違うよ?いやいや、えっと…」

「うい、これは、また土下座ですねえ…。」

「すいませんでしたあああっ!!」

第二十一話：土下座の出来る男の素晴らしき事かな（笑）！？（後書き）

こんにちは。

土下座ものです！！兄はナイフや弾丸には勝てるのに、妹には勝てません（笑）

さて、第二十一話目！！柊目線です。番外編以来の兄以外の目線です。ただ…、ちよつと話がグズグズですかね？とりあえず、空海家の一面を見て頂けたらと書いたものなんですが…。笑ってやって下さい（笑）

それにしても、兄の匂いって、どんな匂いなのでしょう？柊にコロッケ少女…、兄の匂いにクラクラ？

んー、春の花々の匂いか、五月の新緑の匂いですかね？まあ、何にしても加齢臭ではないかと…。

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

あつ！！お母さんの香り？ミルク石鹸とか、洗濯物などから香る洗剤とかの匂い！？

第二十二話・ウサギとりん」

「こんにちは、ドクター・佐久間です…」

…すまん、乗っけから変な奴を出してしまつて…。

「夏樹、失礼だよ？読者が引いてるじゃないか？」

いや、引いてないし…。てか、もしそうなら、お前のせいだし…。

「いやー、最近めつきり寒くなって来ましたねえ…」

はっ？

「いやー、このまま秋が過ぎ、冬が来て…夏が来る頃には、マイナス何度になっているのでしょうか…？」

…漫才か？漫才がしたいのか？…成程、ツツコミ待ちだな？俺に突っ込まれるのを待ってんだな、太郎？よーし、ならば望み通り力いっぱい、ツツコミを入れてやろうじゃないか！？

「なんでやねん、夏樹！」

何いいいつ！？ボケが突っ込んだあつ？てか、ツツコミに突っ込んでどうすんだよ？…て、バシバシ叩くな、普通にいてえ！！

「何で冬の次が夏なんだよ、夏樹！？春はどこ行っただよ、夏樹！？」

しかも、そつちいい！？マイナス何度の所じゃなくて、冬の次が夏って所おおっ！？もはや、漫才ですらねええっ！？

「では、歌います。曲名は…」

意味が分かんねええっ！！てか、歌の前説？今の漫才崩れは、歌の前説だったの！？

「夏樹って、ツツコミの天才だね！！しかも、ボケさせても一流だし……」

しかも、歌わねえのかよっ！？馬鹿か？お前は馬と鹿の合成獣かっ！？

「あつ、今のは面白くなかったなあ……。いつもはもっと凄いボケをするからお？……はい、じゃ、もう一度ボケて……」

いや、ボケて無いし！？もし、何かがボケてるってんなら、お前の頭だよ、太郎……。

「ふむ、夏樹はもう全快なんだな？」

俺の病室で、椅子に腰かけている凜。彼女は、りんごの皮を剥きながら、もう1つの椅子に座っている相手に話かけている…。

「うん…もぐもぐ。夏樹は、超人だからねっ…もぐ。治療後の経過もすこぶる良くて、もぐもぐ…。もう、普通の生活ぐら、もぐ」

「もぐもぐ、うるせえよ、太郎！！てか、人のりんごを勝手に食うなっ！！」

凜が話かけているのは、もちろん太郎だ。しかし、こいつは、凜が剥いたりんごをもぐもぐと凄い勢いで食べている。

「もぐ？ももぐ、もぐぐ、もぐぐ！！もぐもぐ、もぐもぐ！！」

いや、だから…もぐもぐと、うるさいよ…。てか、口に入りきれないよ…。おいおい、まだ食うか!?

「んぐつ…。ごほつ、詰め込み過ぎた…。まあたく、良いじゃないか?りんごくらい…。相変わらず、凜ちゃんに甘えてるなあ、夏樹は…」

甘えてねえよ。凜が勝手に周りの世話をしてるだけだ…。別に、俺は頼んでない…。

「あ、そのウサギちゃんりんごは、俺のだから…。食うなよ、太郎!…」

「やだ!!僕だって、ウサギちゃん好きだもん!!」

「なああつ!?!ふざけんなあ、誰のりんごだと思ってやがる!?!」

「へーん、元は僕が夏樹にあげた、お見舞い品だもーん!!一割は、食べる権利あるもーん!!」

落とし物かよ！？確に、拾った人には一割は貰う権利があるけど…。

「落ち着け、君たち…。りんごは、まだある。ちゃんと、2人分ウサギを作ってやるから…」

そう言い、もの凄い早さでりんごをウサギちゃんの姿に切つていく凜。凄い…。彼女のナイフ捌き…。早さ、ウサギちゃんの形の出来栄えの美しさ…。どれをとっても、最高クラス。料理のプロも真つ青だ…！？

「もぐ、凜ちゃん、すごい…！！ウサギちゃんが、みるみる内に増殖してゆくよ…！！？」

いや、増殖つて…。せめて、量産つて言いなさい！！量産型・ウサ…？

「まあたく…。何で夏樹は、凜ちゃんにプロポーズしないの？早くしないと、誰かに取られちゃうよ？」

「「ぶーっ」「」

な、ななな？何を言うか、いきなり！？何で俺が凜にプロポーズなんぞ…？

「た、たた、太郎？き、ききき、君は、何か大きな間違いをしているようだね？べ、べ、別に私達は、恋仲なんかじゃ…」

「別に、恋人じゃなくてもプロポーズはするじゃん？君達は早く、くつつくべきだと…僕は思っただけど…？」

いや、だから。そんな事じゃなくて…！！別に、俺と凜はそんな関係じゃ…。てか、お前はどうなんだ？

「お前こそ、早く結婚した方が良くないか？金持ちは、跡取りとか、問題が多いだろうし…？」

「あははっ、別にいいっつ。結婚しても良いけど、家庭とか興味ないしいー。大体、ウチの親も同じだから、僕は家庭の暖かさなんてミジンコ程も知らないしいーっ。跡取りだって、問題ないよお？今は

卵子提供とかあるし…。僕はそれで優秀な子供を作るよー？」

あはは、左様か…。家庭なんかに興味ないか？あははっ…。

「よし、まずは…お前に家庭の、いや、家族のなんたるかを叩き込んでやる！！覚悟しとけよ、太郎！？」

後日、太郎が我が空海家の居候となる事が決定したのだった…。

第二十二話：ウサギとりんこ（後書き）

こんにちは。

さて、病院話も終わりに近づいてきました。ドクターが言うには、兄は超人、手術後の経過は順調だとか…。

さて、第二十二話。漫才から入りました。前回、隙有らばドクターを出すと言いましたが…、無くても強制的に登場！？（笑）

しかし、今回は妙な組合せでしたね。…でも、兄とドクターと凜は、主に仲良しです。大抵、この面々に後1人（まだ、不登場）が加わったグループで集まっています。…兄、曰く腐れ縁だそうです。

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

兄…、ウサギ好き！？

第二十三話：兄と太郎の事件簿

「はーやく、退院しないかなあー？病院はー、退屈だあーい…」

訳の分からぬ歌を口ずさみ、病院の廊下をスキップする俺。それもその筈、あと少して俺は退院できる。その事を思うだけで心が踊るのだ…。

「帰ったらあー。なあに、しよつかない？」

帰った時に何をするか、考えるだけでワクワクする。入院中は強制的な禁欲が続いた。正直…、辛かった。だって、だって、男の子なんだもん…、てへっ？

「ああ…。酒が…。酒が飲みたいなあーと…。マツカラン？…ナポレオンでも良いなあー？あ、日本酒も忘れずにいーと、えへへえ」

別段、酒好きという訳ではない。しかし、一度味を覚えた美味し
いもの…、飲みたくなるのが人間の性。^{さが}飲まずには、いられまい…？

「あつはっはーん！？今なら、バッカスにさえ勝てる気がするぜえい…」

ギリシア神話にて、お酒の神・バッカス…。世界に名立たる酒豪と聞く。きっと、何ガロンも高い酒を飲み干すのだろう…。しかし、しかしだ。今の俺も負けない！！スポンジの様に全ての酒を飲み干してくれよう！！

「がっはっはっ！！バッカス、又の名をディオニユソス！！負けねえぜっ！？」

何者にも、俺を止められやしない。それ程の禁欲生活…。ストレスとは、こういう所から来るものなんだな？俺は、改めて自由の素晴らしさに気付く。退院が、本当に待ち遠しい…。

「近くの中学校で、殺傷事件があったらしいわよ？」

「知ってる、知ってる。学校で飼ってるウサギとかも傷付けられたんだってねえ？…最近、物騒ねえ…」

廊下を歩いているとナースステーションに差し掛かる。そこで、何やら看護師の女性達が噂話をしているようだ。…殺傷事件？通り魔だろうか？いや、ウサギを傷付けた？…犯人は、中学生の可能性が濃い。

学校というのは、あれで中々侵入しにくい。広い運動場は目立つ様な所に設置してあるし、校門なども威圧というためか立派な門を大抵の学校が構える。いや、見栄もあるが…。さらには、最近物騒な事もあって昔以上に先生方の目が光っている…。その中で、中学校の一角にせよ、侵入するという事は…、余程、出入りに慣れているのだろう。

「……………。中学校か…。まあ、どちらにも害は無さそうだけど…」

桜子は、高校生になったばかりだし。柊は、まだ小学4年生…。一応、大丈夫ではある…、一応は。

「でも、確か、下校中の小学生も傷付けられたって話だよ？」

何？小学生が！？あわ？あわわわっ！？まずい！！まずいじゃないか？柊が、柊が危険だっ！？わっ、わわわわ…わん？にゃ、にゃにゃーっ！！

「最近は、鋭いナイフがインターネットで手に入るからねえ…。凶器はどこからでも…」

鋭いナイフ!? あっ、ああ? 柊が、柊がナイフで…? いや…なにや? ふにや、ふざけるにやあああっ!?

「うーん。夏樹の顔が面白い様になるなあ…。あはははっ!! 夏樹をからかうと笑えるー」

笑えん!! 断じて笑えん!! これは、由々しき事態だぞ!!? 柊が安心して登校できない!! いや、柊だけではない、桜子だって、途中まで同じ通学路なんだ…。むっ、むむむむ!! 柊と桜子のために、これは、俺が行くしかない!? そうだ、そうなんだ!! 柊と桜子も俺を待っているんだ!! うおおっ、今、お兄ちゃんが行くぞおおっ!!!

「ああ…。夏樹の奴、走って行っちゃったよ。あははっ、ほーんと。夏樹は面白いなあ…」

「佐久間せんせい、学会のお時間ですよー? 早くしないと、教授の皆様が…って、先生? ちょ、どこ。何処に行くんですか? 海外のエライ教授の方もいるんですよ? 佐久間先生が出席しないと国際問題に発展するかもしれないですよーっ!?!?」

「かーんけいなあい…!!てか、そんな、ただの嫌な爺達が集まって金のお話をする学会よりも…。夏樹の方が面白そうだから、行っときまあいっ!!」

こうして、俺と太郎の珍妙な事件が幕を開けたのだった…。

第二十三話：兄と太郎の事件簿（後書き）

こんにちは。

ドクター（太郎）が居候するという話でしたが…、その前に中学校で起きた事件のお話です。兄とドクターの珍妙コンビ。たぶん、事件は迷宮入りですね（笑）

さて、どうなる事やら…。

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

ドクター、意外と国際的？…でも、逃亡（笑）

第二十四話：中学校で聞き込みを…

桜台大間市・聖城中学校…。俺と太郎の母校であり、初めて出会った場所である。

「変わらないねえ、聖城中学も隣町の桜都中学みたいに建てかえれば良いのに…」

確かに、変わらない。この聖城中学というのは100年以上もの歴史があるというのに未だにボロだ…。したがって、俺がいた頃から木造建てで所々が腐り壊れているのだ。

「あら？どなた？」

久しぶりの母校に懐かしさと相変わらずのボロさで呆れていると1人の女の先生が俺達に話しかけてきた。

「うわっ、びっじーん！！夏樹、夏樹！！この先生、スッゴイ美人だよ？」

太郎の言う通り、話しかけてきた先生は美人である。やや興奮気味の太郎をなだめて俺は美人の先生に警察である事を告げる。

「まあ？じゃあ、殺傷事件の事で…？」

俺は、その先生の問いかけに『ええ』と肯定をする。そして、ついでに事件の詳細を聞く事にした。

「事件の詳細…ですか？…はい」

おや？浮かない顔？別に俺が気に触る事を聞いた訳ではない。太郎だって大人しく…？

「わははははっ！次は僕が鬼の番だねえ！？よし、皆はやく逃げないと捕まえちゃうぞおおっ！！」

…をあいっ！？何を中学生と鬼ごっこをやっているんだ？おもいつきり、先生に不信がられてるぞ？

「あははは？あいつの事は気にしないで下さい。さっ、とりあえずウサギも傷つけられたという事なのでウサギ小屋に…」

お馬鹿な太郎を放っておいて俺は先生をウサギ小屋へと促す…。

事件があつたのは3日前…。事の発端は聖城中学のウサギ達が傷つけられた事から始まる。

そして、ウサギ達が傷つけられた翌日、下校中の中学生徒が黒服の男に鋭いナイフで切りつけられた。生徒の傷は浅く、命に別状は無かったとの話したが…。犯行はさらに続き、遂には小学生が病院に運ばれるまでに発展したという。

「…なるほど」

話し終えた先生から不安の感情が読み取れる。彼女もまた、か弱い人間…。先生だからといって恐怖を感じない訳がないのだ。

「あああつ！？夏樹大変だよ！？」

「うおっ？太郎、いつの間に？」

びつくりして、心臓が止まるかと思った。たく、何だ？さっきまで中学生と鬼ごっこをしたのに…。

「殿が、殿が、もふもふ可愛いいいっ！！」

殿？…はあ？何だ、殿って？

「馬鹿っぱ！！知らないの夏樹？殿だよ？この聖城中学のウサギ達のボス、殿だよ！？」

し、知らないよ…。てか、俺はよく学校をさぼってたからウサギ小屋なんて…いや、たまに来てたけど…。

しかし、知らんもんは知らん！！

「いいかい？殿はね、耳が一番長くてね。殿様のマゲみたいだから殿って名前なんだよ？」

ほへえ…。ああ、確かに耳が長いな…。もふもふ、口が動いてる…。目が怖いけど、良く見るとつばらで…。か、可愛い。

「しかも、殿は何と！！僕らが在学してた頃には、もう100歳は超してるんだよ！？てか、いま何歳！？」

マジすか？100ですか？馬鹿ですか？ウサギは100年も生きねえよ…。

「ああ、信じてないねえ！？美人先生、そうだよな？殿は100年前からいるよね？」

「えつと、あの…。た、確かに、100年前から殿というウサギさんがいたらしいですけど…」

マジすか！？有り得ねえ、100年？す、凄い…。と、殿…？ちよ、さ、触らせて…！！

「でも、それは最初のウサギがそういう名前で。そのウサギの子孫達が代々受け継いでいるって話ですよ？その子も生まれた時は違う名前で、前の殿が死んだ時に受け継いだんです」

『ちなみに前の殿は、去年の夏に亡くなりました』と美人先生は申し訳なさそうに説明をする。

「太郎？」

「ば、馬鹿だなあ…？当たり前だろー？な、なな、夏樹は直ぐにひ、引つ掛かるんだからあ…。じよ、冗談に決まってるらっ…がぶっ…」

舌嚙んだよ、こいつ。大丈夫か太郎？血がダラダラと流れてるぞ？

「…えつと…。そ、そうか殿の子かあ、君」

太郎は俺の視線に耐えられず、殿を抱き抱える。よしよしと殿の頭を撫でる太郎。…そういえば、太郎は昔、よくウサギ小屋に来ていたな。

「君！？…そうか、足を…、傷つけられたんだね。手当ては…うん、ちゃんとしてるね。良かったね、傷痕は残るかもしれないけど大丈夫

夫だよ」

どうやら殿も例外なく犯人に傷つけられていたらしい。白い包帯が殿の足にぐるぐると巻いてある。

「…行こう、夏樹。僕は絶対に犯人を捕まえないきやならなくなったよ。…最初は、面白そうだから着いてきたけど。冗談じゃ、済まなくなつた…」

太郎から異様な殺気が立ち込める。久しぶりだ、太郎がキレた姿を見たのは…。

「僕の大切な友達…、殿を傷つけるなんて…。どこの誰かは知らないけれど…ブツ殺シテヤル！！」

中学の時の大切な友達。その息子を傷つけられ、怒りに燃える太郎。もはや、その顔に笑顔はない。犯人よ、覚悟しておいた方が良いかも…？

第二十四話：中学校で聞き込みを…（後書き）

こんにちは。

早いもので11月です。『心から』が連載されて何と1ヶ月も経ちました…。アクセス数もかなりのものになり、読者様には本当にお世話になりました。ありがとうございます。

…何か、最近、お礼ばかり言っている私ですが…本当に嬉しくて。隙有らば毎回お礼の言葉を書きたいくらいなのです！…まあ、しかし、そういう訳にはいきませんので、今回はここで止めておきますね…（笑）

さて、第二十四話です。初動捜査？です。しかし、その初動捜査からドクター、暴走！！次回、ドクター戦いますよ？（笑）

ただ、今回の事件は直ぐに終わらせるつもりなので後2、3話で終わると思います。ちょっぴり、シリアス編て事ですね。

それでは、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

何かの間違いで10月分のアクセス数値が0に…。最初に見た時、ショックで携帯を閉じました（笑）

でも、詳しく見れる所では、ちゃんとなっておりまして。ただ、

総アクセスの所ではやっぱり、10月分は0なのか数値が変…。な、直るのかな？不安です…。

第二十五話：容疑者・黒少年

中学校近くで起きた殺傷事件を捜査している俺と太郎。ひよんな
事から太郎の奴に火がつき只今、暴走中…。

「犯人はお前かああ!？」

「きゃあああ!！」

「うわ?何だあんた？」

「な、何だああ!？」

「犯人はお前かああ!？」

「ひいいい」

「変質者だああ!！」

「な、何者？」

「け、け警察うう」

出会う人、出会う人に『犯人はお前か』と襲う勢いで聞いていく
太郎。てか、逆にコイツのが変質者になってるし…。

「犯人はどこだぁあ!？」

「落ち着け…。大体の聞き込みは終わったから。お前が暴走してる間に…」

「だからっ!？」

「いや、だから…。大体の目星というか、容疑者というか…」

あまりの太郎の迫力に押される俺。太郎は昔から怒らせると恐い。しかも、その怒る基準が分からないため、俺も未だに扱い方が分からないのだ。

「はーんにーん? 夏樹い、行くよおおお!！」

と、とりあえず、俺達は、一応の容疑者を探しにこの場所を離れる事にした。

「あれが一応の容疑者だ」

そう言い俺は道路向こうの少年を指差す。黒い学生服に黒い靴。彼は、あまり友人がいないのかよく1人で行動をしているとのこと…。そして、最後の情報によるとナイフを…、所持している。

「いいか、太郎？まずは様子見だ。彼が、怪しい行動を取った所で…」

「むきやややあ！！お前が犯人きゃあああ！？」

あー、うん。…皆はちゃんと人の話を聞こうね？

「……」

「だんまりきやあああ！？制裁を受けりよよっ！？」

ズダダダと黒少年に向かって行く太郎。そして、ブワツと黒少年に飛びかかる！！クソツ、馬鹿太郎：怪我をさせたらこっちが犯罪者だぞ！？

「……………！！」

「ぎゃあっ！？」

どうやら、俺達は犯罪者にならずに済んだようだ。なんと、黒少年は飛びかかって来る太郎を交わし、逆に殴り飛ばしたのだ…！？

「……………むけっ？このっ！！」

「やめろ、太郎っ！！」

俺は、黒少年に再度、飛びかかろうとする太郎を呼び止める。

「それ…。ナイフだね？」

黒少年が手に持っているのは、鈍い光を放つナイフ。持ち方が妙

に手馴れている。

「…何者？」

黒少年が俺達に問いかける。当然であろう。いきなり、襲われたのだ、怪しく思わないはずがない。

「俺は刑事だ。最近、ここらで起きている殺傷事件を調べている。…情報によると君はよく聖城中学のウサギ小屋に出入りしているらしいね？しかも、そのナイフを所持している。…正直に言おう、俺は君を疑っている」

黒少年の真っ直ぐな瞳。揺るぎない…。俺は、酷く率直な意見を述べた。犯人ならば何かしらの反応がある筈だが…。彼は、本当に真っ直ぐな瞳で俺を見る。

「君は、犯人じゃないのか？」

「……………」

黒少年は俺の問いかけに答えない。ただ、俺をじっと見つめてい

る。

「だんまりかい？夏樹と違って…、僕は優しくないよ？」

「ちよつ、待て！！太郎！？」

太郎は黒少年に殴りかかる。太郎はこれでいて強い。空手、剣道、柔術…。あらりとあらゆる武術を会得している。

「はあ、ああっ！！」

太郎の拳が黒少年を捉える。ガスッという音と共に黒少年が後ろに下がる。

「……………、っ！！」

「うわっ！？」

黒少年の反撃！！太郎の打撃で後ろに下がったと思ったが、違う！！黒少年が後ろに下がったのは、攻撃に反動をつけるためだったのだ！！ズバツと太郎の胸辺りが切れる…。

「ちっ…、ブランドなんだよ？この白衣…」

間一髪…。太郎は白衣を切られたただけの様だ。バサッと白衣を脱ぎ捨てる太郎。

「本気で…、行くよ？」

「……承知」

そう言い二人は激しくぶつかり合う。太郎の拳が黒少年の頬に当たり、黒少年のナイフが太郎の腕を切りつける。両者、一步も引かない。

「てあっ！！」

太郎の回し蹴り！！ズドツと黒少年の横腹に食い込む…。

「ぐっ…！！？」

怯んだ！？勝負が決定する。太郎の勝ちだ。黒少年の膝が地面に着き、手が横腹を押さえる。太郎はそれを見逃さない。『とどめっ

「！！」と太郎は黒少年に飛びかかる。そして…

「…不覚…：が、甘い！！」

「なにっ！？」

瞬間、太郎の体が宙に舞う。なんという戦闘センス！？飛びかかってくる太郎を掴み投げたのだ。投げ飛ばされた太郎は住宅のブロツク塀に体を打ち付ける。

「君…、凄いな。夏樹以来だよ…投げ飛ばされたのは…」

太郎は立ち上がる事が出来ない。強い、太郎をここまで追い込むなんて、並みの強さじゃない…。

「…感謝…しかし、貴方も強い…」

そう言い、黒少年は脇腹を押さえる。余程、太郎の回し蹴りが効いたのだろう。

「…立て、ますか？」

黒少年は太郎に手を差し伸べる。…どうやら、俺達は間違っていたようだ。この少年は、犯人じゃない。

無論、論理的な理由はない。だが、俺を真つ直ぐに見ていた瞳。いきなり、襲ってきたにも拘わらず太郎へのあの配慮…。この少年がウサギを傷付ける犯人な訳がない！！

…しかし、それでは犯人は誰だ？他に犯人の手掛かりは無い。どうやら、捜査は振り出しに戻ってしまったようだ…。

「えっ？君、犯人を知っているの？嘘？本当に？」

「肯定です…。俺は、犯人を捕まえに行く所でしたから…」

なんと？黒少年は犯人を知っている！？

「夏樹…！？」

「ああ…。君、俺達も一緒に行つて良いかな？」

「…承知！！」

そう言つて、黒少年はコクンと頭を縦に振る。頼もしい限りだ。

「さて、少年の了承も得た…。振り出しから、一気にゴールというじゃないか!!」

すでに辺りは夜。闇夜に紛れ街外れへと消えゆく俺達。月明かりが道を照らす。まるで、俺達を祝福するかの様に明々と…。そう、不気味なくらい明々と…。

第二十五話：容疑者・黒少年（後書き）

こんにちは。

前回、アクセス表示に不具合があったと申しましたが…。無事、直りました！いやー、管理者さんに連絡した所、早々に直して頂けました。とても、仕事が早いです。私も見習わなければ…。管理者さん、ありがとうございました。

さて、第二十五話です。事件がもう解決しそうです（笑）たぶん、兄と新キャラの黒少年が、ぱぱーっと解決を…？

しかし、黒少年…。似てますね。え？誰につて、そりゃあ…。黒くて、ナイフを使う、アイツですよ。

まあ、そこら辺の事情は次話にて…。

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

や、やっぱり、話構成が急展開！？き、気にしない方向で…（笑）

第二十五・五話：事件、佳境前にて

黒少年、本名を天城社あまぎやしろと言う彼は、俺と太郎が通っていた聖城中学の後輩であるらしい。

彼は聖城中学に入学して間もなく、ウサギ達の世話をする飼育係になり毎日のようにウサギ達の世話をしていたという。しかし、ある日ウサギ達の異変に気付く。昨日は無かったウサギ達の傷……。彼も最初は学校内の人間の仕業だと思い、疑わしい生徒や教師を徹底的に調べた。が、該当者はいなく捜査に行き詰まった所で夜中に学校に侵入をする怪しい人物がいると情報が入り昨日から張り込みをしていたらしい。

「あのさ、1つ聞いて良いかな？」

俺は前を歩く黒少年・天城社君に話し掛ける。言葉は少ないが彼の話で彼の身元はわかった。しかし、俺には分からない事が1つある。

それは、彼の手馴れたナイフ捌きである。中学生徒にしてはあまりにも卓越している様にみえるのだ。そう、彼の手馴れたナイフ捌

きはまるで…あの、ニュー・エントランスビルで戦った黒服の男の
様なのだ。

「君は、そのナイフの使い方…誰に習ったの？まさか、独学じゃないよね？」

俺の問いかけに社君はチラリと俺の方を見て答える。

「…3年前に、とある人物から習いました。…当時、自分は虐められていたので…」

3年前…。彼のその言葉にピクリと俺は眉をひそめる。3年前と言えば旧・エントランスビル事件があった年だ。そして、あの黒服の男もその事件に関係しており3年前にこの町にいた事を俺は知っている。もし、俺の推測が正しければ…

「その、とある人物って、もしかして黒い服を着ていなかった？」

再び、社君に問いかける。確信があったのだ。彼の卓越したナイ

フ捌き。3年前に習ったという、とある人物。そして、何より似ている。社君の姿がああ黒服の男・月影にあまりにも似ているのだ。

「…確かに…黒服を着ていましたね、あの人はい…」

俺は何を期待しているのだろう。彼が月影と会ったのは3年前。何より、彼と月影が今でも会っている筈なんてないというのに…。しかし、それでも…それでも俺は聞いてしまふ。何を？決まっている。

「君は…、今でもその男と会っているのかい？もしくは、連絡を取り合っているとか…？」

有り得ない話だ。今でも会っている？連絡を取り合っている？…有り得ない。

だって、奴は…。月影は俺が殺してしまったのだ。あの、目が眩むほどの高いビルから落としたのだ。生きているはずがない。では、何故俺は社君に聞いたのか…。月影に生きていて欲しかったから？

……………違うな。

認めたくないのだ。信じたくないのだ。俺が殺してしまったという現実を、俺が犯してしまった罪を…。だから、聞いたのか。だから、聞いたのだ。だから、聞いてしまったのだ。

「いえ、あの人と自分は知り合いという訳ではないので…」

当然の答え。期待をしている方がおかしい、有り得ない。やはり奴は死んだ、いや、俺が殺した。もう、この世には存在しない人物なのだ。

「疑問、なのですが…」

何かを期待していた哀れな俺に社君は眉を八の字にし問いかけてくる。

「何故あの人を知っているのですか？…察するに俺のナイフ捌きとこの黒姿から推測したと考えますが…。たぶん、同じ人物を言っていると思います。しかし、あの人はこの国に知り合いはいないと言っていました。貴方はあの人とどういった知り合いのですか？」

言えない。分からない。彼に何と言えば良いのだろう。…君のナ
イフの先生を俺が殺した？ははっ、悪い冗談だ。まだ、海外のブラ
ックコメディドラマの方が笑える。

「…まあ、良いです。着きました。あのビルが犯人のいる場所です」

そう、言い社君は町外れにある忘れ去られた廃ビルを指差す。こ
こが、この事件の終着点。ここに、ウサギ達と中学生、小学生をナ
イフで傷付けた犯人がいるのだ。

「…詳しい話は後程…」

「分かった、とりあえず犯人を取っ捕まえよう」

そうして、俺達は幾つかのしこりを残してビルへと入っていくの
だった。

第二十五・五話：事件、佳境前にて（後書き）

こんにちは。

はい、番外ではありません。これも、一応の本編でございます。しかし、補足みたいな物なので第二十五・五話という事になりました。でも、黒少年・社君と黒服男・月影の關係を知る為にはこの第二十五・五話は意外と重要な所。

さて、大分長くなりつつ在ります。あと2、3話で終わるなんて言ったのは何処のどいつなのでしょう（笑）

とりあえず、社君が意外な者と戦います。

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

あつ、ドクター（太郎）の事、すっかり忘れてた…。

第二十六話：事件、一応の解決！？

『シマダ第2営業所』町外れにある電気会社の三階建てのビルである。電気会社であるシマダは三年前の暮れに倒産した。そのためか、人が出入りしなくなったこの廃ビルに行き場を無くした少年達がたむろすようになったという事らしいのだが。

「…じゃ、僕は一階。夏樹が二階で、社君が三階を調べるんだね？」

さほど大きい訳ではない『シマダ第2営業所』だが、俺達は各階に分かれてビルを調べる事にした。犯人は年端もいかない少年達である。並みの戦闘力でない社君一人でも大丈夫であろう。それよりも、ここまで来て犯人である少年達に逃げられては釈である。そのための分散。まあ、大抵はビルの半ばである二階に潜伏しているのがセオリー。なので犯人である少年達と出会うのは俺であろう。

二階の階段付近。一階から上がった所に書かれてある文字。『X X X W E A L L D E T H』どういう意味なのだろうか。もしかしたら、深い意味など無いのかもしれない…。だが、俺はその文字に何かを考えさせられてしまう。

「私達は、全てが死…？」

英語が得意で無い俺は、そう訳してしまう。別の意味かもしれないが少なくとも俺はそう感じた。

他に壁に沿って色々とスプレーで絵や文字が書いてある。奥に行けば行く程のその度合いが酷くなっていくが、中々に上手な絵である。画かれている物は天使や太陽、月や女性をモチーフにしている様に見える。

「…これは、何らかの宗教だろうか？」

もしそうだとしたら厄介である。暇や力を持て余した少年達ならば、まだ説教のしようがあるが…。何らかの宗教なのならば話は別だ。彼らは彼ら独自の世界観を築き上げ、彼らの築き上げた世界に乗っ取り考え、行動をする。地下鉄に毒ガスを散布したり、高層ビルに爆発物又は飛行機をぶつけて爆破したり。そう、まるで、テロリストが如く…。

「まさか、な」

通路には空き缶や空のペットボトルが散乱している。俺は歩き難いと思いながらも奥へと進む。月明かりが未だに明々と窓から通路を照らす。不気味な程に静かなビルの通路。ホラー映画ならばこちらで一発、お化けやポルターガイスト等が出て来たり起こったりするのだが…。

「話し声？」

通路をさらに奥へと進んだビル二階の一室。何やら笑い声や話し声が聞こえてくる。やはり、セオリー通りに俺が犯人である少年達と出会う羽目になったようだ。

俺はカチャリとドアを開ける。躊躇^{とまど}い等の類いは無い。

「誰よ、アンタ？」

5人組の少年達である。茶髪の少年が2人。1人は赤いジャケットを着ている。もう2人は金髪とレッドヘアーの少年達である。そして、部屋の奥のソファーに座り、俺を睨み付ける少年。彼がこのグループのリーダーであろう。

「あー、少年。俺は今世間で騒がれているナイフ殺傷事件の犯人を

探している。…てか、未成年がこんな夜中に町外れの廃ビルにたむろしてるのでお前ら逮捕」

言うが早いか俺は5人の内2人を捕まえ手錠で動けなくする。

「ヤロオオツ！！ぶっ殺す！！」

金髪とドレッドヘアを捕まえると赤ジャケットの茶髪が俺に勢い良く殴りかかってきた。何て事のない不良少年の打撃。俺はヒョイと横に避けて赤ジャケ茶髪の足を引っ掛けてやる。

「うわあああつ！？」

勢いのついた赤ジャケ茶髪はガラゴロガラと前に倒れ転がっていく。

「なるおっ！！」

次に普通の茶髪が俺に向かってくる。手には何処で手に入れたのか三段ロッドを持っている。それを振りかぶり勢いに任せて振り降ろしてくる普通茶髪。何とも易しい攻撃である。俺は三段ロッドを

避け、普通茶髪の顔面等に2・3発のパンチを喰らわせる。それ程、力を入れていないのに拘わらず普通茶髪はぐらりと崩れ落ちる。何と呆気ない。5人いた少年達は、1人を残して戦意喪失である。

「さて、少年。後は君1人だ…」

『さあ、どうする?』と俺はグループのリーダーである少年に体を向ける。

「ああ、1つ聞いておく事がある。今回の事件の犯人は君達か…?」

俺は思い出したかの様にリーダーに尋ねる。社君の話が真実ならば彼らが今回の犯人に間違いはない。だから、確証を得る為に俺は聞く。犯人はお前達なのか、と。

「だったら?何アンタ、警察?」

「刑事だ」

俺は、リーダーの問に即答をする。しかし、『あつ、そう』とリ

リーダーは別段に驚く事ではないという感じで、ゆつくりとソファから立ち上がる。なるほど、リーダーらしく中々に落ち着きがある。すると、リーダーはポケットからナイフを取り出す。やはり、犯人は彼ら……いや、彼であろう。

バタフライナイフを右手に持ち、前に構えるリーダー。左手を横に軽く添えている所からナイフの扱いに慣れている様に思える。社君とどちらが上かな？

「よそ事考えてんなよつ、と！？」

鋭い！！彼のナイフが俺の頬の皮を捉える。つうーと血が流れ出る。他の事を考えていた俺は目の前の少年に集中する事にした。右、左、下……

リーダーのナイフ捌きは中々のものだ。もし、彼に社君の様に師がいたならばヤバそうだが……。はっ、月影相手ならばこれだけでアウトだったな。俺はニヤニヤとしまりのない笑顔を抑えきれずにいた。

「ちっ、笑ってんなあああっ！！」

リーダーが怒りに任せ左から切りつけてくる。しかし、遅すぎる。あまりにも遅すぎる斬撃。俺は彼が腕を右に振り切る前に彼の顔を強打する。

ズドツとその場に座り込むリーダー。彼は何が起きたのか分らないでいる。

「さて、あとは社君と太郎を回収して事件解決つと…」

パンパンと手をはたき俺は一息をつく。何とも呆気ない幕切れだ。まあ、しかし、これで柊も桜子も安心して…

「余裕だな、アンタ？言つとくが、三階には俺より強い奴がいるんだぜ！？俺程度で余裕かましてる様じゃ、あの人には勝てねえぜ！？なんだって俺にナイフを教えてくれた人だからなあ！！」

俺は驚く。リーダーは彼ではない？そして『ナイフを教えてくださいたあの人』その言葉が差す意味。マズイ、三階には社君がいる。この少年のナイフ捌きはまだまだ未熟であるが、その師となるならば話は別だ。少年のナイフ捌きから容易に想像できる、その男は強い。たぶん、社君では刃がたたない程に…。

ちいつと俺は元来た道を戻り急いで三階へと駆け上がる。社君、無事でいてくれよ！！

ビル三階の奥の部屋。ドアが半開きになっていたため俺は直ぐに社君がその部屋にいる事が分かった。バンとドアを開け、部屋を見渡す。部屋の真ん中に倒れている何か。言うまでもない、社君だ。

「社君!？」

倒れている彼に近づき、彼を起こす。目立った外傷はないように思われるが…。彼は目を瞑っている。ユサユサと体を揺するが反応がない。マズイ、マズイぞ!？

「おい、社君?社君、社君?...やしろおおおっ!!」

何て事だ。何がセオリーだ。二階に犯人がいる?馬鹿な、そんな

甘い考えだから社君を…。やり場のない怒りが立ち込める。また、また俺は人を…

「ごほっ、ごほっ…。生きてますよ、ごほっ」

「社君!？」

はは、ははははっ。良かった、本当に良かった。どうやら、社君は気絶をしていただけのようだ。俺は焦り過ぎて冷静に判断が出来ないでいたのだ。しかし、本当に良かった。真犯人には逃げられたが、社君が無事なだけマシであろう。それに、とりあえず、二階の少年達が事細かに事件の詳細を喋ってくれるはずだ。

俺は立ち上がれない社君を背負い、一階の太郎のもとへと向かう。事件を解決出来ない事は心残りだが、このまま突っ走っても無駄な気がする。とりあえずは、病院を退院してからだ。

そうして、連絡したパトカーが来るのを見届けた俺は、そのまま病院へと帰っていく事にしたのだった。

第二十六話：事件、一応の解決！？（後書き）

こんにちは。

はい、まさしく事件、一応の解決！？です。話を無理矢理にまとめ終わらせてしまいました。良い案が浮かばず。まあ、うだうだ話をこねくり返しては、ぶち壊し。また、こねては壊すの繰り返し。そして、最終的にこういう事に…。今回、本当に力不足を痛感する事となりました。ん、大丈夫かなあ？

さて、第二十六話です。毎度の如く、展開が急ですが…、気にしない方向で（笑）

兄が、兄ではなく『夏樹』としての話が多くなってきました。まさに、設定に溺れまくっております（笑）

まあ、それはそれで良いのですが…。シリアス編を書くにあたつて兄の知らない所で起きている事件を書くにはストーリーテラーをどうするべきか迷っています。事の当事者に語らせるか、また、別の手法でいくか…。

…まあ、とりあえず、事件は一応の解決です。

それでは、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとございました。

した。

この小説は兄と2人の妹の話…の筈です。とりあえず、確認！！
まあ、着実にズレていつてますが（笑）

第二十七話：三階での出来事（前書き）

こんにちは。

珍しく前置きを書いております。それというのも今回の話、なんと話を語ってくれるストーリーテラー（語り部）がいない話なのです！大抵は夏樹がストーリーテラーを買って出ってくれるのですが…。今回は社がメインなので。彼、あまり喋らないし（笑）

という理由で今回のストーリーテラー（語り部）は作者である私『オオトリページ』が勤めさせて頂きます！…て事でどうでしょう？

それでは本編へ、どうぞ！！

第二十七話：三階での出来事

光となりて闇夜を照らす月。影となりて辺りを支配する闇。

『シマダ第2営業所』のビル3階。天城社あまぎ やしろはひんやりとした静かな通路を進む。このビルは何年も使われていなかった為かゴミが辺りに散乱し、汚れがあちらこちらを占領していた。

奥へ進むに連れて通路の冷たさが増すような錯覚に社は襲われる。言い様のない寒気。通路の奥のそのまた奥。壁は先ほど述べた様に汚れが目立っている。目立っているのにその扉はちっとも汚れていない。それどころか、清潔感が溢れんばかりだ。

カチャリと社は扉を開ける。

「おや、お客さんかな？」

そこにいたのは金髪をオールバックに決めている男。黒の皮ジャ

ンと今流行りのダメージジーンズを着た外国のマフィア風の男である。

「はーん…少年、か。まさか、エントランスビル作戦を妨害したのが少年じゃあるまいし。ガナンめっ、相手の特徴ぐらい見極めておけってのっ!!」

男は持っていた缶ビールをベコツとへこませ、床へ投げ捨てる。

「たく、エントランスビル作戦をおじゃんにした奴を誘き寄せる作戦だったんだが…。ちと、ガキ過ぎた作戦だったかな?…まさか、少年が出てくるとはな」

エントランスビル。社はその言葉に聞き覚えがあつた。最近あつた立て籠り事件の現場。そして、その事件は2・3週間前からニュースでうんざりする程に報道されている事件だ。さらに言うところ、ニュースは現在進行形で報道されているのだが…。事件は警察の活躍によつて解決されたと聞いた。それでは、この男は一体?

社は考えを張り巡らせる。十中八九、この男が小・中学生やウサギ達を傷つけた犯人である事に間違いはない。だが、エントランスビル事件。なにやら、危険な匂いがしてきた。社はゴクツと喉を鳴

らす。

「しかし、少年も運が無かったな？俺の姿を見られた以上、死んでもらう。二階のガキ共と同じくな」

そう言い男は右腰に備え付けていた革製のナイフカバーから真つ黒なナイフを取り出す。一体どんな材質なのか、ナイフは本当に真つ黒である。不気味に黒光るナイフ。いや、不気味なのはむしろ金髪の男。へらへらとしているが、その殺気は隠しきれていない。

汗が社の頬を伝う。息が粗くなり、動悸が激しくなる。苦しい。社は中学生である。いくら戦闘センスがあつて、ナイフ捌きがプロ並だとしても中学生なのだ。この、目の前の殺し屋には敵うまい。

気が遠くなる程の沈黙。金髪男が動く。一瞬にして社の間合いを潰し、攻撃を仕掛けてくる。

ガギンと金髪男と社のナイフがぶつかり合う。キンキン、キンと何度も何度もナイフがぶつかり音をたてる。端はたから見れば社は金髪の殺し屋と対等に戦っている様に見える。が、なんて事のない。社はただ金髪の殺し屋が放つ攻撃を受けているだけ。そう、防御に徹することで精一杯なだけなのだ。

「おおら、おおら、おらあつ！！ははーっ、どうかした少年！？ただ、防御してるだけじゃ俺は倒せねえぜえ！？」

しゅびつ、しゅびつと防御しそこねた攻撃が社の皮膚を切り裂いていく。タラーと頬から汗ではない液体が流れる。金髪の殺し屋の攻撃は回を増すごとに早くなり、その威力も強力になっていく。防ぎきれない。社は『うう』と後ろへと下がる。そして、

「はい、終了!!」

言葉と同時に社が倒れる。彼に、もはや意識はない。完全に負けた。社はドタツと倒れたままピクリとも動かない。本当に意識を失ってしまったのだ。

「少年よ、残念だったな。筋は良かったんだが、俺の方が腕は上だった。…くつ、くくくははははーはっ!!つまり、君はここで死ぬ」

クールな印象があつた金髪の殺し屋。だが、今はグニヤリと顔を崩して笑う。人を切り刻む。この金髪の殺し屋にとってそれはこの上ない幸せだった。今の組織には自分より格上のナイフ使いがいた。その為にナイフで人を切るのは久しぶりなのだ。だから、金髪の殺し屋はグニヤリと笑う。

「ナイフを使う格上のライバルと対等に渡り合うには、それ意外の

方法をとるしかないからなあ……」

普段はフェザータッチにした銃を使う金髪の殺し屋。だが、今回の作戦は好んでナイフを用いた。それというのもライバルであった格上のナイフ使いが先達ての作戦にて行方を眩ましたからだ。その為に事実上、彼が組織の中で最強のナイフ使いという事になったのだ。

全くもってラッキーであった。目の上のコブであった黒服の男。その男が消えたのだ。悦ばずにはいられない。金髪の男は、ニヤニヤといやらしい笑顔を浮かべ倒れている社に近づいていく。

ギラツと黒く光るナイフ。金髪の殺し屋はそのナイフを垂直に立て社へと刃先を向ける。もはや、誰にも止められない。一階にいる大病院の若・佐久間只太郎にも、二階にいるエントランスビル事件にて活躍を見せた刑事・空海夏樹にも誰にも止められない。

「クハハハハハハハッ、シネエエエエッ……！」

金髪の殺し屋からナイフが振り降ろされる。そして、ナイフが社の胸にグサリと刺さる。終わった。彼は死んだ。材質は不明だが、固い印象のある黒光りするナイフが胸に刺さったのだ。彼は死んだに違いない。

「…オイ、オイおい、おいっ！！なんだあ、こりゃあっ！？」

金髪の殺し屋は驚く。目をむき出しにして己のナイフを見る。そう、『部屋の端に落ちているナイフの刃先』を…。

「有り得ねえ、有り得ねええ、有り得ねえだろおおこれはああーっ！？ナイフの刃先を切るだと？有り得ねえ、このナイフは組織が創ったチタネス甲合金製のナイフだぞ！？そいつをブツ壊すなんて、どこの機動戦士ロボットの合金製の武器だってんだああっ、あああん！？」

刃先の無くなったナイフ。これではナイフはナイフの意味を持たない。つまりは、社に刺さったナイフは刃先の無くなったナイフという事。彼の胸には傷一つついていない。彼は生きているのだ。

だが、金髪の殺し屋にとって社が生きている事など問題では無かった。組織が創った最強の筈のナイフ。鋼鉄の盾だろうと鍛え上げた鉄刀だろうと、全てを両断する筈のチタネス甲合金製ナイフ。だが、支給されて一週間と経たずそれは破壊された。

「あああっ！？デメエはっ…！？」

金髪の殺し屋は部屋の入り口を見る。そこにいた者。そこに存在した男。金髪の殺し屋は驚愕する。まるで、幽霊を見るかのような表情で驚愕する。

黒服の男であつた。上から下まで黒一色で統一した男。黒髪を長く伸ばし、切れ長の目をさらに鋭くした男。肌は白く、それがより黒を強調している。一般にはこの男を美形というのであろう。その姿を見て金髪の殺し屋は男の名を言う。忌々しく、吐き捨てる様に…。

「月影」

この後に二階の少年達を逮捕した夏樹が、この部屋に駆けつけてくるのだが…。この金髪の殺し屋と黒服の殺し屋が消え失せていたのは言うまでもない事であつた。

第二十七話：三階での出来事（後書き）

こんにちは。

前書きに書いた通りにストーリーテラー（語り部）を勤めさせて頂きました。まあ、なんて事のない普通の小説構成なのですが（笑）上手く書けていたでしょうか？

さて、第二十七話目です。今回の話は前話の補足的な話ですね。夏樹が三階に駆けつけてくる前に社の身に何があったか…。それを書いたものです。

はて？何やら面白い事になっていませんか？社を助けた黒服の殺し屋。この後の展開が私自身、気になりますか…。

今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

直ぐ終わるとか言っておいて結局話を長くしてしまう私。…頑張ります！！

第二十八話：闇

そこは崖に建った古城。古びたレンガの色彩がより古城を歴史的に魅せている。その古城の一室。大広間というべき部屋であろう。そこには、三人の人影が見える。

「いとおしさ故に破壊を」

「限りなく無へと帰した世界を」

「より深みのある創成へと導かん」

三人が三人共に別々の言葉を放つ。それは、まるで暗号のように…。

「ふん、いつまで祈りを捧げているつもりだ、ビシユヌ？」

三人の内、黒マントを羽織り大鎌を手に持つ男が左側の女性に文句を言う。

「シバ、やめなさい。ビシュヌは我々より信仰を強く持っているのです」

シバという黒マントの男をもう一人の男が諫める。諫めた男の姿は白いマントを羽織り左腰に剣を差している。

「良いのですよ、ブラフマー。シバの言う通り、祈りを早急に済ませて今回の議題に移りましょう」

そう言いビシュヌという彼女はそつと瞑っていた目を開ける。彼女は水色のマントを羽織り木製の杖を膝の上に置いている。

「議題ね、はっ！！東洋の島国にて存在する第三者による妨害……」

シバは不敵に笑い、テーブルに置いてあるブドウ酒を飲む。それを見たブラフマーは『はぁ』とため息をつき言う。

「さて、どうしたものか……島国とは言え。我々組織の邪魔をする者が現れました」

組織名『crown』

世界に徹底的な交戦を求める彼ら。破壊を繰り返し、世界を限りなく無にした後、より平和のある世界を創成するというのが彼らの組織的目的である。だが、その壮大なる計画を前にそれを妨害する者が現れた。そのために、各地にて作戦を展開中だった彼ら三人はこの古城へと集^{つど}う事となったのだ。

「ああ、そういやあ……。『インビジブル・ブレード』が行方不明らしいなあ。なあ、ビシュヌ？くはっ、お前のお気に入りにじゃなかったか、おい！？」

シバは『カカカツ』と卑しく笑う。それを笑う事も怒りを表す事もなくビシュヌは答える。

「確かに、『月影』は残念な事をしました。しかし、悔やんでも前に進まなければなりません。後悔よりも前を見据えるのが先です」

どこを見ているのかビシュヌはただ真っ直ぐに顔を向けている。彼女の表情は全くの無表情であるが、その姿からは悲しみが色濃く見て取れる。

「シバ、いい加減にしないか」

その様子を見ていたブラフマーがシバを再び諷める。黄金の髪に微光を放つ瞳。その全てがシバに対し怒りを向ける。

「…かつ、恐ろしいねえ。創造を司る神には到底見えない。お前、俺より破壊神の素質があるんじゃないの？」

ブラフマーの睨みを受け流し、シバは皮肉る。

「しかし、一体どのような者なのでしょう？『月影』を打ち倒し、我々を退ける程の力を持った第三者とは…」

ビシュヌは自分が可愛いがっていた部下を打ち倒した第三者について論じる。

「さあな、『インビジブル・ブレード』がどれだけの力を持っているかによるだろ？まあ、あの黒猫がちょこざかったのは覚えているが…」

「ははっ、シバよ。その黒猫に痛手を負わされたのは何処の誰だったかな？」

ブラフマーがシバに対し復讐の皮肉を浴びせる。『あぁっ！？』とシバが立ち上がりブラフマーへと大鎌を向ける。

「はははっ、大鎌を仕舞いなさい、シバ。しかし、三年前の事を思い返すと第三者を見くびっては痛い目に合うのは確かでしょう?」

ブラフマーがそう言うとお大広間は静まりかえる。三年前。このフリーズにシバもビシュヌも黙り込んでしまう。

「カカカツ、三年前な。確かに、この国にはお世話になったなあ」

シバは大鎌をブラフマーから離す。そして、部屋の隅に置いてある銅像を切りつける。ズバンと真つ二つになる銅像。

「魔神・空海玄治」

ガシュン、ガシュンとシバは大鎌を振る。

「そう、三年前の作戦にて立ちはだかった男。魔神は死んだが、その力はまだ衰えていない」

その言葉に世界を破壊する神・シバも、世界の維持を司どる神・ビシユヌも息を飲む。それを見て彼は言う。世界の創造を司どる神・ブラフマーは続けて言う。

「今回、我々の作戦を阻止した第三者とは『魔神の息子』なのです
よ」

闇を蠢き、光を進む。彼らは誰にも止められない。そして、誰にも止められない『システム』が動き出した。その『システム』を邪魔する者を彼らは排除する。目標は東、東洋の更なる東の島国。

世界は激動に流れていく。そう、神さえも置き去りにして…。

第二十八話：闇（後書き）

こんにちは。

遂に組織の幹部がその姿を露にしました。彼らの名が意味する事とは…？

東洋の更なる東の国。そこにいる第三者『魔神の息子』。彼の正体は言わずもがな…。

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

『インビジブル・ブレード（見えない刃）』 Ⅱ 『月影』 Ⅱ 『黒猫（笑）』

第二十九話：病院にて、再びコロッ……

「それで？君は何がしたかったのかな？」

昨日、小・中学生やウサギ達が傷つけられたという事件を捜査していた俺。んで、今日の朝に凜がやって来て。

「んん？ほら、怒らないから言ってごらん？君は昨日何がしたくて町外れのビルに行ったのかなあ？」

彼女はニツコリと笑っている。そう、それはまるで、全てのものを抱擁する聖母マリアの様に……。が、しかし、彼女の口元はヒクヒクと器用に動いている。……怖い

「ち、違つのですよ？ナイフを使った殺傷事件が中学校の近くであつたから、柊や桜子が襲われないように……」

「何が違つかあああつ……！」

きゃあああ！？怒らないって、怒らないって言ったのにいゝ。嘘つきいいいい！！

声にならない声で叫ぶ俺。そして、そんな俺の顔面にゴスンと凜の正拳が飛んでくる。

「まあ、まあ、良いじゃない。凜も怒らないの、夏樹がすっかり怯えちゃってるじゃない？」

そい言いながら病室に一人の人物が入ってくる。

「げ、お前は！？」

「お久しぶり。夏樹ったら連絡をちつともくれないんだからあ。入院してるって聞いてビックリしたわよ？」

そう言い言葉の主はヒラヒラと手を振る。

「よし子、私は怒ってなどいない。ただ、叱っているのだ！-」

「凜、貴女って言葉遊びが上手ね!!」

『あははは』とよし子と凜は笑う。彼女達は本当に仲良しだ。

しかし、その二人の姿は異様である。何故ならよし子という人物の姿が問題なのである。

髪は紫色に染められ、その長くなった髪を瑠璃の髪止めを使い後ろにまとめてモフモフのマフラーを首に巻き、マダムといった服装を着てお姉言葉で喋る『男性』。それが、よし子という人物なのである。

もちろん、俺が先程言った『彼女達』というのは『凜』という『彼女』と『その他のよし子』という意味である。

本名：音薔薇 おとばら 良和通称：よし子 よしかず

音薔薇財閥の一人息子で、多才な能力を持ち、世界を忙しく飛び回る貿易会社社長。それが、音薔薇良和である。先代の親父さんが引退してからは、今や会社、財閥、共にボスとなった良和。いまだ海外にて貿易中だと思っていたが、どうやら、帰ってきていたようだ。こいつとは、凜と同じく幼い頃からの知り合いであるが…。

「おほほほっ！！まあ、まあ、まあ、夏樹ったら、27にもなつてまだ、わんぱく坊やなの？」

よし子、もとい良和は『おほほほ』と笑う。…しかし、確かに、27歳にもなつてガキっぽい俺もどうかと思うが、同い年でオカマのこいつには言われたくない。

「何か言つたかしら、夏樹？」

「いえ、何も…」

良和も凜と同じく勘が鋭く、よく俺の心を見透かす。特に、ある『ワード』に対しての勘の鋭さは異常である。

「うわ？オカマが夏樹の病室にいるよ？何、夏樹ってオカマバーにでも通っていたの？」

そう言い病室に入ってくるのは太郎だ。大抵こんな馬鹿話は『んな訳ねえだろ！！』と俺が太郎にツツコミを入れて話が終わるのだ

が。今回はそれを許さない。

「オ・カ・マ……？」

ゴゴゴゴツと大地が揺れる。病室の空気がいつきに重くなるのが分かる。良和に、いや、よし子に絶対言ってはならない言葉。そう、太郎はそれを言ってしまったのだ。そのため、怒りに燃えたよし子が鬼の形相で太郎を今にも襲おうとしていた。

「こん、ガキヤアアツ！？ テメエ、昔からそれだろうがあああつ！？ 忘れたとは言わさんぞお、キサマ会う度会う度に言いやがつてつ！！ 今日という今日は許さないいいいいいいつ！！」

ガバアアとよし子は太郎に飛び掛かる。だが、太郎は『うひゃ、オカマザウルスが怒った』。あはははは『っ』と廊下に出て逃げて行く。

「ギヤアアアス！！ 馬鹿太郎がああつ、逃げてんじやあねえええつ！！ぐぎゃあああああつ！！」

そう言いオカマザウルス、じゃない、よし子は太郎を追い病室を出ていくのだった。

「…なんと、騒がしい」

凜がため息をつきながらそう言う。そんな彼女に『全くだ』と俺も同意する。

病室には、俺と凜の二人が取り残されていた。シーンと静まり返った病室。カチッコチツと時計の針の音が聞こえてくる。

「あ、あゝ…あれだ、君は今日の午後に退院するのだろう？」

沈黙に耐えられなかったのか凜が唐突に俺に話かけてくる。

「ん、ああ。何かドタバタしたけど、そのつもりだよ？…何で？」

俺は凜の質問に対して解答と切り返しの質問を投げ掛ける。だが、凜は答えない。俺は時計の針をじっと見つめたまま微動だにしない。

一方、凜は凜で椅子に座り、膝に乗せた両手をじっと見つめている。

果てしなく、気まずい空気が病室を支配する。何だかムズがゆい。

「にい……」

そう、まるで、にい……。ん、にい？……にいとは何だ？

「ん、あっ！！スマン、君の事をすっかり忘れていた」

そう言い凜は病室に入ってきた少女の元へ駆け寄る。病室に入ってきた少女。その少女は小さく、真っ白な肌と淡い水色の髪の毛をしていた。可愛いワンピースを着て、白い靴下と赤い靴を履いている。

「君は……」

近寄ってきた凜の服をチョイと可愛く掴む少女。俺はその少女を知っていた。初めて会った場所は、俺の家の近くの商店街。その姿

に似合わなくコロツケを15個も平らげ、リボルバー式の拳銃を持つており、ニュー・エントランスビルで俺を助けてくれた少女。

そう、コロツケ少女である。

第二十九話：病院にて、再びコロッ…（後書き）

こんにちは。

ストーリーテラー（語り部）、交代！！ただ、今後もあらゆるケースが考えられるため同じように私がストーリーテラー（語り部）になる話が出てくると思います。しかも、予告無く（笑）その時は『ああ、またあの手か』という感じで見て頂けると幸いです。よろしく願います。

さて、二十九話目です。オカマさんが出て来ました（笑）しかも、初登場にてさっそく男に戻ってる？

まあ、何にしても揃いました。夏樹、凜、太郎、よし子！！この四人が前に言っていた主に仲良しの四人組なのです。夏樹いわく腐れ縁という訳ですが、結構頑丈な縁に見えるのは私だけでしょうか？

そして、話最後に出てきた少女！！サブタイトルにもなっているのに出番はアレだけ（笑）でも、やっと出てくれました。コロッケ少女、実は話的に重要な人物だったり？

それでは、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

よし子の名前に注目！？……これで私が言わんとする事が分かった
アナタは凄い人物かも？（笑）

第三十話：柊と柚子（コロッケ少女）

俺が退院して1日が経った。入院中、最初の内は気を失い寝ていたので入院生活をそう長くは感じなかったのだが、実際には一ヶ月も入院していたらしい。…道理で我が家が懐かしいはずだ。

そんな事を考えながら俺は、いま地元で流行りの『ローズアリア』という洋菓子店のコーヒーを一口、飲む。

「みゆ、にい…」

その声に俺は左下の少女を見る。そこにいたのはコロッケ少女である。彼女は俺の左隣に座っており、ベッタリと俺の腕に抱きつき満足そうに目を瞑っている。

「ういゝー！！離れろっ、柚子ゆずー！！」

そこへ柊が現れ、コロッケ少女のほっぺたをつまみ上げる。

「みゆうっ…!!?」

「うい、みゆう、ではない。兄は私の物だ。柚子ばかり兄とベッタリしてズルいぞ!？」

ドタバタと暴れ回る柊とコロツケ少女。その度に俺の持つコーヒ―が、チャポンチャポンと揺れる。

「ういっつ!!」

「みゆうっ!!」

さて、どうしたものか……。

昨日、病院にて再会した俺とコロツケ少女。彼女は、あのニュー・エントランスビル事件の後、警察の尋問を受け、凜によって保護され彼女の家で過ごしていたのだが…。

『彼女を君の家で保護してやってくれないか？私の家に暫くいたのだが、何分私の家にはもう一人の居候がいるのでな…。それに、彼女も君の家の方が良いと言っているし、どうだろう?』

と、凜が言ったので俺は快く承諾した。大体、コロツケ少女を最

初に保護したのは俺だ。彼女の行く場所が無いのなら、俺が保護するのは当然である。それに、コロッケ少女が来てくれれば、我が家も賑やかになる。そう思い彼女を我が家に受け入れたのだが、はははっ（笑）

「うつ、うつ、うつ、うつゝっ!!」

「みゅっ、みゅう、みゅう、みゅうゝっ!!」

ああ、ちよっ、コーヒーが…。

そんな訳で、昨日初めて出逢った我が妹達とコロッケ少女。桜子の方は『まあ、妹が一人増えたって思えば…。よろしくね、柚子ちゃん?』と言ってくれたのだが…。

「ういゝ!! 柚子のバカ馬鹿ばかりっ!!」

「みゅうゝ!! 馬鹿じゃないもん…」

んゝ、ぼこぼこと二人が叩き合ってるよ。普通だったら、凶悪に見えるはずの殴り合いなんだけど。なんか、スツゲー可愛く見えるのは俺だけだろうか…?

いやいやいや、そうではなくて…。柊とコロツケ少女。昨日、初めて出逢った時からこんな感じである。彼女達にはお互い似た所があるから仲良く出来ると俺は思っていたのだが、似た者同士過ぎて逆に…て事だろうか？

「みゆう、にい…」

「うつゝ、兄にスリスリするなあ！！…私もスリスリしますう！！」

二人はぎゅうゝと俺に抱き付く。途端、俺の背筋にぞくぞくつと何かが走る。二人はまだ、幼い。そのため、女性として成熟していない分、所々にやや硬い感触が印象的である。だが、それ故に柔らかい所は柔らかいまま、より強調されているように思える。

そんなふにや柔らかな感触に、あたふたと俺は動揺してしまう。別に彼女達は少女なのだから意識する必要はない。逆に意識し過ぎるのは犯罪であり、軽蔑するべき事である。だが、俺は動揺してしまふ。というか、誰でもこんな状況に置かれれば同じ反応になると思う。残念な事は、この二人がまだ幼いという事…。これが成熟した女性であればより嬉しいのだが…。

「うつ？何やら兄がいやらしい顔に…」

「みゆ？」

はっ！？…ごほん！！

先程から柊はコロツケ少女の事を『柚子』と呼んでいるが、これは凜がコロツケ少女に付けた名前である。

凜がコロツケ少女、もとい、柚子を保護した時に『名前が無いのは不便』という事で付けたらしい。ちなみに、何故に『柚子』なのかと俺が凜に聞いた所『自分の名前を考えてみると良い』と言ったのだが、未だに分らないままである。

「こんにちは、はぁー！！」

ん、何だこの間抜けな『こんにちは』は？そんな事を考えていると、ガチャリと廊下へと続く扉が開く。

「やつぽー、夏樹ーい。居候に来たよぉん！！」

太郎である。普段の白衣を纏い、どデカイリュックとハムスターのゲージを抱えた太郎が、そこに居た。

「はぁ！？居候お？」

「うん、居候っ」

何を急にコイツは…。そんなの桜子が許してくれる訳無いじゃん。
…ん、あれ、待ってよ…。何だ？何か忘れているような？…。あっ！？

その後、帰って来た桜子を説得するのに3時間を用いたのだった。

第三十話：柊と柚子（コロッケ少女）（後書き）

こんにちは。

祝・話数30！？前回から今回にかけてはシリーズ編とコメディ編のキャラクター顔合わせといった所。まあ、コロッケ少女だけです（笑）

さて、第三十話目です。コロッケ少女、名前を改め『柚子』と命名。名付け親は凜ですね。名前の由来は夏樹、というか空海家に有り！？

柊と柚子については似た者同士といった所。この二人は作者である私から見てもかなり似ていると感じます。『うい』とか『みゅう』とかの口癖も似ているし。当分は兄・夏樹の取り合いが続きそうかも？

それでは、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

柊と柚子。…彼女達は、ただ似た者同士という訳では無い！？

第三十一話・日常という幸福

朝ご飯で何だと思う？俺は今日1日を元気に過ごすための原動力だと思う。

「みゆっ、にいの玉子焼き…ちようだい？」

そう言われたので俺は柚子に玉子焼きを渡す。『みゆ、にい大好き』と柚子はにっこりと笑う。ああ、なんて可愛い笑顔なのだろう。

「うっ、柚子めっ。…兄、私はそのウィンナーを所望します」

そう言われたので俺は椀にウィンナーを渡す。『兄、大大大好きです』と椀が叫ぶ。ああ、コレはコレで何やら可愛いな。

何というか、幸せだ。こんなにも可愛い二人が自分を取り合

っているのだ、幸せに感じない訳がない。神よ、いままで信じず馬鹿にしていた…ゴメンなさい！！あははははっ、幸せ過ぎて鼻血出そうっ！？

「……出てるわよ、馬鹿兄。言葉も鼻血も…」

あははははっ？何かなあ、桜子も僕の取り合いに参加を…

「黙れロリコン！！」

「ぶひゃあっ！？」

あまりの幸せ空間に我を忘れている俺に桜子の鉄拳がズガンとささる。俺は椅子ごとガタンと真後ろに倒れる。鼻がじゅんとする。あ、小学生時代のプールで鼻に水が入った時の感覚がする。つつんで、頭につっんて来るやつ…。

「…夏樹、君たちはこんな生活を毎日続けているの？」

太郎が倒れたままの俺の顔を、覗く様にして言う。俺が『そうだよ』と起き上がり言うのと太郎は。

「ふうん、家族って変。朝から漫才をするんだ？」

……えっ、どういう解釈！？今の何処が漫才だったの？俺は太郎の顔をまじまじと見る。何やら太郎は『ふうん』と唸っていた。何を考えているのやら…。

「だから、私は言ってやったの。…あんたじゃ、このプロジェクトを完遂させる事は出来ないわって…」

午後になって我が空海家によし子がやって来た。彼…いや、彼女？ああ、もう、よし子は何やら俺に用事があるとの事だが、桜子や

太郎と話をしていた一向に用件を言っていない。

「よし子さんてキャリアウーマンの鏡なんですねえ…」

桜子がよし子の話を聞いて何やら敬意の念をよし子に送っているが、桜子よ一つ間違いがある。…よし子はウーマンじゃない！！

「何か言ったかしら、夏樹？」

「いえっ…」

相変わらず鋭いな…。前回言ったようによし子には『言うてはいけない禁句』がある。彼にその禁句を言おうものなら…。

「桜子ちゃん、よし子はウーマンじゃないよ。ただのオカ、ぐげっ…」

「おほほほほほっ。あら、やだ、どうしたのかしら馬鹿太郎った

ら…？」

……太郎の顔に血の気がない。何をしたんだろう、よし子のやつ？

「て、違う。よし子、早く用件を言え。一体、俺に用事って何だ？」

俺はソファーに座るよし子を見る。相変わらず、毛皮のコートだの金のネックレスだの豪華でごちゃごちゃな服装だ。

「あら、そうだったわ。いや、何、別に深刻な話じゃないの。ただ、貴方、退院したじゃない？だから、クリスマスも近い事だし…」

そう言いよし子は立ち上がる。そして、にっこりと微笑み。オペラ歌手の様に両手を挙げ言う。

「つまりは、パーティーをしましょうって事よん！？」

「パーティー？」

パーティーねえ。いやまあ、クリスマスパーティーなら毎年、家^{うち}でもしてるけど…。

「なんだよ、何を考えてんだお前？」

「いやん、別に変な事を考えてる訳じゃないわよ？ 夏樹、貴方、ロズアリアって知ってる？」

ああ、駅前のケーキ屋だ。確か、桜子がそのケーキが好きだったような…。でも、それが何なんだろうか。俺はくにやつと首を傾げる。よし子の言わんとする事が分からない。一体、彼は何を言いたいのだろうか。

「うふつ、知ってるみたいね。実は、あの店は私のなの」

「ええ、本当ですか？ 私、あそこのイチゴショートやモンブラン、大好きなんです〜！！」

『きゃあー、うそー!?!』と騒いでいる桜子。そんな桜子を見て俺は昔、よし子が語っていた夢について思い出す。大企業・音薔薇財閥の息子のため進路は既に決まっていたよし子。だが、幼き日の彼の夢は『ケーキ屋さんになること』だった。しかし、彼は親に反発する事もなくここまでやってきた。これは、彼なりの夢実現といった事なのだろう。俺はそんな考えに至り、物思いに耽^{ふけ}てしまう。

ローズアリアねえ。…ローズは薔薇で、アリアは…アリアはオペラの用語だけど音って事かな?つまり、薔薇音、もとい、音薔薇か…。なるほど、気付かなかった。

「ん?で、なんでパーティーなんだ?」

「ああ、つまりのつまりね。ケーキを買えって言うてんの!」

って、商売しに来たのかよ、コイツ!?!…はあ、何というか、ホント商売屋の息子だよ。

「あら?馬鹿太郎の口から泡が…」

「つおっ！？やべえ、医者、医者医者っ！？」

「あら、夏樹、医者ならここにいるじゃない？馬鹿だけど、一応は医者でしょ、太郎は？」

ああ、そうか。何だ、慌てる事は…って、馬鹿あゝっ！？

とりあえず、救急車で病院に運ばれた太郎。1日入院して我が家に戻ってきたのだが…。彼が言うにはその時、夢の中で死んだはずのお祖父ちゃんとお祖母ちゃんに会ったという事らしいのだ。…太郎よ、それは本当に夢だったのか！？

第三十一話・日常という幸福（後書き）

こんにちは。

いつの間にか、柚子を加えての日常に戻ってきました。しかし、空海家には通常という日常は無いらしく…（笑）

さて、第三十一話目。よし子についての話になってますね。そして、ローズアリアとは音薔薇の事を指す様です。これは、意外と重要な設定でして『月影』と同じく至る所に出てくる名前です。

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

クリスマスシーズン到来。なのでここらで一発クリスマスな話を…？とりあえず、コメディ編、続きます。

第三十二話：柊ちゃんとちっこい悪魔

ジングルベル、ジングルベル、す〜ず〜があ〜なる〜…。

街の至る所からクリスマスによる定番の音楽が流れている。そのクリスマスの音楽が流れる街角に数人の少年少女達が仲良く歩いていた。

「しかし、浮かれきってんなあ〜」

白いニット帽をかぶった少年。彼は紐付きサッカーボールをけいんけいんと蹴りながら街のクリスマスモードに呆れたような声を上げる。

「うっ、良いではないか？クリスマスだぞ？サンタクロースだぞ、馬鹿者！？」

その言葉に対し黒髪というより、藍色に近い髪色をした少女がムスツとした顔で反論をする。

「はっ、サンタクロース？お前は馬鹿か、サンタなんている訳ないじゃん。か・く・う、架空人物だよあのじいちゃんは…」

白ニット帽の少年は更にそう言う。サンタクロースは存在しない。誰も見た事ない存在。それは、無いのと同じ。サンタクロースはいないと彼は言う。

「甘夏、甘夏」

そこへ、黒ニット帽の少年が白ニット帽改めて、甘夏という少年に声をかける。

「んだよ、ヒトシ？」

「いや、柊ちゃんが…」

その言葉に甘夏は柊という少女を見る。

「……………」

明らかに不機嫌だ。彼女は明らかに不機嫌であった。空海柊は、ジロ〜ツと甘夏を睨み付けたまま一言も話さない。

（な、ななな、何だよ。めっちゃ、空海の奴、俺を凝視してくるんですけど？）

甘夏は彼女のその威圧感にたじろぐ。冷や汗が首筋を通り流れ行くのが分かる。何と言つか、マジやばい…。

「……………クソがつ！！です」

その柊の言葉に『ひいつ！？』と情けない声を上げてしまつ甘夏なのであった。

（サンタはいます。いるのです。私は知っているのです…）

空海柊はムカムカと街中を歩く。サンタクロースはいる。必ずいるのだ。柊はズンズンと大地に足を突きながら歩いて行く。

「うい、甘夏は馬鹿ですから。そうです、馬鹿な奴ですから。サンタさんはアイツの家には来ないです。…うん、そうに決まっています」

343

柊は『はふん』と公園のベンチに腰を下ろす。時間は昼過ぎだが、公園には人がない。いつもならば、低学年の子供達が砂場やシーソー、ジャングルジムなどで遊ぶ姿が見られる公園のだが。今は柊以外、誰もいなかった。

「ギギイ…」

「うい？何ですか、この声は？…ん、声ですかねコレ？」

柊は妙な音のする方向を見る。スベリ台が1つ。青色の手すりに黄色のスベリ台。それ以外に妙な所などは無いように…。

「ギギイ、ギギ…」

やはり、妙な音がする。何だろうか、スベリ台の下の安全の為の砂場がモツコリと盛り上がっている。とりあえず、パサパサと砂を叩く。徐々に姿を表していく何か。それは…。

「うい、人形さんです…」

ちっこい悪魔の人形。尖った耳に丸い顔。ギザギザの歯が横いっぱい広がった口からはみ出していた。

「ギギ…」

「うわっ、動いたです！？目が見開いたです！？…綺麗な目ですね」

つり目の悪魔。瞳はブルーアイズ。ニタリと笑う姿が不気味だが。何やら可愛い感じがする。

「うい、捨て猫ですか？…いや、この場合は猫ではなく、悪魔？悪魔っているんですね。うい、まあ、サンタさんがいるなら悪魔も…」

意味の分からない脳内変換である。しかし、柊はそれを心から信じているようであった。

と、そんな事を考えていた柊。ぐぐ、という音がちっこい悪魔のお腹から鳴った。

「うい、お腹がへっているのですか？…チョコ食べますか？」

柊はちっこい悪魔にチョコを差し出す。

途端にちっこい悪魔は柊の手に噛みつく。

「ギギ、ぐちゃぐちゃ、ぐちゃぐちゃ、ぐちゃぐちゃ…」

「うい、器用な奴です。私の手に噛みついてるくせにチョコだけ噛んでます。てか、手を離しなさい。チョコだけ口に入れなさい。ヨダレは垂れ流しですか？私の手はヨダレでベタベタではないですか？て、ペロペロ舐めない！？」

ちっこい悪魔は、柊の手を傷つける事なくチョコレートを食べ尽くす。一方、柊はそれを見ながら何やら考え込んでいるようだ。

「うい、決めました。アナタは私が飼って上げます。兄に言っただけです。うっ、しかし、姉が問題です。うっ、姉を説得しなければ。どう、説得しましょう…」

「ギギ…？」

困ったような顔をする柊。彼女が一体何故に困った顔をしているのか、ちっこい悪魔には分からない。しかし、ちっこい悪魔は考える。人間は嫌な事があってもそれ以上の幸せがあれば、前の嫌な事を忘れる。きつと、この少女だって同じに違いない。ちっこい悪魔は手を天にかざす。そして、何処からともなくいくつもの光る物を取り出した。

「うわっ、何ですか、いきなり？うい？何ですかコレは？キラキラ光ってます。ガラス？ビー玉？うい、金ぴかの板もあります。どこから、こんなに出したんですか？この、ガラクタ達は？」

「ギギッ！？」

当然、小さな少女は知らない。このガラクタ。ちっこい悪魔が何処からともなく差し出したガラクタ。これは一般に宝石という。

正しく、ダイヤモンドカットをされたガラスはダイヤモンドであり。ビー玉の様にまるっこい緑、青、紫の石達はサファイアやルビー等の高級品である。金ぴかの板はもちろん金である。

しかし、少女は知らない。いや、俗世間に毒されていない。彼女にとってそれは必要のない物だから。彼女にとって幸せはそんな物ではないから。

「うい、駄目ですよ？公園は皆のものですから。ゴミはゴミ箱へ…」

いや、決して彼女が宝石の価値を知らない訳ではない。知らない訳ではないのだが…。

「はい、ザザザーです」

「ギギッ!？」

そう言い彼女は金銀財宝をゴミ箱へと流し込む。ゴミにまみれた宝石達。もはや、その輝きは光る事を許されなかった。空き缶と比べられた金と銀。ガラスにさえ、その威厳を示せないダイヤモンド。これらを見て人は言うだろう、ガラクタ。

いや、決して柊が宝石の価値を知らない訳ではない。ただ、ちょぴり貧乏な空海家の財政。その家で彼女は宝石というものを見た事がないのだ。テレビで見た事があっても実物を見た事がないのだ。

いや、だからと言って決して安月給の空海家の長男が悪い訳でも……。

第三十二話：柊ちゃんとちっこい悪魔（後書き）

こんにちは。

SFです。空想科学ストーリーです。ちっこい悪魔です。クリスマスストーリー…？

さて、第三十二話目です。柊が主人公の話ですね。ちっこい悪魔が登場。エスエフの世界になっています、が、本編には関係ありません。前回言った『こちらで一発、クリスマスな話』という訳です、まあ、番外編に似た様なモノ。とりあえず、続きます。

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

『あわてん坊のサンタクロース』って知っています？クリスマス前にやって来たり、煙突から落っこちたり…。歌、なんですけどね。

第三十三話：柊ちゃんと柚子ちゃんとちっこい悪魔

「右目は見えているのかい？」

白い白い白衣を纏った男。佐久間只太郎は、お茶請けの煎餅をバリツと食べながら目の前の男に話し掛ける。

「な、ななな、何の事かな？」

目の前の男。空海夏樹は両手をバタバタと上げ下げする。何やら動揺しているようだ。

「ふっ…。それだけで充分だよ、夏樹。君の右目は見えていない。いや、微妙かな？視力の問題ではない。見えたり、見えなかったり…かな!？」

「……何の、事かな？太郎、俺は至って健康体だ。何なら視力検査でもするか？」

静まり、鎮まる。この場を沈黙と無音が支配する。太郎と夏樹は言葉を交わすことをしない。ただじっと、お互いを見ているだけであつた。眼光が眼光を睨む。威圧的な雰囲気徐徐に溢れ…

「ういゝ、ただいまですう！！」

どうやら空海家の次女が帰つて来たようだ。彼女の言葉にリビングを支配していた雰囲気消える。

「う？どうしたのですか、兄？太郎も？」

「うんにや、夏樹が歯医者怖いって言うから、僕が歯の治療をしてあげようかって話してた所」

「は、は、はっ。太郎に任せるくらいなら自分で抜くよって、お兄ちゃんが言つた所だよ？」

「あはは、夏樹が自分で抜いたら神経死んじやうって言つた所だよ？」

「あはははははは。てめえに任せたら、命が死ぬわっ！！て、言っ

た所だ」

「あはははははははははあーっ!」?」

「……っい?」

「ギギ?」

「ふむ、似合いますね。サンタさんの服ですよ?分かりますか?家から取って来たのです」

悪魔はサンタの服を着た自分を見る。心なしか嬉しそうである。

「うい、兄達にはまだ知らせない方がよいですね。悪魔なんて知ったら卒倒してしまいますよ、特に兄とか、兄とか……兄とか？」

「みゆ、にいは悪魔を……知らない？」

「いや、そういう訳ではなくてです。大抵は悪魔って聞くと、良い顔をしないって……おおおっ！？」

いつの間にかそこには淡い水色の髪をした少女がいた。彼女の名前は柚子。最近、空海家の一員になった少女である。

「何故いるのですか？ 柚子は買い物に行ったのでは？ はっ！？ 貴様、偽者ですね？」

「みゆっ？ 柊は……馬鹿？」

「馬鹿とは何ですか、馬鹿とは？ うい、この感じは本物の柚子ですね。……え、ええ〜と、あっあ〜あ……そんな事は良いのですよ。あはのは〜、です……さあて、公園に行こうです」

「みゆう、分かった。公園…行く」

「お前は呼んでないです〜!？」

ぎゃあぎゃああと騒ぐ、空海家の少女達。時間はもう夕方である。肌寒い風が吹き、太陽は意地悪なのか物凄い速さで地面へ消えようとしていた。

「みゆ、小さな悪魔……………可愛…い？」

「何故に疑問形ですか？可愛いですよ、可愛いではないですか？この八重歯^{やえは}とか…」

「…悪魔…歯、全部八重歯…」

確かに、ちっこい悪魔のギザギザの歯は口いっぱい八重歯だ。むむむっと柵は柚子を睨む。全く、この柚子ときたら、あー言えば

こー言うのだから…と。

「お、いたいた。おゝい、空海ゝいつ!!」

柊と柚子が夕日の公園で遊んで(?)いると、向こうから白いニット帽をかぶった少年がやって来た。

「む、甘夏です。嫌な奴が来ました。…アイツにはちっこい悪魔は見せません」

「みゆう、分かった。甘夏、嫌な奴……倒す」

その言葉に一瞬『えっ?』という顔をする柊。だが、柊が見た方向には柚子はいない。なんと既に、遥かに先の甘夏が走ってくる方向にダッシュしていたのだ。しかも、もの凄い速さで…。

「おゝい、空海ゝいつ。おゝい?……て、うおおお?な、何だ?ものスゲー速さで女が近づいて来る!?!?て、ぎゃあああ!?!?な、何故に飛び膝蹴りiiiiiiiiいつ!?!?」

ガスンと柚子の膝が甘夏のアゴに当たる。まさに、会心の一撃だ。スローモーションの様に甘夏が後方へと倒れていく。一方、柚子は見事に着地を決める。

「みゆう、ミッション………コンプリート？」

「うい、不幸な…奴です」

市ヶ谷^{いちがや}甘夏^{あまなつ}。彼はただ、クラスメートの空海柊を怒らせてしまったと思い。お詫びに彼女を近所の教会のクリスマス・プレゼント会に誘いに來ただけだったのだが…。辛くも初対面の柚子によって阻止されてしまうのだった。

第三十三話：柊ちゃんと柚子ちゃんとちっこい悪魔（後書き）

こんにちは。

兄と太郎の何やらシリアスなケンカ…？太郎が言いたい事とは一体？まあ、本編ではない、サンタ編には関係ない訳で…。

さて、第三十三話目。柚子が加わりました。柊と柚子の絡み、何か犬猿的な感じ？ただ、本当は仲が良いのです、この二人。

それでは、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

市ヶ谷甘夏^{いちがやあまなつ}。柊のクラスメイト。不幸な小学生（笑）。特技・サッカー。思い人（好きな人）有り。素直の様なそうじゃない様な性格。

第三十四話：クリスマスプレゼント

聖アマント教会は、桜台大間市の南側に位置する教会である。キリストを信仰する聖アマント教会だが、これといって信仰が厚い訳ではない。大体、教会の主であるヒゲもじゃ神父はパチンコ、競馬に宝くじと賭博に夢中だったりするし、最近来た新米の神父は何やら得体の知れない人物なのである。

「でもよ、ここの教会は毎年クリスマスになるとお菓子をくれるんだぜ？空海だって毎年来るじゃん？」

白ニット帽の少年、市ヶ谷甘夏はやや大きめの袋に入ったお菓子を品定めする。中にはイチゴ味、みかん味、ぶどう味、といった飴や手作りなのかやや焦げたクッキー、駄菓子などがいくつも入っていた。

「うい、でも変な教会って事は変わりません。さっきだって、甘夏が私の事を大声で呼んだ時に、あの黒服の男の人が私の方にやって来て、じろじろ見てきました。：ロリコンですよ、あの人？」

「黒服なのは神父の服だからだろ？じろじろ見てきたのだって、空

海って名前が珍しいからじゃないの？まあ、何にせよ、あの月影って神父は悪い奴じゃないぞ？この前、野良猫にエサやってたし……」

「……みゆう」

太陽が半ば頑張りながら大地を照らしている。今時分の夕方にし
ては明るい方だ。ただ、気は抜けない。やはり、今時分の夕方は直
ぐに夜になってしまうのだから。

「……みゆう、お菓子食べて良い？……柊？」

「別に私に了承を得なくても……まあ、どうぞ？晩御飯がちゃんと食
べれる程度なら食べて良いと思いますよ？」

柚子はその言葉に嬉しそうに自分のお菓子袋から綿菓子を取り出
す。はふはふと柔らかな綿菓子の噛み付く柚子。彼女の小さな口は
あっという間にベタベタになっていく。

「……まあ、何と云うか空海の妹って、アレだな？子供だな？」

「まあ、子供ですけど。お前が言いますか、お前が？」

甘夏にはとりあえず、柚子は自分の妹という事にしておいた柊。身長的には大差がないのだが、仕草やあまり社交的ではない性格から妹という事になったのだ。

「でも、俺、空海の事幼稚園の頃から知ってるけど…兄弟は、あのヘタレの夏樹兄ちゃんと美人の桜子さんだけだと思ってた。てか、いきなり妹がいましたって…隠し子かよ？」

「はい、隠し子です」

「みゆ、隠し子…っ」

冗談のつもりだったのだが、あまりにも柊が真剣に答えるので甘夏は苦笑いを浮かべた。

（まじで隠し子なのかよ？…ていうか、何だよ柚子って子のこのハイテンションは！？）

甘夏の知るよしもないが、いま柚子はお菓子によって気分がハイになっているのだ。いつもは、無気力、やる気0、不活発な柚子であるが、見たことのないお菓子の量にピョンピョンと教会の庭を飛び回り喜んでいるのだ。甘夏が柊の方に再び振り向くと、柚子の姿

を見てか柊もやや笑顔であった。

（むう、空海の奴。妹にはこんな笑顔になるんだ…やっぱ可愛い）

「ギギイ！？」

「どわあ！？う、空海！？な、何だよその生き物！？」

甘夏は突然、柊の胸元から出現したちっこい悪魔に驚く。ちっこい悪魔はキョロキョロと辺りを見回し、ひょいと地面に飛び出した。

「あつ、こら、危ないですよ。ほら、こっちです。こっちにおいで…」

柊がそう言ううちっこい悪魔は彼女の出した両腕の中に再びひょいと飛び、戻る。

「なな、何なんだよ、それ？う、空海？」

甘夏は驚く。それもそのはず、柊が連れている生き物は見たこと

がない。サルにしては、毛が少なく耳が尖り過ぎている。かと言って、それ以外には思いつかない。サルではない。では、その生き物は何だ？甘夏は、口をポカンと開けたまま柊の腕の中にいる生き物を凝視する。

「おお、何だ珍しいなあ。無名霊ではないか？」

「うおっ、神父！？」

さらに、口ヒゲをたくわえた初老の男性が甘夏の横から現れる。
名前を真鍋雲外まなべうんがいと言い、この聖アマント教会の主ぬしである。

「おじじ、無名霊とは何ですか？」

柊は悪魔の頭を撫でながら真鍋の言った『無名霊』という事について聞く。

「そうじゃのう、言うなれば、まだ何になるか決まっていけない精霊という事かな？珍しいのう、今の世の中、邪な心や欲望などがはびこっているから人の前に姿を表す事は滅多に無い事なのじゃが…。
よほど、間抜けなのか…、柊嬢ちゃんの事を気に入ったのか？」

そう言い真鍋は『カツカツカツ』と笑いながら教会の中へと戻っていった。

「…まずいな、あのじいさん、呆けが進行してるぜ？なあ、空海？て、あれ？空海？」

「うい、何になるか決まっていな精霊ですか？」

柊は再び、ちっこい悪魔と出逢った公園に来ていた。公園のベンチに座り、教会で聞いた事について考える。サンタがいるのだから、悪魔や霊的な物があっても不思議ではない。では、何故それが自分の目の前にあるのか。柊は考える。今の世の中は汚れている。だから、色々と霊的な物は現れない。聖アマント教会の雲外神父が言っ

ていた。

「……て、お前は何をお菓子の袋に体を突っ込んでいるのですか！？」

無名霊の悪魔は、バタバタと柎の持つお菓子袋に頭を突っ込んで
いる。その光景は、柎から見ても滑稽であった。聖アメント教会の
神父、雲外が言った通りこのちっこい悪魔は間抜けなのかと柎は真
剣に考える。

「うい、お前は何になるのですか？やっぱり、悪魔ですか？…でも、
悪い事をしてはいけませんよ？良い悪魔になりなさい。愛が有れば
皆幸せになるです。私の父が言っていました…」

「ギ？」

につこりと笑う柎。しかし、笑う彼女の顔は何処か悲しそうであ
る。

「そうだー！サンタです。貴方はサンタクロースになりなさいー！
サンタは、皆に愛を運ぶ偉い人なのですよ。貴方はサンタに弟子入

りするです!!」

柊はぽふんと両手を叩く。相変わらず、ちっこい悪魔はお菓子袋に頭を突っ込んでいる。しかし、柊は気にする事なくちっこい悪魔に話掛ける。

「みゆ、サンタ？」

「まあ、柚子は私のストカーですか？」

「みゆ、ストカー？」

柊はため息をつく。柚子は本当に自分にまわりついてくる。こいつは、大好きな兄を取り合う敵と同じだと思っていたのだが。

「まあ、姉妹ですからね。邪険にする事ありません。……時に柚子、貴女はサンタに何をお願いするですか？」

柊はちっこい悪魔と同じく、教会で貰ったお菓子袋に頭を突っ込んでいる柚子に質問する。サンタにどんなプレゼントを貰いたいのか。一体、柚子の欲しい物は何なのかと…。

「みゆ？サンタ、来る？」

柊の言葉に柚子はガバッとお菓子袋から頭を上げる。何やらその表情は驚きに溢れていた。

「来ますよ。良い子にしていたら」

「みゆー！？サンタ、来る！！サンタ、初めまして！？」

「ははっ、何ですか、それは？」

柊の言葉に余程嬉しかったのか柚子はぴょんぴょんと公園のベンチの上で跳び跳ねる。柚子の所には、いままでサンタは来なかったのだろうか？柊はそんな事を考えながら仕切りに『サンタ、サンタ』と歡喜の叫びをあげる柚子を傍観していた。

「みゆう、柊は何を貰う？」

と、不意に柚子がサンタに何を貰うのかと聞いてきた。柊はその質問にしばらく考えていた。そして、五分ぐらい考えた末に彼女は答える。

「母の、写真です」

空海家には母の写真が一枚も無かった。父や兄、姉や自分の写真はあるのに母の写真は一枚も無かったのだ。柊が物心ついた頃には既に空海家には母がいなく、父、兄、姉、自分の四人家族だった。昔はそんな事は気にする事などは無かった。誕生日会も遠足も授業参観も運動会も、父や兄がいた、姉がいた、だから、母がいない事を気にする事は無かった。

この前までは、そう思っていた。いつからだろう、この感情が芽生えたのは？いつからだろう、他人の家が羨ましく思い始めたのは？母がいない、何故？顔を知らない、何故？写真がない、何故！？

母に会いたい。母を知りたい。母の写真が欲しい。

「きっと、父がいなくなったから…。だからです。きっと…」

兄には言えない。兄は、父がいなくなってから自分達に心配をかけまいと頑張っている。悲しませないと歯をくいしばっている。だ

から、言えない。

「でも、知りたいです。会いたいです。顔を知りたいです…」

ちらほらと空から雪が降りだした。辺りは既に闇夜だ。公園の街灯がぼわつと明るくついている。そろそろ帰らないと兄に心配をかける。帰らなければ。柊はいつの間にか流れていた涙を拭う。

「帰りましょう、兄や姉が心配します」

「みゆ？みゆうみゆうみゆうー!!」

柊の言葉にコクコクコクと何回も頷く柚子。彼女は柊の突然の涙に困惑気味だった。自分のせいで柊が涙を流したのではないかと思っっているのだ。

「さて、ちっこい悪魔。帰りますよ？ちっこい悪魔？……うい？ちっこい、悪魔？」

雪は次第にその降る量を増していく。しゃんしゃんと降り行く雪。

きつとこの勢いで行けばクリスマスはホワイトクリスマスになるだろう。楽しいクリスマスになる事は間違いない。兄と姉と柚子とちっこい悪魔。きつと、今までで一番のクリスマス。

早く帰って兄達にちっこい悪魔を紹介せねば。柊は辺りを探す。美味しい料理やケーキを食べたらちっこい悪魔は喜ぶだろう。サンタはちっこい悪魔にもプレゼントをくれるだろうか？柊はクリスマスについて考える。楽しい楽しいクリスマス。早く帰って支度をしなければ。

雪が降るクリスマス・イブ前夜。楽しいクリスマスになるだろう。ただ、その中でちっこい悪魔はいつの間にか消えていた。

第三十四話：クリスマスプレゼント（後書き）

こんにちは。

ええと、とりあえず柊の話はここまでです。色々が無茶苦茶な感じですが、とりあえず柊の母に対する思いが伝わっていると上出来かと？

さて、第三十四話目。ちっこい悪魔、別に居ても居なくても良いのでは？……まあ、不思議不思議という事で（笑）柊の話はここで終わりですが、サンタ編は続きます。

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

ク、クリスマスにまで間に合うか？

第三十五話：イブ前日に

「それじゃあ、お使いお願いね？」

そう言い空海桜子は、目の前の少女にお金を渡す。少女の小さな手は、ぎゅっと渡したお金を握り、その顔は『任せて下さいませ』といった感じで目を輝かせている。

「だ、大丈夫？ちゃんと買って来れるかな？」

何やら、桜子に言い様のない不安が込み上げる。お使いを頼む、少女。名前を柚子という。空海家の兄がとある事件にて保護をし、家族の一員として向かい入れた少女だ。

「まみゅん！！大丈夫、大丈夫。牛乳、たまご…買って、くる！！」

フンフンと鼻息を荒立て柚子はお金を握り締め、右手をあげる。

そして、ドタドタと玄関へと走って行く。桜子も柚子を追い、玄関へと向かう。いやはや、不安である。柚子は元気一杯でやる気も全快なのだが…。

「……………商店街、どっち？」

くにとやりと頭を傾げて、家の前で佇む^{たたず}、柚子。不安である…。

「商店街はあっちね」

何やら面倒な事になっている。

「夏樹は、夏樹は、いつもそうやって誤魔化して！！凜ちゃんの事だつてそうだ！！なんで、君はそうやって自分の心を閉ざすんだ！？馬鹿っぱああっ！！」

「ぶあっ！？」り、凜は今、関係ねえだろうがっ！？てか、馬鹿っぱって何だよ、馬鹿っぱって！？」

空海家の兄、夏樹とその友達の佐久間只太郎が珍しくケンカをしていたのだ。二人はぎゃあぎゃあと騒ぎ、ソファアの周りをぐるぐる回っていた。

（全く、子供みたいだ、二人共…）

桜子は呆れた様な顔をして、キッチンへと戻る。まあ、何だかなで仲の良い二人だ。放つて置いても直ぐに仲直りするだろう。そんな適当な事を考える桜子。すると、桜子の考えが的中したのか暫くすると二人は静かになる。ただ、ダイニングキッチンから見る限り、二人の周りには何やら不穏な空気が漂っている。

「ういゝ、ただいまですう!!」

夏樹と太郎の騒ぎを放って置いてキッチンで洗い物をしていた桜子。すると、玄関から元気な声が聞こえてきた。空海家の次女、柊である。

「姉、兄と太郎が何やら変なのですが？何かあったのですか？」

と柊がいまだに不穏な空気を漂らせている夏樹と太郎について聞いてくる。

「さあ？まあ、でも放って置いて良いわよ。適当な所で仲直りするだろうから……」

桜子のその言葉に『ういゝ、そうですか』と柊は言い、自分の部屋に向かって行った。

(…何だろう、柊がそわそわしてるような?)

桜子はいそいそと自室に向かう柊を見て不思議に思う。

（大抵、あの娘があんな感じだと隠し事をしてる時なのよねえ。…何か壊したのかしら？馬鹿兄のプラモデルとか…）

もしそうなら、それはそれで面白そうだなと桜子は心の中で笑う。先日、野良の猫に大事なロボットプラモデルを壊された兄は物凄い顔で、壊れたプラモデルの破片を握り、膝について落胆していた。あの時の状況を思い出すだけで爆笑ものだ。

そんな事を思い、『クククッ』と笑いをこらえて桜子は再びキツチンへと向かう。とりあえず、準備をしなければならぬ。明日はクリスマス・イブ。空海家ではクリスマスパーティーをイブにする。そして、クリスマスの朝、起きたら枕元にプレゼントが置いてある。サンタが居るか居ないかは置いておくが、クリスマスは楽しみだ。

「ういゝ、行ってきますですう！！」

柊の元気な声。どうやら、彼女は再び遊びに出掛けたようだ。桜

子はルンルンと鼻歌を歌いながら、ケーキを作る準備をする。パーティーには、音薔薇財閥の社長、よし子が経営するケーキ屋のクリスマスケーキも来るのだが。やはり、我が家でもケーキを用意したい。だから、前日である今日ケーキを作って置こうと思ったのだが……。

「柚子ちゃん、帰って来ないなあ……。道に迷ったのかしら？」

と、桜子は家の前に出てみる。すると、玄関前に袋が置いてあった。何だろうと桜子は袋をあける。そこには、牛乳とたまごがワンパック。柚子に頼んだ買い物だ。

「もしかして、あの娘こ。玄関で柵にばったり会っちゃって、そのまま着いて行っちゃった？」

まさかね、と桜子は買い物袋を持ち、家へと入る。しかし、桜子の推理は的中していた。三時間後、柚子は柵と共に帰って来たのだった。

第三十五話：イブ前日に（後書き）

こんにちは。

サンタ編の桜子編です。なかなか出番のないキャラクターですが、桜子目線だと他キャラが扱い易かったりします。

さて、第三十五話目。所々、前回等と繋がっています。お使いに行った柚子が柊と帰って来た理由は前話にありますし、兄と太郎の事も前話で書いてありますしね。桜子と柚子の絡みについては、何やら仲良しの姉妹といった感じです。この組み合わせは、機会があったらまた書いてみたいと思っています。

それでは、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

サンタ編、まだまだ続きます。…クリスマスまでに間に合え！！

第三十六話：幸せを求めた少女のクリスマス

この世界は誰も拒まない。どんな者も、どんな物も、どんなモノも…。誰も、拒まない。

柚子という名前の少女がいる。世界から見て何の事のない小さな少女だ。しかし、彼女の生まれた世界、彼女が育った世界は違った。

『組織』

それが、彼女の唯一の世界だった。生まれた時から誰かと戦う為に彼女は存在した。3歳の頃、少女は彼女のその手にはあまりにも大き過ぎる銃を組織から与えられた。5歳の頃、少女はナイフ1本でジャングルに放り投げられ1年間、そのジャングルで生き抜いた。少女が生まれて、8年の歳月が流れた、その頃、少女のその『力』は世界にとって兵器と呼ぶに相応しい『力』となっていた。

『被験体30217番、良く生き抜いた。…7号、それが今日からお前の名前だ』

世界は誰も拒まない。聖人も罪人も天使も悪魔も、凡人も、神さえも。ただ、世界は意地悪だ。平等という名の下に、世界は彼らに足かせを付ける。力を持つて生まれたモノには、それだけ重い足かせを…。世界は意地悪だった。

柚子という少女には、生まれ持った才能があった。1万と2千分の1の才能。彼女は間違いなく天才だった。いま存在するモノの中で1番といってよいほどに。彼女の才能は奇跡だった。世界が彼女に最も重い足かせをはめるくらいに。

『今回のターゲットは、ボルツ公国の首相・ニルツィアーゴだ。1号から7号までは、暗殺任務を残りはアシストだ。良いか、我々が世界を変える。これは、制裁だ。世界から悪を掃討する事で我々は世界を変えるのだ。この殺しには意義があるのだ』

柚子という少女の才能は、生まれ持った才能だ。神に見初められたのか、サタンに見初められたのか。しかし、世界は違った。平等という名の下に、世界は彼女に足かせを付けた。彼女の『力』が強大になっていくほど、さらに重い足かせを。彼女の『力』が彼女を不幸にした。あまりにも、強大な『力』は世界によつて、あまりにも強大な足かせへと変わる。

柚子と言う少女は考えた。足かせを外したい。幸せになりたい。この世界から逃げ出したい、と。彼女には『力』なんて要らなかつ

た。生まれ持った才能なんてそこらの公共のゴミ箱に投げ捨てたかった。だから、彼女は逃げる事にした。どこまでも、どこまでも、どこまでも…。

『…逃げたいのですか？貴女は、この組織でも重要機密なのですよ。それでも、逃げたいのですか？……そうですか。まあ、貴女の組織とは我々、crownは友好関係にある。が、良いでしょう。7号さん、私が貴女を逃がして差し上げましょう』

闇夜に月が浮かび上がる。その光の影は、彼女を照らし、道を指し示す。彼女は迷わず、月影の指し示す道を歩んで行った。彼女は初めて、本当の世界にその身を晒す^{さら}。なんて穏やかな風なのだろう、なんて暖かな光なのだろう。その世界は彼女の知る世界ではなかった。血に腐り、死に囚われ、悲鳴に貫かれた『組織』という世界とは、格段に違う世界。そこは、戦争の無い国だった。

柚子は幸せを見つけれられると思った。戦いのない世界で、平和を保つその世界で、柚子は幸せを見つけれられると思った。

『みゆう、何て広い世界なのでしょう？』

世界は誰も拒まない。ただ、意地悪だ。たった、1人の少女。何

も知らない少女に、重い重い足かせを繋いだ。少女はその重みを背負い生きてきた。どんなに重くても、どんなに苦しくても。それが、普通だと思っていたから。

『…あ、あの何かな？お兄さんに何か用かな？』

世界は意地悪だ。でも、それでも、世界は平等だ。少女は、柚子は出逢った。『組織』から逃げて、逃げて、逃げた先で、出逢ったのだ。それは、突然に、いや、まるで決まっていたかのように。

「くしゅん！！……みゅ？」

「うい、ぶぶつです。柚子の鼻から水が出てますよ？笑えるです。爆笑です。て、こらっ、鼻水付けたままで近づいて来ないで下さい。わ、わわ！？ひゃー、鼻水が服に付いたですうー！？」

「こらこら、柚子は鼻水を柊につけない。柊も、あまり柚子をからかうな。仲良くしなさい。お兄さん、二人が仲良くしてくれないと悲しいぞ？」

ここに、柚子という少女がいる。彼女には家族がいた。

「ずずず、まみゅう。にい、サンタさんは私の…所にも来る？」

「もちろんさ。サンタは良い子の所に来るんだよ？柚子は良い子だから、きつと来るよ。…ほら、鼻かんで、鼻水がまだ出てるから…」

クリスマスと一緒に過ごしてくれる家族。初めて出来た、大切な人達。かけがえのない、宝物。柚子が探していた、宝物。

「はい、はい。ケーキ出来たよー。あとは、明日のパーティーでお披露目するだけよー？柊に柚子ちゃん、楽しみにしててねえ？お姉ちゃん、頑張っちゃった！！」

幸せは、ここにある。世界がどんなに重く辛い足かせを自分に付けようとも。私の幸せはここにあるのだ。明日は、クリスマス・イブ。家族でパーティーをする日。とても、楽しみだ。柚子は、自分の目の前の女性を見る。

「ん？どうしたの、柚子ちゃん？あ、わかった、明日のクリスマスパーティーまで待てないんでしょ？」

そして、自分とは反対のソファアの左奥に座っている少女を見る。

「うい？柚子、どうしました？何をまじまじと私の顔を見ているのですか？」

そして、自分の左横。べったりと柚子が自分の体を押し付けている、1人の男性を見上げる。

「どうしたんだい？お兄さんの顔に何か付いてるかい？ん？どうしたんだい、いきなり、ニッコリ笑っちゃって？」

柚子は思う。家の暖かな雰囲気と、心地よい空間に彼女は思う。
私の幸せは、ここにあったのだ。と…。

第三十六話：幸せを求めた少女のクリスマス（後書き）

こんにちは。

いや、なんと申しますか。サンタ編は本編と切り離して考えてたのですが、かなり重要な話を書きすぎました。すいません、とりあえず、サンタ編も本編って事で…（笑）

さて、第三十六話目です。柚子の話です。彼女の今昔の話。何やら、『crown』とは別の組織の存在が確認されました。まあ、とりあえず、柚子の正体、柚子がいた組織の詳細。それは、お決まりの『追々、話が進むに連れて』で誤魔化しておきます（笑）

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

サンタ編、もうすぐ佳境！！クリスマス・イブと次の日のクリスマスに次話と次次話を掲載予定。：有言実行が出来ない、私なのですが（笑）頑張って、書きますのでよろしく願います。

第三十七話：空海家のクリスマス・パーティー

クリスマス・イブだぜ、バツキャロオ！？俺はクリスマスツリーに飾り付けをする。キンキラの装飾品と電飾がツリーを彩る。最後にはツリーの頭に星を付けて出来上がり。

「うむ、上出来だな」

俺は一般家庭にはやや大きめのツリーを見て、満足げに微笑む。

「夏樹さあ、パーティー前にツリーを飾り付けて…。前もってやって置けば良かったじゃん？」

そんな俺の横で太郎がクリスマスパーティーのご馳走を片手に持ちながらツリーの飾り付けの遅さに何やら意見を言う。

「我が家では、皆で飾り付けっるのが主流なのだ。そうすると、集まるパーティー前が飾り付けに丁度良い」

俺はそんな太郎の意見に反論をする。今日は、クリスマス・イブ。我が空海家では、クリスマス・イブにクリスマスパーティーをする。なので、イブの今日はクリスマスパーティーだ。家の中にはパーティーに呼んだ友人達や家族である妹達が楽しげにクリスマスを祝っていた。

「うい、ちっこい悪魔……」

「んだよ、空海、まだ言ってんのか？しょうがねえだろう、ああいうのは直ぐ消えちまうってのが、映画やドラマでもセオリーだぜ？きつと、何かの精霊にでもなったんじゃねえの？」

テレビ前のソファーでは、柊と近所の子供・市ヶ谷甘夏が何やらメルヘンな話をしている。

「おー、ほっほっほっ！我がローズアリアのケーキよ、有り難く頂戴致しなさい！？」

「うっわぁー！！スツゲエ、美味しいよ？なにコレ！？最高に美味しいよ、この…、桜子ちゃんの作ったクリスマスケーキー！！」

「て、ちよつとおおおつ！？そつちい！？確かに、桜子ちゃんの作ったケーキ、美味しいけど。…まあ！？何かしら、隠し味がされてるわぁ？きゃああ！？ちよ、桜子ちゃん！？貴女、私のお店で働かない！？」

「えっ！？いや、でも私…。し、素人料理ですから。む、無理ですよー、ローズアリアのケーキには敵いませんよー」

豪華に料理が並べられているダイニングでは、よし子と太郎が桜子の作ったケーキについて語っている。よし子は、桜子のケーキがかなり気に入ったらしく、執拗に桜子をローズアリアで働かないかと誘っていた。

「みゆ、もぐもぐ…みゆんぐ。…もぐ、もぐもぐもぐ、みゆ」

「こらこら、柚子。君は、ちゃんと一個ずつ食べないか？はしたな

いぞ？ほら、頬っぺたにお弁当をくつつけて…」

そう言い、凜は柚子の頬っぺたについている、ケーキの生クリームをひよいと指で拭い、それを口に運ぶ。まるで、仲の良い親子みたいだ。

「わっはっはっはっはっはっはっ！！飲めや歌えや、今日はクリスマスじゃあ、清この夜じゃあー！！」

そう言い、桜台大間市の南側に位置する教会。聖アマント教会の老神父・真鍋雲外は酒を一升ビンごと口に運ぶ。なかなか酒豪なパワフルジジイである。

「……で、違う！！何でだ？何で、アマント教会の雲外ジジイが家にいる！？テメエは呼んでねえぞ！？」

「まあ、良いではないか、夏樹よ。いたいけな老人がクリスマスに一人は寂しいじやろう？わしもパーチーに交せてくれや…」

「うい、おじじは私が呼びました。すいません、でも、パーティーは沢山いた方が楽しいです？…駄目ですか？」

そう言い、柊は上目遣いで俺を見てくる。

「だ、駄目じゃないさあー…」

俺は、柊のあの上目遣いに弱い。いや、マジで。マジで可愛いだから、あの上目遣いはっ！！

「だあーはっはっはっはっ！！飲みまくれえー、高橋、飲みまくるんだあー。空海のお金で飲む酒はマジで格別だあああっ！！」

「ちょ、黒田先輩！？まだ、始まったばかりなのにもう酔ってるんですか？て、わあああっ！？な、何をズボン脱いでるんですかああーっ！？」

『ぎやははー、俺のは、大砲だー』と訳の分からない事を叫び走り回る酔っ払い、もとい、黒田さん。それを、高橋君が『まずいで

すよー、ここには小さな子達もいるんですよー！？黒田先輩ーい』
と黒田さんを追い回していた。

「うふふ、ふん。なーべーわー、お肉からー。特・特・特上お肉だよー。美味しい、高い、お肉からー」

「日陰よお、肉ばかり入れてないで、ちつとは野菜も入れてくれねえか？俺は、白菜が食いてえんだがよおー？」

鍋が置いてあるテーブルでは、何やら肉ばかりを鍋に丁寧に放つてる日陰と、野菜が食べたいらしく、日陰の隙を付いて鍋に野菜を入れようとしているヤクザ顔の上司・松居警部がいた。

「…なんちゅうか、乗り遅れた気分だ」

パーティーが始まって二時間が経過した。子供達はさすがに騒ぎすぎたのか眠そうだ。

「う…い。ねむ…ね…むです…」

「ふあああ、確かにねみい…」

「ふみゆう…ふみゆう…ふみゆう…」

「ふあつ、柚子ちゃん、こんな所で寝ちゃったら風邪引くよ？さあ、部屋で寝ようね。柊も甘夏君も部屋に行くわよー…ふあああつ」

桜子の言葉に子供達は二階の寝室へと向かっていく。うむ、さすが桜子だ。自分も眠いはずなのに一生懸命に皆の世話をしてるよ。…本当に良い子だよなあ。

「うりやああつ！！夏樹いー、おまあ、どこを見てるらあ？私はここらぞあー！？」

突然の大音量の大声と、かなり強い衝撃。痛てえ、と俺はそのばにうずくまる。後頭部、いきなり、後ろから何か固い物で後頭部を叩かれた。クソッ、誰だこんな無茶苦茶な事をするのは？馬鹿太郎

か？オカマよし子か？ナルシスト黒田かつ！？

「てえーなあああっ！？いきなり、何をしゃがんだっ！？テメエ、おふざけにも限度つても、ん、が…、はっ！？」

あまりの痛みに心底頭にきた俺は、ガバツと立ち上がって後ろの犯人に怒鳴った。怒鳴ったのだが、最後の部分は言えてなかった。それもそのはずだ。何と俺の後頭部を強打した犯人は…

「り、凜さん？…えっと、何故にビールビンでわたくしめ後頭部を強打されたのでしょうか？」

そう、あろう事か俺の後頭部を強打したのは、凜だったのだ。いつも冷静沈着で、頭も良く。とても強く、教養と知性に溢れる女性。それが、凜だ。氷川凜のはずだ。

だが、いま俺の目の前にいる彼女にはそのどれも当てはまらない。いや、とても強いって所は当てはまるかも。めっちゃ、叩かれた後頭部が痛え…。

「うにやああああつ！！夏樹は、私の心配を何だと思ってるのらあああ！？おみや、おまあ、お前はいつもいつも私の知らない所で無茶をしてえー」

何やら、凜の目が据わってらっしゃるんだけど……。うわっ？ な、何だ、凜の奴、酒くせえー！？

[illegible]

な、ななな、何だこの展開は！？えっ、え、えええ！？うわっ、ちよっ、凜が抱きついて……はわわわっ！？やべえ、やべえよ。体が密着して、凜の凜の至る所が俺の体に当たって。うひゃっ！？ちよ、ち、ちよ、胸！！胸がめちゃくちや当たってますですよおーっ！？

「（うわ、ちよ、よし子、見てみなよ。凄い事になってるよ？）」

「凜は素直じゃない娘だからねえ。お酒の力を借りて、やっつて所かしら？さあ、どうするのかしら、夏樹の奴？まさか、逃げわ

しないわよねえ」

ぐわあああっ！？テメエら、何をテーブルの影に隠れてヒソヒソと話をしとるかつ！？まさか、これはお前達の仕業じゃねえだろうなあああーっ！？

「にやつきいい！？どこを見てりゆのらあああっ！？ちゃんと、わたりを見ないと、わたりを見ないと…うえゝん。にやつきの馬鹿あーっ、にやつきの馬鹿あーっ！？うわあああん！？…ひつく、ひつく、ふああああん！？」

「ひやあああ、泣くな！！泣くなよ、お前。て、抱きつくのはもつと駄目だあああああっ！！」

やべえ、やべえぞ。これは、人生で最大のピンチかもしれん…。

「うっと、凜さん？ほら、あの、えっと。…くっ、あのな、泣くなよ。困るよ。お前に泣かれると…。お前に泣かれると、俺が困るんだよ…」

「ひつく、ひつく…どうして？」

「えっ？」

「どうして、私に泣かれると、夏樹が困るの？…どして？」

「いや、そのだな…」

くあああつ、やべえぞ？勢いでとんでもない事を言ってしまったぞ？どして？どうしてだと？そんなの…そんなの決まってるじゃねえかつ！？

「（ふわわ）、これは佳境に入って来ましたねえ。これは告白するのでしょうか？夏樹は、いつも閉ざしていた心を解放するのでしょうか？どうなんですかねえ、解説のよし子さん！？）」

「（んん）、どうなんでしょうねえ、太郎さん？夏樹はあれで中々に奥手ですからねえ。分からないわあ。…でもねえ、夏樹さーん。ここで、ちゃんと答えないと貴方は男じゃないわあ。ここは男らしく、ちゃんと凛の思いに答えないと駄目よ？）」

くわゝっ、好き勝手に言いやがってえゝ!!...くっ、そ。.....
わあった、分かったよ。答えるよ、答えれば良いんだろ?そうだよ、
そうなんだよ、俺は、俺は...

「俺は、凜!!お前の事がっ!!」

「くゝ...くゝ...くゝ...むにゃむにゃ...」

.....はっ!?

第三十七話：空海家のクリスマス・パーティー（後書き）

こんにちは。

とりあえず、宣言通りに掲載。散々、引っ張ってきたクリスマスパーティーのお話。

第三十七話目。今まで出てきたキャラクター達（一部を除く）がパーティーに参加です。何やら愉快的なパーティーになっていますね。さて、最後の部分。凜と夏樹の何やら不穏な空気。一体、どうなる事やら…。

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

今日はクリスマス・イブ。皆様にとって良いクリスマスでありますように…。

第三十八話：夏樹サンタ苦労す！？

あわてん坊のサンタクロース、クリスマス前にやって来てく、と。

俺はクリスマスの街中でよく見掛ける人物特有の赤い服を着る。
クリスマス前では、なくクリスマスだ。今は夜の12時を回っている。さあて、ここからがクリスマス最大のイベントだぜっ！！

「真っ赤なおっはなのく、トナカイ太郎さんはあく、いっつも皆のく、人く気者くつと。あははははは、空海家の風習ていつ見ても面白くよねえ？」

俺がバカデカイ白い包みを担いでいると、太郎はトナカイの格好をし笑う。

空海家の風習。それは、空海家の親父・空海玄治つつみげんじが我が可愛い妹達の為に考案した。

いわば、妹達を喜ばせる為のイベントである。誕生日は勿論の事、遠足や授業参観、節分、七夕、海の日、紅葉、クリスマス、正月…。ことあるイベントにて、我が空海の大人は子ども達の為に最大の力を持つて最高の事をしなければならぬ。それが、空海家の風習。まあ、ただ単に親父が妹達を楽しませてやりたいとやっていた事なのだ。

そして、今回のイベントはクリスマス。パーティーは、先ほど終了した。次は、俺、空海夏樹にとって最大のイベント。妹達の部屋にサンタクロースとしてプレゼントを枕元に置いてくるイベントだ！！

「よし、行くぜえ…」

このサンタクロース作戦は、実に難解だ。なぜなら、サンタクロースは煙突から入ってくる。そう、そのサンタ方式でいくと、俺は自分の家に侵入しなければならぬのだ。無論、正面の玄関からではなく。裏手の庭から…。

「あははは、コレッて1歩間違えれば警察に捕まっちゃうねえ」

確かに。はたから見れば、この光景は異様であらう。いくら、サンタの格好をしようとして、間違はなくそれは空き巣か何かに見える事は必至だ。

「だが、ここは俺の家だ。何をしようが他人様には関係のないこと。それに、警察は俺だ!!」

俺はそう言い、無駄に広い庭を走る。庭の景観は非常に綺麗だ。冬の為に彩る花々は少ないが無駄な雑草類は除去され、山茶花やサルビア等が咲き、綺麗にガーデニングされ、春を迎えるための用意が出来ている庭だ。

「さて、太郎よ。ここからが問題だ」

俺は家のベランダにあるウッドデッキに片足をかけて二階に視線を向ける。

「さて…突入だ!!」

俺は背中にプレゼント袋を背負って手すりづたいに上へと登る。高さは、ざっと3〜4メートル。何処かの高層ビルの高さよりはマシ、か…。俺は柵の部屋のベランダに体を乗り上げ、そんな事を考える。

「ピッ、ターゲット、ロック。任務リョウカイ。対人データロード。照合、確認中、確認、ターゲット・空海夏樹。ミッション開始」

「……………」

「……………ゾニーのアイコンボ？」

いや、それはどうか？確かに、人型ひとがたのロボットといえば、ゾニーのアイコンボだけだ。こいつは完璧過ぎる。ゾニーのそれを上回っている。

人型のロボット。柊の部屋のベランダにいた物だ。俺と太郎はお互いに顔を見合い、再び人型のロボットの方に視線を向ける。

「いや、アイコンボだよ。だって、二足歩行してるよ？あのメタリックボディで…。歩く度にガシャン、ガシャンで機械音もして…。うわっ！？」

「いや、太郎。違うってそれは絶対違うって。いや、拳銃とか、ガトリングに見えるけど、まさか、本物なんて事はあ…。」

「アタック!!」

機械音と共に銃撃音。ダララララララララッと弾丸が俺の体の横を通って行く。ガシャン!!ズカン!!バキン!!ベランダが破壊されていく。弾丸は本物。という事は銃とガトリングも本物!!?

「ちっ、太郎!!外に飛べっ!!こいつ、本気で殺しにきてやがるっ!!」

ベランダから勢いをつけて飛び出す。カガンと体に強い衝撃。そう易々と映画の様にカッコいい着地とはいかないものだ。体全体で地面を感じる。至る所がずきずきと痛む。

「ターゲット、確認…アタック!!」

「うおおおおっ!!?」

ゾニーのアインボもどきが俺にガトリングガンを向ける。絶対的

絶命…。マズイツ！？ウィーンとガトリングが回り出す。そして、

パシュン…

「……ん、んん？」

弾丸が飛び出して来ない。一体これは？弾丸の代わりに飛び出してきた物。それは、旗だ。その旗には何やら文字が書かれている。俺はソロリとその文字の書かれた旗を見る。

「…ドッキリ大成功？」

何じゃそらっ？何が何だって何だ？訳が分からない。意味が分からない。確か、俺が桜子、柊、柚子と妹達の枕元にプレゼント置いてくるイベントのはず…。断じてドッキリではない。

「おーっほっほっほ！！来たわね、夏樹サンタクロース」

深夜の空海家・庭にオカマな高笑いが響く。

「だあーれがオカマか！？まあ、良いわ、どうかしら？その、ロボット。我が音薔薇財閥が技術の随意を決して作り上げた、介護用ロボットよー！！」

介護用ロボットオツ！？こいつがあつ！？んな、バカなああつ！？

「んな事より、どういうつもりだ、よし子？ドッキリだあ？一体、何がしたいんだよ、お前は！？」

高笑いの正体は音薔薇財閥・社長、音薔薇よし子だ。こいつは、なにやら全身アミタイツという気持ち悪い格好をしている。

「そんな事で…。まあ、良いわ。何がしたいですって？うふふふつ、当然！？貴方の邪魔よ、夏樹！！その貴方が持っている妹達へのプレゼント、私が貰うー！！」

何考えてんだあああつ！？馬鹿か？いきなり、何を言つとるんだ、こいつは！？

「という訳で、介護用ロボット・ガリレイ！！夏樹を倒しなさい」

「任務再登録、リョウカイ。ターゲット・ロック、アタック！！」

よし子の命令に反応した音薔薇財閥のロボット・ガリレイはガトリングガンを再びこちらに向ける。

「ちっ、ふざけんな。このプレゼントは妹達のだ。どりゃああっ！！」

ガギーンとガリレイのガトリングガンを蹴り上げる。かなりの重量だ。しかし、そんな事は関係ない。妹達のプレゼントを枕元におく。それを、完遂する事が今の俺の任務だから。

ガチャン！！

「はっ！？」

奇妙な音が俺とガリレイの下から聞こえる。俺はソロロと足下を見る。ギザギザの刃。輪っかにそのギザギザの刃があり、その輪っかはガリレイの足を見事に挟んでいる。

「こ、こいつは、虎とかを捕まえる時に使う罠じゃ?」

「あ、馬鹿ガリレイ!! アンタが罠に引っ掛かってどうするのよ。それで、夏樹を足止めするはずだったのに……」

ほほう、コイツで俺の足止めをねえ。虎をも仕止める罠でねえ。

あは、あははは……

「よし子おおつ、馬鹿か己はあーっ!?! 何が足止めだ!?! これじゃ、足止め所か、足が無くなるわ、ボケエツ!!」

ああ、涙が、涙が流れる。何で、何で俺の周りにはこんな奴らしかいなんだ? 太郎とか、マジで何を考えてんのか分かんないし……ん、太郎は何処だ?

俺はキョロキョロと辺りを見渡す。しかし、いくら探せど太郎はいない。

「あのトナカイ、逃げやがったなあ……」

もはや、涙どころか鼻水さえ、出てきやしねえ。訳の分からん友人よ。大事な所で逃げやがった友人よ。

「お前ら何か大嫌いだああーん！！」

俺は大声で叫ぶ。ありつたけの不満をぶちまける様に！！

「ピピッ、ターゲット・ロック、アタッ……」

「うるせえい、デク人形があつ！？馬鹿やろ、馬鹿やろ、馬鹿ばかり！！」

「ピッピッ、ダメージ増加。制御不能。ターゲット・消失。付加付加付加付加付加：ブレイカー・アウト。機体ガリレイ、制御不能。回線遮断：グッドラック」

俺はガリレイを破壊する。そして、プレゼント袋を背負い、二階へと上がる。涙なんか、涙なんか、出てないもん！断じて、鼻水なんか出てないもん！！うにやにやにやにやにやにやーっ！！

「あらら、ガリレイがやられちゃった……」

「まあ、良いんじゃない？これで分かったでしょ、よし子？」

「太郎……。そうね、貴方の推測……。当たってるわ。夏樹、右側の目が
見えてない。……まっ、とりあえず、データは取れたから良しとする
わ。太郎、私、帰るわね」

桜子は幼い頃から暗闇を怖がった。眠る時に電気を消すと、尋常ではない程に叫び、泣き、喚く。この娘のトラウマ。一体、何が彼女にあったのか…。桜子の部屋は小さな電球が明かりを灯していた。まるで、暗闇から彼女を守るように…。

「うにゃ…。にゃ？にゃにゃ？」

まずいな。何かさっきのよし子との戦闘で声が『にゃ』とかしか出せなくなった！？まあ、さして問題は有るまい。さて、桜子のプレゼントだが、確かオーディオ・プレーヤー…名前はアイ、アイ…アイ何だったか？

まあ、良い音楽が聞けると良いな桜子。

柊は本当に寂しがりやな娘だ。1人でいる事を何よりも嫌う。そのくせ、1人で何もかもを背負い込んで、1人になってしまふ。そんな、君がお兄ちゃんは、とても心配だ。でも、大丈夫だよ。桜子がいる、柚子がいる、凜も太郎もよし子も……。だから、俺が居なくても大丈夫だよ。

「ギギイ」

「にゃ!？」

何だろう、今の声は？てか、声か今の？……。ん、部屋には何もないな。何なんだ、今の？ん、人形？悪魔の人形か？こんなちっこい悪魔の人形なんて柊、持ってたかな？

……まあ、良いか。さて、柊のプレゼントはと……。お決まりだが、クマの人形だ。前から欲しがっていたからな、この人形。

……最近のアニメグッズって高いのな。

柚子か……。まだ、逢って間もない妹。少し常識はずれな娘。コロッケを15個も平らげ、その手には似つかわしくない銃を持っている少女。彼女が一体何者なのか。分かりはしない。しかし、そんな事は関係ない。この娘は誰が何と言おうと、俺の妹だ。

ん、しかし、この娘は何が欲しいのか……。とりあえず、柊とお揃いのクマの人形を用意しておいた。気に入ってくれると嬉しいんだが……。

しかし、マジで高いのな、今どきのアニメグッズって……。

「にゃ、うにゃん」

「君は何を言いたいのかな？…ん、しかし、何だこの頭痛は？いたたた、やめ、やめて、痛い痛い…」

ん、まずいな。最後の仕上げとして凜にプレゼントをと思って凜の寝ている部屋に来たのだが、凜は酒の飲み過ぎによる頭痛の為に深夜にも関わらず起きていた。

「いたたた。とにかく、何だって君は私が寝ている部屋に忍び込んできたのかな？」

滅茶苦茶、睨んでくる凜。

かなりマズイ状況である。

別に他意はなく、本当にプレゼントを枕元に置きにきただけなのだが…。しかし、本当にマズイ状況だな。弁解しようにも今俺は『うにゃ』とかしか喋れない訳で。はっ、待てよ。このまま弁解しなかったら、俺に変態の称号が！？

マズイ！？いやいやいや、諸君が考えている以上にマズイ状況だ。てか、パーティーでの事を凜が覚えてるとしたら？……………うわっ、今スゲー、マズイ未来が見えた！？凜は空手有段者だ、ああ、マズ

イよマズイよ、本当にマズイよ！？

「……君は本当に何を考えて私が寝ている……。私が寝て、私が……寝て」

ん、何だろう。急に凜の顔が真っ赤に。あら、視線を外された？
凜がうつ向いて、表情が見えない。ま、まさか、あまりにも怒り過ぎて、顔が真っ赤に！？

「君……私が寝ている所にやってきたという事は……だな。その、つまり、あの……」

凜らしくない歯切れの悪い会話だな。何だろう、怒ってはない？
ん、凜が顔を上げたぞ？

「君、その、コレはつまり、夜這いか！？」

夜這い？……て、あれか？男が好きな女に思いを伝える為、もしくは、性的欲求をぶつける強行行為……の夜這い？誰が？誰を？

…ええと、この場合、男は俺で女は…

「うに、うにや…。うにやあああああ！？」

「えっ？ちよっ、君！？何処へ？こら、そっちは窓だぞ！？あっ！？」

あまりにも、予想外の事態に、この日、二度目となる二階からの紐なしバンジーをした、俺なのだった。

第三十八話：夏樹サンタ苦労す！？（後書き）

こんにちは。

すいません。約束の期日を守れませんでした。色々な事をしている内にこんな時間に…。本当に申し訳ございませんでした。

とりあえず、第三十八話目です。夏樹サンタ苦労すです。ギャグです。くだらないですか？すいません、笑ってやって下さい（笑）

ロボットが登場。何やらSF要素が膨れ上がってきました。そして、よし子と太郎の思惑。彼らは一体何をしようとしているのか…。

そして、夏樹の何やら思いつめた感じ。一体何を考えているのか。コメディのサンタ編なのに、謎だらけの話に。

さらに、気になる夏樹と凜の関係。バトルアクションラブコメディですから、ラブがないとね。…ラブかな？

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。そして、すいませんでした。

空海家の事情。前にも書いたのですが、より詳しい話を…もうそろそろ作らないと（笑）

第三十九話：枕元のプレゼントは…

「写真？」

夏樹は片手に湯飲みを持ち、柊の差し出す写真を手に取る。

「うい、そです。サンタさんのくれたプレゼントは、クマのぬいぐるみにこの写真でした。何故でしょう？」

クリスマスの朝。昨日、夏樹はサンタクロスとして、桜子や柊、柚子の枕元にプレゼントを置くというイベントをおこなった。しかし、写真？柊にあげたクリスマスプレゼントはクマのぬいぐるみ一体だけのはず。枕元に写真などは置いてきていない。お茶を口に含ませながら、ちらりと夏樹は写真を見る。

「！？」

途端、夏樹の表情が一変する。

「うい、写真の人物は3人です。この大柄の男は父ですよ？つまり、この赤ん坊は小さい頃の兄です？」

柊は、夏樹の表情が変わった事に気付いていないのか話を続ける。

「…うい、つまり、赤ん坊の兄を抱いている女性は……母ですか？」

夏樹は額に汗が滲むのを感じる。確かに、大柄の男は若き日の父親であり、赤ん坊は幼い頃の自分である。そして、幼き自分を優しく抱き、写真に向かい微笑みかける女性。その女性は、空海家の母であつた。

「母、なのです？やっぱり、そうなのですね？…うい、私が欲しい物を知っているのは柚子と…」

柊が何か言っているが夏樹の耳には入ってこない。彼の額に汗が滲む。何故なら、柊が持つ写真。それは、この世に存在しないはずの写真なのだからだ。

空海^{うつみ} 真里愛^{まりあ}。それが、写真の女性。空海家の母の名前である。彼女は夏樹が17歳の時、持病が悪化してこの世を去った。そして、その時に空海家の父・空海玄治が彼女の写る写真を捨てたのだ。その為の理由。その為に空海家には母の写真が存在しない理由なのだ。

しかし、何故だ。何故に柊がその存在しないはずの写真を持って
いるのか。…サンタクロース。そんな事が夏樹の脳裏に過った。し
かし、彼は馬鹿馬鹿しいと否定する。しかし、それでは何故に柊が
この写真を…？

「母です。これが、私の母なんです」

柊はベッドに寝そべり、飽くる事なく空海家の母の写る写真を眺
めていた。とても、嬉しかった。知りたかった母、見たかった母。

柊はえへと笑い、写真を胸に抱く。そして、思う。

「サンタクロースに弟子入り出来たのです。きっと、そして、私にプレゼントを…」

柊はそんな独り言を言い、公園で出逢った小さな悪魔の事を思いだす。

「うい、忘れません。決して忘れません、貴方のしてくれた素晴らしいプレゼント…。はやく、愛を配れるサンタに成れるといいですね」

柊は微笑む。優しく、嬉しく、そして、切なく。少女の不思議な出来事。ありえないほど珍妙で奇妙な出会い。その出会いは楽しかった。嬉しかった。だから、彼女は微笑む。別れはツライ。しかし、彼女は泣かない。

「だってクリスマスは、また、やって来るですからね…」

第三十九話：枕元のプレゼントは…（後書き）

こんにちは。

ちよっと、話的に文字が少ないですね。その為、どこか物足りないし、分かり辛い。すいません。

とりあえず、第三十九話目。第三十八目の補足的話。その後、的な話ですが意外と重要？しかし、良い感じに文章が浮かばず、少量で断念。その為、内容もスカスカです。

ええい、とりあえず次に行きましょう！！

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

空海家、母。実は登場済み。しかし、夏樹同様に名前は時間差。
流石、親子？（笑）

第四十話：最果ての敵

神などいない。世界は闇だ。全てが醜い。

「では、修羅よ、お願いしますね」

そこは崖の上にある古城。その一室に2人の男がいた。1人は白いマントを羽織り、左腰に剣をさしている男だ。

「……了解した」

もう1人の男は顔に傷があり、短髪を元々なのか、ぐわっと上げると上げる中国風の男だ。

「気を抜くなよ、修羅。何せこの男は魔神の息子だからな。甘くみていると……喰われるぞ!!」

修羅^{しゅら}。それが、中国風の男の名前だ。白い肌に黒い道着を纏い、その筋肉は鋼の鎧の様に分厚い。

鋼の龍狼。修羅の異名である。限りなく『力』を求める男、修羅。これまでこの男は、3メートルを越す熊や人を主食としてきた樹海の虎などを倒してきた。だが、修羅にとってそれは、おままごにも満たない事だった。熊など額の急所ごと頭蓋骨を碎けば事足り、虎など牙を折り爪を剥ぎ取ればただの肉の塊。

修羅は退屈だった。己を鍛え、鍛えたその先に最強の二文字が待っていると思っていた。しかし、現実が違う。『力』を手に入れた所で比べる者がなければ、それは意味を成さない。

修羅という男は分からなかった。最強とは何だ。武芸を極めればそれが最強か？いや、いくら筋力を鍛えた所で銃一丁にも敵うまい。では、野生の猛獣たちか？いや、人の貪欲の前には猛獣とて、金か食料へと変えられる。ならば、人が最強か…。しかし、武芸が出来ようとやはり銃一丁には敵うまい。修羅は分からなかった。最強とは何で、何を倒せば自分が最強になるのかを…。

世界を周り、最強と名をはべらす武術家達を倒してきた。しかし、修羅の圧倒的な『力』の前には彼らも赤児同然であった。修羅は貪欲に探し倒してきた。しかし、倒せば倒すほどに彼の心にある思い

が過った。

『最強とは、こんなものか…？』

遂に修羅は国をも敵として戦い始めた。空を掻ききりながら飛ぶ戦闘機、陸を轟々と走る戦車、海を堂々と進む戦艦。地雷爆雷打撃銃撃斬撃毒殺絞殺。だが、最後に立っていた者は修羅という1人の男だった。

やがて、彼はとある組織の存在を知る。その組織が作る『力』。彼はその『力』に興味を抱く。最強を作る『力』。

「しかし、その組織さえも破壊する『力』があった。俺はソレと戦いたい。そして、知りたい。最強とは、何だ！？」

その2日後、修羅という男が極東の島国に密入国をする。最強の二文字を求めて…。

第四十話：最果ての敵（後書き）

こんにちは。

第二幕・シリアス編始動…。

第四十話目。組織が動き始めました。手始めに送られる刺客・修羅^{ゆら}。えっ？中国風なのに、何故に日本読みですか？別段、意味はありません。そう、私が中国語を知らないからです！！（笑）

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

極東の島国。その国の名は……！？……。

第四十一話：女神・ピシユヌ

太陽は東。まだ、陽射しは全ての大地に降り注いでいない。薄暗い闇を残す、街の一角。その一角の一軒の家。さらに、その家の一室。

「…やい、ガルシュ。どう言う事だ、コレは!？」

まだ、幼さの残る一人の少女。彼女の手にはドロドロの物体が乗った皿がある。彼女はその皿を目の前を歩く男に差し向ける。

「いや、玉子焼きですが？」

「コレでは玉子焼きではなく、玉子やけくそだっ!！」

少女はそう言い、手の中にある皿を男に投げつける。びしゃっと男にドロドロの物体、もとい、玉子焼きが当たる。

「あちゃああああっ！？あちゃあちゃあちゃあちゃあちゃあっ！？」

あまりの熱さにドタツバタツと男は転げ廻る。そこへ、ガラツと和室の襖ふすまが開き一人の女性が二人のいるダイニングキッチンへと入ってきた。

「…何をしているのですか、ガルシュ？」

その女性は聖女のように美しかった。流れる様な金色いんげいの髪。透き通る様に白い肌。彼女から、彼女の周りからは身震いがする程の神々しいオーラが放ち出されている。

「あちち、ちょっと聞いて下さいよ、ビシュ又様々。ランが私に熱々の玉子焼きを投げつけたんです！う！う！全く、誰の為に朝ごはんを作っているの？」

「うつさい、ガルシュ！ちがうね、全体ちがうね！アレは玉子焼きじゃないね、悪意ある玉子黒焦げだったね！コンチクショ、てめえ、目玉焼きは半熟に出来ない、玉子焼きは黒焦げのドロドロッ！一体、次は何だコラッ！？」

ぐぎゃあつとランと言う少女は両手を挙げ、バタリと机にうつ伏す。

「…はあ、あなた達は全く」

聖女ビシュヌは、二人を見て深いため息をつく。全く、この二人は昔からこうだ。月影がいた時には、彼が二人を止めていたが…。

「あ、ビシュヌ様？何か朝食でも作りましょうか？」

ガルシュは、ニコリと笑いフライパンをくるくると回す。

「うわっ、危なっ！？てめえ、フライパンをくるくる回すなっ、フライパンについたドロドロ玉子焼きの残骸が飛ぶだろっ！？」

「ぎゃあ、ド、ドロップキックは無いんじゃないかなっ、ラン？てか、いま玉子焼きって認めた！？」

ガルシュにその小さな体でもついきり飛び上がりドロップキックを喰らわせる、ラン。ガルシュはドロップキックが当たった腰辺りをサスサスとさする。成人男性として、まあまあに体の大きいガルシュ。彼にとって、ミニサイズのランの攻撃はさほどダメージにならない。だが、だからこそ、ランの攻撃は厳しい。彼女のガルシュに対してのツッコミ攻撃は常に力一杯なのだ。

「ラン、女の子がそんな、はしたない事をしてはいけません」

ビシュ又は、片膝を付き立ち上がるランを注意する。『はい』とランは返事をするのだが、その目はガルシュを睨み付けている。

「はあ、ガルシュ。良ければ料理の手解きをして差し上げますが…？」

ビシュ又は片手をオデコに当て、ガルシュに問い掛ける。ビシュ又は、こう見えて料理が上手である。主に作るのは洋食であるが、とある事情により和食も少なからず作れるのだ。

「えええええっ！！？」

そう叫びを上げたのは、ランだ。『何で何で！？ビシュ又様がガルシュに料理を教えるなんて…』と頭をフルフルと横に振り、叫ぶ。

「ビシュ又様、ビシュ又様、ビシュ又様っ！！ガルシュに教えるくらいなら、私に教えて下さい！！私、お料理大好きです！！」

「（……ウソばかり、ランはいつも面倒くさあって言って、私に料理を押し付けているくせに…）」

ランのお料理大好き発言に、ぼそりとツツコミを入れるガルシュ。

「うつさい、ガルシュ！！てか、私が料理を押し付けて、何年も料理をしてきたくせにドロドロの玉子焼きしか作れない男に言われたくない！！私が習った方が百倍良いもん！！下手くそガルシュ！！創作意欲0料理っいつ！！」

「下手！？ヒドッ！？創作意欲は有りますよぉっ！？」

はあ、全くこの二人ときたら……。ビシュ又はため息をつき、再びギヤアギヤアと騒ぎ始める二人の間に割って入るのだった。

太陽は東。いまだ、陽射しは全ての大地に降り注いではない。その陽射しを浴びぬ大地。そこは東洋の更に東の島国。その大地に世界の維持を司る神・ビシュ又は居た。

第四十一話：女神・ビシュヌ（後書き）

こんにちは。

キャラが増えて大変です。上手に使わなくては…。

第四十一話目。ビシュヌ、覚えているでしょうか？いつか崖の上の古城にて、話し合っていた組織『crown』の幹部3人の内の1人。何やら楽しい雰囲気ですが、彼女達は間違いなく夏樹を殺しにきています。そして、前話の刺客・修羅。夏樹は一体どうなってしまうのでしょうか…。

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

組織が本格的に動き出した今、月影は…！！？

第四十二話・元旦にコタツに電話…

「うい、あけましておめでとうございます」

「みゆ、あけましておめでとうございます？」

「明けましておめでとうございます」

正月である。元旦である。明けましておめでとうございますである。と、いう訳で俺達は我が家の和室で元旦のお祝いをしている最中である。

「はい、明けましておめでとうございます」

コタツの温度をMAXにして置かないと寒い元旦の朝。俺達は元旦の挨拶を済ませる。その後、コタツに入り、おせち料理を食べる。もちろん、餅も忘れない。我が空海家では、雑煮ではなくお汁粉を食べるのだがこれがまた中々に美味しいのだ。朝一から食べるお汁粉…。いや、これが正月と感じるのは我が家だけかもしれんがね。

「コラア、僕を忘れるなあーっ！！何で起こしてくれないんだよ！
？おはようございます、あけましておめでとうございます、今年も
よろしくお願い致しますってんだあーっ！！」

「ああ、明けましておめでとうございます、太郎。……ちなみに、
俺はお前を起こしに行ったぞ。後、五分と言って一時間以上も起き
て来なかったのはお前だ」

何やら元旦から叫び声をあげる太郎。不満爆発な顔をしているが、
俺は怒られるような事をしていない。むしろ、怒るべきは元旦の朝
に寝坊したお前では太郎？

「さて、我が可愛い妹達よ。お楽しみイベントだ。んと、お年玉の
袋はっ」と……」

俺は未だプンスカと怒る太郎を放っておいてコタツから足を出さ
ない様にちよつと遠くに置いたお年玉を取る。

「ええと、まずは柊からな。去年は学校が中々良い成績だったな。

しかし、その反面、1人で突っ走って問題を起こす事が多々あったね。君は皆をもっと頼りなさい。皆、良い人ばかりだよ?」

「うい、すいません」

「いやいや、責めてる訳じゃないから。と、はい、お年玉」

俺はコタツの右側に入っている柵にネコ柄のお年玉袋を渡す。中身は…

「うん、次は柚子ね。んと、柚子は今年初めて家の正月を迎える訳だけでも…て、聞いている? コラ、お餅と格闘しない!! もう、じゃ、怪我や病気をしないように、君も柵同様に皆に頼ること…。はい、お年玉。…まだ、食べるんだね」

『ふみゆ?』つと柚子は俺の方を見るが、やはり、ひたすらにお汁粉を食べるのだった。

「さて、桜子。あら、桜子? ほら、早く、早く。よし、えっと、桜子はもっと自分の事を優先しなさい。君はずっと家の事をしているいつも自分の事を後回しにする事が多い…。だから、たまには家の

事を忘れて…ね？」

桜子は本当によく働いてくれる。本当なら友達と遊びたい盛りなのに彼女はいつも俺や妹達の為に働いている。家事は交代制の空海家に置いて、上手く回っているのはひとえに桜子のフォローの賜物。彼女がいなければ、空海家はこんな暖かな家にはならなかっただろう。だから、だからこそ、俺は桜子に樂をして貰いたい。彼女の人生は彼女自身の物だから…。

「ん、何だその手は太郎？」

「え、お年…玉？」

肩までコタツに入っている太郎。彼は俺に片手を差し出す。

「お前、今年でいくつだ？」

「みつちゅ…」

「ダアホ！！俺と同じ年だろうが！！」

俺はバブバブと奇妙な声をあげる太郎にすかさずチョップを喰らわせるのだった。

昼過ぎに雪がチラホラと降り始めた。積もる程ではないが強く吹雪く。ビュービューと冷たい風が服をなびかせる。

いや、全く寒い。本当なら今頃はくだらない正月番組を見て、コタツでゴロゴロとしているはずなのに……。はずなのに俺はいま外にいる。何故、外にいるかというと話は昼前の時間に戻るのだが。

『兄、電話です』

『ん、ありがとう。たく、新年早々に電話をしてるのは何処の誰だ？…もしもし、夏樹ですけど…！！…！！…！！…！！…！！…！！…！！』

と、いう訳だ。あはははははっ、分からない？だよな、分かる訳がない。まあ、つまり、俺が何故に寒空の下にいるかというと先程の回想の通り電話で呼び出されたからだ。

相手は…。まあ、旧友？1日友達、みたいな？そんな奴だ。

「オー、ソナ誤解デース！！ワタシ、痴漢トチガウ。貴女ノ魅力ガワタシヲ惹キ付ケタノデエース！！」

……気になるか？あの片言外人？いや、俺もさっきから気にはなっていたのだが。ただ、関わったら面倒な事になる気がする。……うん、とりあえず、この場は離れ…

「オオ、助ケテ。貴方カラ、ワタシガ痴漢チガウ言ッテクダサ〜イ！？」

うおっ、やばっ！！向こうから話しかけて来やがった！？どわっ、何か相手の女性も俺の方に注目してる！？いやいやいや、そんな俺みたいな部外者に仲裁しろってか？いやいやいや、別に俺じゃなくても他に『どうしたんですか？』みたいな感じで警察官が仲裁を…あつ、俺！？仲裁者、俺！？俺が警察じゃん！？

「ん、あゝ…うん。偶然ではあるが俺は警察官な訳で…。痴漢を捕まえるのも仕事な訳で…」

はあ、我ながら歯切れの悪い。しかし、仲裁しない訳にもいかないし…。

「いきなりなんです！！この外国人、道を聞くフリをしていきなり私のお尻を触って来たんです！！」

なるほど、典型的な痴漢だな。

「オオ、チガウチガウ。ワタシ本当道聞キタッタデエス。タダ、女性ノ貴女ノ魅力ガワタシノ手ヲ惑ワセタデエス」

耳障りだな、この片言…。

「て、触ってんじゃん！？アンタ、彼女のお尻触ってんじゃんか！
？十分に痴漢だよアンタ！！」

片言の外国人は『オオ』と大袈裟に倒れ込む。何か可哀想だが、
犯罪だしな…。

「痴漢デスカ？犯罪ナノデスネ？スイマセン、ソナツモリデハナ
カッタノデス。……申シ訳ナイデス、貴女ノ様ナ女性ヲ傷ツケテシ
マッタナンテ。アア、ナンテ事ナノデショウ。神ヨ、コノ愚カナワ
タクシメニ罰ヲ、オ与エ下サイ。イクラ、コノ国デ、コンナニモ美
シイ女神ニ出会ッタカラトイツテ、犯罪ヲ犯シテシマウナンテ…。
アア、女神ヨ、オ許シヲ…」

くわっ！？マジ、耳障り！！聞いてると何か気分が滅入ってしま
うぞ、コレは…？

「えっと、あの私…。もう、いいですから…。さ、さよなら…！」

「オオ、女神！！ワタシヲ許シテクレルトイウノデスネ！？」

いや、多分、片言が耳障りだったんだな…。

女性は苦笑いと共に人込みの中に消えていく。残った外国人は両手を合わせ消えて行った女性の方を見ている。何か分らんが、解決したようだ。ふう、面倒な事にならず良かった。

「はあ、助かった。まさか、痴漢と呼ばれようとは…。今度は上手くやらなければ」

……はっ？

「しかし、片言の外国人作戦は女性に易々と話しかけれるがナンパには不向きだな。しょうがない、今度はちゃんとルックスで勝負しよう、うん…」

コイツ、わざとか？片言しか喋れない訳じゃなくて片言しか喋らなかったのか！？ナンパをする為に…？

「うん、ときに夏樹君。この国の女性はどんなタイプの男性が好みかな？…映画俳優的な感じはどう？」

コイツは全然、反省してない！？てか、ナンパ外人！？イタリアの人かよ！？たく、なあにが映画俳優的な感じはどう、夏樹く…

「…お前、何で俺の名前を知っている！？」

「知っているとも、空海玄治と空海マリアの息子。右眼の事だっつね、空海夏樹君…？」

男は片手を目元に当て、ニコリと笑う。不敵に不気味にニコリと笑う。

「…まさか、クラウン？」

ニユー・エントランスビルを襲った、テロ犯罪組織『crown』

。月影が言っていた。組織は世界に戦争を仕掛けると。その為に邪魔になる俺を、俺の家族を排除すると…。あの時はまだ組織の人間がいた。まさか、そいつらが俺に気付いて!?

「君の心が見えるね。クラウンか…。ニュー・エントランスビルで組織を退けたというのは本当だったか…」

「っ、だったら何だ!?俺を殺しにきたか…」

俺は男から間合いをとる。得体の知れない外国の男。警戒しない訳にはいかない。

「いや、チガウチガーウ」

うえっ!?何だ、いきなり!?戦う覚悟をしていた俺は、男の言葉にズルツと滑る。

「電話を受けたでしょう?僕は君の友達の友達さ」

「信じ…ろ、と？」

「別にいいさ。僕は君にコレを届けにきたただだからね」

そう言い男は俺に紙を渡す。これは、船のチケット！？

「君の思っている通り、組織ク라운は君を殺すため動いている。君はこの国に居ては良くない。家族の為にね。その為のチケットさ…」

…逃げろってのか？全てを捨てて！？

「ふふ、迷いは君を殺すよ？まあ、死なない程度に考えるがいいよ。船が出るのはまだまだ先の話だ。事が、終わってからさ…」

また、逃げなければならぬのか？あの時と同じに？今度は全てを捨てて？チケットは、俺の分1枚…

「（じゃ、僕は行くよ。……夏樹、死ぬなよ）」

いつの間にか外人の男は消えていた。後を追う事も出来た。しかし、俺は街を歩く人混みを見て呆けている事しか出来ない。クラウンと言う組織とはそれほどに強大なのだろうか？昔の友は俺の窮地を知り、文字通り助け船を用意した。しかし、彼が言うには『代金は俺の全て』だと言うのだ。…呆けずにはいられない。

「俺は、どうすりゃいい！？どうすりゃいいんだ！！……なあ、親父？」

第四十二話：元旦にコタツに電話…（後書き）

こんにちは。

明けましておめでとございます。今年もよろしくお願い致します。

さて、第四十二話目です。元旦でコタツでおせちでお年玉な訳で…。幸せな家族団らんは、1つの電話によって終わりを告げます。夏樹を呼び出した旧友。ここでは、名前も姿も出ません。ただ、代わりに出てきた外人の男。組織『crown』とは無関係ではなさそう…。

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

…二幕のシリアス編は戦いまでの話が長い！？

第四十三話：迷い迷う男のお見合い！？

また、世界は邪魔をする。逃げてても逃げてても、世界は俺を追いかけてくる。

放っておいてくれ！！俺は幸せを見つけたんだ。ここを離れたくない。壊さないでくれ！！俺の居場所を！！

ニユー・エントランスビルを爆破しようとしたテロ犯罪組織『crown』。俺は自分の世界を守るために戦った。何がいけない！？むしろ、己の自己満足で他人の幸せを破壊しようとする『crown』の方が悪いんじゃないのか！？なのに何故、世界は俺を不幸にしようとする？俺がお前に何をした！？

「ああ、ちゃんとしろよ？何たって相手は上流階級のお嬢様なんだからなあ」

そう言うのは俺の仕事場の上司である。ヤクザ顔負けのヤクザ顔

で、俺の親父とは昔ながらの友人である松居警部。両親が死んでからはことある事に親代わりに助けてくれたお方。そして、先日『おい、お見合いするぞ。はっ？じゃなくてお見合いだ。お前も良い年頃だ、嫁さんの一人も貰った方が良い』と言い強引にお見合いの席を設けたのだ。

「いや、松居警部？俺は別に結婚は…」

「ああああん！！？」

怖えよ、あんたマジで怖えよ……！！松居警部は俺の主義主張は一切聞かずカズカと奥の『鳳凰の間』へと向かう。

松居警部は、ガラリと襖ふすまを開ける。

「あ、どうも松居さん」

「あ、どうも。本日はお日柄も良く…」

松居警部と『鳳凰の間』に先にいた眼鏡の中年男性はお見合いでお決まりの言葉を交わし合う。全く、良い気なもんだ。俺はそんな二人を見てため息をつく。そして、チラリと眼鏡の中年男性の横にいる女性に目をやる。

「お久しぶりですね、307号室の空海さん？」

「あっ……」

そこに居たのは、太郎の病院に居た看護師の女性であつた。

……気まずい。

お見合いが進み、お決まりの『では、後はお若い二人だけで……』というシステムにてこの部屋には、俺と看護師の女性だけである。

相良^{さがら} 夕凧^{ゆづな}さん、彼女の本名である。彼女の父親は有名な国会議員である。確か、外務次官だった気がする。…本当に上流階級のお嬢様じゃないですか、松居警部!?

「ふふふつ、空海さんたら私をお食事に誘って下さったのに一度もお食事しませんでしたね?」

「あ、いやあ…すいません」

「気まずい。何か気まずい。食事に誘ったかな俺?…誘ったかも? ああ、何だこのドキドキ?」

綺麗な黒髪を結び、うつすらと赤みが差した頬。ぱっちりとした目であるが、何処かやんわりとした眼差しである。十人が十人、彼女を見て美しいと言うであろう。

「妹さん達は、お元気ですか?」

「えっ? あつ、はい。元気一杯で困ってましゅ…」

恥ずっ！！言葉を囁じまった！！

「うふふふ」

しかし、相良さんにはっこりと笑う。

「私、びつくりしましたわ。親に嫌々お見合いをさせられたんですけど…。まさか、空海さんがお相手だなんて」

びつくりしたのは俺も同じ。まさか、こんな偶然があるなんて…。

俺達のいる『鳳凰の間』はゆつくりと時間が流れる。最初に出せれた一杯のお茶はもう一滴さえ残っていない。緊張なのか俺の喉はカラカラだ。いい加減、足も痺れて、もはや感覚がない。

「あの、とりあえず、庭を散歩で…なっ！？」

俺があまりの気まずさに相良さんを庭へと連れだそうとした、その時。いきなり、俺達のいる『鳳凰の間』の襖が破られ、1人の男が飛んできた。

「いい加減にしろよ、貴様！？俺達はお前らとは違う！！貴様のその貪欲さが俺達の村を壊したんだ！！俺達は絶対に許さねえ！！」

『鳳凰の間』の前の廊下に数人の男達。全員が全員、頭に白いハチマキをしている。とある者は背中に『許すまじ兼元』という旗を背負っていた。

「ん、兼元？」

俺はもう一度飛んで来た男を見る。

「ひっひっ、たず、助けてくれ！！私だつて、私だつて知らなかったんだあ！！？まさか、作った工場から有毒排水やガスが出てくるなんてえっっ！！？」

間違いない、あの兼元だ。国会議員・兼元^{かねもと} 厚志^{あつし}。ニュー・エン
トランスビル事件で月影達組織『crown』に暗殺されようとし
た男。狙われた理由は武器や麻薬の密売。その為に戦争国の戦争が
激化、戦争国出身の月影達の怒りを買ったのだ…。

そしてまた、この男は誰かの怒りを買ったのかっ!?

「…行きましょう、相良さん」

「えっ?でも…」

俺は相良さんを無理に外へと連れ出す。助けないのかだって?あ
あ、もちろん、助けない。俺はいま刑事ではない、一般人としてお
見合いをしてるんだ。この男を助ける義理も義務も無い!!

「兼元、死ねえ!!」

「なっ!?!」

俺と相良さんは『鳳凰の間』をあとにしようとした。しかし、その瞬間、白ハチマキの集団の1人が持つていたクワで兼元に殴りかかる。いくら何でもそんな農具で頭を叩かれた日には怪我だけでは済まない！？

「くっそがあああつ！！」

体が動いてしまう。頭では助ける価値も値打ちも無い男だという事が分かっているのに。俺は兼元を助けるべくクワで襲い掛かる白ハチマキの男の前に立ちはだかってしまう。

「貴様、邪魔するのか！？そいつは俺達の村を2度と住めないようにした男なんだぞ！？部外者が邪魔をするなっ！！」

「知らないね！！コイツが悪で最低な事は分かっている。だけど、だけど、アンタそいつで兼元を殴ったんじゃ、ここは血の海だ…。そんな事も分らないのかよ、アンタ達はあ！？」

「それが何だ！？そいつは死んで当然なんだ！！爺さん婆さん、親父やおふくろ、子ども達だって汚染の影響で体を悪くしてんだ！！終いには村には住めないなんて…。殺さなきゃ、気が済まねえ！！」

…そこを、どけええーっ!!」

「ちい、わからず屋がああっ!!」

クワの鉄の刃を向け殴りかかってくる白ハチマキの男。ブワツ、と鋭い刃先が俺の顔を横切る。ぐさりと畳にクワが刺さり、男はもう一度クワを振りかぶる。

「俺達は、もうコレしかないんだあああっ!!」

悲痛の叫びと共に男はおもいつきりにクワを振り下ろす。しかし、俺はそのスピードに合わせて右手でクワを受け止めた。戦い慣れをしてしまった自分に呆れてしまう。相手が素人だからといって物凄い速さのクワを受け止めるなんて…。

「な、何なんだよお前!? 何で邪魔すんだよおおーっ!?」

自分の攻撃をあつさりと受け止められた白八チマキの男はグタリと地面にひれ伏す。悔しいのだろう。自分の居場所を奪った男が、それを気付かずに見ていた自分が、そして仕返しも出来ない己の無力さが…。

「お、おお、良くやった青年。は、はははは、褒めてつかわずぞ。私は国会議員の兼元だ。コイツらは金の為に村を売ったというのに逆恨みをして、私を襲ってきたのだ。全く、これだから無教養のサル共は…」

「うるせえよ、クソ俗物が！！俺はアンタを助けた訳じゃねえ。彼らを助けたたんだ。お前みたいなクソでも、殺したとなれば警察沙汰だ。少なくとも4、5年は喰らうからな。そんなの彼らが不憫だ……覚えておけよ、俺はアンタを、絶対に、逮捕してやる！！アンタの悪事を洗いざらい調べて、二度と世間に出て来れないようにしてやる！！首を洗って待ってるんだな……」

俺はキョトンと俺の顔を見ている兼元を睨む。これだけの惨事になっても未だ己の腐った心に気付かない兼元。この国が偽りの平和だと言った月影の言葉を思いだしてしまう。これが、俺の居場所？ここが俺の幸せを育む場所か！？……嫌になる！！

「ほら、アンタら、いくら怪我をさせてないていったって暴力をふるったのは事実。一緒に警察署に来てもらうよ…」

はあ、終わったな。松居警部には悪いけど、コレではお見合いはおじやんだ…。何せ、父親と同じ国会議員をボロくそに言ってお見合いだというのに仕事してるんだもの…幻滅しない訳がない。まあ、コレで良かったんだよな。俺はいま結婚してる場合なんかじゃないしな。

「相良さん、そういう訳ですので…それじゃ…！」

俺は『crown』との決着を着けなきゃならない。…結婚なんてしてる暇なんて有りはしないんだ。

そんな訳でその日のお見合いは中止になってしまった。後日、謝罪をと思っていたのだが…。俺は『crown』との戦いで全てを失ってしまうことになってしまう。

第四十三話：迷い迷う男のお見合い！？（後書き）

こんにちは。

ええ、遅くなりましたが、感想・評価でのセキさんのリクエスト
を実行してみました。第十七話（かな？）の看護師の女性、名前を
付けて再登場！……え？もつと別のシチュエーションの方が良か
ったのでは？いえ、結構重要な役割ですよ彼女？まあ、とりあえず、
セキさんお待たせしました。彼女、また暫く出てきません（笑）が、
また出します！！

さて、第四十三話目です。お見合いです。ニュー・エントランス
ビル事件後、様子のおかしい夏樹を見て、ヤクザ顔上司・松居警部
が気をきかせたといった感じ。ただ、またまた再登場の兼元によつ
て全てがおじゃん（失敗）。しかも、何やら最後は暗い感じに…。

とりあえず、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

月影さん、アンタ今どこにいるのよ！？

第四十四話：激動の流れにて、再び

紙が切れた。夏樹はトイレの便座に腰をかけ、トイレットペーパーという紙を巻いていた芯を凝視する。

「最悪だ。何がつて、トイレットペーパーの予備を買い忘れた事に気付きながら買いに行かなかった事が最悪だ」

ぬうはー、と夏樹は深くため息をつく。トイレに置いた消臭剤がム力つく程に匂ってくる。これは、消臭した後の為の香りなのか、それとも香りで臭いを誤魔化す為の香りなのか…。どちらにせよ、トイレットペーパーは、無い…。

「あむう、まずいなあ。ちょっと、この状況はまずい。早く、紙を確保しないと。…ふむ、まあ、外から持ってきて貰うなら……太郎辺りがベストですな」

こんな姿、可愛い妹達に見せられない。だって、情けないから。もし、妹達にこの醜態を知られてもしたら自分は終わる。夏樹は最

悪の展開は避けたいなあ」とトイレのドアを少しずつ開いていく。

「あ、にい発見!」

一瞬にして夏樹が石化し、崩れさったのは言うまでもない。

「くっは、ペーパー高えなあ。ガソリンもレギュラーで150円前後だし。やあ、不況というか、資源不足というか…」

商店街の裏通り。夏樹は舗装もままだらない古びた道路をせつせと歩く。両手には重そうな買い物かごが3つとトイレトペーパー2袋を持っている。

「なんつか、うちには大飯食らい1人と育ち盛りが3人もいらつしやるから…。はあ、赤字はもう良いっちゅうねん」

空海家の財政は困難を極めていた。ただでさえ、貧乏な感じなのに最近やたらと出費が多い。これでは、いつか底をつきかねない。お金が欲しい。どこかに落ちてないものか。

「うつらっ、てめえ何だ!？」

夏樹が本気で現金の落とし物を探していると何やら怒鳴り声が聞こえた。

「兄さんさあ、若者だからってなめて貰っちゃこまるよ? ああん! ? 刺しちゃうよ、ナイフを刺しちゃうよ、僕う! ?」

数人の若者が1人の男性を囲んでいる。ガラの悪い服装や顔の若者達。彼らは言葉を発する度に『ああん! ?』とか『んだあ! ?』とか『調子こいてんじゃねえぞ』とか知性の欠片も無い言葉しか出てきていない。まあ、実に嘆かわしい事だが、この国ではよく見かける光景である。

1人では生活さえ出来ない子供が数人のグループを作ったとたんに辺りに牙を剥く。いや、最近では1人の場合でさえ誰彼構わず突っ掛かっていく。死語で言えば、キレた若者達だ。全く、この国の若者はどうなっているのやら…。夏樹は、面倒な所に出くわしてしまつた物だため息をつく。

「……1に貴様達は武術家か？2に貴様達は脳内の変換手術を受けたのか？最後に貴様達は自分の愚なる行いを分かっているのか？」

「ああっ！？てめえ、なに言つてやが、うぎゃあああつ！？」

夏樹は目を疑つてしまう。1人の少年が中国風の男の肩に触れた瞬間、少年の顔面が鮮血に染まる。ズシャツと地面に倒れた少年、ピクピクと痙攣をしているがそれ以上は動かない。あまりにも無惨な状態だ。

「うおお？な、何だよお前！？うわ、く、くるな、来るなあああ！？」

「やめ、やめて、お願い……ぎゃあああああつ！！」

「あああ…あああ、ガァァァァァァ！？」

まるで、地獄だ。中国風の男は逃げ惑う少年たちを次々に襲う。
ある少年は両腕を無惨に真つ二つに折られ、ある少年は真つ青な顔
で仕切りにぶつぶつと何かを唱え、ある少年はもはや、言う言葉が
みつからない。

「笑止、弱い。弱い者が無闇に牙を見せる、己の力量も知らずに、
だからお前たちは死ぬ。さらばだ、己の生き方も分からぬ無知なる
者たちよ…」

そう言い、中国風の男が少年たちの首を掴む。ゴキイ、と鈍い音。
それは、少年たちの首の骨が…

「ふざけんな、少年たちを離せ！！いくらなんでも、やりすぎだ！
！」

夏樹は次の少年の息ある内に助けるべく中国風の男に殴りかかる。

「…ほう、強き者か？……ふむ、1に問う、貴様、空海夏樹だな！？」

「それが…何だよ？早く少年から手を離しやがれ！！」

「……ふん、弱者に用はない」

中国風の男は両手にある少年二人をぞんざいに投げ捨てる。

「クククク、私は運が良いな。さっそく、ターゲットと接触出来たとはな…。我が名は、鋼の龍狼・修羅！！貴様が退けた組織、クラウンの使者といった所だ」

ニユー・エントランスビル事件にて死闘を演じた、テロ犯罪組織

『crown』

ついに来た。夏樹は目の前の男を見据え、深く息を吸う。そして、覚悟していた時が来たのか…と拳に力を入れる。

（くそつたれが。今か、今なのか！？ああ、覚悟はしていた、そうさ、していたさー！……しかし、しかしな、早い、早すぎやしないか！？もう少し、もう少し待っていてくれたって……）

夏樹は深く深く息を吐く。あの事件、ニュー・エントランスビル事件後、夏樹は不安であった。病院で目を覚ました時、夏樹は思ってしまった。

『生き残ってしまった』

入院中の夜、ベッドで眠りにつく時。その度に考えてしまっていた。

『もし、いま、組織に狙われているとしたら…』

幸せの時間。妹達といつもの日常を過ごしている時だって心の底

では思っていた。

『この幸せが組織によって、今、破壊されてしまったら…』

迷っていた。恐れていた。心が苦しく、締め付けられていた。

『クラウンは、いつ俺を殺しに来るんだ!？』

『もし、殺しに来るのなら、妹達はどうなる?』

『もう、いつその事…死んでしまおうか?』

来る日も来る日も来る日も、毎日考えた。奴らはいつ俺を殺しに来るんだ、奴らは何処まで俺の存在を知っている?俺の家族の事は知っているのか?友人知人の事は?俺の住んでいる街の事は?

夏樹は怖かった。自分の戦いで誰かが傷付くのが。夏樹は怖かった。自分の家族が傷付いてしまうのが。夏樹は怖かった。自分の世

界が何者かによって破壊されてしまう事が…。

「空海夏樹、さあ、私と…戦え!!」

時代が流れる。激動に、人を飲み込みながら…。世界がその姿を現す。悪しき、醜き、憎悪を纏い。

人類は制裁を受ける。己から出た邪なる心によって、見て見ぬふりをしてしまった代償として。もはや、止まる事の無い車輪に乗って『システム』が動き出す。

空海夏樹という存在。それは、その中で最も近い場所にいるようであった。世界はその全てを持って彼を巻き込んでいく。偶然に必然に、運命に宿命に、彼が望もうとも望まずとも…。

世界が壊れ始める、空海夏樹という存在を巻き込みながら…。戦いは今、第二幕の舞台へと移行する。

第四十四話：激動の流れにて、再び（後書き）

こんにちは。

はい、始まりました。第二幕での戦い。夏樹が全てを失ってしま
う（？）戦いの幕開けです。ここから、小説『心から』の分岐点と
しての見せ場を作っていくつもりです。なので、これから、脳内を
電気アンマにかけて続きを書いて行きたいと思います。…いや、電
気アンマは嘘ですけど（笑）

とりあえず、頑張ります！！皆様、応援のほどを…んっ、よろ
しくお願い致します！！

では、第四十四話目です。暫く、コメディが減るので少な目です
がコメディから入りました。そして、いきなりのシリアス編。組織
から送られてきた男・修羅、夏樹と対面。いきなり、無関係の少年
たちを無惨にも拳殺…。冷酷の中にもプライドがあり、弱者にも手
を抜かず厳しい男。夏樹はこの、虎や熊、国をも殺す武術家とどう
戦っていくのか？

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

しかし、何やら、自分で自分に余計なプレッシャーをかけてしま

った感じ……？

第四十五話：弱者

まるで、岩をぶつけられたみたいだ。

夏樹は、ついに自分を殺しに現れたテロ犯罪組織『crown』の使者と名乗る男、修羅の拳を受け、ぐらついてしまう。

修羅の繰り出してくる攻撃の1つ1つが必殺の勢い。ガードをしたその奥からダメージが広がる。

（くそっ！？何だよ、この男の力は？パンチをガードする度に腕に感覚が無くなっていくじゃないか！？）

長袖のシャツを着ているため、外見では何ともないように見える夏樹の両腕。しかし、実際は修羅の異常な力による拳撃で真っ赤に腫れ上がっている。その為、両腕からは痛みの変わりにじんじんと熱が発せられていた。

「ふむ、中々に強い者よ…。私の拳は鍛え上げた鉄をも貫くというのに、貴様の両腕は全く貫くイメージが湧かない…。なんと、堅確な腕よな…」

修羅は、自分の拳を幾度も喰らったというのに、骨1つ折りはしない夏樹に驚愕の思いを露にする。鍛えに鍛え上げ己の拳は、どんなに強固な物も破壊出来ると信じていたというのに、と……。

（信じられん……。私の拳の方が痛みを感じているだ！？この男は、鉄をでも食しているというのか！？）

夏樹は修羅の拳の強さに驚き、修羅は夏樹のその強固なる体に驚愕する。お互いがお互いに畏怖の念を感じずにはいらなかった。

[illegible]

修羅から真つ直ぐに拳が飛んでくる。反応をした時には、すでにもう目の前。

「っがああああっ!!」

夏樹は修羅の弾丸のごとき拳撃を避ける。しかし、やはり弾丸。ギリギリにかすっただけだというのに、夏樹の頬は赤く染まる。

「ふっ、はっ!?!これをも避けるか。なんと俊敏な?では、これで…どうかっ!!」

下段、中段、上段!!修羅の三段蹴りが夏樹の足と腕にぶつかる。辛うじて上段の蹴りを避けたが、最初の下段と中段がまずかった。あまりの衝撃と痛みに夏樹の左足と腕が動かない。ビリビリとした痛みを残し全くの感覚が無いのだ。

(マズイぞ、マズイぞ、マズイマズイマズイ!!)

左足が動かない。その場から逃げる事が出来ない。夏樹は己の左足に必死に訴える。

（動け、次の攻撃が来るぞ！？動け、動け、動き、やがれっ！！）

必死にその場から逃げ離れようと左足を動かすが、夏樹の左足は全く言うことを聞かない。その間に修羅の凄まじき拳が夏樹を襲う。

「ふっはあああっ！！どうした、どうしたあ！！動きが鈍いぞ、空海夏樹い！？」

修羅の拳が刺さる。ゴスツとみぞおちに拳が当たった瞬間、夏樹の内臓という内臓が悲鳴を上げた。夏樹は何度も嗚咽を繰り返す。
『おええ』と胃からうす黄色の胃液が吐き出された。

「……貴様もか！？貴様も私と戦う相手では無かったというのか！？やっつと、やっつと己と同等に戦い合える相手を見つけたと思ったというのに……。貴様も他の弱者と同じだということのかっ！？」

修羅が叫びを上げる。最強を求めてこんな東洋のさらに東の島国にまで足を運んだというのに。そこにいた敵はやはり今までと同じ

弱者であつた。修羅は夏樹を睨み付ける。弱者を見下ろし、蔑むかのように。

「最後だ、空海夏樹。私は貴様を過大評価していたようだ。組織ク
ラウンを退けたというのは、偽りであつたか…。ふ、所詮、人は私
を越えられはしない。さらばだ、弱き夏樹よ！！」

両膝を着き、右手で腹を押さえる夏樹。その夏樹に修羅の凄まじ
き剛拳が振り落とされる。虎や熊をも殺す、修羅の一撃。

夏樹はそれを防ぐ事が出来なかった。

「…任務完了。弱者よ、安らかなる眠りを…」

夏樹の首筋に振り落とされた修羅の手刀。夏樹は動かない。倒れ
ることも、立ち上がることも、しない。夏樹は動かない。

「脳へと繋ぐ神経を切断した。じきに呼吸も出来なくなる。いや、もはや意識もないか……。そのまま、死に逝くがいい」

修羅は後ろへと体を向ける。この場所にもう目的はない。最強の二文字はこの場所にはなかった。そして、ブラフマーに言われた目的は遂行した。だから、修羅はその場を後にする。

ターゲット・空海夏樹：抹殺完了。

第四十五話：弱者（後書き）

こんにちは。

ちよつと、戦闘シーンが少ないですかね？まあ、技量的にしょうがないのかな？（笑）とりあえず、次のステップ的な話。

では、第四十五話目。つまり、次の話へのステップ的な話（笑）
修羅、強いんだけど…私の足りない技量のせいで陳腐な物に（悲）

夏樹が修羅に敗北をしてしまいました。なんか一瞬にして負けた感じ？…一応主人公なのに、やられキャラ？夏樹の生死については今回は直ぐに分かります。一応、主人公ですから（笑）

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

空海夏樹、とりあえず、やられたら倍返しが基本な男…。

第四十六話：混沌来たりて…

空気が透き通って心地の良い夜。ただ、風は冷たく、厚着をしておかないと風邪を引きそうだ。その心地の良い夜、空海家では兄・夏樹の行方が知れなくなつたと騒ぎが起こっていた。

兄である夏樹は、日用品が無くなつたと昼間に買い物へと出掛けたのだ。だが、それっきり夏樹は帰って来ない。最初は家族である妹達も怠け者の兄の事だどこかでくつろいでいるのだろうと心配をしていなかった。しかし、夜になり、晩御飯の時間になり、就寝の時間になつても帰って来ない夏樹。そうなると話が変わってくる。

桜子は兄の行方を探し、兄の友達で職場の同僚である氷川凜に連絡をする。

『居なくなつた？それは本当か！？帰って来ないのだな！？っ、また、アイツは何も言わないでっ！？』

どうやら、凜も兄の行方を知らないようで彼女は兄を探すために街中に出てみると言い電話を切った。

「兄は、まだ帰って来ないですか？どうしたのですか？何で帰って来ないですか？探しに行かないですか？ねえ…姉え、何か言っ下さいですう…」

「みゆ…」

空海家の次女はその瞳に涙を目一杯に溜め、姉である桜子に詰め寄る。しかし、桜子は何も話さない。ただ、じつと目を瞑り、両手を握りしめ祈っていた。

部屋ではテレビがピカピカと明かりを放っている。テレビのニュース。そのニュースではキャスターが何やら叫びをあげて報道をしている。

『皆さん、早く逃げて下さい！！先ほど、政府が緊急の会見を開き驚きの発表をしました。この国に、桜台大間市に原爆を積んだ船が衝突するんです！！皆さん、早く家族と荷物を持って出来るだけ遠くへ、逃げて下さい！！繰り返します、この桜台大間市に原爆船が衝突します！！皆さん、早く遠くへ避難して下さい！！』

国会議事堂、その豪華絢爛の一部屋。

「原爆船！？」

「ああ、クラウンという犯罪組織が我々に犯行声明をしてきた。8時間後に桜台大間市の港に原爆を積んだ船をぶつけると、な…」

緑のスーツを着たやせ形の男。アゴヒゲを剃る事をしない主義なのか、パリッとしたスーツに似つかわしくない程にヒゲが伸びている。

「クラウンだと！？あのエントランスビルの時のアイツらか！？」

黒ぶちの眼鏡の男が驚きと忌々しさを露にする。クソツと吸っていた煙草を灰皿に押し当てる。

「何が目的なのだね、彼らは…？」

と、奥の大きな椅子に腰かけていた小太りの男性が2人に話しかける。

名前を風間 かざま 成光 なりみつ と言い、この国の総理大臣という役職に就いている男である。

「はあ、それが目的は無いようなのです。これは制裁である。悪しき醜き者達よ、己の罪を特と悔やむがよい！！との事でした…」

緑スーツの男は総理を目の前にしてやや緊張気味なのか、額に汗をかきながら説明をする。

「ええと、この国の悪しき所業は知っている。他国への武器密売、

麻薬取引、人身売買、または臓器売買、その他諸々による斡旋の数々…。金を欲するあまりに人とは思えない邪なる行い、我々が貴様ら悪魔を罰する…と彼らの犯行声明には書いてあります」

残り8時間。8時間後、原爆を積んだ船が空海家の存在する桜台大間市に激突をする。この国会議事堂での話し合いの1時間後、組織『crown』の犯行声明は全世界のネットワークを使い、世界へと報道された。

世界が濁り、淀んでいく。世界が闇に引きずられていく。世界が、混沌へと引きずり込まれていくのだった。

第四十六話：混沌来たりて…（後書き）

こんにちは。

混沌来たりて。なんというか遂に、おおごと大事に？

第四十六話目。帰って来ない空海家の長男。寒空の下、一体どうなっているのやら…。さて、この国の政府機関が表に出てきました。不透明であつた空海家の住む、国組織。その姿が徐々に露に…。

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

『crown』という原爆船。もし、そんな物が国にぶつかれば、そこは…地獄絵図。

第四十七話：獅子咆哮す！！

「どういう事だ。組織『crown』の幹部、世界維持を司る神・ビシュヌはテレビ画面に映る、ニュースに思わず叫んでしまう。

『皆さん、早く逃げて下さい！！先ほど、政府が緊急の会見を開き驚きの発表をしました。この国に、桜台大間市に原爆を積んだ船が衝突するんです！！皆さん、早く家族と荷物を持って出来るだけ遠くへ、逃げて下さい！！繰り返します、この桜台大間市に原爆船が衝突します！！皆さん、早く遠くへ避難して下さい！！』

けたたましくテレビのニュースキャスターが叫ぶ。原爆船が桜台大間市に近づいていると…。ビシュヌは窓から外を見る。辺りはニュースを聞いてか人々が一斉に逃げ惑っていた。車にありつたものの荷物を詰め込み、靴を履き違えている事など構わず、子供が泣き叫ぼうが、人々は慌ててこの桜台大間市、この東の島国から逃げ出そうと必死であった。

（これは、この作戦は…。空海夏樹と制裁対象国であるこの国を一気に掃討する作戦。確か、シバが以前、提示した作戦のはず。しか

し、これは罪のない善な人々にまで危険が及ぶ、リスクが高い作戦だと月影が破棄したはずなのに…)

ビシュヌは混乱する。組織は一体何を考えているのだろうか？罪なき人々を傷つける事は『crown』という組織の思う所ではない。腐敗し逝く世界を変える為、腐敗した者達に制裁を加える為、そして、新しき世界を創成する為の組織。確かに、その業の為ならば邪魔となる者を暗殺する事もある。

しかし、しかしだ！？だからといって罪なき人々を巻き添えにする事はない。この作戦は異常である。もはや、これは制裁では無くなった。これでは、ただの大量殺人である。

(くっ、シバは何を考えている！？ブラフマーはこの事を知っているのか！？また、またこぼれ落ちる？私の思う人々が…)

世界を巻き込んでいく組織『crown』。しかし、その組織もまた荒波には逆らえず、変わっていく。世界を正す為の組織が壊れていく。

ビシュヌの思惑とは相反して、組織『crown』本来の存在意

義に反逆して、今、世界が混沌を極めつつあった。

「（ねえ、どうするの、ガルシュ！？）」

「（どうするも、こうするも…）」

そこは、街の裏通り。古びた店々が並んでいる。しかし、開いているのか閉まっているのか、営業しているかどうか怪しい店ばかりの裏通りである。

そこに、金髪とスーツを身に纏った長身の男。それに、同じくサラサラの金髪を後ろに結い上げ緑のパーカーにジーンズというボーイッシュな服装の少女が居た。2人は身を屈め、道の曲がり角から壁向こうの道路の様子を伺っている。

『さらばだ、弱き夏樹よ』

ガルシュとランの伺う壁向こうの道には、2人の男達がいる。その男達はこの平和な国で命を賭けた死闘を繰り広げていた。

『そのまま、死に逝くがいい…』

そして、決着が着く。勝ったのは中国風の男。ガルシュは知っていた。その死闘に勝利した中国風の男。

（鋼の龍狼・修羅。…ヤバいですよ、ヤバいですよ。ビシュヌ様の為にターゲットである空海夏樹を倒しに来たのに…。修羅と鉢合わせはヤバいですよ！?）

崖の上に建つ古城。三神と言われる組織の幹部達、ビシュヌ、シバ、ブラフマーの3人が集まる際に使われるサンスクリット城。ガルシュはそのサンスクリット城にて修羅に1度だけ会った事があった。

猛獣の様な瞳。頑丈で堅そうな筋肉。なにより、その存在感が恐ろしかった。どす黒く、まわりついてきそうなくらい濃い、闇。彼とスレ違った時、ガルシュは身も凍る様な悪寒に襲われた。その時のイメージが頭から離れる事はない。あの男、アレは異常だ。虎や熊を体1つで殺す修羅。ガルシュはぶるぶると身を震わせる。

「…聞けよ、ガルシュ？何を人を無視するんだ、この馬鹿足長野郎！？」

ガルシュは、ランの言葉にはっとする。ランは自分の言葉が無視された事が不満だったらしく、スニーカーを履いたその足でガシガシとガルシュの膝^{ひざ}辺りを蹴飛ばしている。

「て、痛い！？貴女は何故に私の足を蹴り、いつ、たああい！？モロッ、モロにランの爪先が私のヒザにクリティカルヒットんっ！？」

「ばっ、馬鹿！？聞こえちゃうだろ！？……ふう、良かった、中国男はどっかに行ったみたい」

どうやら、ガルシュが考え事をしていた間に修羅はその場から居なくなっていたようだった。ガルシュはゆっくりと壁向こうの道路を見る。

「ねえ、ガルシュ？あの人、死んでるのかな？…そりゃターゲットだけどさあ、殺す事はないんじゃないかな？話し合いすれば、分かり合えると思うのに…」

壁向こうの道路で修羅と戦い、全く動かなくなった男、ターゲット・空海夏樹。組織『crown』は、世界を創り変えるという孤高なる使命の為ならば、どんな事もする。邪魔な者がいるならば、その孤高なる使命の下に抹殺を決行する。だから、ランの言う話し合いという概念は『甘さ』だと組織の人間達が口を揃え言うだろう。

「ねえ、助けないの？」

ランは不安そうにガルシュの顔を見上げる。彼女は優しい。かつて1人、死を待っただけの存在だったラン。孤独で不安で息苦しくて悲しくて辛かっただろう。だからこそ、彼女は他人の不幸にとても敏感である。何百という数の殺し屋達で構成される組織『crown』には似つかわしくない程に。

「ラン、割りきって下さい。あの男は私達の敵です。ビシュ又様の敵なんです。殺さないといけないのです。修羅が殺したのなら、私達の任務も終わり。ビシュ又様と一緒にイレイサスに帰りましょう？」

「でも…。あの人、何も悪い事してないよ？ビシュ又様は、言ったよ？いくら、組織の使命でも罪の無い人々を傷つけるのは間違ってるって…？間違ってる…て？」

ランは瞳一杯に涙を溜め、今にも泣き出しそうな表情をする。それを見てガルシュは眉を八の字にして困り果てる。いくら、ランの頼みであろうと敵を助けるなどと。コレばかりはどうする事も出来ないのである。

と、ガルシュがランの言葉に困っているとザザザッ！という音が壁向こうの道から聞こえる。ガルシュは空海夏樹が意識を取り戻したのかと驚く。が、しかし、それはあり得ないとその考えを頭で打ち消す。修羅は『任務完了』と言った。猛獣をも必殺する男、修羅。つまり、彼が任務完了と言ったのならそれはターゲットの死を意味する。

ガルシュは再び、ゆっくりと壁向こうの道を見る。そこには、先ほどと同じく修羅の必殺の攻撃によって死を待つターゲット・空海夏樹が両膝を地面に着け微動だにしない姿があった。

しかし、先ほどとは確実に違う風景。暗視ゴーグルと拳銃。ミリタリーナイフやガチガチの軍用ライフル。他にも一般人が持っているには不自然過ぎる武器を装備した黒いミリタリー服を着た男達が複数、空海夏樹を囲んでいた。

「あれは、シバ様特設の先遣部隊？」

「先遣部隊！？」

ランはガルシュの言葉に先日組織の下っ端戦闘要員がしていた噂話を思い出す。

組織『crown』にて過激派とされる破壊の神・シバの部隊。その中で破壊神シバは世にも恐ろしい部隊を作った。噂ではその部隊の戦闘要員は組織のその莫大な科学力を使い、モンスター並みの力を持った人間との事だ。そして、彼らに組織があまりにも危険と考え封印した開発武器を与え、全てに置いて破壊の名を欲しいままにする部隊を造り出したというのだ。

「…ターゲット・空海夏樹、確認。…修羅はやはりとどめを刺さずか…」

「ふん、修羅め、ターゲットの死を確認せずに立ち去るとは…」

「いや、それほどに己の力に自信があるのだろっ」

「…このまま、放っておいてもターゲットの死は確實だが…」

「更なる確實たる死を、道端の石ほど邪魔なモノはない」

人数は5人。皆同じ黒いミリタリー服で身を覆っているが性格は個々に違うようだ。

「ふん、では任務を開始する。ターゲット・空海夏樹よ、神の名に置いて安らかなる死を受け入れよ…」

と、その中のリーダーらしき男がナイフを取り出す。見事に真っ黒く染まった刃である。

組織の造る殺人兵器の1つ、チタネス甲合金製ナイフ。黒ミリタリー服の男が持つナイフはそれと同じ種類であるうかとガルシュは考える。確かにガルシュの考える通り、黒ミリタリー服の持つナイフは鋼鉄をも切り裂くチタネス甲合金製ナイフと同じ種類である。しかし、その切れ味は比べ物にはならない。世界で最も固い鉱物であるダイヤモンド。何と黒ミリタリー服男のナイフはそのダイヤモンドをも貫くのだ。その為ついた名前が『ダイヤモンド・スラッシュ』。人の骨などいとも簡単に切断出来る代物であった。

そして、その斬刃が今まさに空海夏樹へと突き刺さろうとしていた。

「むん!!」

刃を持つ黒ミリタリー服男が掛け声と共にそれを振り下ろす!!

「だめええっ!!」

「なっ、ラン!？」

だが、その刃が夏樹に触れる前にランが彼の前へと飛び出した。

「やめて!お願い…」

ランは、死んでしまう者を目の前に飛び出してしまった。組織に出来損ないと烙印を押されてしまった自分の才能。

だが、それでも彼女は良いと言った。ビシュ又は必要としてくれ

た。だから、それを、自分の力をビシュヌの為に使うと誓った。ビシュヌの為に戦うと誓った。だが、ランは今死に逝く者を目の前にして飛び出してしまった。それが、大恩あるビシュヌの敵だとしても、ランは死に逝く者を見捨てる事が出来なかったのだ。

「ふん、部外者か…」

「なるほど、我ら、姿を見られた以上は、それを抹殺せねばならぬな」

「御意に…」

飛び出してしまったランを2人の黒ミリタリー服の男達が狙う。

「小娘とて容赦はせん」

「それが、我らの心得」

ガシッと1人がランの腕を掴み強引に近づける。『痛い』とランが叫ぶがもう1人の男がランのお腹を殴り飛ばす。殴り飛ばされたランはぐたりとなり動かなくなる。

「な、に、何をするのです。私達がビシュヌ様直属の部下だと知つての所業ですか!？」

ガルシュはぐたりとなつたランを助けるべく黒ミリタリー服の男達に立ち向かう。

「……知つていても、ガルシュ＝マキナー!？」

「な、ならば何故、ランを!？」『あの方』から話は聞いているのでしよう!？」

「聞いているとも、ガルシュ＝マキナー。だが、『あの方』は作戦の邪魔になる者の排除をも我らに命じられた。今、我らの存在を知られる訳にはいかない。この娘、始末するほか無い」

「馬鹿な!？」

ガルシュはギリリと犬歯を犬歯で噛み合わせる。作戦の為には親しき者を、ランをも失う事になるのか?ガルシュは言いようのないもどかしさに襲われる。

（私は、私は、私はっ…。俺は何をやっているんだっ！？）

「くはっ、それでは少女よ、安らかなる死をつ！」

「まっ、待て…」

ガルシュが叫びをあげようとするがナイフは止まらない。ランの
胸目掛け、漆黒の刃が突き刺さる

はずだった。その場にいた全ての者が想像をしていなかったであ
ろう。ランに突き刺さろうとする漆黒の刃。その刃を持つ破壊の神・
シバの造り出した戦闘要員である黒ミリタリー服の男達。誰もが目
の前の光景に自分たちの目を疑う。

「ひはっ！？ば、馬鹿な？てめえ、何で…？」

一瞬、暗闇に小さな光が鋭く光る。ドンツと重く低い音とバキインという高い音が響く。そして、ランを襲ったダイヤモンドをも貫くナイフがただの鉄の欠片となって地面に散らばる。刃を持っていた黒ミリタリーの男は口から血へドを吐き、倒れる。

「貴方……」

ランは目の前の人物に驚きの表情を隠せない。今しがた、修羅に攻撃を受け、瀕死の状態であったはずの男。修羅に死んだと言われたはずの男。その男の名前は、空海夏樹。

彼は立っていた。その動くはずのない体で、ランを襲う黒ミリタリー服の男を殴り飛ばしていた。ランを傷つけまいとダイヤモンドも貫くはずのナイフを素手で握りしめ。あまつさえ、その斬刃を砕き。襲われるランを助け出したのだ。

「殺られただと！？馬鹿な、ありえん！？我らは悪魔をもひれ伏す最強の戦士ぞ！？それが、それがこんな愚国の民に殺られるだとおっ！？」

「ば、化け物か！？」

体が熱い右目が疼く。声が聞こえる。頭の中で誰が自分に問い掛

けてくる。右目は見えているか！？お前の力を感じるか！？さあ、覚醒しろ。赴くままに、お前の感じるままに！！

「があああああああーっ！！！」

獣が吼える。夏樹が吼える。獅子咆哮！！ビギリと牙の様な犬歯が剥き出しになる。そして、右目。赤く紅く、真っ赤にその瞳が光る。暗闇の中、その瞳がぞっとするほどに妖しく光っている。

「く、我らが負ける訳がない！！ナーバ、トラリア、行くぞ！！」

黒ミリタリー服が3人。散開し、夏樹へと攻撃を仕掛ける。右側から1人。ナイフを持ち、夏樹の顔目掛け突き立ててくる。

「死ねえええい！！」

だが、その刃先は夏樹の薄皮一枚をも切り裂く事は出来ない。先に夏樹の右手が男の顔を掴み、そして、投げ放る。ドドンと男の体が地面に叩き付けられる。男の顔にはベコリと手形がついていた。まるで、プレス機で潰されたかのように男の頬骨は碎け散っていた

のだ。

「ふ、ふざけるな！？そんな、馬鹿な事があつてたまるか！！我らが負けるなどとおおおっ！！」

間髪入れずにすぐさま2人目が夏樹を襲う。男の手には拳銃が握られている。銃口が夏樹へと向けられ、ズドン！！と銃撃音が響く。

「どうだっ！？」

にやりと男は暗視ゴーグルを付けたマスクの下で笑う。しかし、次の瞬間、男の目の前には夏樹。

「馬鹿な！？弾丸を避けただとおおおっ！？」

夏樹が男の顔面を握り締めた拳で振り抜く。めきよめきよっという音と共に男は笑う事もなく宙を舞う。

「…ぐふあっ、しかし、まだ。我らの攻撃は、まだだっ!!」

「!？」

男のその言葉と共に、更なる爆音が夜の街中に鳴り響く。

「いくら、ナイフや弾丸を避ける事が出来ようと、これならどうだっ!？」

3人目の男が、夏樹へとゴツい軍用ライフルで直径1・5センチの弾丸を放つ!! ジュゴオオツとけたたましい音をたて弾丸が夏樹へと向かう。

「るあああああああーっ!!」

弾丸が着弾し、辺りに爆発音と煙が立ち込める。

「やったか？」

黒ミリタリー男は闇と煙で閉ざされた視界を凝らし敵である夏樹を見つめる。直撃だったはず。いくら、弾丸を避ける化け物だったとして直撃すれば…。

「ふっ、ふは、ふははははは…馬鹿な、あり得ん、お前は…お前は…」

黒ミリタリーの男は我が目を疑う。煙が晴れ、闇夜に視界を凝らして見付けた敵。己が放った組織でも危険とされるライフルで撃ち抜いたはずの敵。が、それもその男には効果がなかった。

音速をも越えるはずの弾丸を敵は、男は、空海夏樹はそれを両手で受け止めていた。衝突した瞬間、爆炎が夏樹を襲うが、何故か彼の体には焼け焦げ1つさえ付かない。それ所がその着ている服さえも燃えていない。

「お前は一体、何なんだ!？」

組織の力によって、人知をも越えた力を手に入れた黒ミリタリー服の男。だが、彼は驚く。まるで、神か悪魔のようなその光景を見て彼は驚いてしまう。

「我は、我らは、組織によってこの肉体を限界まで高めた超人間だぞ！？貴様が敗北をきした修羅など我らにとって赤子も同然なのだぞ！？なのに貴様は、貴様はあつ！？」

ズンと闇を切り裂き、夏樹の右手が男の顔を捉える。もはや、言葉を言うのも憚れる。夏樹の拳と男の体が触れた瞬間。男はまるで重トントラックにでも跳ねられたように吹っ飛んでいき、そのまま、覚める事のない深い眠りへと就くのだった。

「るああああああああああアアアアアアアッ！！」

月が映え、穏やかな風が頬を優しく撫でる。この夜は静かだ。先ほどの戦いがまるで嘘の様に…。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

そんな静かな夜空に獣の如き叫びがあがる！！夏樹は己の行動が抑えられない。熱く、熱く、体が燃えるようだ。夏樹は吼える。月夜に向かい、獣のように叫びをあげる。まるで、冷めることのない熱を放出するかのように。

獅子咆哮！！獣のように夏樹は吼える。止めることの出来ない自分の体。止むことのない欲求の衝動に駆られる己の心。静かな月夜に止むことない咆哮が、吼えあがる！！

第四十七話：獅子咆哮す！！（後書き）

こんにちは。

大分、書きました。これだけで結構、疲れてしまいました（笑）でも、実はまだまだ物語は序章！？更なる、混沌が夏樹達を待ち構えている…ような、感じになるはず！？（笑）

では、第四十七話目です。組織『crown』の崩壊？幹部であるビシュヌも知りえない作戦。彼女の思いとは反し、悪へと変わっていく組織。一体、組織に何が起こっているのか！？

ビシュヌのお供であるランとガルシュ。覚えているでしょうか？遂に、別々に書いていた色々な話が交差し始めました。ランとガルシュの夏樹との出会い。これが何を生み出す事になるのか！？

そして、タイトル通りの『覚醒せし、その力！！』。夏樹のあの異変は一体！？

色々と疑問・伏線が御座いますが！！

とりあえず、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

何と言つか、SF的要素が色濃くなりつつありますね。今後、突拍子もない事を書いていってしまうと思いますが、何卒ご容赦の程を…。

第四十八話：戦場でのストラゲル（苦闘）

緊急召集！！

いつもなら、爆睡しているはずの時間帯。いや、残業などがある時もある。だが、夜中の１１時過ぎというのは、木下日陰にとって爆睡の時間帯なのである。

「く、何なんだコイツらは！？ここは、警察署だぞっ！？」

無造作ヘアーと言うのかボサボサの黒髪に流行りの足長スーツとブランド物の革靴を履いた、黒田秋人は拳銃片手に煙草に火を着ける。

モアとたちまちに白い煙りとほろ苦い匂いが辺りに立ち込める。ここは、桜台大間市にある警察署。しかし、そこは秩序と法律で護られた正義のある場所とは程遠く。そこは、戦場であった。

「黒い武装集団だぞっ！？ふざけんな、ふざけるな、映画じゃねえんだよ、世の中ってのはっ！！」

突如、警察署に武装をして攻撃してきた黒武装集団。暗視ゴーグルに黒マスク。顔がはつきりと確認出来ない。いままで捕まえてきた犯罪者たちが一斉に警察に対して復讐を兼ねて攻撃を仕掛けてきたのかと考える黒田。しかし、それにしては、突入10分足らずで警察署の1階を占拠するなんて手際が良すぎる。まるで、それを目的として訓練された軍人のようである。黒田はガリガリと頭を掻きむしりながら半分も吸わない煙草をそこらにポイツと投げ捨てる。

「ふぁーん！？何なの、何なの、何なんですかー！？ふぁーん、誰か助けてえーっ！！」

「ええい、うるさいぞ、きのしたぁーっ！！俺だって助けて欲しいぜ、この状況！！」

更に、『うえーん』と大声をあげながら泣き叫ぶ、日陰。みかん色の髪の毛をパチンパチンとクマの髪止めで可愛らしく止め、マシユマロの様なほっぺは赤く桃のように染まっている。彼女はおつとりとした目じりから大粒の涙を流す。突如始まった、戦争さながらの銃撃戦に戸惑いながら彼女はその手に持つ、リボルバー式拳銃M25を黒集団目掛けてぶっ放す。

乾いた音と共に日陰の持つ銃から弾丸が飛び出す。

「ダアホがつ！？そんな緩い照準じゃ当たる物も当たらないだろうがーっ！！」

「ひいゝん、私、私ゝい、銃なんて使った事が無いんですうゝっ！！」

日陰が撃った弾丸は四方八方に飛び散り、黒武装集団には全く当たりはしない。それどころか、日陰たちの前で戦っている他の警察官の側を横ぎっていく。

「お前、確かこの前ゲーセンで射撃の自慢してなかったか、おい！！」

「それはゲームの話ですよー！！ハイスコアは取れても、実際は下手っぴなんですよー！！」

2人がそんな会話をしている間に、黒武装集団は着実に近づいてきていた。彼らの通った後の惨状。血まみれの制服警官たち、がたいのいいヤクザ専門の警官でさえ、太刀打ち出来ずその命を散らしていく。黒武装集団の爆撃により片腕がぶっ飛んでしまいのた打ち

回る者、両足を切断され動けなくなった所に弾丸を至近距離で放たれる者。もはや、そこに常識などはない。異常と異様が混ざり合い。血生臭い、戦場となっている。

（クソッ、何で、どうして、こうなった！？）

黒田はその惨劇に体の底から震え上がる。30分前までは日常であつたはずの警察署。なのに、今は死が飛び交う戦場になってしまっている。黒田は銃を敵に向け、弾丸を容赦なく放ちながら考える。

（一体、この国で何が起きている！？何故、政府はこの惨劇を容認している！？応援は来ないのか！？奴らの目的は一体何なんだ！？）

だが、いくら考えた所で答えが出るはずもなく。黒田は撃ち尽くした、リボルバーを開き弾丸を詰め込んでいく。カチャカチャと手際の良い黒田。ガシャンとリボルバーを戻し、再び敵に狙いを定めようと顔を上げた。

瞬間。黒田には一体何が起きたのか理解が出来なかった。前に顔

を向けたはずなのに見えているのは警察署の天井。

「黒田さん!？」

日陰の声が耳に響くが、次の瞬間、頭を強く打ち付けられる。ガガンと小刻みにバウンドを繰り返し、黒田の頭は地面と『何者かの足』によって挟まれる。

「ぐがぁあつ!？」

黒田の頭を地面に踏みつける黒武装集団の1人。その力は普通ではない。ギリギリと黒田の頭に取り掛かってくる重圧が増えていく。

「やめてえーっ!!黒田さんを離せ、離せよ、バカヤロー!..」

日陰が黒田の頭を踏みつける黒武装集団の男に叫びのような怒鳴り声をあげる。

「く、馬鹿、木下、逃げっ…ろ」

黒武装集団の男はカチャリと銃を日陰に向ける。その凶悪な程にゴツゴツとした銃。弾丸は重く硬く、放たれば女性など一溜まりもない。

「ぐう、やめろおおっ!!」

黒田の叫びが辺りに響く。日陰はググツと力一杯に瞳を閉じて、体を強張らせる。

しかし、日陰の思いと反して一向に銃撃音は鳴らない。彼女はソロリと目を開ける。と、そこには1人の男が黒武装集団の男に拳銃を向けていた。

「ひいゝひやはははははは!!んだあ、コラア!?!人が牢獄で大人しくしている内に面白い事になってやがるじゃねえかゝあつ、あああん!?!」

茶髪を逆上げにした、囚人服の男。ニュー・エントランスビルにて夏樹と死闘を演じた男。

「お前は、イッシュグラナ！？8号館に幽閉されてたはずじゃっ！？」

黒田は突然に現れた、イッシュに驚く。マズイ状況だ。いまは外からの敵に手一杯。そんな中、脱獄してきた囚人たちにも攻撃をされたら……！？黒田の額に汗が滲む。絶体絶命である。

「ぐぐ、イッシュよ、我は貴様の仲間だ。何故に我に銃を向けた？」

確かにイッシュは、黒武装集団の男に銃口を向けている。これは一体どういう事だろうか。黒田は押し付けられていた力から解放されたため、立ち上がる。

「どう、いう事だ、イッシュ？何で敵である俺たちを助ける！？」

「ああん？タコツ！！誰がテメエなんざ助けるよ！？気に喰わねえ

んだよ、コイツら！！コイツらが使つていやがる武器と防具はなあ。組織でも危険性が高いと月影隊長が封印したはずのものなんだよおっ！！……なあ？なんでだあ！？その封印したはずのものを何で使っちゃってるとんだお前ら？ああああん！？」

と、次の瞬間！！イシユは躊躇いもなく仲間であろう黒ミリタリ―服男に銃撃を加える。ズドンと一発響き、崩れ落ちる黒ミリタリ―服男。その倒れた男の頭からおびただしい程の血が流れ、床に溢れていく。

「ひやは、ひゃーはははははっ！！良いね！？良いね、良いね、良いねえゝっ！？これさ、これこそが俺様だ！！ひゃーはーっ！！」

狂気。ニュー・エントランスビル事件の時もそうだった。イシユⅡグラナという男。ビルの44階で夏樹と戦った時も彼を支配していたのは狂気であった。腐敗した俗世に狂わされた男。彼は頬に飛び散った血に舌舐めずりをする。

「こ、この化け物ーっ！！く、黒田さんは殺らせないぞ！？わ、わわわ、私が相手だ、コノヤローツ！！」

そんな狂気に満ちたイシユを見て危険性を感じたのか日陰がイシ

ユの前に立ち銃口を彼に向ける。ガタガタと手を震わせ、ギリリと歯を食い縛らせている。

「ああん、何だよ、お嬢ちゃん？俺様は忙しいんだ、お子ちゃんは家で飯食って糞して寝れば？」

「にゃ！？お、おお、お子ちゃん！？！しつ、失敬な、てか、女の子に向かって糞とはなんですか、糞とは！？私はゲームセンターでは、ちよつと名の知れたゲーマーだぞおう！？射ちゲーの戦竜姫こと木下日陰様とは私の事だーっ！！」

イシュの言葉にプンスカと怒る日陰。もはや、恐怖という概念が無くなったのか日陰はイシュに対して物凄い勢いで睨み付けていた。

「…あん、日陰？…ああん？あああああん！？日陰だとおおっ！！」

「にゃあー！？ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、いやー、たびないでえー…」

日陰は物凄いイカツイ顔でイシュが近づいて来たので、頭を抱え縮こまってしまふ。一方、イシュはイシュで何やら日陰の名前を聞いておびただし程の汗を全身にかいていた。

「（ひゃ？まで、待てよ？日陰？日陰だと？をい、をい！？まさかこんな所にいたのかよ！マズイぞ、おい！？久々の戦場で楽しんでいる場合じゃ無くなったぞ、おいっ！？）」

そんな小言を言いながら、イシュは両手で頭を抱える。ポタポタと暑くもないのに体全身から汗が流れ出してくるのだ。

ズガガガガン！！とけたたましい音が鳴り響く。どうやら、武装した敵が援軍を連れて、日陰たちのいるフロアにやって来たようだ。ダシュ、ダシュ、ダシュとかなりの数の黒ミリタリー服の男達。

「ちい、まじい、木下あ！！縮こまってねえで、逃げるぞ！？あの数相手じゃ歯がたたねえ！！」

黒田が叫びをあげ、床に座る日陰を無理矢理立ち上がらせる。しかし、敵はもう目の前。たった2人では逃げる事なんて不可能である。

「ふえゝん、四面楚歌だよ、四面楚歌っ!!」

立ち上がる日陰は何が何だか分からない。いきなり、増えた得体の知れない敵。このまま行けば待っているのは死である。戦うにも戦力不足。もう、どうする事も出来ない。日陰は心がキュッと締め付けられる。苦しい、逃げ出したい。誰か助けて、誰か、誰か、誰かっ!!

「たく、しょうがねえなあゝ!!? ひやはっ!!? 参ったぜ、こんな時に出会っちゃったんだからよおゝ!!」

そう言い、黒ミリタリー集団に攻撃を仕掛けるのは、テロ犯罪組織『crown』の殺し屋であるイシューグラナだ。彼は、日陰の持つ拳銃を奪うと二丁拳銃にして次々に敵を撃ち倒していく。

「な、どうして？どうして、私たちを助けてくれるの？」

日陰は戦うイシュの背中に語りかける。敵であるはずのイシュ。しかし、彼はその敵である警察官の自分たちを倒さずに仲間である黒ミリタリー集団を倒していく。日陰はイシュが何故そんな事をするのか分らない。だから、聞いた。だから、イシュに聞いたのだ。

「ヒヤアハ！？さあてねえ、それは、自分の事について考えてみるんだなー？ヒヤハハハハハハッ！！」

ズドドドドツッ！とイシュと黒田は凄まじい勢いで黒ミリタリー集団を倒し、血路を作り出していく。バシュン、バシュンと敵の弾丸に皮膚を切られてもイシュは立ち止まらない。

一体、何が彼をそこまでさせるのか？相手は仲間である組織の人間達。普通ならば、助けに来たと考え、一緒になって警察官である日陰達を攻撃するはずなのだが。しかし、彼は戦う。仲間であるはずの組織『crown』の兵隊達に銃口を向ける。まるで、そう、まるで、木下日陰を護るかのようにな…。

いま、世界が交差する。別々に進んでいた話が交差し始めていく。

そして、1つの大きな分岐点へと姿を変える！！

第四十八話：戦場でのストラゲル（苦闘）（後書き）

こんにちは。

久々に登場（？）黒田先輩と日陰嬢！！更には、ニュー・エントランスビル44階で夏樹と戦ったあの狂気の男。イシューグラナーナも再登場！！…覚えてます？（笑）

さて、第四十八話目。 이슈です。はい、月影の片腕的存在の人はです。ニュー・エントランスビル事件の時、国会議員の兼元を殺そうとしました。覚えてます？私より、笑う奴です。

しかし、その狂気の男がなんと日陰たちを助けてしまいました。一体、どういう事だよ？更には、日陰に何やら秘密まで出てきて…？ああ、何が何やら？？？

それでは今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

…実は、あらすじと最近の内容が微妙に違う事に内心ビクビク！？しかも、今後の展開次第では更にビクビクになる可能性が…？

第四十九話：トライアッド（三者関係）

平和な国がある。

その昔、戦争を起こし敗北した国だ。悲惨であった。負ける事など考えもしなかったのだろう。その国は戦った、何を求めて戦ったのか……。初めは、勝てると考えていた政府も国民も、戦争が佳境に入った辺りには気づいていた。この戦争は負ける、もはや、勝ち目はない、と。それでも、その国は戦った。そして、悲劇が起きる。

誰が作ったのか。いや、誰が好き好んで作ろうか！？それは、研究者達にとって予想外の結果となった。作ろうとしたのは、笑顔。しかし、その研究は苦しくも笑顔を奪う兵器を作る事になってしまった。

『原子力核爆弾』

いや、正式名称はもっと別の名前であるのだが。しかし、その名前が落とされた国としてよく耳にする言葉であった。原爆と略されたその兵器は二度、二度もその国に落とされた。国が崩壊するのには十分過ぎる破壊力だ。あまりにも突然の出来事で国は負けた事に気付かなかった。国民が死んだ事に気付かなかった。

「そして、再びその国にぶつかる。まあ、今度のは原爆とまではいかんが、な」

警察署の奥深く。桜台大間警察署には『特牢室』という牢屋らうやがある。犯罪がはびこるこの時代。犯罪を解決するには警察だけの力では不可能であった。その為に作られた『特牢室』。その牢屋には国をも脅かす最重要人物達が投獄されていた。そして、その投獄された最重要人物の1人が警察署内を歩いている。

「シバ様、こちらです」

その警察署は先ほどから銃撃音や人々の怒号、叫び声が飛び交っていた。警察署襲撃。テロ犯罪組織である『crown』が30分ほど前から警察署であるこの場所を襲撃しているのだ。

「おや、そこにいるのは松居警部では…?」

理由は実に単純明解でシバと呼ばれるこの長身の男を助けだすためだ。

「く、シバ！？てめえ、脱獄する気か！？」

「ええ、3年もこの警察署奥の牢獄に閉じ込められていたのですからね。ちよつと、散歩でもしようかと？ちなみに、目的地は『新境界』……！ですよ？」

桜台大間警察署の警部である松居は決して出してはならない最重要人物・シバを目の前にして傷ついた体を立ち上がらせる。

「ああ、松居警部……。そんな体で、傷に障りますよ？」

「うるせえよ、てめえを逃がす訳にはいかねえんだよ……！3年前の旧・エントランスビルの時みたいにてめえに好き勝手させる訳には……！？」

松居がシバ目掛け走り出そうとした瞬間、シバの真横にいたはずの黒ミリタリー服の男が松居の顔面を殴り飛ばす。ガゴンと松居の巨体が崩れ落ちる。

「まあ、貴方では無理ですね」

シバと名乗る男は乾いた笑いで地面に這いつくばる松居を見下ろす。

「空海玄治が出てくれば、別ですが……。1人間の貴方に私は止められない。ははは、いや、熊みたいな体して何を猫みたいに踞って、お笑いですよ松居警部。結局の所、3年前の作戦は再び動き出した訳で、この国の南側は破壊される、とねえ？」

3年前にあつたビル爆発事件。それは空海玄治によって阻止された。そして、その時、最重要人物として捕まえたのがこのシバと名乗る長身の男。歳は40代後半。真つ黒な髪は東洋人を思わせる。だが、それとは違う西洋を思わせる高い鼻と緑色の瞳。体はすらりと高く、どう見ても東洋人の基準値を超えている。優しさを感じられる目尻の下がつた穏やかな目は聖職者を思わせる。

ただ、この男、決定的に足りない。優しさと親しみ、何者をも包み込む心が必要な聖職者にしては、このシバという男にはその心が足りないのだ。

「ああ、叫び声が聞こえますねえ。血に踊り、痛みを歌い、死を奏でるメロデー。ああ、この警察署は戦場なんですなえ…あは、あは、あはははひはっひひひひひひひっ…」

いまでもそこで罪のない人々が死んでいるというのに。シバはそれを嬉しそうに叫び笑う。ぐにやりと口元と瞳を曲げて、ひたすらに笑う。

「ひはひはひはひはひはひはひはひはひーいはははははひ」

「ひやははははは！？ ひやはーはーっ！！ ひいはー、ヒヤハハハ、
ヒヤハハハ、ヒヤハハハハーッ！！」

と、その場にいた誰もが驚く。叫び笑うシバの隣に更に笑う1人の男。シバはその男の突然の登場に笑いをやめる。

「誰だ、貴様？」

「ひやはー？… あん？なんだよ、笑う所じゃなかったのか？」

茶髪を逆上げた囚人服の男。ヘビを連想させる顔で、厳つい顔。チンピラと呼べば、そうだと思うし、殺人鬼だと呼べばそうなのだろうと思わせる顔だ。彼は両手に拳銃を持ち、その傍らに1人の女性を米袋を脇で持つような感じで抱えていた。

「コラー、離せえ！！日陰さんは米袋じゃねえぞ、バカヤロー！！大體、黒田先輩を置いてきぼりにしてどうする、バカヤロー！！」

傍らの米袋：じゃなく、女性はそのヘビ顔の男に罵倒を浴びせる。バタバタと体を動かすが男の力が強いのか一向に男の脇から脱け出せる気配はない。

「んあ？良かねえか？黒田は高橋とすぐ来ると思うし、ここらのザコは俺様が瞬殺したし… ひやは、てか、助けてくれた恩人をバカヤロー呼ばわりはどうよ、嬢ちゃん？」

「ええい、私を嬢ちゃんと呼ぶ、イシユて名前の奴は全てバカヤローだ！！」

「ひやははは、俺様限定じゃん、それ？」

そこに居たのは、みかん色の髪をした桜台大間警察署の警官・木下日陰とニユー・エントランスビル事件での犯人の1人・イシュウグラーナであった。2人は何やらバタバタと漫才のような会話をし、隣にいるシバを全くの無視をしていた。

「き、木下！？それに、お前はイシュウグラーナ！？な、なんでお前たちが一緒に！？」

「お、松居警部だ。松居警部、松居警部、松居警部！！聞いて下さいよ、イシュウたら玉子焼きを知らないんですよ？馬鹿ですよ、馬鹿。玉子焼きほどお弁当に入ってる確率80パーセントの食べ物は無いつてのにい」

「ひやは、だから、食文化の違いを棚にあげんなよ。てか、80パーセントで微妙な数値だろ、それ？これだから、嬢ちゃんは数字を出せば頭が良いと思って、お・こ・ちゃ・ん、だぜえー、ひやははー！？」

『何をコノー』と日陰がイシュの腰辺りをビシッとチョップした所で。

「きさまらあつー！話をきけえーつー！テメエら、私を破壊の神・シバ〓サンスクリットと知っての狼藉かつ！？」

怒号になる。ギリギリと先ほどまで涼しい顔をしていたシバとは打って変わって恐ろしいほどに怒りを露にした顔だ。ビクビクと彼の米噛みが動き、ひくひくと口元が痙攣している。

「はん、嬢ちゃん、なんかこの場所ではこのオッサンの講演を聞かないとイカンらしいぞ？」

「ええ？やですよ、講演なんかつまらんですよ？講演てアレでしょ？国家議員のオッサン達がチマチマ小言を言うあれでしょ？しかも、公約しましょうとか景氣の良い事言って結局は金だけとってなぐんもしないやつ。やですよ、金取られるのお」

「ひやは、同感だねえ。払うマニーがあつたら酒買うわ俺様」

「全く、オッサンは、全くです」

ビギリという音が松居の耳には確かに聞こえた。日陰とイシュの会話に怒りを露にしていたシバが更には喋る2人にぶちギレたのだ。

「殺すぞ、死ねよ、ぶち死ねよ。俺の話を聞かねえクソは死を持つて死ね」

ぶつぶつとシバは鬱のように呟く。さらには彼の手に真っ黒のナイフが隣の黒ミリタリー服の男から渡される。

「ぶち殺す!!」

シュン!!と振り落とされたナイフは横のコンクリートの壁を紙のように裂きながらイシュたちを狙う。が、バキンという音と共にナイフが飛ぶ。

「ひやは、甘いね、あんた。そのナイフは切れ味が抜群だが、持つ柄を弾かれたら、終わりさ。まあ、大抵の刀系はそうだが。そんな事は神業な訳さ。でも、ひやは、そんな事が出来るのが俺様！……うだ、見直したか、嬢ちゃん！？」

「いや、私の事を嬢ちゃんと呼ぶ限り、お前は『バカヤロー』だバカヤロー」

『そりや、ねえよ、嬢ちゃん』とイシユは発砲して熱を帯びた拳銃で日陰がヤケドをしないように彼女を下に降ろす。と、下に降ろされた日陰はタタタツと地面に倒れる松居の所へと近寄る。

「大丈夫ですか、松居警部？もう、歳なんですから無理をしたら駄目ですよー？」

日陰はポケットから可愛い猫柄のハンカチを取り出す。そして、傷付いた松居の顔から血を拭う。

「木下、あいつは何で？イシュー＝グラナはその組織『CROW

」の殺し屋だろ？何でお前たち……俺たち警察を助ける！？」

松居は理解出来ない。組織『crown』は他の者たちなど気にせず、『新世界』などという訳の分からない事を口ばしり平気で悪行の限りを尽くす野蛮な奴らが集まるものばかり思っていた。しかし、イシュはそんな松居の思いに反して組織を裏切り、敵であるはずの日陰たちを助けていた。一体、何が起きているのか？松居は真っ直ぐにイシュの方向を見る。

「はあ、知りません。あのバカヤローは何か勝手に私達を助けてくれるらしいです？まあ、バカヤローですから、いつ、寝返るか知りませんが……？とりあえず、聞いてみましょうか？」

と、日陰は振り返りイシュに話しかける。

「おい、バカヤロー、なんで私達を助けてくれるのですか？」

おちゃらけた様に日陰はイシュに話かける。だが、イシュからは返答の言葉がない。何だろうと向こうを見ているイシュの顔を覗き込もうとした瞬間、イシュが目線の先のシバに話しかけた。

「よう、あんた破壊の神・シバって言ったな？」

「いかにも、私は破壊の神・シバⅡサンスクリットだ」

イシュはシバのその言葉に暫し考え、そして『はぐん』と言い、顔を覗いてこよつとする日陰の頭をくしゃくしゃにするとガチャリとシバに拳銃を向けた。

「はん、シバか？なるほどな、シバねえ？」

「あむう、せつかくセツトした髪がくしゃくしゃにいゝ」

くしゃくしゃになった髪を直しながら日陰は、ぶくつと頬を膨らませる。イシュはそんな日陰を見ながら、さらにシバに向かい話しかける。

「確かに、シバってのは『crown』に最高幹部として存在する。存在するが、だ……」

日陰の不機嫌そうな顔を見て、イシユは苦笑いをし、再びシバに顔を向ける。苦笑いの顔ではなく、今まさに人間を殺す殺人鬼のような顔で真っ直ぐシバを睨み付ける。

「で、お前は誰だ!？」

第四十九話：トライアッド（三者関係）（後書き）

こんにちは。

なんというか、デタラメな設定や話で読者さんを置いてきぼりにしていないか不安です…。

では、第四十九話目です。イシュさん、アンタ、一体？何やら、日陰と仲良しなイシュさん。いや、エントランスビルでのイシュさんが嘘のよう？

さて、謎の男・シバⅡサンスクリット登場。私たちの知っているあのシバとは違うよう？…はっ！？また、伏線と謎を増やしてしまった！？

それでは、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

松居警部。本名、まつい ただよし松居忠義。熊のような体格。大学時代は柔道部。既婚者。空海玄治とは昔馴染み。熊だけど普通の人。実は子煩悩（笑）いっつも、空海家の子ども達を心配している。

第五十話：少年の思いと少女の思い

ずっと昔の事だ。

小さな頃、俺はなんで産まれてきたのか分からなかった。その頃の俺は、とにかく暗かった。残酷的であり、非情だった。蟻ありや蝶ちょう、セミやバッタ、小さな命を見つけては幼き俺はその命を無意に奪っていた。酷い時には猫や犬を傷付ける事もあった。幸いにして、命は奪わなかったものの最低の所業には変わらない…。

何故にそんなに残虐であつたのか。他人とも会話する事もなく、同じ歳の子ども達と遊ぶ事もせず。ひたすらに幼き俺は何かを絶望していた。

『夏樹！？あなた、何て事をしてるの！？どうして、こんなにか弱い虫たちを…！？』

そう言い、幼き俺を叩くのは若い頃の母さんだ。美しく流れる金色じきの髪。真っ白でマシュマロみたいに柔らかそうな肌。優しい瞳で吸い込まれそうなブルーアイズ。とても綺麗な女性であつた。

『母様、どうして叩くのですか？僕が弱いからですか？』

『違うわ！！夏樹、君が虫たちを虐めているから、お母さんはあなたのほっぺを叩いたの』

ああ、そうか。これは、昔の俺が非情に虫たちの命を奪っていったから。それを見た、母さんが俺のほっぺをおもいきり叩いた時の記憶だ。

『……虫は、虫は弱いです。だから、強い僕がどうしようと勝手に。母様が僕を叩いたように……』

『っ、違う！！違うわ、夏樹！！誰も誰かを支配なんて出来ないの！！強いから弱い相手に何をしても良い訳ない、弱いから強い相手に逆らってはいけないなんて訳はないの！！』

なんて虚ろな瞳をしてるだろう、昔の俺は……。まるで、この世の終わりみたいな感じだ。

『……母様、しかし、僕は強い相手にコレと同じ様な事をされました。逃げることも、逆らうことも出来ませんでした。それは弱い僕が悪いから、それは無力な僕が何も出来ないから……。その人はそう言いました。僕は何故あんな事をされたのですか？僕は虫と同じ、僕は僕に押し潰されて殺される。母様、僕は……』

『もういい！！……もう、いいの。ごめんね、母さんが謝るね？違うよ、君は弱くない。弱いのはあなたに何かをした人達。あなたは悪くない。だから、あなたは押し潰されたりしないの。ずっと、母さんがついていてあげるから、ね？虫たちは自由にしてあげよ？あなたは押し潰されない。だから、虫たちも押し潰されないの……』

遠い記憶。遠い記憶だ。何故いまさらながら思い出すのだろう。まるで、誰かが俺に見せているようだ。でも、そうだな。誰も誰かを押し潰すなんて事は出来ない。命を奪うなんてしてはいけない事なんだ。

『優しく強い子になりなさい。誰かを傷付けるんじゃない、誰かを守れる人に……』

だけど、母さん。俺はあの時、既に……。逃げるために、生きるために……。だから、幼き俺はそこにいるんだ。

ゴメンね、母さん。また、俺は虫を殺し始めたよ。それは守るため。それは大事な誰かを守るために…。やってはいけない事だと分かっているけど。でも、守るためには…。家族を傷付けない為には戦うしかないから。だから…。でも、やっぱり、駄目って言うんだろうな、母さんは…。

「シバの部隊ですか…」

「はい。黒ミリタリー服を着込み、封印したはずの開発兵器を所持していました」

純洋風の家なのに和室。和洋折衷な建築、いまや、それがマイホームを作る基準である。そんな基準な家の一室。ソファーに綺麗な黒髪をした男が寝かされている。

身長は180前後、足が長く、やや小さめのソファーから大太的に足がはみ出している。スポーツをしているのか、無駄な贅肉がなく、堅そうな筋肉が付いていた。いや、真つ当なスポーツ選手よりも彼の体は筋肉の付き方が異常である。そんな上半身裸の彼はランという少女に濡れタオルで体を拭かれている。

「空海夏樹か…」

「はい。私達を助けたあと、急に倒れてしまつて…」

空海夏樹。それが、ソファーで寝かされている男の名前だ。さらに耳までかかる伸びた髪は心地の良い香りを匂わせる。

「ビシュ又様、この人は悪い人ではありません。だから…」

「大丈夫ですよ、ラン。その方を殺す理由はありません。組織はもう、私達とは袂たもとを分けました」

金色の髪的女性、ビシュヌは金髪の少女、ランに優しく微笑む。

「そうですか、ビシュヌ。やはり、組織に留まる気にはなれませんか？」

そう言い、夏樹に剣を向けるのは白マントを羽織る男。組織『Crown』の幹部、三神と呼ばれる1人・ブラフマーだ。と、ランがそのブラフマーの剣から守るように夏樹の前に両手を広げ、立つ。

「ブラフマー、やめて下さい。今は、空海夏樹よりも、勝手な行動をしている『シバ』を探す事が先です」

「……ふっ、そうですね」

ビシュヌのその言葉にブラフマーは剣を左腰の鞘さやへと収める。

「しかし、探すといってもどうしたものか…。私の部下たちはシバの部隊に全て殺られてしまいましたし…」

ブラフマーは、自分の部下たちが殺されたというのにその表情には一切の曇りがない。『虐冷のギロチン』。そんなブラフマーの態度にビシュヌは彼のもう1つの名前。つまり、異名を思い出す。

いつだったか。ブラフマーは西洋の国の1つを潰す任務についた。作戦はなんら問題なく進み、最終局面に差し掛かった。だが、その時、潰される国の最後のあがきでブラフマーの部隊は全滅とはいかなかったが、半壊という大ダメージを負ってしまう。その為、作戦は失敗。ブラフマーは撤退を余儀なくされた。

彼は怒り、叫び、周りを破壊した。そして、残った全ての部下たちをその持つ剣で殺していったのだ。落とされたその剣はまるでギロチン。だから、『虐冷のギロチン』。残虐で冷酷。それが、ブラフマーという男だった。

「人数的には、この家の数だけ。では、私とビシュヌとガルシュは『シバ』探しと行きましょう。残ったランは、空海夏樹の監視・介護を…」

「分かりました。ガルシュ、ラン、良いですね？」

そして、ランと夏樹を残してビシュヌ、ブラフマー、ガルシュの3人は家をあとにする。ランは、ガランとしてしまった部屋を見渡す。

この国に来て1ヶ月程度。だが、幸せの時間であった。任務とは分かっていただけ、普通に暮らして、普通に過ごして、普通に眠って…。ランは、目映いばかりの日常という幸せを思い出していた。しかし、それも今日で終わり。ランの表情は少し、いや、とても悲しみに溢れていた。

と、そんな事を考えながら、ふと、夏樹に目を向ける。

「ひゃ！？お、起きてたの！？」

「うい、何だろう？何で俺、上半身裸？…小さいのに、痴女？」

パチンと心地良い音。ランが夏樹の頬を叩いた音だ。ランと夏樹。奇妙な2人はその後2〜30分、沈黙のまま見つめ合っていたのだ。

第五十話：少年の思いと少女の思い（後書き）

こんにちは。

ふう、祝・第五十話です。て、事で私も夏樹も小休止？上半身とはいえ少女に体を露にされる夏樹。大人なのに…（笑）

第五十話目。ブラフマー、合流。優しそうな感じなのに残虐で冷酷って…味方にしては、嫌なタイプ？

ランと夏樹、奇妙な関係ですね…。いきなり、平手打ちをされる大人・夏樹（笑）しかも、上半身裸なんですよね（爆笑）

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

話を早く進める為に、いくつかの話をボツにして省いてます。だから、展開が早めなのですが…、話的に大丈夫でしょうか？

第五十一話・見えざる敵

破れた服の代わりに、その家の男の黒スーツを着た夏樹。

「いや、結構しつくりくるなこのスーツ?」

「ガルシユのボケの服だから、まあ、破ろっがどうしようが勝手にして良いよ、それ…」

「いや、ちゃんとクリーニングして返すから…（てか、ガルシユて人可哀想だな…）」

と、夏樹は最後の方を小声で言う。ただ、小声だったにも関わらずランは『そういう奴だから』と夏樹の言葉に返答を返してきた。

「で、本題に戻るけど…。シバって男が黒幕なんだな?」

「ええ。ガルシュが言うには黒ミリタリーの男達はシバの部下との事で…」

ランはトポトポと紅茶をカップに入れ、クッキー缶から幾つかのクッキーを皿に移す。それを『どうぞ』と差し出された夏樹は『ども』と受け取る。香りはダージリンだろうか。紅茶なんてあまり飲まない夏樹は適当に考える。

本当だつたらこんな悠長にお茶など飲んでいる訳にはいかなかったが、戦いで服が破れたため、外に出れる状況ではなかった。その為に、ランから服を借りられないかと聞いた所、ガルシュという男の人の服を借りて良いとの事で。そして、着替えをしていると、ついでに、ランがこの事件の概要を話してくれると言ってくれたので今に至るという訳だ。と、夏樹はクッキーを一口食べる。

ガシャン！！

一瞬、クッキーを砕いた音かと夏樹は錯覚してしまう。彼はクッキーを口から離し、まじまじと凝視する。しかし、すぐにそんな訳がないと夏樹は思い直す。そんな固いクッキーがあつてたまるかと

残りを頬張り、音のした方向を見る。

リビングのドアがカチャリと開く。そこに、2人の男。黒いマントを羽織った黒髪の男と、同じく黒髪だが瞳は青色の少年。黒マンツの男はまるで酔っ払いの様にグタリとしている。青目の少年に肩を持たれ、やっと、立っているという所……。いや、意識の方がない感じだ。

えっ、知り合い？と夏樹がランの方を向く。しかし、ランの顔は蒼白していた。ゾツとするほど青ざめた表情だ。

「シバ…サンスクリット？」

シバ…サンスクリット。夏樹はいましたがたランから聞いた、この戦争さながらの犯罪の黒幕の名前を思い出す。

（シバって、この少年が黒幕のシバ？くっ、なんでこんな所に！？戦うか！？それとも、逃げるか！？）

夏樹がクッキーを乗せた小皿を取り、青目の少年、目掛け投げつけようとした瞬間。

「すまないが、助けてくれないか？」

と、青目の少年が未だ顔面蒼白のランに懇願をした。

月の美しい夜。

澄んだ空気で空がくつきりと映し出されている。冬の星座を探すならば丁度良い。オリオン、シリウス、プレアデス星団、くつきりと明々と光る星々は簡単に見て取れる。それほどに澄んだ空気で空だ。ただ、この街は明る過ぎる。大地が明るければ、星は見えない。簡単に見て取れそうな星々も霞んで見えない。

住宅の明かり？コンビニ？それとも、高く上がったビルの電灯？いや。いやいやいや、どれも違う。明るく光る、それ。それは、暖かであり、狂気である。真っ赤に真っ赤に全てを飲み込み、熱く熱く何者をも寄せ付けぬ、それは炎。

街は燃えていた。平和なはずの街は死者が転がり、崩壊が雄叫びをあげ、絶望が至る所にたむろしている。燃えるのは家。燃えるのは草。燃えるのは人。燃えて、燃える業火は全てを滅ぼしていく。

「破壊をすれば、良いという訳では無いというのに……」

焦げ臭い街にビシユ又は胸が締め付けられる。初めて見た、潰される国の光景。いや、実際には桜台大間市という街1つなのだが……。それでも、光景は残酷なものだった。

「シバの部隊は徹底的に、この街を潰していくつもりでしょうね」

カシャンカシャンと左腰に差した剣から音を立たせ、ブラフマーは先を急ぐ。辺りの光景には目もくれず。さも、それが当然かのように。

商店だろうか。焼け焦げた果物や野菜が道端に転がっている。さらに、燃えた看板をビシュ又は読み取る。

『八百屋・加賀』

ぐっ、とビシュ又は胸元の両手を握り締める。

（関係のないはずの人々。何故？何故、彼らが彼女らが傷付けられなければならない！？私達の組織は、そんな物では無かったはずでしょう、シバ！？）

ビシュ又は、この絶望の犯人であろうシバに問い掛ける。ただ、居ない者から返答が返ってくるはずも無く。悲しさと悔しさだけが彼女の心に返ってきたのだった。

行く道行く道、破壊された平和が辺りに散らばっている。黒焦げの炭が宙に舞い、炎の熱気が息する事の邪魔をする。倒れる人を見ては、息があるかないかを確認するビシュヌ。しかし、全てが徒労と疲労の結果に変わる。

ビシュヌは息せぬ人々に手を合わせ祈りを済ます。ブラフマーは、さつさとシバを探しに行きたいらしく、イライラと地面を蹴っている。

「ビシュヌ、もう良いだろう？行くぞ！？」

ブラフマーはやはり、イライラという感じでビシュヌを急かす。ビシュヌは頷き、再び燃え盛る街中を歩き始める。なんとも酷いものか、人々は顔さえ分らない程に焼かれ、原型を留めている体はそつと触れただけで崩れ落ちた。ビシュヌは、これほど心が締め付けられる思いは無いと唇を噛む。あまりにも、噛む力が強かったのかツツーと血が流れた。ビシュヌは血を拭う事もなく歩く。あの者を止めるため、この残酷の絶望を終わらせるため。

「たす…けて…」

その言葉にビシュヌは、はっと今来た道を振り返る。少女。ピン

クのトレーナーと綿生地のパンツ。傍らには腕の取れた熊のぬいぐるみを持った少女だ。

「あっ……」

不意に出たその言葉は弱々しく。悲しく、間抜けであった。ビシュ又はそんな喉の奥から出た自分の言葉に気付かず、少女に語りかける。

「いま、いま行きます。大丈夫ですか？怪我をしているのですね？大丈夫。もう大丈夫ですから……」

ビシュ又は涙する。この絶望で破壊された世界で生き残った少女を見て、ビシュ又は心から歓喜して涙を流す。清く美しく清楚を重んじる彼女は走る事はしない。が、歩くよりも早く、早足よりも早く少女に歩み寄る。

「邪魔だなあ……」

しかし、ビシュ又はその手に抱かれる事なく少女はその場に倒れ

てしまう。びしゃと少女の鮮血がビシュヌの頬に飛び散る。

放たれたのは、斬撃。疾風よりも早く、ビシュヌの歩みよりも早く、ブラフマーの剣は、熊のぬいぐるみを持つ少女に突き刺さる。

「ぶ、ぶらふま？…ブラフマー？…ブラフマアアアアッ！？」

二度目の斬撃にて少女の命は絶望のモノとなる。ガシツとその血まみれの少女を胸に抱きしめ、ビシュヌは叫ぶ。

「どういうつもりだ！？どういうつもりだ！？どういう、つもりだ、ブラフマアアッ！？」

怒りに忘れ。聖女ビシュヌは、清く美しく清楚の三文字を保つ事が出来ない。彼女は叫び怒り、眉を吊り上げ、口元をグニヤリと曲げてブラフマーに怒号を放つ。

「貴様、貴様あつ！！少女が何をした！？彼女は助けを求めているのだぞ！？生きようとしていたのだぞ！？何故、斬りつけた！？何

故、二度も斬りつけた！？何故、彼女を殺そうとしたあつ！？答える、答える、答えやがれ、クソヤロオがあああつ！！？」

ボタボタとビシュヌの腕から赤い血が流れ落ちる。もちろん、彼女の血ではない。腕に抱く少女。その少女からおびただし程に鮮血が流れているのだ。

「邪魔だなあとはいまして」

「邪魔！？何が！？何が邪魔なのだ！？私達の組織は、腐ったこの世界を創り治す事！！決して、弱き者たちを惨殺する物ではない！！そうだろう、ブラフマー！？悪しき者には制裁を、善き者には賛美を、弱き者に我らのその手をつ！！それが、私達『crown』の存在意義だろうっ、ブラフマアアツ！！？」

そう、テロ犯罪組織とはその過程の名前。実際にテロで倒すのは、腐りきった世界の権力者たち。その過程で多少の犠牲はやまなしと諦めとやるせなさがある。だが、決してその力が弱き者限定に動く事は無く。組織『crown』は最低でも正義を成す組織だ。

だが、ブラフマーの今の行動は違う。いまのは明らかに、弱き者

限定に向けられた力。この街に絶望を与えたシバと同じく。正義を成す組織『crown』とは懸け離れた行為だ。

「いや、まあ、貴女は組織を抜けたはずでは？」

怒りに狂うビシュヌとは反対に飄々とそう答えるブラフマー。

「それに、組織とは構成される者によってその形を変える物。昔に語られた定義なんて風化しますよ？」

「ふざ、ふざけるな！！いくら、人員が変わるうと、組織の理念は変わらない！！組織は正義を成すため……」

と、ビシュヌが言いかけた所でブラフマーは高笑いをする。腹を抱え、地面をけたぐり、その場に転げ廻る。

「あは、あははははは。馬鹿かお前！？ああ、もう、さつきから笑いを堪えていたのに我慢が出来ん！！正義？弱者？善き者に悪しき者？ぎゃはっ！？馬鹿は馬鹿でも、これほど平和ボケした馬鹿はお前が一等だろ？ブハハハハハハハ！？何だ、一等になると良い

事があるのか？景品は何か平和に関する、平和な物か？ギャーハッハッハッハッハッハッハッハッ！」

ビシュ又は、その光景に啞然とする。何が起きたのか分からない。世界をより良い世界にする為に共に戦った戦友。優しさと凛々しさと揺るぎない正義を持っていたはずのブラフマー。

「ひー、ひー。笑いが止まらない。はっ、ガハハハハはっ！？」

だが、そこにいたのは誰だ！？優しさ？凛々しさ？正義？そんな物は一辺の欠片さえ無い。下品に笑うその男。彼は、一頻り笑い終えると立ち上がりビシュ又を見据える。

「ばーか、最初から組織『crown』はこういう物だ。正義なんて微塵もない。世界を思うように動かす。支配、支配、支配っ！！力でねじ伏せ、力で動かす。世界を支配する事に意義がある。それが、組織『crown』。それが、俺たちだよ？今も昔も…なっ、ガルシュ君？」

「！？」

ブラフマーの言葉にビシュヌはガルシユの方を見る。先ほどから静かに後ろをついて来ていたガルシユ。と、彼のその手に鋼鉄の槌。

「すいません、ビシュヌ様。私は…私は…、作戦には犠牲が付き物ですから…だから、だから…」

ビシュヌは状況が飲み込めない。何をしている？早く少女を手当てしないと、少女の命が助からない。ビシュヌの頭にはその言葉だけが浮かんでいた。

目の前の状況。見たことのない下品なブラフマーと今まさに鋼鉄の槌を自分に振り落とそうとするガルシユ。ビシュヌには状況が理解が出来ない。

そうして、鋼鉄の槌がビシュヌと少女に振り落とされた。

第五十一話・見えざる敵（後書き）

こんにちは。

ええと、見えざる敵。つまり、敵が誰なのかよく分からないという訳です。

第五十一話目。夏樹とランとシバ＝サンスクリット！？話がややこしくなってきました。話がよく分からない読者様、すいません。とりあえず、日陰とイシュと戦っているアイツと今回ののは別人です。

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

ええと、素人のために、あまりよくない書き方・設定などが多々御座いますでしょうが…、何卒、ご容赦のほどをよろしくお願い致します。

第五十二話：博愛する者と惨殺する者

貧しい、村だった、食べる事も眠る事も許されず、村人は皆、働き詰めだった。土は枯れ、草木は育たず、雨は気まぐれ、ただ存在する事でさえ苦になる村。いつしか、村の大人は子ども達を邪魔に思うようになる。あの子が食べなければ…あの子がいなければ…あの子が死んでくれたら…。捨てられたのは村のため。出ていったのは生きるため。ガルシュは捨てられた子どもであった。

「で、さあ、俺言っただよね？作戦には犠牲が付き物だって？」

「はい…」

「じゃ、さ。…なーんで、ハンマー外すかな？」

燃え盛る商店街の道中。ガルシュはブラフマーという男の命令で、今まで仕えてきたビシュヌに鋼鉄の槌を振り落とす事になった。

ただ、振り落としたそれはビシュヌには当たらず、タイル状の道にゴゴンという音と共に突き刺さっている。

「殺せよ、その女を…」

「出来ません…」

「あんっ!？」

ガタガタと手が震える。いや、手だけじゃない。肩から足まで、体全体で震えている。かろうじて動くのは口。だから、ガルシュはブラフマーに自分の思いを口にする。

「やっぱり、私には、俺には出来ません。だって…家族だから!!」
ランの時もそうだった。助けたかった。助けたかったのに何も出来

ない。それが、作戦のためだと、世界をより良く導くためだと割り切っけていても……やっぱり俺はランを助けたかった。だから、だから今度はちゃんと助けたい。ブラフマー様、俺、出来ません。ビシュ又様は俺の家族だから、殺すなんて……俺には出来ません……」

終いには口さえも震えて、言葉が出て来なかった。涙がポロポロと流れてくる。怖い、恐い、こわい。ガルシュは知っていた、ブラフマーに逆らう事がどういう事かを……。部下の小さな失敗にも、ブラフマーは笑って部下を串刺しにする。自分の思い通りにならない事には、とことん冷徹になる男。それが、ブラフマーである。ガルシュはギュッと手のひらを握る。手のひら全体に汗をかいているのが分かる。

「なるほど……家族だから、か」

しかし、意外にもブラフマーは落ち着いていた。ふう、やれやれとガルシュを優しい瞳で見ている。ガルシュは一瞬、ブラフマーが分かってくれたと思った。穏やかに『ああ、そうか』と笑いかけられた時にはビシュ又を殺さないでよかったと希望さえ湧いた。

ブツン……

ガルシュはその音に寒気を覚える。そして、音のした自分の右側を見る。片腕が無かった。気が付いたら、自分の片腕が無くなっていた。止めどなく流れる自分の血。ガルシュは何が起きたのか理解が出来ない。気が付いたら、右の腕が肩から消えていたのだ。

「えっ？」

ストンとその場に座り込んでしまう。自分の無くなった片腕を見て、次にいつの間に抜いたのか、両刃の剣をその手に持つブラフマーを見た。

「あはは、馬鹿だなあ、ガルシュくん？そうならそうだと早く言ってくれよ？お前が…使い物にならなくなっただって、なあっ!？」

ガルシュは呆然とブラフマーを見る。流れる血を止める事など出
来ず。

「ブラフマーアッ!!」

と、ビシュヌの叫びでガルシュは我に帰る。ビシュヌはガルシュの腕に布を宛がい、止血をし始める。

「ガルシュ、大丈夫です。血は止まります。気を確かに持って。大丈夫、助かりますから……」

必死に自分の腕を止血するビシュヌ。何故？ガルシュの頭にそんな言葉が浮かぶ。何故彼女は涙を流す？何故彼女は大量に出る裏切り者の血を見て震える？何故彼女は自分を親しき者のように声をかける？

「大丈夫、大丈夫だ、ガルシュ。止血出来る。血は止まる。意識を意識をちゃんと保て……」

そんな、彼女を見てガルシュは笑ってしまう。ニッコリと頬をあげ顔一杯に笑ってしまった。腕から止めどなく血が流れていようと、その血で道が赤々と染まっていこうとも、ガルシュはビシュヌを見て幸せそうに微笑んでしまう。

「…目玉焼きは、半熟ですよネ？」

瞬間、ガルシユの顔が無惨に後ろへとはね上がる。な、にっ？と
ビシュヌがガルシユの顔をはね上げた物を見る。

剣である。英式の細いレイピア等ではなく。冒険ゲームなどで出てきそうな両刃のゴツい剣。刃には文字が刻まれ、その刻まれた文字は血で赤々と写し出されている。

「なんだ最後の？目玉焼きは半熟？気が触れて、おかしくなっちゃまったのか？」

ブラフマーが不機嫌そうに剣に付いた血液を振り拭う。シャンという音と共にびしゃつと地面に剣に付いていた血が張り付いた。

「…おかしい？」

「あっ？」

頭を後ろにグタリとさせたガルシュを右腕で抱き、小さな吐息を苦しそうにさせおびたらしい血を流す少女を左腕に抱き抱え、ビシュ又はぽつりと言葉を漏らす。

「当然、命は生きようとする。自然、命は1人では生きられない。決然、私達は共に生かし合わなければならない。必然、命は他の命を助けることとなる。…おかしい？何が？少女が？ガルシュが？私達が！？」

ビシュ又は腹の奥から言葉を吐き出す。心から、思いが込み上げてくる。悲しみが悔しさが憎しみが込み上げてくる。

「おかしいのはお前だろう！？なぜ、そんなに命を簡単に殺せる？私達は共に生きる命だぞ？支配？世界を支配した所で何になる？金か、名誉か、地位か？何だソレ？金が欲しいのなら働けば良い、名誉なら弱き者を助ければ良い、地位なんて善き行いをすれば自ずと付いてくるだろう？お前は何故、そう易々と他人の命を奪う！？」

ビシュ又はありったけの殺意を抱いてブラフマーを睨み付ける。だが、ブラフマーはそんなビシュウの殺意など気にしていないようにこやかに笑う。

「言いたい事はそれだけか？」

そして、カチャリと剣をビシュヌへ向ける。禍々しい程に尖った刃がズズツとビシュヌの顔に近づいてくる。しかし、ビシュヌは逃げない。ただ、真っ直ぐにブラフマーを見定め睨んでいる。

「健気だねえ…さつさと、逃げれば良いのに。そんなに、その2人が大事か？」

男と女。自然でいうと力の差は歴然。しかも、ブラフマーの武器は剣でビシュヌの武器は木製の杖。片や破壊を望む惨殺者、片や平和を望む博愛者。ここで、決まる決定的な未来。

「じゃ、死ねっ」

ブラフマーが剣を振りかざす。しゅおんと音が鳴り、空で剣が止まる。そして、禍々しく刃先の尖った剣がビシュヌの頭へと振り落とされ……………無い！？

高く高く振り上げられたブラフマーの剣は空に留まったまま振り落とされない。ブラフマーは剣を振りかざしたまま、どこかを見ている。それは、ビシュヌではない。彼女の座る場所の更に後ろ。燃える商店街の街路。その街路をスタッスタッとこちらに向かい歩いて来る人物。

ブラフマーは目を離せない。そこにビシュヌが居る事も忘れ。彼はただじつとこちらに向かつてくる男を見ていた。

黒服の男。肩から足まで包む黒い服を纏った黒髪の男。顴の長い帽子も黒で、足に履く靴も黒。唯一、胸に刺繍された十字だけが白く光っていた。

一体、ブラフマーは何を見ているのか？ビシュヌは彼が殺すターゲットをも忘れて凝視している方を見る。丁度、黒服の男がビシュヌの目の前に来た所だった。ビシュヌは目の前の神父服を見る。そして、その神父服の男の顔を確認した。

にっこりと笑う神父。優しく親しく柔らかかに、にっこりとビシュ
ヌに微笑む神父。

「お久しぶりですね、ビシュヌ？」

ビシュヌは知っている。いや、ブラフマーも知っているだろう、
この男。故に神父が着る黒い神父服を着ているのかは謎なのだけど
…。この顔を忘れる筈がない。つり上がった目は鋭いくせに優しく、
風に靡く肩まで伸びた髪は闇の様に黒い。にこやかに笑うその顔は
いつもシラツとしていて人がどれだけ心配していたのなんて知ら
ないっという感じ。

言い表せない怒りと哀しみと安堵感。ビシュヌは先ほどの殺
意などかなぐり捨てて涙を浮かべる。まるで、我慢していた物が遂
に噴き出してしまったかのようにビシュヌはその男の名前を呼んで
いた。

「つきかげえ…」

ぼろぼろに涙を流すビシュヌ。いくら人の上に立つ者とはいえ彼

女は女性だ。訳の分からない裏切りや親しき者の死にそんな状態などに平気なはずがなかったのだ。それでも彼女は1つのリーダーだった。だから毅然とブラフマーに立ち向かった、笑顔で命を奪う惨殺者に文句をいった。殺されると分かっているにも、涙1つ流さずに…。けれど、本当は泣きたい程に恐ろしかったのだ。

「ケガをしているのですか？いや、違いますね。ケガをしているのは、そちらの2人…。ガルシュと…少女ですか」

ひらりと月影はビシュヌの前に片膝を立ててしゃがみ込む。そして、サラサラとビシュヌの金色の髪を手で触り、ブラフマーを見上げる。

「なんだ、生きてたのか？」

そんな月影にブラフマーは心底つまらなそうに刃を鞘に収める。

「おや、私の口真似は止めたのですか、ブラフマー？」

「はっ、別にお前の真似をしてた訳じゃないさ…」

周りの炎がほぼ鎮火され、徐々に闇が支配権を取り戻していく。
ビューツと冷たい風が吹き、灰と化した商店街が舞い上がる。月は
影を落とすほどに明々であった。

第五十二話：博愛する者と惨殺する者（後書き）

こんにちは。

久しぶりの更新です。

えゝ、小説を見直し、ほんとに迷走している最近です。特に第二幕はご指摘もあつたのですが、設定がかなり幼稚……。いえ、そこから繋ぐ話もあるにはあるのですが、もっとこうちゃんとした話が書けたらどんなに良いかと鬱になっております（笑）こんな私ですが、どうか、見捨てないでやって下さい。

第五十二話目です。まだまだ小説『心から』の世界観が固まっていないので説明を入れないなあ、と前フリ的な感じで書いた話。なので次話はまたまた突拍子もない設定の話に…。

とりあえず、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

月影、やっとの思いで舞台上上げました。色々と書けてないので『社君とかどうなったの？』と自分で突っ込んでます（笑）

第五十三話：理由

月明かりが映える。静まりかえった街中で2人の殺人鬼が真つ正面で向き合っている。恐ろしく冷たい空気は肌を刺すほどで、あまりにも重かった。

「死んだはずの男が今さら何の用で生き返ってきた、月影？」

月影とブラフマー、全く対象的な2人である。

「償い…ですかね？」

「償い？」

月影の言葉にブラフマーは眉をひそめる。

「ええ、私が組織でやってきた行いに対しての償いです。全てが償

えるとは思いません。いや、一生をかけても償えないかもしれません。だけど、これが今の私に出来る精一杯の生き方……」

「……それはつまり、裏切りと……いうことか？」

「ええ、そう取って貰っても構いません」

そう言い、ゆっくりと月影はブラフマーのもとへと近づく。と、ギリと輝くブラフマーの剣がそれを静止させる。

「それ以上、近づくな！近づかれて貴様のナイフの餌食にされては堪ったものではないからな」

たと足をつかせブラフマーは後ろへと下がる。が、次の瞬間、月影の持つナイフがブラフマーに襲いかかる。3メートルは離れていたはずなのに、月影とブラフマーの間合いは一瞬にしてその距離を縮める。

「ふふっ、私のナイフを剣で受け止めるとは……」

「くくく、なんとも早業だな月影？」

ギリギリと拮抗する2つの刃。そして、鋭く高い音と共にお互い、その場から離れる。

「ナイフ一本で剣とやり合おうなんて、さすがに組織のボスだっただけはあるな月影？」

今度はブラフマーが剣を大きく振り下ろす。月影は襲いかかる剣に合わせ、身をよじり避けるが、バキンという音と共に振り下ろされた先の地面が決れる。

「ふふ、貴方は私がボスである事に不満がある派閥だったで、しょっ！」

剣を振り下ろした反動で動けないブラフマーに今度は月影がナイフの刃を立てる。

「つぐあー!!」

しかし、その鋭く突き立てられた月影のナイフも、即座にブラフマーが剣を地面から上げたため、剣に当たり弾かれる。からからからんと走るように地面を滑るナイフ。ブラフマーはナイフを無くした月影に重く鈍い光りを放つ剣を向ける。

勝敗の決定か。剣のブラフマーに丸腰の月影。黙せずブラフマーがすら笑いを浮かべる。

「USS」

「あっ?」

ふいに月影が何かを呟く。それは、日本の言葉ではない。英単語。月影は弾かれたナイフを取りに行く訳でもなくブラフマーに向かい呟く。

「面白いことを思いつく。合衆国の船が、しかも、戦艦が核弾頭をぶら下げて、この国にぶつかれば。もはや、冗談では済まない。一

体、貴方は何が目的なのですかね、ブラフマー？」

『USS』これは、とある大国の戦艦の通称。そして、その国は強
大で壮大で世界の中心たる国。その国が動けば、世界が動き、世は
荒れる。その国の行動は常に他の国に多大な影響を及ぼすものな
だ。

「そう……。そして、その国の戦艦が他の国にぶつかるという意味。
それは、何を意味するものなのか……」

ゆっくりと息を吐きながら月影は問い掛ける。ブラフマーの瞳に真
っ直ぐに瞳を重ねて。すると、その月影の言葉にブラフマーが答え
る。グニヤリと歪めた笑顔で月影に答える。

「まずは、1つ。国の歪みは世界の歪み。例えば世界の中心たる大
国の戦艦が、60年もの時間を平和に費やした凡国に、理由なき襲
撃をしたとしたら？」

ゆっくりとブラフマーは剣を己の腰の鞘へと収める。

「例えば、それが情報を操作された偽りの真実だとしても…。例えば、それがテロリストによるものだとして…。船が街に衝突したのは真実。疑いは、確実に信頼を蝕む！」

瞬間、ゴゴゴオオーン！という果てしなく大きく爆音が響く。地面が地鳴りを上げて大きく揺れる。商店街から見えるのは真つ赤に光る夜空の明かり。先ほどまで月明かりで照らされていた街は、再び一気に紅く燃え上がる炎の光りに照らされることとなる。

どうやら、この街の近くの港から炎は上がっているようだ。月影はその真つ赤に光る夜空に、ここに来る前にみた『原爆を積んだ船』のニュースを思い出す。

「当然、合衆国は否定をするだろう。事故、あるいは、他国の策略だと…。だがそれは、やがて世界に染り、疑心暗鬼を生む。そして、疑心暗鬼はやがて、被害妄想へと拡大する。……この国の、日本の制裁されるべき真は『戦争をしなかったこと』だ。60年もの時間を自分たちだけが、争いから逃れようとした。時には金を出し、時には争いの終わり始めた戦後に兵を送ったりして、体裁だけを整えていた」

「だから、合衆国の船をぶつけたと？しかし、それは貴方の勝手な言い分でしょう？たとえ、自分たちだけの世界にしる平和を貫くと

いうことは……」

「くくく、だが日本はその事について承諾済みだがなあ？」

「……つまり？」

「日本は気付いたのさ、戦争には経済的価値があると。犠牲者としての立場を理由にしたなあ。第一の被害者である故に疑いは他国へと向けられ、始まった疑心暗鬼の戦争に富みを貪る。日本のお偉いさんは、戦争が良い商売になることを知っていた。だが、平和を貫くと決めた以上、自らは戦争が始められない。そこで、日本は被害者になる事にしたのさ……」

ブラフマーはケタケタと笑い声をあげて饒舌に語り出す。

「この戦争ならば日本は戦争をしないという名目を貫く事が出来る。疑いは常に合衆国へ、さらにはロシアや北朝鮮。容疑者など、そこら中にいる。次はどの国が襲われる？一体、どの国が首謀者なのか？疑心暗鬼に駆られた世界は自ずと相手に牙を剥く。それに、乗じて日本は利益を貪るが疑いの目は常に他にある。ふふふ、まあ、起きてしまえば、火種なんて些細なことに過ぎないがな……」

燃える夜空は真っ赤に光り。見上げれば、映える事を許されなくなつた月明かり。それを黙して見上げ月影は思う。

（戦争が世の常になれば、被害者である国民は日本が戦争で利益を貪るとしても、それが戦争をする事とは感じられない訳か……。しかし、そうまでして、戦争を惹き起こして、お前は何がしたいのだ、ブラフマー！？）

月影は空を見上げたまま瞳を瞑る。それは、熱くなつた目頭が月明かりを歪ませるから、気持ちを落ち着かせ大きく深呼吸をするため……。

（もはや、これは正義を成す為のテロでは無いのですね……ブラフマー？）

悲しみは仲間だと思つていたからこそ。涙は止められなかった己の無力さに、月影は再び前を向きブラフマーに笑顔を向ける。

「ならば、ここで殺すが私に出来る最後の行い！さよならです……ブラフマーッ！！」

武器を持たずに走るは月影。それを鞘に仕舞った剣に居合い構えで待ち受けるはブラフマー。

交差するのは、一瞬。シュオンという音は軽く、ブシュンという音は重く生々しかった。

「かつ……くくく、だから、お前が嫌いなんだよ俺は……月影え……」

「……私は嫌いではなかったですよ、ブラフマー……」

ポタポタと大粒の滴が月影とブラフマーの間から地面へと落ちていく。そして、それは次第に流れへと変わり。次の瞬間、弾けるような音と共に赤い液体が辺りに飛び散る。

倒れたのは月影。だが、血を流すのはブラフマーであった。彼の首には彼が持っていた剣が深々と刺さっている。

出来事は一瞬。まずは、月影がブラフマーと交差する際に剣を持つブラフマーの腕を掴み、それを一瞬引き下げる。そして、ブラフマーが剣を取られまいと己の方に力を入れた所で、一気にその腕と剣を押し上げブラフマーの首に押し当て、切り上げる。もっとも、ブ

ラフマーは最後まで剣を離そうとしなかったため、剣は首を最後まで振り切る事なく途中で止まっているが…。

「ブラフマー。貴方はどうして…」

立ったままに死に絶えていくブラフマーに月影は優しい瞳で嘆くように言葉を投げ掛ける。しかし、その月影の言葉はもはや意識の混濁しているブラフマーには届いていない。

夜空は燃え盛る何処かの炎で真っ赤に光り、月は厚く広い雲に遮られていた。もはや、月明かりは影を落とすことも許されなくなっていた。

第五十三話：理由（後書き）

こんにちは。お久しぶりです。

ええと、もはやこれが精一杯としか言い様がございません（笑）

読んで分からなかった読者様。すいません！読んで面白くなかった読者様。すいません！とりあえず、まとめると…

ある平和な国の街に、合衆国、つまりアメリカの常用戦艦が衝突した事で世界は混乱し、戦争が始まるかも……と、その作戦を実行したのがブラフマー達という訳です。

そして、その街のある『日本』という国は、ブラフマー達組織に利用された、または、利用したという所ですかね…。

……すいません、これが精一杯です！！（笑）もう少し面白く書けるよう頑張って努力致します。皆さま、どうか呆れずにもうしばらく私めにお付き合い下さいませ！！

それでは、この辺りで失礼致します。ありがとうございました。

第五十四話：黒少年と金髪の殺し屋

【月影・ブラフマー衝突、数時間前】

「をい、やしろお？俺は帰りたいんだけどお？」

金髪をオールバックに決めた黒革のジャンパーを来た男が隣にいる少年に話しかける。

「……月影さんは、俺たちに民間人を救出するように言った」

話しかけられた社という少年は金髪オールバックの男に一言そう言うことさつさと商店街を歩いていく。

なんとも愛想の無いガキだ。金髪オールバックの男はため息をつき社のあとを着いていく。

ああ、それにしても何の因果か。何ゆえに自分が元いた組織に敵対しなければならぬのか。金髪の男はゴールドのライターの蓋をカシアンカシアンと開けたり、閉めたりして商店街の中を歩く。

カルロスⅡオジエツト。

それが金髪の男の名前である。

鼻が高く小綺麗な顔なのだが、つねに締まりのない顔をしておりどこか飄々としているこの男。実は最近までテロ犯罪組織『crow n』の殺し屋として活動をしていた男である。

が、ひよんな事にある作戦任務中に月影と出くわしてしまい、その任務を阻止されてしまう。組織にて任務を阻止され失敗してしまうという事はどういう事か、カルロスは知っていた。そのため、任務を失敗したカルロスが組織に帰れず困っていると、事の原因である月影から自分の下で働かないか、という申し出が出てきたのだった。

まあ、どうせ行く宛などないこの男。月影の提案にかなりの高給取りで了承したのだが…

（はあ、やっぱりやめときゃ良かったかなあ？いくら、儲かるからって直属の上司がガキって……）

こんな燃え盛る商店街で誰が生き残っていようものか。さつさと帰ってビールでも飲みたいぜと金髪の男、カルロスは再び大きくため息をつく。

「兄はきっとこちら辺にいます。柚子も早く見つけるです」

「……………わかった」

おや？とカルロスの眉がピクリと上にあがる。声のする方向には少女が2人。黒というより藍に近い色の髪をしたピンクのトレーナーを着る少女と淡い水色の髪をした赤いトレーナーを着る少女。

（なんととも社の勘は鋭いね。まだ逃げ遅れた民間人がいるとはね）

やれやれとカルロスは何やらキョロキョロと周りを見渡している2人の少女に近寄っていく。

「ヘイ、リトルレディ達。ここは危険だ。俺と一緒に避難所まで避難しな」

「外人さん、日本語上手なのか下手なのか分かん喋りですね」

「……夏樹探す……邪魔しないで」

カルロスの胡散臭い日本語に警戒心マックスの少女2人。それもそのはず、何者かの襲撃で燃え盛る街中。怪しい外人に胡散臭い日本語で喋りかけられたとしたら、誰だって警戒をするというもの。むむむとカルロスを睨み付けてくる2人の少女。

そんな2人にやれやれ、大人のレディなら口説きながら警戒心を解くんだが、とカルロスはポリポリと頭のでっぺんを掻く。

「……ああー、そうだ。やしろおー、やしろお。民間人がいたぞおい」

「……仲間呼んでいます」

「……やる!」

「んっ?やるって?ヘイ、ブルー・リトルレディ?何を……ゴッオ!」

それは魔王の一撃！2人の少女を見つけたカルロスだったが、自分に警戒心マックスなので代わりに社を呼ぼうとした瞬間。カルロスの腰の下辺りにきた強烈な一撃。攻撃をした水色の髪の少女にとって、まだ幼い故にそんな事は与り知らぬといった所なのだろうがカルロスが受けた強烈な一撃、その場所を…男子、其所を急所と言う。

水色の髪をした少女の一撃はあまりにも理不尽かつ無遠慮きわまらない一撃であった。地面に転がりこみボタンボタンと股を閉めながら膝から下の足を打ち鳴らすカルロス。要は金的を喰らって悶絶中なのだ。ゴロゴロと地面を転がり回るカルロス。地面、商店街、空、地面、商店街、空、地面、商店街、空と交互に交互にカルロスの視界に入ってくる。

一段落して、うぐぐつ…と地面に顔を埋めて唸っているカルロス。先ほど視界に入ってきた商店街の商店『八百屋・加賀』という名前が頭から離れない。いや、そんな余計な事はどうでも良いのだが、あまりの痛さにそんな余計な事でも考えていないと気が狂ってしまいそうなのだ。

「柚子、よくやったです！さすが、空海家の三女です！」

「むふい…頑張った」

少女2人は何やら誇らしげに語っているが、大事な大事な男の象徴に無遠慮な攻撃を加えられ悶絶しているカルロスにとってもはや、それは冗談では済まされる事ではなかった。

「なにをしている、カルロス？」

と、そんな2人の少女とカルロスの前に黒い服を着た少年が現れる。社である。彼はなにやら地面に顔を埋め、尻を空に向けて、くの字の体勢で腰の後ろ辺りをトントンと叩いているカルロスに軽蔑の視線を送っている。

「新手です」

「……新手？」

「違うつで、いづでんだろお？リトルレディ達、俺らはマジで君らを助けに……」

「……カルロス、小さな子にまで手を出したのか？だから、こんな警戒心を抱いているのか？変態なのか？カルロスなのか？」

「オオオオイッ？なんだ、なんで変態の後に固有名詞で俺の名前がきた？なんだ変態とカルロスは同義語なのか？もしくは類義語なのか！？」

カルロスは未だ腰引ける出で立ちで少女2人と黒少年に突っ込みを入れる。だが、社はそれを全く無視して2人の少女に話かける。

「……君たち、この男の言うようにここは危険だ。少し遠いが避難所があるから俺達と一緒にいこう」

カルロスは今までに見たことの無いくらい笑顔な社の顔に驚愕する。なるほど、これが世に言う営業スマイル？そんな事をカルロスが考えていると気付いているのか、いないのか、社は構わず2人の少女に笑顔で避難するよう促す。だが、少女達は一向にうんとは言わない。

「……私達にはやるべきことがあるです。兄である空海夏樹を探すです。だから、まだ避難なんて出来ません」

「……夏樹知る？知らない？」

どうやら、この2人の少女は探し人がいるようだ。よく見ると所々に怪我や汚れが目立っている。よほど走り回ったのだろう。彼女たちの腕に持たれるお揃いのクマの人形も燃える街の煤すすだらけであった。

「空海、夏樹だと？」

と、いきなり、聞き覚えのない声が社とカルロスの後方から聞こえる。その声に社とカルロスは一斉に後ろを振り向く。

「くつくくく、貴様ら空海夏樹の関係者だな？くはっ、くははは、運がいい。俺は運がいいぞ。あのバケモノを取り逃がした責任でブラフマー様に殺される所だったが、くくく、貴様らを殺せば俺の命は助かりそうだなあ？」

そこに居たのは黒服ミリタリー仕様の男。体に大量の手榴弾を掲げ、手には軍用ライフルが構えられており、こちらを見る顔には暗視ゴーグルが身に付けられていた。この桜台大間市を襲う謎の集団。いや、戦争を望むブラフマーが街に放った殺戮者たちの1人。

ここに奇妙な出会いが重なる。

月影の指示で街の人間を避難させていた社とカルロス。そこに現れた夏樹を狙い敗北した黒ミリタリー服の殺戮者。そして、藍色の髪の少女と水色の髪の少女、空海柊と空海柚子。

話が思わぬ所で交差した。

第五十四話：黒少年と金髪の殺し屋（後書き）

こんにちは。

話は月影達の物語より時間が戻っております。

さて、第五十四話目です。黒少年と金髪の殺し屋。覚えていらつしやいますでしょうか？いつかの殺傷通り魔事件の時の社くと犯人であったカルロス（その時は、まだ名無しだったけどこの人）。いつの間にやら仲間になっていたようですねえ。

そんな彼らが出会った2人の少女。そして、その出会った場所は？更に、この後一体？

とりあえず、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

『八百屋・加賀』とは、夏樹がよくお世話になっている女将さんがいるお店の名前…。実は3回目の登場。一回目は夏樹の休日編で、

そして、この話が3回目。あれ、2回目は…？

第五十五話：交錯する者たちの戦場

それは組織にて野望を叶えんとする為に作られた兵器。幾重にも重ねられた科学技術によりて、作られたその兵器はまるで現実を破壊するかの如き力を持つ。近代科学とはまるで一世代も二世代も飛び越えた、その科学はまさに魔術。

そう、我らはその魔術によりて造られた怪物。兵器を扱う者こそ兵器と化せよと造られた怪物。幾重に渡り、開始された訓練は拷問で、幾重に渡り繰り返された実験は地獄であった。だが、我らは耐えた。いつか訪れる我らの野望の実現の為に、我ら野望の礎にならん為に日常を忘れ、家族を忘れ、もはや己が誰であるかも忘れた我ら。なぜ、戦うのか。なぜ、生きるのか。忘れた我らに分かりは出来ぬ。だが、いま我らが存在する理由。我らが生きる理由。我らが野望の為に。

『なんだ、失敗をしたのか？5人もいて、民間人1人始末出来なかったのか？』

我らは、組織が造りし兵器。

『まあ、いい。俺はこれからビシュヌを始末しに行く。それから、俺直々に空海夏樹を始末すればいい話だ。月影が死んだいま、邪魔者はあの平和ボケしたお嬢様のビシュヌと数合わせて入れてやったシバ様の身代わりのあの男。あとは、このブラフマーが真の主を迎えにいけば、今回の任務は終了だ』

我らは、戦う。組織の野望のために…

『あん？なんだ、まだそこに居たのか？　たく、使えない道具はさつさと……死ねえ！！』

ナーバ、トラリア、アルセド、リロイ。我らはなんの為に生きてきた？　なんの為に任務をこなしてきた？

『つと、なんだあ？　ガルシュから連絡が来やがった。ああん、ビシュヌが空海夏樹と接触？　ちつ、次から次へと問題を起こしやがっておい、死に損ない。ここに居ろよ。次に俺が帰って来たときがお前の最期だ。部下の後始末くらいは、出来ないと示しがつかねえからなあ……』

我らは何のために戦ってきた？我らは誰だ？何の為に生きている。
我らはどこで産まれた？我らの故郷はどこだ？何故、我らの記憶は
無くなっている。疑問に思わないのか？同胞よ、疑問は沸かないの
か？任務につく我らの仲間よ？

思い出したい。我は答えを知りたい。我は誰で、我はどこで生まれ
て、我はなぜ記憶を失ったのか……。生きなくてはならない。殺され
てはならない。

「……私達にはやるべき事があります。兄である空海夏樹を探すで
す。だから、まだ避難なんて出来ません」

「……夏樹知る？知らない？」

我とは一体、何者なのだ！？

「空海、夏樹？」

まだまだ！まだ、我は死ねぬ！！我はなぜ記憶を失った？我はどこで

産まれてどこの誰でなぜ組織で戦っている？我は生きなくてはならない。我は殺されてはならない。

「くつくく、貴様ら空海夏樹の関係者か？くはっ、くははは、運がいい。俺は運がいいぞ。あのバケモノを取り逃した責任でブラフマ―様に殺される所だったが…くくく、貴様らを殺せば、俺の命は助かりそうだなあ？」

我は己の存在を知りえるまで、死にはしない！

∴ ∴ ∴ ∴ ∴ ∴ ∴

「あつ、ああ……オウケエ。あんたが、まず、組織の戦闘部隊だつてのは理解できる」

金髪の男、カルロスは両手を肩まであげて、やれやれと首を振る。この目の前の男は危険だ。カルロスのいままでの経験と生まれ持った勘が、この組織の戦闘部隊の黒ミリタリーの男を危険だと判断した。だから、カルロスはとりあえず、お得意の口上でこの場をやり過ごそうと話しかけた。

「……敵、夏樹危ない……殺す!!」

「んな、物騒な!? ブルーリトル!？」

だが、そんな組織の戦闘部隊の黒ミリタリーの男に穏やかにカルロスが話をしようとした、瞬間。水色の髪をした少女、柚子が男に向かい銃を撃ち放つ。

バキンと放たれた弾丸は男の顔面にヒットする。硝煙が辺りに立ち込め、苦い匂いが全員の鼻を燻る。

「くくく、ただか、9ミリの弾丸が我に効くとても…?」

その場にいた皆が目を疑う。効いていない。確かに弾丸は柚子のそれを飛び出し男に当たった。だが、その放たれた弾丸は弾かれてしまったのだ。まるで、鋼鉄の盾に弾かれたが如く、弾丸は地面へと落ちてしまう。

それから、男が不気味な笑い声をあげながら柚子へと黒く光るナイフを投げつける。

「くくけ、くケケケケっ!？」

「!?!」

柚子は動けない。

男が放つ黒いナイフを目視するものの、己の弾丸を顔面に受けても尚生きている敵に驚き、逃げる動作が遅れてしまう。

(……くる……でも、避けられない……)

柚子は真っ直ぐに飛んでくるナイフを見詰めて考える。頭に当たるのだけは避けなければ、せめて致命傷な場所に当たるのだけは避けなければ……。

瞬間、ぐわつと柚子の体が斜め真上に上がる。えっ？と柚子がそちらの方向を見るとカルロスが自分の体を掴み、そちらの方向に引っ張っていた。

しゅん！と風切り音と共に柚子の逃げ遅れた前髪がナイフによってチラリと切断される。間一髪。まさに、柚子の頭とナイフが接触するまでギリギリの距離であった。

「はっ、笑えねえ？笑えねえよ、あんた！バケモンを相手に勝てる道理も無いってねえ！？」

カルロスは投げられたナイフから柚子を自分の方向に引っ張り守ると、黒ミリタリーの男に向かいそう叫ぶ。

「おかしいと思ったんだわ？いくら、組織の部隊だからといって、

その装備は無いわと思ったんだわ？」

「なにが言いたいんだ、カルロス？」

急に饒舌に喋り出したカルロスに社は稀有な表情を送る。

「おう、社！逃げるぞ！？ヤバい、コイツはヤバい！！」

「だから、何がヤバいと……」

カルロスはそう言うと、柚子を片腕に抱えると社に柵を連れて逃げるよう告げる。

カルロスは己の中にある、とある妄想に否定の言葉を投げ掛ける。違う、違うって、あれは噂の中の話だっただろうが……！？

カルロスは知っていた。黒ミリタリーの男を。カルロスは知っていたのだ。その男が装備がどのような意味を指しているのかを。

『名も無き死霊たち』

かつて、そのような名前の部隊を組織で聞いたことがあった。それはある実験の為に失敗した被験者たちだけで作られた暗殺集団だとか、薬を射たれ自我を失い死をも恐れぬアンデッド集団だとか……。とにかく、奴らの持つ装備は全てが普通の人間が使うには不適格で、異常な破壊力を持つ物だと聞かされた。そう、彼らはその為だけに作られた集団だとも噂されていた。

組織が作った幾つかの武器の中には、あまりにも人間が使うには危険過ぎると判断され、処分された物がある。それが組織でのルールであり掟だった。組織での前ボスである、とある男が定めたルール。それは後世のボスである月影にも受け継がれた。だが、ある日、組織のある科学者が言った言葉にそれは覆されてしまう。その科学者は言った。己の最高傑作の兵器が処分される様を見て言い放った。

『なら、兵器を使う兵器を作ればいいじゃないか……』

兵器を使う兵器。それはロボットなどではない。生きた人間を使い、兵器を使う兵器に変えるという計画。優等な殺し屋を使い薬漬けにし、無痛無感情無慈悲に造りしソレは人ではなく兵器。戦場にて、ただひたすらに戦果をあげる無情な兵器。己が傷付くことも、他人が傷付くことも恐れない。

いや、それは噂に過ぎなかった。組織にて作戦任務を完遂させる為に作られた都市伝説のような物だと思ってきた。だが、カルロスは寒気を覚える。ならこれは？なら、その噂と符号するこの男は何者なのか？

「……を……うつみを……我……俺……知るために……せ……うつみを……せ……うつみを……殺せえええーっ！！」

「！？」

その男のかすれた生気の無いその言葉に、それでいて無情にも叫ぶその男に、その場にいた誰もが背筋に寒気を走らせる。

社も、柊も、柚子も、カルロスのいうヤバいと言っ言葉が理解出来た。この男はなにか危険だ。この男はただの人間なんかではない。カルロスは片腕に柚子を抱え、社が柊を片腕に抱え走り出す。2人とも、商店街の一本道を黒ミリタリーの男から逃げようと走り出す。

「にげるな……にげるな……逃げる、なああああーっ！！」

だが、それを黒ミリタリー男が許さない。叫びをあげる男は、その背中から黒光りした鉄塊を取り出した。今度は、それを見たカルロスがその場で叫び声をあげる。

「げええっ！？ありや、ヴィーダルシューズの銃！？弾が20ミリのバケモノじゃねえかつ！？はっ、当たれば頭蓋がぶっ飛ぶどころじゃ済まされねえぞ！？はっ、街中に大砲なんて…持ってきてんじやねえぞ、バツキャロオーツ！？」

だが、カルロスのその叫びも虚しく、黒ミリタリーの男がゴツく黒光りする鉄塊を構える。カルロスの感覚がチリチリと熱を放つ。

（狙われているのは…俺か！！）

瞬間、大砲のような爆音が鳴り、シュゴオオオオっというあまりにもあり得ない弾丸が飛ぶ音が辺りに響いた。

「やしろおっ！！おらーっ、ブルーリトルを受けとれえーっ！！」

黒ミリタリーの男に狙われていると理解したカルロスは柚子を社の方を目掛けて投げ渡す。

「ひいう!？」

宙に舞った柚子が可愛らしく、叫びをあげる。それを社が上手く柁を持ち抱える反対の方向で受け止めると、次の瞬間。

「ぐっ!カルロス?お前!？」

「おらあつ、来いいつ!たとえ頭蓋が割れたとて、俺の刃は弾丸をも切り裂くぜえっ!？」

カルロスが腰に差した刃渡り30センチの黒光りしたナイフを取り出し、そして、その刃で目の前に迫る小石（大）の大きさの弾丸を切り裂こうと一直線に振り下ろした。

ドンッ!!

腹の奥に心底響くような鈍い音が辺りに響き渡る。パラパラと大砲のような銃によって破壊された商店街の一角が崩れさっていく。

「カルロス！？」

社が弾丸の衝撃で舞った土煙に視界を細め、カルロスを呼ぶ。

「……………」

応答は無い。

くそっ！？社はカルロスの生死を確認する間もなく、2人の少女を両脇に抱え走り出す。ここを離れなければ。一刻も早く、あの危険な男から逃げ出さなければ！？

社が満身の力を込めて地面を蹴り上げる。いまだ、土煙の立つ商店街を抜け出してしまおうと、足を走り出させる。

「うふふ、駄目ですよ。逃げて貰ったらあ……」

「！？」

だが、それは突如現れた1人の髪の長い女に阻まれてしまう。桃色の絹の着物を着たその女。にこやかに社を見詰めるとゆっくりとその場から退く。と、その影にもう1人の人物。背は高く、中国調の服を着て、逆立てた髪は鬼を想像させられる男が立っていた。

「……何者!？」

社に言い知れぬ濁る汗が流れる。何だ、これは? 一体、何が起きている?

「久し振りだな……」

中国風の男がゆっくりとこちらに歩み寄ってくる。久しぶり? 言われて社は頭を探る。しかし、この中国の男に見覚えがない。この男は何を言っているのだろうか?

「久し振りと言われるほど、貴方とは親しくなかったと思うが……?」

この桃色の和服を着た女と中国服を着た男。何者なのか？社は、何故、このタイミングで、こうも次々と厄介な事が起きるのかと心の中で舌打ちをする。後ろには、信じられないくらい馬鹿デカイ拳銃をぶっ放す危険な男。前には得体の知れない、和服と中国服の女と男。

敵なのか？テロ犯罪組織の仲間なのか？だとしたら、最悪だ。前門の虎に後門の狼。カルロスが居たならば、軽く何か考えるはずだが……頭の固い自分では！？社は信じられないくらいに爆音を上げる心臓に動揺を隠せない。くそ、くそくそくそつと、額からおびただしい程の脂汗が流れる。

「……7号。組織から逃げて、何処に居るかと思えば、ここにいたのか」

すると、中国服の男が社に話かけてきた。やはり、親しげである。隣にいる和服の女もにこやかに笑い、こちらを見てきている。やはり、知り合いだったのだろうか？いや、しかし……

「7号？」

この言葉が社には引っ掛かった。7号なんて、そんな番号で呼ばれ

た記憶など自分にはない。学校の出席番号だとしても、この2人がそんな平和な学校の関係者だとは考えられない。では、一体、この男たちは何者か？

「さあ、行くぞ。我らの世界はいま確実に近づいている。貴様はその新たな世界の住人となるために生まれたのだ」

「俺は7号なんて名前じゃない、それにあんたとは……」

そこで社は何らかの違和感を感じる。この男、自分を見て喋っていない。顔は確実に自分に向いているが……。視線は僅かにズレている。横？そう横だ！この中国風の男は自分の右横を見て喋っている。と、社はその右横に抱えられた少女を見下ろす。見下ろされた少女は沈黙を保っている。じつと喋りかけてきた中国服の男を見つめている。そして、ゆっくりと閉ざしていた口を開けた。

「……7号違う……柚子!!」

そう答えたのは社の右腕に抱き抱えられた水色髪の少女、柚子であった。

第五十五話：交錯する者たちの戦場（後書き）

お久しぶりです！

迷走、瞑想、めめめそのオオトリです。はい、もう話が飛んで飛んで收拾がつかなくめめめそ泣いております。

そんな訳で、久しぶりの第五十五話目です！！本当にもうお待ち致しました。（……待っている方がいらっしゃるのでしょうか？不安ですね（笑））

ええ、まずはこんな自己満足のようなぼろぼろの小説をここまで見捨てずに呼んで下さっている読者さまにお詫びと感謝の念を深くお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、この小説、收拾がつかなくなって、はや五十五話目まで来てしまった訳なのですが。

柚子です。最初、七号と呼ばれていたんですね。覚えていらっしゃるますか？（いまは数字で7号になってますけど）

この設定、生きてたんですね。私自身、書いていてびっくりしました。あんた、7号じゃん！？って…。

はい、柚子を7号と呼ぶ、中国服の男。あいつです。しかも、なんか新しいキャラで和服の女性を侍らせてます。

何はともあれ、交錯する者たちの戦場。

黒ミリタリー男が、中国服の男と和服の女が、そして、我らが水色の少女・柚子が…。

それでは、長々と喋らせて頂いたのですが、ここら辺りで失礼したいと思います。ありがとうございました。

ここまで熟読なさって下さった読者さま。どうか、こんなぼろぼろの小説でございますが、今後ともご愛読のほどをよろしくお願い致します。

第五十六話：交錯する者たちの戦場（2）『柚子と柊と』

「……………柚子？」

髪を逆上げた中国服の男は柚子の名前に不可思議な表情をする。

「あらあら、アドバンスのメンバーが自分で名前をつけるなんて……
うふふ、いけない子」

それに和服の女がころころとにこやかに笑いながら中国服の男の腕に自分の体を抱き寄せる。

「うふふ、修羅様。もしかして、7号は、エクスネームを組織のどなたかに与えられたのかしら？」

「さて、我の方ではそのような事は聞いてはおらぬな。7号はエクスネームを得る前に組織から逃げ出したと聞いている」

修羅と呼ばれた中国服の男は己の腕に抱き付く和服の女を見てそう答える。

「そうなのですか？ふふっ、まあ、柚子ちゃん？と貴女の事はそう呼びましょう。それじゃあ、行きましょうか？修羅様が直々に迎えに来るなんて本当はあり得ない事なのよ？うふふ……」

と、和服の女が柚子に手を差し伸べた。それに対して、社の腕に抱き抱えられていた柚子は地面に降り立ち、その腕を……と歩み出す。

「柚子？」

それに柊が声をあげる。

「……だめ……駄目です、柚子……！」

更に大声を上げ柚子を止めようと柊は柚子の前まで走り出す。行つては駄目だ！その手を取つては駄目だ！！柊は柚子にありつたけの声で訴える。

「柚子は私の妹でしょ？ 柚子は姉の妹でしょ？ 柚子は兄の妹でしょ？ 柚子は私たちの家族でしょ？」

だが、それに柚子は答えない。じっとそれを見詰めているだけ。じつと柊が喚くのを見ているだけであつた。

「……柚子ちゃん。君はその男の仲間なのか？」

さらに社が柚子に話かける。お前はあの修羅という男の仲間なのか、つと……。

「うふふ、そうです。柚子ちゃんは、私達『ユニファイ』のメンバーですわ」

黙して語らない柚子に、和服の女が代わりに答える。

「ユニファイ？……クラウンと違うのか？」

社がそう問うと、今度は髪を逆上げた中国服の男、修羅が答える。

「クラウンとは、似て非なる存在。我らは全ての総合であり、頂点である。『crown』つまり、『王冠』は、その意味であり。我らはそれを持つ者の集まり」

「……つまり、結局はお前たちもこの街を襲うテロ犯罪組織という事で良いのだな？」

「うふふ、違うわ。テロは過程であって目的では無いの。私達は、世界を再生させる為に仕方なくテロ行為をしているのよ？」

和服の女が、そう答える。社はそれに『なるほど』と、相づちを打ち……。

「腐っているな、犯罪者！！」

そして、びぎりと犬歯を立てて2人を睨み付けた。

「……………うそです」

ぽつりと柊が言葉を漏らすように声をあげる。

「柚子は違います。柚子はテロリストじゃないです。そんな他人を……兄を……傷付けるような犯罪者じゃないです!!」

だって、そうでしょう？ いまだ、黙して語らない柚子に柊はそう問いかける。

あんなに楽しそうに暮らしていたじゃないですか？ あんなに楽しそうに笑っていたじゃないですか？ 兄は貴女を妹だと、大切な家族だと言いました。だから、私も貴女を妹のように思いました。そりゃ、最初は兄を取られるのではと心配もしました。でも、今は同じく兄を思う妹として、姉妹として貴女を大切な家族なんだって……。なのに、テロリスト？

兄を傷付けて……父を奪った……犯罪者!?

違う。柚子は違う。今は違う。今は兄を思う。私と共に思う。大切な家族なんだ!!

そうでしょう、柚子？ と柊が柚子にその小さな腕を差し伸べる。悲

しく切なく、いまテロリストに戻ろうとする妹に行かないでっ、と
その手を差し伸べる。

「……邪魔」

「!？」

だが、その差し伸べられた柊の小さな思いは、柚子によってびしり
っと軽々しくも振り払われてしまう。

じんじんと熱を放つ差し伸べた右手。柊は左手でそれを胸に抱えな
がら柚子の行動に驚いた顔をする。

「……家族？……兄？……妹？……笑わせないで……」

そんな柊に柚子が、心底、滑稽だと失笑を浮かべる。

馬鹿じゃない？何が兄？何が妹？何が大切な家族！？

「馬鹿じゃないの？……私は今も昔も『ユニファイ』の殺し屋。一
時を過ごしたのは空海夏樹を観察するため……家族？……はっ、笑

わせないで……」

心底、詰まらなそうに柚子は目の前に立ちはだかる柊の体を強く押し退ける。グイッと押し退けられた柊は、柚子の言葉に柚子の今まで見えたことのない表情に力が入らず、そのまま地面へと倒れ込んでしまった。

「……じゃあ」

もはや、表情は形を成さない。悔しくて、悲しく、やりきれなくて、柊は顔を地面に向けたままあげられない。だから、地面を見詰め、涙を必死にこらえ、柚子に聞いた。

「あれも、嘘だったですか？」

ゆっくりと、涙をこらえて、繰り返し出てくる嗚咽をこらえて、柊は柚子に聞いた。

「初めて出会った時、私と初対面で兄を取り合いましたよね？」

ふるふると地面に着いた両手が力を制しきれなく震えを生み出す。

「それからことあるごとにどちらが兄と仲良くするか競い合っていましたよね？」

もはや、涙は瞳に留まっ^ていてはくれない。きらきらと光るそれは柊の綺麗なその瞳から砂利の地面へと流れ落ちていく。

「クリスマスの時、サンタのお話を一生懸命に聞いていましたよね？ 姉の作ったケーキを嬉し^{そうに}、兄と姉と私と一緒に食べましたよね？ お正月は凧も上げました、コマも回しました、それ以外にも少しの時間だったけど楽しく、笑って過^ごしていましたよね？」

思い出す思い出は短く少ない。でも、それでも、それは幸せで楽しい時間だった。幸せで楽しい毎日だった。よく笑った。よく遊んだ。よく一緒に…

「…………あれも？」

過ごしたじゃないか！？それも、それも全て…

「あれも全て、嘘だったと言うのですか？」

全て、嘘だったというのか？

否定して欲しかった。違うと言って欲しかった。テロリストの仲間に戻ろうとしたのは、自分たちにテロリストが危害を加えようという為に仕方なく、柚子に笑って欲しかった…

「そう。全ては組織の為に。全ては統合する世界の『ユニファイ』の為に。私は貴女方を利用した。私はアドバンスチルドレン。組織『ユニファイ』によって造られた戦闘兵器…」

だが、答えは柊のそれを遥かに上回った現実。現実とも付かない非現実な現実。

戦闘兵器？誰が？柚子が？自分と変わらない歳なのに？同じく子どもと称される存在なのに…兵器？

沈黙は驚愕する柊に耳痛い、心臓の鼓動を打ち鳴らし。黙して、柚子は中国服の男と和風の女と共に柊から去っていく。柊はもはや、言葉が出ない。決定的に別れを告げられたのだ。お前とは住む世界が違うのだと…

「くっ、待て！まだ、話は…」

それに、社が柚子を止めようと去り行く3人の前に立ちはだかる。

「うふふ、拾った命を大切に使うのよ、少年くん少女ちゃん。本当は、この街の住人は全て抹殺することになっているのだけど…」

だが、それを見て和風の女がにこやかに社を退ける。やんわりと体を押された社に次は…

「7号に免じ、貴様の命。いまだけは見逃してやろう…だが…」

「ぐっ!？」

修羅が社の首を掴み、信じられない力で締め付けてくる。ゆっくりと手を伸ばしたはずの修羅なのに社は避けられなかった。なにを思ったか、気付いたら首をその大きな腕で締め付けられていた。ぐぐつと修羅が、社の目の前に顔を近づける。あまりにも鋭い眼光。本当にこの男は人なのだろうか？その姿はまるで鬼。

「いまさらに邪魔をするというのなら……いま、お前を殺す!!」

社は動けない。

修羅と呼ばれる男の気迫に押し負けた。

ぱつと離された首に安堵を覚え、座り込んでしまう。もはや、戦う意思はない。己を兵器と言う少女、テロリストの仲間だと言う少女その少女を闇へと誘う鬼のような男。ただそれを見送るしか出来ない自分が情けなく、社は唇を噛み締める。広がる血の味が嫌に印象的で、あまりにも無力な自分に戒めさを感じさせられてしまう。

もう、誰も止めない。誰も止められない。柚子を止める者は誰1人として居なくなった。柚子の決定的な別れの言葉によってその思い

を砕かれました。修羅のあまりにも鋭い眼光と恐ろしい姿に戦う意思を根こそぎ削がれてしまった社。黒いミリタリー服の男の襲撃によってその身を焦がしてしまったカルロス。

もう誰もいない。もう誰も去り行く水色の少女を止めることは出来ない。

こうして、幸せを求めた少女は結局、平等という世界によってはめられた足枷に、再び闇へと体を墮としていく。もう、少女の瞳には幸せという希望さえ見えなくなっていた。

「っがあああああああーっ!!」

瞬間、終わりを告げて静けさを保っていた商店街にそれらをぶち壊して男の叫び声上がる。

「うつ…み…うつみ…うつみうつみうつみ…うつみをころせえええーっ!!」

そこに現れたのは、黒いミリタリー服を着た男。体には数えきれないくらいの手榴弾を巻き付け、片手には黒く光る不気味な刃のナイフを携え、叫び声を上げる、その男。

ズダボロに破れた黒い服は何者かに鋭い刃で斬られ、ぼろぼろに崩れた暗視ゴーグルの傍らからは赤く染まった瞳を血走らせている。

この男、先ほどから仕切りに『うつみを、うつみを……』と叫んでいる事から先ほど襲ってきた黒ミリタリー服の男に間違いない。

だが、一体、いままで何をしていたのか。カルロスに馬鹿げた程に大きい銃を向け放った後、土煙で目標を見失っていたのだるか。

ともかくにも、黒ミリタリー服の男はいま再び。いま再び、柊たちの前にと姿を現した。

第五十六話：交錯する者たちの戦場（2）『柚子と柊と』（後書き）

こんにちは。

迷走中のオオトリです。

ええ、また組織です。またかよ、て感じですが。この組織の存在は前から書いてあったもの…。組織『ユニファイ』に修羅たち『アドバンス?』。

まあ、ちよつと、また突拍子もない設定が出てくる前兆であります（笑）。

さて、とにかく、第五十六話目です。

柚子は柊たちと離れる事を決意しました。止めたくても止められない柊と何を思つか去り行く柚子。

そこへ再び、黒ミリタリー！？（いい加減、この呼び名は使いにくいです（笑））

この後、一体！？

では、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

次は、突拍子もない設定的にぼろぼろな感じな話になると思います。ですが、それでもどうかもうしばらく私めにお付き合い頂ければ幸

い……。変わらぬご愛読と応援の程をよろしくお願い致します。

第五十七話：交錯する者たちの戦場（3）『修羅と黒ミリタリーの男』

「ぐっぐぐ、うつみを…」

ずさりずさりと藍色の髪をした少女・柊に歩み寄るのは黒いミリタリー服を着た男。

「ふうっ!？」

男はがしりと地面に倒れる柊を掴み上げると、その手に持つ刃を彼女の首に宛がう。

「死を…死を…死を…」

「ほう、グールがまだこの街に残っていたか…」

「…………あああ？」

そんな黒ミリタリー服の男に髪を逆上げさせた鬼のような男、修羅が言葉を漏らす。

「！？」

そんな言葉を漏らした修羅に気付いた黒ミリタリー男は、柵に宛がう刃を下ろして、じっと修羅の方へと視線を移す。

「しゅら…しゅしゅしゅ…しゅらしゅら…しゅら…修羅らあああ
あっ！？」

常軌を逸したように男は声を荒げる。目の前の中国服の男に叫びをあげる。

「きさまが…貴様が、貴様が貴様が貴様が、空海夏樹に確実にとど

めをさしておけばあああつ！？」

黒ミリタリー男は掴んでいた柵を放り投げると、一目散に修羅のもとへと走り出す。片手に持った黒光りしたナイフを突き立てて修羅へと襲いかかっていく。

「あら、もう、躰の無いグールだわ？修羅様に近づかないでっ！！」

と、それを和服の女が制止する。女は和服の袖から赤い色の扇子を取り出すとおもむろに縦に振り落とす。途端、振り落とされた扇子から幾つもの鋭い刃。クナイが飛び出し、黒ミリタリー男の体に突き刺さる。

「ぐがあああつ！？」

男はいきなりの攻撃に歩みを止め、その場に座り込んでしまう。それに和服の女が、さらにとどめをと扇子を高らかに振り上げる。

「待て、シャロン……」

だが、修羅がそれを制止する。言われた和服の女、シャロンはスパツと扇子を広げ、再び閉じると袖口へとそれを仕舞う。

「……………いま、貴様、なんと言った？」

修羅は男を見下ろすと、先ほどの男の言葉を確認する。

空海夏樹にとどめをさしておけば？修羅にはその言葉が、どうにも気になった。空海夏樹とはブラフマーの依頼によりて抹殺を行ったターゲットの名前。先刻の折りに確かににとどめを差した相手である。それを、いま、この男は何と言った？とどめを、さして、おけば！？

633

「ぐぐつ…そうだ。貴様が確実にあの化け物にとどめをさしておけば…我らは任務に失敗せずに……………皆も^{みな}ブラフマー様にも殺されずに……………」

「……………はっ？はは？は、はははははっ？」

修羅は不意に出てくる己の笑みに気付いていない。だが、修羅は黒ミリタリーの男の言葉に言い知れぬ恍惚感を感じてしまう。

生きている？死んでいない？奴は死んではいない！？度重なる拳を受け、尚も立ち向かって来たあの男。だが、最終的にはやはり鉄をも貫く拳にひれ伏し倒れた相手であった。だから、とどめを差した。高みをめざす好敵手では無かったと、とどめを差した。だが、とどめを差し損ねた？確実に首から脳へと繋がる神経を、更には大動脈を切断してやったはずだというのに……生きている？効いていなかったというのか？あの無防備の状態で！？

「修羅様？」

言い知れぬ喜びにいままでに見たことのないような修羅の笑みにシヤロンは不思議な表情を向ける。

「行くぞ、シヤロン、7号！！我はいま真に戦える好敵手を得た。もはや、この街に留まる理由はない。くく、くははは、うつみ……空海夏樹いっ！！」

さっそうとその場を去ろうとする修羅にシヤロンは戸惑いをみせる。何が修羅をこんなにも喜ばせているのか、シヤロンには理解が出来ない。だが、それでも愛する者の笑顔は嬉しいものだから、彼女も

より一層笑みを浮かべる。

「ぐぐつ、ま、待て…」

と、黒ミリタリーの男が傷付いた体を立ち上げらせ修羅たちを止める。

「ぐぐぐ、貴様……我を、グールと呼んだな？」

それは一体如何なる理由でそう呼んだのか。それを黒ミリタリーの男は修羅に問う。この中国服の男、何か知っている。自分が何者で何なのかを、この修羅という男は知っている。

「ぐぐが、貴様、我が何かを知っているな？……ぐぐつ 教えろ、我は誰だ？我は何者だ？我は何故記憶を失った？ぐぐぐ、我らは一体！？」

『名も無き死霊たち』

そう名付けられた部隊は、皆同じ服で同じ格好。個を忘れた自分たちは、過去をも忘れてしまっていた。何故、組織で戦っているのか。何故、皆疑問を持たずに任務をこなしているのか。自分は知りたい。自分が何者で、誰だったのかを…。だから、聞いた。自分を聞きなれぬ名称で、グールと呼ぶ、この中国服の男に黒ミリタリーの男は問うたのだ。自分は一体、何者なのだ…と。

「あら、修羅様、珍しいわ、このグール。もしかして、自我を持つのかしら？グールは大抵、自我を持たず疑問を持たず、ただひたすらに戦うことだけに生き甲斐を感じるようプログラムされているはずなのに…」

「ぐが、プロ…グラム？」

この女は一体何を言っているのだろうか？プログラム？自我を持たず、疑問を持たず？

一体何を言っている？一体何の話をしているのだ？

「……がががつ、女、教えろ、我は何者だ？」

男はプログラムという言葉を話す和服の女に知っている事を話せと睨み付ける。それに対して、和服の女シャロンはころころと笑みを浮かべながら喋り出した。

「うふふ、組織『クラウン』の学者があまりにも人間には不釣り合いな兵器を作ったわ。ダイヤモンドカットの異名をとるチタネス合金のナイフ」

シャロンはその視線を黒ミリタリーの男が持つ、黒いナイフにへと移す。と、それに気が付いた黒ミリタリーの男がその手に持つナイフを見詰める。

「うふ、あまりにも切れすぎて使う者の腕さえも切断してしまうそれは処分されたわ。それから、ヴィーダルシューズの銃」

次にシャロンは黒ミリタリーの男が腰にかかげるあまりにも馬鹿デカイ拳銃に視線を移す。

「ヴィーダルというのは北欧神話でのフェンリルを殺した巨人の名

前。その名前の如く巨大なその銃は人間が使えばその衝撃で体の半分を飛ばすわ。それに耐えたとしても撃ち放った後のその熱量は、人がそれを持つには肌が焼き爛れる覚悟がいるわね……」

楽しく饒舌に喋るシャロンは舞を踊るように声を高らかに上げる。

「でもね、それがただの人間じゃ無かったら？」

くるくると回るシャロンの袖がヒラヒラと舞い上がり、黒ミリタリー男の顔を覆い隠す。

「その学者は考えたの。なら、人を超える存在にならそれは使えるんじゃないかって……」

「ぐ、人を超える存在？」

顔を上げる黒ミリタリーの男に、シャロンはにこやかに笑いながら話を続ける。

「私達、アドバンスチルドレンって言うの…。それは、1万と2千分の1の存在。生まれながらに天才と呼ばれる私達は組織『ユニフアイ』によつて更なる高みを目指して訓練された」

ある者は1つの国を滅ぼして、ある者は幼き時に未開のジャングルへと放り投げられて、そして、全てはデータをもとに人が人を超える力を与えられた。

「諸説、人間の脳ていうのは、右脳左脳とは別の話に天脳と地脳という2つの存在があるの。顕在意識である地脳と潜在意識である天脳。うふふ、この2つの間には壁があつてお互いを行き来するには不便な訳なの。主に私達が使うのは地脳の方で、天脳を使うにはかなりの労力が必要らしいわ。でもね、もし、その壁に関係なく天脳と地脳を使えるとしたら…」

とある脳医学の学者が言った。

人は無意識に己の能力を過小評価して脳の可能性に暗示し反抗をする。それは見えない壁となりて、人の持つ脳の力を押し込め、大半を機能させないようにしている。その壁によりて人は、顕在意識の地脳を使えても潜在意識の天脳を使えず。だが、天脳と地脳の壁を超えれるとするならば、人間の進化や学習の効率が大幅に上がるで

あろう。いや、もし、それを取り外す事が可能であるならば、人は約10%も引き出せない脳の力を100%引き出すことが出来るかもしれない…。

「そこで集められたのが、天才と呼ばれる子どもたち。私達はあるとあらゆる場所から連れて来られ、脳の無限の力への可能性を幾度にも重ねられた実験によりその存在に近づけられた」

まさに、異次元の世界を目指し生まれた子どもたち。ころころと笑うシャロン。それを腕を組みながら見ている修羅。そして、黙して2人の姿を見詰めている柚子。

「うふふ、まあ、私達の事はいいの。それでね、組織『クラウン』の学者はそんな人間を超えた人間である私達に目をつけたの…」

「ふん。だが、我ら、そのような武器など使わずとも個体一個で国さえも落とす」

「でも、その学者は諦めなかった。自分の作った兵器を認めさせたかったみたい……だから、私達はある1人の方のDNAサンプルをその学者に渡してあげたの…」

シャロンはゆつくりと黒ミリタリー男から離れると、ぴたりと修羅の体に自分の肢体を合わせる。

「学者は修羅様のDNAから新たな兵器を作り出したわ。人型に作り出したそれは、私達アドバンスよりもずっと劣るものの普通の人間よりは幾分かはマシな兵器。それに、人間で無いのだから、どんな危険な武器を持たせたって、どんな危険な任務を命じたって、自由。それに、作られたのだから、代えはきくし…ねえ？」

そう、にこやかに笑みを浮かべるシャロンに黒ミリタリーの男は言葉を失う。それは一体どういうつもりだ？それは一体何が言いたいのだ？いまの話は真実なのか？

そして、もし、それが真実だとしたら、それは…

「ふん、つまり貴様が何者か…」

そんな呆然と佇む黒ミリタリーの男に修羅が面白くもなさそうに声をあげる。黒ミリタリーの男にとって、あまりにも残酷で、あまりにも信じがたい真実。

「貴様は、私のクローンだ…」

こんにちは。

やってしまったオオトリです。何をやったかというところ、これでもか
つてくらいの突拍子もない設定をやってしまったのでございます。

修羅たちアドバンス（異次元とは訳さないのですけど）の正体。そ
れは、天脳と地脳による人を超えた存在。
もはや、よく分かりませんね（笑）

天脳と地脳とは右脳左脳とは別のもので、地脳はいうなれば私たちが
が行う生活や第五欲求などを司る（？）場所。それに比べて天脳は
私たちの潜在的にある能力を司る（？）場所で、まあ、超能力や特
異能力など人の信じられない可能性を秘めた場所という感じです……
たぶん。

ただ、地脳と天脳の間には壁があり、簡単には行き来、出来ない訳
で。私たちは顕在能力（常にはつきりと使える能力と解釈）の地脳
は使えても、その壁により天脳が使えないという事らしいのです……
が。壁が何で何がその壁に通るのか、私には理解出来ませんでした
（勉強不足です、すいません）

例えば、それはシナプスやニューロンみたいな物で、そのシナプス
やニューロンを通して地脳の能力を電気信号で体に伝えられるけど、
地脳側からしか行けない天脳は、その何かの壁により電気信号が上
手く伝わらず、その天脳にある潜在的能力が私たちには活用出来な
い、といった感じではないでしょうか？

んー、言ッてて余計意味が分かりませんね（笑）

とりあえず、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

第五十八話：交錯する者たちの戦場（4）『掴んだその手…』

一体、この男は何を言った？

「我が…クローン？」

一体、この男は何を言っている？

「よく出来た、木偶人形よな。私の力には及ばぬものの、数を集めればそれなり使える。だが、まあ、そんな個体の無い人形であるお前は故にグールと我らは称するが…」

人形？我が？我らが？個体の無い人形？同じ背、同じ格好、同じ形を持つ我らは人形？

黒ミリタリーの男は、もはや冷静ではられない。長くに渡り組織にて任務をこなしてきたのは、いつか来る己の幸せのため。どんな危険な任務にも、どんなに辛い訓練にも耐えたのは、いつか来る人間としての人生の為。だが、いまこの修羅という男は何を言った？

お前は、自分のクローン？お前は、個体のない人形？

「うふふ、プログラムというのは、そんなクローンである貴方たちに自我を持たせない為に作られた一種の首輪。だって、そうでしょ？個体の無い貴方たちが自我を持ったりなんかしたら面倒ですもの。記憶もなく、欲望もなく、ただひたすらに任務だけが生き甲斐になるよう作られたのはプログラム……」

「はっ……ははは……馬鹿な……そんな馬鹿な……」

男はそれ以上言葉を発せない。

我は疑問を持つべきでは無かったというのか。我はあのままブラフマーに殺されておけば良かったというのか。よりもよって、クローンだと？よりもよって作られた命だと？それでは、我は何者でも無いじゃないか？我は誰でも無いじゃないか？我らは同じ。皆、同じ。ただ作られた模造品。我の記憶があつたとして、それは我の人生ではない。我が自我を取り戻したとして、我は結局、人では無かった……

ぐたりと力の抜けた黒ミリタリーの男は、その場に倒れる。涙さえ流れない兵器の自分の体に恨めしささえ感じてしまう。

「……修羅、もういい…時間の無駄」

そんな黒ミリタリーの男を脇目に、柚子が修羅に早くこの場を去るように促す。もはや、彼女にとつてこの場所に居る意味はなかった。だから、柚子は修羅に言った。早く、この場所から離れるよう促したのだ。

「ふむ、そうだな…」

それに修羅が同意をする。柚子はそれを確認すると、その場にいる柊の方を見ずに歩く。今度こそ、何者も自分を止めない。柚子は静まり返った商店街を後に、歩みを始める。

ゆっくりと彼女は、そのまま柊に何も告げずに去っていく。ただ、ひたすらに何も考えず。何かを振り払うかのように…。でも、それでも、彼女はふと考えてしまう。ここで過ごしてきた時間のことを思い出してしまう。

それは夢のような生活であった。

それは限りなく奇跡と呼べる出会いであった。

出会ったのは家族で、過ごしたのは平穩。それは、平和な世界の間なら誰もが手に持つ当たり前の生活。だけれど、彼女にとってそれは、奇跡のような幸せだった。彼女にとってそれは、初めて手に入れた、何物にも代えがたい大切な世界だった。

それまでの彼女の過ごしてきた世界は異常であり、最悪であった。血に腐り、死に囚われ、叫びに貫かれた世界であった。その世界では、誰もが誰かを蹴落とす事を考えるのが通常で、生きる為には戸惑い無く違え合う他者を消していかなければならなかった。

そして、そんな彼女の最初の相手は、それまで仲良くしていた隣の部屋の友達、マーク。

訓練に次ぐ、訓練に彼女たちは耐え。その日初めて外に出る事を許された。初めて出た外は眩しくて明るかった。世界とはこんなにも美しい物なのかと、何度も目を疑った。

しかし、世界の美しさに目を疑った、次の瞬間、彼女は耳をも疑うことになる。

『さあ、この世界で生きられるのは、この130人の中で1人。時間はたつぷり2時間。その時までに1人の勝者が決まらない場合は、ここにいる全員が敗者。さあ、殺し合え。他者を蹴落とし、自分を主張し、生き残れ』

ラボという組織の研究所で育った130人もの子どもたちは誰も言葉話を話さない。ただ、一概に研究所の職員に言われた事に耳を傾け。

1人1人がその手に武器を取った。瞬間、そこは異常異様以上！！誰も隣の手元に武器を向けて、誰もが自分が生き残る為に他者の命を狙い始めていた。そして、そんな光景に呆然としているその彼女に、1人の子どもがナイフを突き付ける。

それは隣の部屋のマーク。他者の関わりなど皆無だった研究所で初めて出来た親友とも呼べる友達。早く研究所から出て、外の世界で過ごしたいね、と仲良く語った友達。

その時は一緒に外で遊ぶうね、と約束した友達。彼女は血眼で襲い来る親友にその手に持つ生まれて初めて貰った拳銃を向けてしまう。分からなかった。何が起きたか分からなかった。彼女はその日、生まれて初めて貰ったプレゼントで、生まれて初めて出来た親友を、生まれて初めて他者の命を、奪ってしまった。

そこから……。そこから、彼女の、少女の人生は大きく狂い出す。129名もの命を背負った少女は、組織にて更なる命を背負う羽目となる。

兵器と称された自分は世界をより良くするための正義で、必要悪だと教えられた。他者の命を奪うのはその他者があまりにも非道であった為に正義である自分たちが神に代わり制裁を与えたのだと組織に教えられた。

疑問は無かった。いや、疑問さえ沸かなかった。親友の命さえ奪った少女に、それより重い命など有りはしなかったのだ。

少女は無為に戦った。何と戦っているのかも分からずに戦った。その中には自分と同じくらいの子どももいた。だが、戦った。

勝ったのは少女だった。虚しくも悲しくも、生き残ったのはまたしても彼女だった。

そんな、戦うだけの少女の人生にある変化が起こる。それは街で見掛けたある2人の親子。

娘である少女と父親である男性。2人は一緒に美味しそうに公園で売るアイスクリームを食べていた。

それだけ…。

たった、それだけの光景で少女の心にいままでに感じた事の無かった感情が芽生え出す。

『ねえ、パパ〜』

『なんだい、エミリー？』

『今年もサンタさん、エミリーの所に来てくれるかなあ？』

『ああ、もちろんだとも。エミリーは今年も良い子だったろ？』

『うん！エミリー、いっぱい良い子だったよ！？』

『なら来るさあ。サンタは良い子の所にしか来ないからね。たくさんたくさんプレゼントを持って良い子のエミリーの所にやって来るさ…』

『やったー！サンタさん、サンタさん、エミリーは今年も良い子だったよー。だから、いっぱいいっぱいプレゼントを持ってエミリーに会いに来てねえー！！』

サンタさん。

彼女はその名前を聞いた事があった。それは確か、いつもマークが言っていた魔法使いのおじいさん。毎年クリスマス夜のになると何処からともなくやって来て、子どもたちにたくさんのプレゼントをくれる優しいおじいさんの名前。そういえば、マークが言っていた。

『いまは、ラボ：研究所に住んでいるから、サンタさんは来ないけど。外の世界に出たら、きっと来るんだ！たくさんのプレゼントを持って、僕たちに幸せを運んでくれるんだよ？』

そっか…。

少女は1人、そんな事を呟いてしまう。

サンタは良い子の所にしか来ないのか…。

少女は1人、そんな事を呟いてしまった。

じゃあ、自分の所には来ないだろう。

少女はいまだ幸せそうに笑う娘と父親を見て、そんな事を思っってしまう。

だって、自分は他人の幸せを奪ってきた。自分が生きる為にと他人

の命を奪ってきた。それが、組織にて常識でも、それが悪い事だと聖書にも書いてあった。いや、聖書を見なくなっただけで分かる。あんな、あんな、後味が悪い。気分の悪い所業は無い。

だから、サンタは自分の所には来ない。幸せを運んではくれない。幸せは自分には来ない…。

少女の瞳には透明な雫が流れていた。少女にはそれが分からない。初めて流した涙が少女には理解が出来なかった。ただ1つ、ただ1つ。

何故！？

何故、自分はこんな世界で生きている？

何故、自分はアドバンスなどという名前で他の命を奪う世界にいる？何故、自分にはあの親子のような幸せな世界が無い！？

何故、何故、何故！？
流した涙の名前さえ知らない彼女にその時、分かったたった1つの事。

この世界は普通じゃない。
疑問さえ沸かなかった、少女に、その時、初めて疑問が沸いた。その時、初めて組織で無為に戦う事を疑問に思った。

『……逃げたいのですか？貴女はこの組織でも重要機密なのですよ？それでも、逃げたいのですか？』

だから、少女は逃げる事にした。幸せを運ばない世界から逃げる事を選んだ。

『……分かりました。貴女の組織と我々クラウンは友好な関係にある。が、良いでしょう。7号さん、私が貴女を逃がして差し上げましょう』

そうして少女は、初めてその姿を本当の世界に晒す事となる。今までに無いくらいに美しい光景。そこは、平和な街であった。商店が立ち並び活気に満ち溢れ、どこにも、血に腐り、死に囚われ、悲鳴に貫かれた世界は有りはしない。

血は熱くたぎり、死は生と共に有り、叫びは商店街にて呼び込みの嬉しい叫びしか聞こえて来ない。みゆう、なんと美しい世界なのでしょう。と、少女は初めて見る日本の活気溢れる商店街に心を踊らせる。

『はい、いらつしゃい、いらつしゃい。お野菜安くしとくよー！美容健康家計に第一！！お野菜食べて、元気百倍！！安いよ、安いよー……あら、なっちゃん？』

『どもつす、なんか暑くて気が滅入ってる夏樹です』

『もう、なにそれえ？馬鹿ねえ？お仕事？パトロールかしら？』

『いえ、捜査つす。なんか食い逃げらしいです』

『まあ、いまのご時世、そんな人いるのねえ？』

『いたつす。そんな人がいたつす。でも、俺は暑くて捜査してる場合じゃありません。正直、帰りたいです』

『もう、なっちゃんたらあ。よし、じゃあ、なっちゃん！元気になるよう、隣の八百屋を見てみよう！？』

『隣?』

『へい、らつしゃいらつしゃーい! 安いよ、安いよー! ？今日はなんと鮭が丸々一匹、千円! アラスカの熊もビックリ? ジャンボな鮭が丸々一匹、千円だよ! ？』

『買つかあーっ! ？どんだけ、デカいんだよ丸々一匹鮭って! ？てか、匹じゃねえよ、本だよ、もうそのデカさ! ？』

『うおっ! ？魚屋だけにうおっ! ？夏坊、今日はどうしたい? また、鮭フレークパスタでも作る為に鮭を買いにきたか? なら、今日はまとめて3匹安く...』

『だから、匹じゃなくて、切れで寄越せよ! ？捌いて切れにして寄越せよ! ？てか、いやいや、買わねえよ? オヤジさん買わねえよ? 俺はただ仕事で食い逃げ犯を追い掛けて来てるだけだから... ダルいなあ... もう、捜査とかダル...』

『夏坊、刑事として、その発言もどうかと思っぞ?』

『らっしゃい！らっしゃい！肉が安いよ？神戸牛なんて売ってないけど、肉が安いよー！？』

『肉屋のばあちゃん…せめて、何の肉が安いか言おうよ。売ってない肉より、売ってる肉の事を言おうよ…』

『ほほほ、それじゃ、神戸牛じゃない肉くださいな』

『買うのかいつ！？何の肉が分からんのに買うのかよ、アンタ！？
ねえ、足立の奥様！？』

『ほほほ、いや、夏樹くんのツッコミ待ちで言ってみたの。ほほほ、
本当はコロッケを8個ほど下さいな』

『いや、俺のツッコミ待ちって…』

『足立さん、足立さん、ナイスじゃよ。私もボケた甲斐があったと言っもんじゃ…』

『ばあちゃんもかよ…てか、なにこの商店街！？おかしくない？ボケ通しな商店街っておかしくない？……たく、人がこの暑さで滅入ってるのに……』

『ひゃっひゃっひゃっ、夏坊のツッコミは街の名物だもの』

『何その名物！？何その馬鹿げたはた迷惑なシステム！？俺はどこの特産品ですか！？』

『足立さん、足立さん、コロッケ買っなら本日10個で2個のサービスじゃよっ。』

『あら、じゃあ、10個頂こうかしら？』

『無視ーっ！？まさかのツッコミ無視ーっ！？てか、10個買っと2個のおまけっていつもじゃん？毎日がサービスデーじゃん！？』

『うるさいのー。行き過ぎたツツコミはただの防音じゃぞ？たく、今日は夏坊にはサービスはしてやらんからな！10個買っても5個サービスしてやるけど、値段は15個分じゃー！』

『名物特産品の話はどこ行っただけ？てか、15個分の値段っていらねえよ、だったら5個のサービスいらねえよ！？てか、サービスしてんじゃん？いや、値段分だからサービスじゃない？てか、今日は買わねえし、だったら明日買っし！てか、何故に5個？通常は2個なのに、何故に5個！？やっぱ、サービスじゃねえ、やっぱ、それサービスじゃねえよ、むしろ大迷惑！？』

なんて珍妙な会話なのだろう。なんて馬鹿馬鹿しくて楽しそうな会話なのだろう。

少女はじつとそれを見つめていた。ただ、じつと馬鹿馬鹿しくも楽しげなその会話に笑いを堪えながら見つめていた。

それから、少女は思う。やっぱり、ここが私の幸せを見つける場所。ここなら、自分の幸せを見つけれられると心からそう思った。と、不意にそんな自分の体が何かに突き動かされるように歩みを始める。自分の思った事とは異なった行動を体が勝手に取り出し始める。

『ん、なんだ？』

さて、どうしたものか。触れてしまった。さて、どうしたら良いか。先ほどのツッコミをしていた男の人の服を引っ張ってしまった。

『……………』

『……………』

何故、そんな事をしてしまったのか。何故、体が勝手にその男の人の服をつまみ引っ張ったのか。少女には分からない。だけど、やってしまった。何かに突き動かされ、男の人を呼び止めてしまった。

『…あ、あの何かな？お兄さんに何かようかな？』

ようもなにも、少女の心とは異なった行動だったため、少女には何も言えない。少女には何を言ったら良いのか分からない。でも、嫌だった。このまま、何も言わずに変な子だなあ、なんて思われて、この掴んだ手を離されるのが凄く嫌であった。だから、言った。頭に浮かんだ単語を、ただ何も考えずに少女は言った。

『コロッケ…』

なんとも意味の分らない会話。なんとも意味の無い会話。でも…でも、そこから始まった。そこから少女の奇跡とも呼べる幸せの間が始まった。

その男の人は、コロッケを買ってくれた。先ほどのおばあさんが、にこやかに笑う中、男の人がひくひくと苦笑いをしながらもコロッケを買ってくれた。

とても、美味しかった。なんとも言えない美味しさだった。

何でだろう？初めてだ。こんなにも美味しい物を食べたのは…。15個もあった。15個もあったのに直ぐに全部食べてしまった。

もっと、ゆっくり食べれば良かった。少女は少し後悔する。あんなに美味しかったのに、ゆっくり食べれば良かったのに、それから少女はコロッケを買ってくれた男の人を見上げる。

お礼がしたい。この優しい人にお礼がしたいと少女は思った。これも初めてだ。誰かの為に何かをしたいと思ったのは、少女にとってこれも初めての感情であった。

だから、助けた。だから、頑張った。男の人が、月影相手に戦った

時。ビル爆破を阻止する為に戦っていた時に、少女はその人を助ける為に頑張った。男の人は、優しく微笑んだ。そんな少女に男の人は優しく微笑んだ。とても、心地良かった。この男の人といるとても心が休まった。安心する。この人といると安心する。とても、良い匂い。とても、心地良い空間。

だから、また助ける。

だから、恩人である月影にも銃を向けようと決意した。この人は傷付いている。度重なる戦いで傷付いている。このままでは月影に勝てない。彼は強い。訓練された戦闘兵器のアドバンスでも無いのに、月影はナイフ一本でどんな相手も倒してしまう。勝てない。こんな傷付いてしまったこの人だけでは勝てない。だから、自分も戦う。この人の為に兵器である自分の力を使う。

『駄目だ!』

だが、そんな少女の思いをその人は拒む。それは、優しさ。それは、少女のためだった。危険だから、君は避難するんだ。そう言われた少女に、また感じた事の無い感情が芽生える。またコロツケを買ってあげると優しく頬を撫でてくれた、その人。少女は分からない。少女は理解出来ない。

一緒にいたかった。自分だけ逃げたくなかった。でも、それに少女は抗えなかった。

何故だろう。少女はその男の人が言う通りにしてしまう。その人の

言葉に逆らうという選択が浮かばない。

結局、その人は月影に勝利する。ぼろぼろに傷付いて何かを守ろうと勝利した。

凄いと思った。信じられないと思った。アドバンスにも劣らない月影に、あんなにも傷付いた体で戦って勝ってしまった、その男の人に少女は心から凄いと思ってしまう。

それから、少し時間が経った。少女は警察の尋問から1人の女性に引き取られる。そしてそこで、少女は信じられない物を貰う事となる。少女にとってそれは驚くべき事で、とても心踊る出来事であった。

『ふむ、君が夏樹が保護した子か……。私がしばらく保護するが、夏樹が目覚め次第そちらに保護して貰う事になる……。まあ、いつになる事やら……。あの馬鹿は、いつも私をおいて無理ばかり……。』

その女性はそんな事を言いながら悲しげな表情をする。だから、少女はそんな女性の頬に指を触れた。涙が流れそうな瞳近くの頬をそっと優しく触れる。

『ん、慰めてくれるのか？ふふ、ありがとう、君……。と、君は名前が無いのだったな。7号なんて人間らしくない。よし、私が名前を付けてあげよう。……。ん、なつき…樹だな？で、桜子ちゃん…ん、木だな……。柊ちゃん、も木だな……。』

女性はしばらく考え、そして少女の頭に手を置く。にこやかに笑うその表情は美しかった。少女がいままで見て美しいと思った世界の美しさに、勝らずとも劣らない美しさであった。

『柚子…君の名前は柚子だ。空海柚子。うん、それが今日から君の名前だ』

少女は驚いた。名前なんて、アドバンスの中でも組織の幹部に認められた者しか与えられない。しかも、それはエクスネームという殺し名。一生、兵器として生きる事を約束させられる名前。

だが、その女性はいとも簡単に少女に名前を付けた。しかも、なんのしがらみもなく。ただ、名前を付けた。それも、あの男の人の名前を元に…。

こうして、アドバンスチルドレンと呼ばれ、兵器と呼ばれ、7号と呼ばれていた、少女は、何もない、何もないただの空海家の柚子となった。

さあ、それから少女にとって信じられないくらいに奇跡で幸せな時間が始まった。塞き止めていた何かが外れたが如く、流れるように幸せがやってくる。

『こら、ちゃんとお風呂に入らないか？えっ、湯船を知らない？いつも、シャワー？』

アッチッチと少女、柚子は初めての日本式お風呂に身をすくめる。

『箸を使った事がない？むう、仕方がない。これは、こうしてだな……それからだな』

後ろから優しく抱かれて、ゆっくりと手を取り箸の使い方を教えてくれる女性。これも初めて。なんだか、柚子にほんわかと暖かな気持ちの流れる。

『わわ？凜お姉さん、凜お姉さん？この子は誰ですか？私が署内に泊まって働いていた内に子どもを作ったんですか？相手は誰ですか？』

？はっ！？まさか、夏樹先輩！？』

『馬鹿もの。彼女はこの前の事件で保護した例の女の子だ。全く、お前は居候の身で家主に何を言う？』

『なあーんだ。良かったあ。そっか、君が夏樹先輩が保護した例の女の子ですか。なるほど、では先輩はロリコンだということですね？』

『何故そうなる？』

はてさて、柚子は楽しい毎日を送る。

お母さんのような優しい凜と馬鹿な姉のような日陰。楽しかった。

日陰が夜中じゅうゲームをして凜に怒られ、拳げ句ふて腐れた日陰がトイレに籠った為、トイレが使えなくなったり。凜がご飯を作ると直ぐに日陰がやって来て、つまみ食いをする日陰とそれを阻止する凜とのバトルがあったりと、本当に幸せな時間であった。

だが、それは序章。それは加速し、更なる幸せを呼ぶ。更なる驚きを呼んだ。

『この子を君の所で保護してやってくれないか？』

目覚めたあの人に凜がそう言う。だが、柚子は気が気じゃない。別にこのままでも良かった。凜との暮らしでも良かった。だって、楽しかったし、幸せだったし。でも、もし、そんな生活がこの優しい男の人と過ごせるなら……。いや、いやいや、でも、それはこの人は求めていないかもしれない。迷惑かもしれない。

柚子にまた初めての感情。恥ずかしさと不安。一緒にいたいけど、駄目って言われたら。

柚子は凜の足元に体を隠してじっと男の人を、ベッドに座る夏樹を見詰める。凜が買ってくれた、可愛いワンピースと赤い靴。生まれて初めてのおしゃべりは、この人のため。見せたいけど、恥ずかしい。一緒に居て、と言いたいけど、言えない。

と、そんなもじもじとする柚子に夏樹はにっこりと笑みを浮かべる。

『こんにちは、柚子ちゃん。俺には2人の妹がいるけど。2人とも君を歓迎してくれると思う。柚子ちゃんが良かったらでいいんだけどさ。これからはウチで暮らさないかい？』

もう、気絶してしまいそうだった。顔が真っ赤で熱くなるのが、直ぐに分かった。

夏樹の言葉にコクコクコクと頭を頷く。もはや、それは同意なのか動揺なのか…。

『むっ、誰ですか？兄、誰ですかその女はっ！？』

さて、夏樹に連れられやって来た家にいたのは、藍色の髪色をした少女、柊だ。彼女はあからさまにぎゅうと夏樹に捕まる柚子に敵意の眼差しで見ている。

『ああと、この子は俺がこの前の事件で保護した子だよ？名前は柚子ちゃん。今日から新しい家族。新しい妹だよ！？』

と、その夏樹の言葉に柚子の心がどきつと高鳴る。家族？妹？本当に？いいの？

戸惑いを隠せない柚子に夏樹はにっこりと笑みを浮かべ、なでなでと柚子の頭を撫でる。うにゃー、と柚子はそれに目を細めてしまう。そう、そこで、柚子は初めて大切な家族を得たのであった。

『私、桜子。よろしくね、柚子ちゃん？』

そこにいたお姉さんは、にっこりと柚子に笑いかける。柚子は一瞬でそのお姉さん、桜子のことを好きになった。

『……柚子です。兄は私のものです……』

そういう自分と変わらないくらいの柊はふん、と頭を振る。だが、柚子はこの柊も直ぐに大好きになった。

ちよつと意地悪で素直じゃないけど、家では一番自分を思ってくれる柊。大好きだった。凄く親近感を覚えた。理由はないけど一緒にいるだけで柚子は幸せに思えた。

そしてそれから、色々あった。商店街で食い逃げをしたうどん屋で、夏樹が平謝りをしたり。柊の図工の宿題を徹夜で手伝ったり。

桜子にいままでやった事のなかった料理を教わったり。遊園地にもピクニックにも、動物園にも色々行った。

クリスマスもした。初めてサンタからプレゼントを貰った。柊とお揃いのクマのぬいぐるみ。良い子だったのだろうか？ 柚子はそのクマを見て、ぎゅゅつと抱き締めて思う。自分はサンタさんからプレゼントを貰えるほどに良い子だったのかな？ いや、そんな事はない。あんなにいっぱい悪い事をしたのだ。良い子のはずがない。でも、プレゼントはあった。サンタさんはプレゼントを置いていった。だから、これはきつとオマケ。…これから。きつと、これから良い子になるようにオマケでくれたんだ。

柚子はそう思った。だから、柚子は良い子になる事を決めた。サンタさんから次はオマケじゃなくて、ちゃんと良い子として、プレゼントを貰えるようにと、柚子は良い子になる事を決めた。

『みゆ…マーク。私、良い子になる。マークが貰えなかった分、いっぱい良い子になって、いっぱいプレゼント貰う……だから、だから、私が天国に行ったらマークに、その半分をあげるね？マークが欲しがってたプレゼントの半分を、あげるね…』

短い時間だった。少ない時間だった。でも、幸せは凄かった。それは凄く濃密な幸せの時間であった。

柚子は幸せを噛み締めた。これからたくさんたくさんあるであろう幸せを、これからたくさんたくさん来るであろう幸せを、あのコロツケみたいに急いで食べずにゆっくりとゆっくりと…。

桜子は笑った。お使いが終わると、いつも頭をなでなでと撫でてくれた。

夏樹は笑った。いっぱい甘えるといっぱい頭をなでなでと撫でてくれた。

柊は笑った。一緒に遊んで一緒に過ごして、一緒に居てくれた。

この幸せは終わらない。この幸せは永遠。ずっと続くといいな。ずっと皆と一緒にいいな。柚子の切なる願い。それ以上でも、それ以下でもない。ただ、皆と居たい。ただ、皆と過ごしたい。それだけ、たったそれだけ。

なのに、世界はまたもや柚子に重い足枷をはめる。重く冷たく、厳しい現実。幸せは唐突に壊された。幸せは唐突に流れを止めた。

「さあ、いくぞ7号」

「うふふ、柚子ちゃん、どうしたのかしら？」

現れたのは組織『ユニファイ』でも恐ろしいとされる男。彼はなんと組織から逃げた自分を連れ戻しに来たと言う。そして、組織『ユニファイ』とは新たな世界にて全てを抹殺する組織。その銘の中でも修羅たちアドバンスは、それに忠実に生きている者たちだった。ここで、自分が幸せにしがみついたら彼らはそれを破壊する。その幸せの中にいる柊たちをも抹殺しようとする。だから、柚子は突き放した。だから、柚子は柊に邪魔だと心にも無い言葉を告げた。

寂しく街に夜風がせせらぐ。冷たいそれは、冷える柚子の心には届かない。冷たい夜風なんかより、ずっと冷めていたから。柚子の心はずっと冷めていたから…。

さよなら…

そんな消え入りそうな言葉が風に乗って夜空へと舞い上がる。それは誰の言葉なのか。それは誰に向けられた言葉なのか。静まり返った商店街の中でも、それを確認することは誰にも出来なかった…。

「待つて…」

「!？」

はずなのに、誰にも聞こえはしなかったはずなのに、そんな柚子の消え入りそうなその声を聞いて彼女の腕を、がしりと柊が力も強く掴んでしまう。

「……離して」

だが、それに柚子は拒否の言葉を投げ掛けかける。そして、離してくれと、力強く握る柊の腕を振り払おうとする。

「どうした、7号？邪魔ならば、我がその娘を始末するが？」

「っ！？大丈夫……何でもない……」

柚子は修羅のその言葉に言い知れ恐怖を感じ、未だ自分の腕を掴んで離さない柊に強い口調で腕を離すよう言い放つ。

だが、柊は頑として離さない。ぎゅっと閉ざした瞳は涙を何度も流したらしく、うつすらに濡れ、その流した涙はピンク色に上気した頬に筋を通していた。

「……離しません」

ふるふると柊は柚子の体にしがみつく。がっちりと掴んだ腕は胸元に、いよいよ力を入れて柚子が押し退けようとするのを離すまいと柊は柚子にしがみつく。

「あらあら、全く今日はなんて日なのかしら。さっきから人が早くこの場所から去って行きたいというのに、次々と…」

そんな柊の姿を見て和服の女シャロンがその和服の袖口から赤色の扇子を取り出す。

「……っ、離して!?!」

柚子はそのシャロンの笑みに寒気を覚える。この女は殺すつもりだ。何度も何度も行く手を遮られてシャロンは苛立ちを覚えている。だから、いま柊がここで再び邪魔をするとしたら…

「……離しません……嫌です……柚子は……柚子は私といます……」

だが、柊は離れてはくれない。柚子は必死に柊を押し退けようと、その体を力一杯に振り払う。だが、やはり柊は離れてはくれない。ぎゅっと、ぎゅっと、その柚子の腕を体を抱いて頑なに離れようとしない。

駄目だ。

柚子にそんな言葉が脳裏に浮かぶ。

「うふふ、お嬢ちゃん？駄目よく？私たちの邪魔をしたらあ…」

ゆっくりとシャロンが近づいてくる。その手には鋭い刃の仕込んである赤色の扇子。

駄目だ。駄目だ、駄目だ、駄目だ！！

「離せ…離して…柊っ!？」

柚子が大声をあげる。そして、遂には必死に自分に食らい付いてくる柊の頬を、思いつきりに引っ叩く（ひっぱたく）。

バチン！！

という、痛々しい音と共に叩かれた柊が体勢を崩して地面へと倒れる。

「……邪魔をしないで」

それを見下ろして柚子は振り返る。もう、止めないで……。私を放っておいて……。じゃないと、じゃないと、貴女が殺されてしまう。

「！？」

だが、それでも、それでも、柊は諦めてはくれない。別れを告げられても、頬を叩かれても、拒絶されたとしても、柊は諦めない。そんな、去り行こうとする、柚子の足をぎゅうっと掴み、それを止める。

「……邪魔でも……嫌いでも……いいです……でも……」

驚く柚子は柊を見詰める。叩かれて赤くなる頬も気にせず、地面に倒れたままなのも気にせず、ただぎゅうつとぎゅうつと柚子の足を掴み見詰める柊を、柚子は驚いた表情で見詰める。

「……行かせない！！それでも、貴女は私の家族です。行かせはしません……貴女は行かせはしません……」

ぎゅつと握られた腕は痛々しい程の力。柊は強くはつきりと柚子を見定める。

「なら、その腕を引きちぎり、切り裂いてあげるわ、お嬢ちゃんっ！？」

と、そんな2人に和服の女・シャロンがしゃしゃり出る。彼女の腕には幾つもの刃が飛び出した赤い扇子。

「……うう…あうう…」

シャロンはやる気だ。シャロンははまだ自分を止めようとする柊を殺す気だ！？

柚子はもう分からない。どうしたら良いのか分からない。離れてくれない。いくら別れを告げても、いくら罵倒を浴びせても、いくら力いっぱい振り払おうとも、柊は、彼女は離れてはくれなかった。

そして、柊は命を狙われる。自分を離さないから、自分を家族と言いかせてくれないから、柊をシャロンが狙う。

嫌だ。嫌だ。嫌だ。

死んで欲しくない。生きていて欲しい。自分とは別の場所で生きていて欲しかったから、柚子は離れる事を決意した…のに。

と、柚子はゆっくりと近づいてくるシャロンから柊を遠ざける。自分の体と入れ替え、柊を向こう側へと押し退ける。

あら、どういうつもり？とシャロンが笑みを浮かべる。だが、目が笑っていない。恐ろしくも殺意を露にして隠しきれていない。

柚子は未だふるふると震え自分の腕を離さない柊を見る。何で？

そんな柊にそんな疑問が沸く。そんなに震えるほど怖いのに、あんなに酷い事を言ったのに、何で！？

「何で柊は離れてくれないの？」

ぐしゃぐしゃであつた。遂には柚子の瞳には数えきれないほどの涙の筋が流れ出していた。

「……………ゆ…ず？」

柚子は分からない。柚子には分からない。何故、自分からこんなにも涙が流れ出しているのかを…。

離して欲しかった。離れて欲しかった。

柚子は修羅を見た時、『ああ、自分はやっぱり、この世界から逃げ

出す事が出来ないんだな』と感じた。でも、涙は出なかった。悲しくなる事はなかった。

次に柊が自分を止めに入ったが、修羅と同じテロリストである事を告げた。その驚いた柊の表情が嫌に心に残る。だが、それでも涙は出なかった。淋しくは無かった。だって、そうしなければ、修羅が柊を、シャロンが柊を、殺してしまうから…。だって、従わなければここにいる全てを破壊してでも、修羅たちは自分を連れていこうとするだろうから…。

だから、柚子は1人、暗い闇に向かう道だと分かっているても向かう事にした。

柊が、夏樹が、桜子が、自分のせいで傷付く事がないように…。1人、傷付く事を選んだ。

「掴んだその手を離すな…です」

「えっ？」

「掴んだその手を離すなです!!」

柊が立ち上がり、柚子のその手を握る。ふるふると震え、恐怖に震え、立つことさえままならないというのに、柚子の手を、その掴んだ柊の手は強く、強く握られている。

「父が言っていました。辛いことは誰にだってある。嫌なことは誰にだってある。だけど、その辛いこと嫌なことで幸せを離してはいけない。きっと、後悔する。幸せを離せば絶対に後悔する。確かに幸せを離さないことでも、傷付いたり痛かったりするだろう。それで、こちらでも後悔することにもなるだろう。だけど……だけど！」

「!？」

ググッ!!と繋がれたその手から柎の熱さが伝わる。冷えきった柚子の心に熱さが伝わる。

「掴んだその手を離すなです!! 離しても後悔するなら、離さなくとも後悔するなら。どちらも後悔するというのなら、幸せを掴んだその手を離さず後悔をした方がいいに決まっている……だから、離しませんよ? 柚子を離して後悔するなら、私は柚子を離さないで一緒に後悔した方が何倍もいいです!!」

掴んだその手を離すな? 掴んだその手を離すな! 掴んだその手を、離すなっ!!

柚子はもうぼろぼろだ。だけど、柚子はもうその手を離せない。柊は言った。柊は言ってくれた。

例え、傷付いたとしても。例え、後悔することとなっても。自分と一緒に後悔してくれると。自分と一緒にいてくれると。

柊は決して、掴んだその手を離してはくれないと…。

「……どういう、つもりなのかしら？」

だから、柚子はぼろぼろの表情で、手に持つ自分の愛銃をシャロンへと向ける。組織に与えられた道具。柚子が初めて与えられた自分の物。それは、人を傷付けるための道具だった。それは人を殺めるための道具だった。

「……柊を……傷付けるのは……ゆるさない!!」

初めて使った。初めて柚子はその禍々しくも呪われた殺人の道具を、守るために使ったのだ。

「……柚子？」

異変に気付き、ゆっくりと顔を上げる柊。そんな柊に柚子は、涙でぼろぼろな顔の中、特大の笑顔を作る。特大の幸せの笑みを浮かべる。

「絶対に守るからね…」

瞬間、その場から大きな笑い声が立ち上がる。そんな大きく上がる笑い声の主は修羅。

「ふっ、フハッ！？はっ、ははははっ！？クアーハッハッハッハッハッ！？ふっ、ふはっ、7号、なんだ？なんなんだ、その茶番劇はっ！？」

「あらあら、アドバンスの子が普通の子とお友達になるの？やあねえ、柚子ちゃんたら…。駄目だよ、アドバンスではない人間は、全て殺すのが『ユニファイ』の掟でしょう？」

シャロンがころころと笑みを浮かべる。それから、その腕に持つ刃を仕込んである扇子を振り上げる。

来る！？

シャロンがその手に持つ仕込み扇子から刃を飛ばしてくる。修羅がその禍々しいほどの拳を握り、自分たちに向かって来る！！

それに、柚子はぎゅっと柎を守るように覆い被さる。せめて、柎だけは守り通したいと彼女を守り、覆い被さる。

「おおおおっ、であいつ！？」

「きゃっ！？もう、次は貴方なの？もう、もうもついい加減にして……」

そこへ、戦意を喪失したはずの社が和服の女シャロンへとナイフを突き立てる。

「……走れ」

「えっ？」

「走れって、言ってんだよっ！！ここは俺が、俺が食い止める！！だから逃げる、さっさとここから消えろっ！！」

社の叫びに柊と柚子はコクンと頭を頷く。

柊はいま柚子の想いを確認した。いま柚子の想いを教えて貰った。柊にもう迷いは無い。たとえ、テロリストだったとして。たとえ、父を奪った者たちの仲間だったとして。たとえ、兄を傷付けた者たちと同じだったとして。いまは違う。いまは空海家の三女。自分の妹。大切な家族。

だから、柊は涙を拭う。だから、柊は柚子のその手を掴み走り逃げ出そうと歩みを始める。

柚子はいま柊の想いを確認した。柊の想いを教えて貰った。柚子にもう迷いはない。

一緒に居てくれる。例え、それが茨の道だとしても柊は自分と一緒に居てくれると言ってくれた。だから、逃げる。柊と共に、柊の腕を掴んで、離さず逃げる。

2人の少女は逃げる。想いを教えて貰った2人は逃げる。相手の想いを知った2人は、相手を想って逃げることにした。

「笑止…いや、笑えんな」

だが、その思いを余所に修羅は待っていてはくれない。

「ぐっ…逃げ…ろ」

「うふふ、弱いわ。少年くん、もう、おねんねかしら？」

だが、シャロンは待っていてはくれなかった。

2人の人間外存在に、2匹の戦闘兵器である化け物に社は一瞬でさえ時間を稼げない。社がナイフを片手にシャロンに挑もうとした

次の瞬間。横から修羅の鉄をも砕く拳を無防備に喰らい彼は地面にと口付けを交わす。ガタガタと再び立ち上がるうとするが、それをシャロンが上から足で押さえ付け許さない。

「……守る」

そんな修羅たちに柚子が再び愛銃を向ける。アドバンスでもその強さは上位にある修羅たちに勝てないと分かってても柚子は柵を守るために銃を向け立ち向かう。

「くくく、7号…アドバンスである我に、ただか9ミリの弾丸が効くとても？」

「くっ!？」

確かに、修羅にニューナンブ仕様のただか9ミリの弾丸が効くとは思えない。いや、それは目に見えている。なぜなら、この修羅のクローンである黒ミリタリーの男にさえ効かなかったのだ。そのオ

リジナルとなると、もはやそれは意味をなさない。

「逃げるです！ 柚子、行くです！！」

それを察してか、柊は心惑う柚子の手を引き走り出す。勝てないのなら、戦わなければいい。いや、逃げれば勝ち。この男から逃げ切れれば自分たちの勝ちなのだ。

「！？」

と、そんな逃げる為に元来た道に戻ろうと振り向いた柊の目の前には、あの黒ミリタリーの男。くっ、そういえばこの男もいたのか！？と柊はいまだ佇む黒ミリタリーの男に警戒をする。

だが、男は動かない。ただ、ぶつぶつと何かを呟いている。

「？」

よく分からないが、どうやら自分たちの邪魔をするつもりはないようだ。と、柊が安堵して再び走り出そうとした、その時。

「くくく、くはははは、我がクローン？我がレプリカ？くくく、ならばオリジナルを殺せばよい。ならば、我が唯一無二の存在になればよいではないか！？なあああーっ、修羅ああっ！？」

黒ミリタリーの男が体に巻き付けた手榴弾の1つに手をかける。

「ふむ、何が言いたいのだ、グールよ？」

それに柊たちを捕まえようと歩み出していた修羅が反応をする。

「この我に巻き付けたる手榴弾はただの手榴弾ではない。そう、お前のいう異常な兵器を使う我だ。この手榴弾も、また一個を異常となる威力を持つ」

そして、それが男の体に無数と巻き付けてある。もし、ピンを抜き

放ったとしたら？もし、その1つを爆発させたとしたら？

柚子は考える。あまりにも恐ろしい出来事を想定する。

爆発は、この商店街の一角を巻き込み、灰にする事さえ簡単である
う……

「つまりは我と貴様、どちらかが生き残り。どちらかがオリジナルとなるのだ……」

「ふん、馬鹿な……」

そうそんな馬鹿な事があるものか。柚子は黒ミリタリーの男を見上げる。だが、どうやら冗談ではないらしい。男は不敵に笑った。男は修羅の顔をみて不敵に笑った。

「いくら私のオリジナルとて、この爆発の中生きられるかな……」

「っ！？きさまああーっ！？」

「くけけけ、ばあか…どうみても…貴様のその拳より、我的手榴弾のピンを抜く手の方が早いっていうの……」

瞬間、辺りに閃光が走る。十秒も無い時間で、爆発の閃光が辺りに走り出す!!

「っ！？柚子、逃げるです、爆発が当たらない所に……くっ、駄目、間に合わない……柚子!？」

「守るから……柊は守るから……」

「離して、柚子!？貴女、爆発が…私を守るって、貴女の背中……」

爆発の中、柚子は思った。自分は何の為に生まれたのだろうと。人を殺すために生まれたのだろうか？他人を傷付けるためだけに生まれたのだろうか？

違う。きっと、このためだ。きっと、人を守るため。強い力を与えられたのは、弱い誰かを守るため。辛い人生だったのは同じ辛さの

誰かを守るため。

そして、こんなにも頑丈に作られたのは、こんな爆発の中でも大切な、大切な柊を守るため…。

柚子は柊の体を爆発から守るように覆い被さる。ぎゅうと抱いた柊の体が少しでも、爆発で焼けないように柚子は柊を守る。

例え、背中に痛みが走っても。例え、燃えるように熱く、肌が焼け焦げたとしても。柚子は離さない。柚子は決して離さない。

繋がれたその手を、柊を守るために、幸せを守るために、体で包んで、決して離さない！！

掴んだその手を離すな…

そうして、黒ミリタリー服の男のあまりにも突如な自爆によって辺りは真っ赤に燃える炎の海と化してしまった。辺りは爆発の衝撃で崩壊している。灰となり、瓦礫も燃える商店街。そして、そんな中でたった1つ。道端に崩壊した商店街の商店の1つ『八百屋・加賀』

という看板がたった1つ、ゴロリと燃え残り、そこに転がっていた。

第五十八話：交錯する者たちの戦場（４）『掴んだその手…』（後書き）

こんにちは。

ぐたり、くたくた、ぐったりのオオトリです。今回の話を振り返り一言……長いよ（笑）

オオトリ小説の通常の三倍はある量でしたね。詰めて詰めて詰めました。疲れました。

どうだったでしょうか？一応の山場だったんですが？ちゃんと書いていたでしょうか？

さて、第五十八話目です。柚子の過去でしたね。そして、彼女がこれまで何を思っていたのか、それが分かる話になっている…はずです（笑）

交錯する者たちの戦場。柚子と修羅の関係。修羅と黒ミリタリーの関係。そして、柚子と柊の関係。お分かり頂けたでしょうか？

この話はこれで一応の終わりですが、さらに交錯として、ビシユヌと月影が関わります。それは、もう気付いている方もいるかもしれませんがね。何を言っているのか分からない方にはキーワードとして『八百屋』と言っておきます。いえ、別にたいした事では無いんですけどね。答えは次話で書くつもりです。

それから、柚子と柊の関係。実は彼女たちの交錯はこれだけでは終わりません。どこか似ている２人。柚子が言った『親近感が沸く』、

『ただ一緒に居るだけで…』。こちらも、キーワードです（笑）

それでは、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございます。

ここで毎度ながら読んで頂いている読者様にお礼の挨拶をしておきたいと思います。お陰様で祝10万アクセスです。ご愛読、本当にありがとうございます！！

第五十九話：繋がる2つ

そこは、古びた洋館の一室。錆び汚れたその洋館で、その部屋は優しい色に包まれていた。

桃色の壁紙は、白いウサギが点々といくつも描かれており、その部屋に2つと置かれたベビーベッドにはとても小さな命が2つ寝かされていた。

「この子たちは、産まれてすぐに離ればなれになるのか…」

そんな2つの小さな命に、白いスーツを着た黒髪の男。男は、そとと2つの小さな命の頬に指先を触れさせる。

「あー…うー」

「……うー」

そんな男に、目覚めた2つの小さな命は小さく笑みを浮かべる。
無邪気に純真に、これから起きる事を知らずに彼女達は笑みを浮か

べる。

「あなたのせいでは、ありません……」

優しく男に声をかけた女性は、窓辺の木目調の椅子に腰をかける。それから、青く透き通る空を見上げる。雲1つない青空である。

「すまないな。俺がこんな組織などを作ったばかりに……」

「あなたは悪くない。この理不尽な世界に疑問を持つ事は罪じゃない。それを変えようと、あなたがやった事は……正しい事。私は、信じてる」

「アルテシア……」

「組織はあなたが思うより、深くなった。それだけ、あなたが望んだ物にならなかっただけ……あなたは悪くない。悪いのは、そんなあなたの気持ちを利用して組織を悪用した者たち……」

アルテシアと呼ばれた女性はゆっくりと立ち上がると、2人の娘たちが寝かされるその前で佇む男の頬にそつと手を宛がう。それに男は自分の顔を寄せ、ゆっくりと目を瞑る。

（俺はただ世界の不条理を見過ごせなかっただけ……。俺はただそんな不条理に苛まれる人たちを助けたかっただけ……）

男はゆっくりと瞑っていた目を開ける。そこに見えるのは、穏やかに笑う最愛の女性。自分とベッドに眠る2人の娘たちに微笑みを向ける最愛の妻。

（やっと、俺にも分かったよ。守るべきは目の前にある。何を守るべきかを見定めろ。貴方の言われた事が今になってやっと俺にも理解できる……）

そんな男はその部屋を後にする。ベビーベッドに寝かされる2人の娘たちの内、1人を抱き抱え。ベビーベッドに寝かされる2人の娘たちの内、1人を部屋に置いていつて……。父親である男はその部屋を後にする。

自分の作った組織は、暴走し始めた。自分の思想とは違った行動を取り出した。自分を除く、組織の幹部たち。彼らは世界に戦争を仕掛けるつもりだ。そして、その糧として組織のボスである自分の娘たちを利用するつもりだ。

逃げなければならぬ。逃がさなければならぬ。どこか遠い土地へ。彼女たちが幸せに、何も知らず平凡な世界で暮らせる場所へ。1人は自分が、1人は妻が…。

「なあ、お前はどこに行きたい？」

「あー…うー？」

名も無い小さな娘は、ただひたすらに笑みを浮かべる。ただひたすらに、不甲斐ない父親である自分の顔を見て、笑みを浮かべるだけなのであった。

夢を見ていた。黒ミリタリー男の自爆に気を失ってしまった空海
柊は、目を覚ます。そして、ついさっきまで見ていた不思議な夢の
事を思い出す。

それは本当に不思議な夢。見たことのない男と、見たことのない
女の夢。そして、隣に寝かされていたのは……

（……柚子？そうだ、柚子はどこです！？）

そこで、柊は自分を爆発から守ってくれた柚子の事を思い出す。

（くっ、邪魔です…）

柊は柚子を探そうと立ち上がろうとする。だが、彼女は立ち上が

る事が出来ない。爆発の勢いで、商店街の一角は瓦礫がれきの山と化して
いて、柊の体はその真下に位置していた。幸い、上半身は潰されず
に済んだが、足。柊の足には、重く固い商店のコンクリートがのし
掛かっている。

パチパチと燃える音が聞こえる。そして、暑い。どうやら、商店
街は爆発の影響で燃えているようだ。

「……………うぁ……………」

と、そんな柊にどこからか苦しそうな呻き声が聞こえる。

（柚子！？）

柊は頭だけを振り、辺りを確認する。瓦礫の山の下では、光も中
々に入ってこれず薄暗い。かろうじて、呼吸と這いずり回れるくら
いの隙間はあるものの。やはり、体は思うようには動かせない。と、
柊は自分が倒れる空間から、やや右斜めにあるクマのぬいぐるみを見
つける。

（これは… 柚子の方のぬいぐるみ…？）

そのクマのぬいぐるみは、数日前のクリスマスにサンタから貰った自分と柚子お揃いのクマのぬいぐるみ。どうやら、自分のぬいぐるみはどこか別の場所に行ってしまったようだ。柚子のぬいぐるみの方は遠くに飛ばずに直ぐ近くに落ちたようだ。そんなぬいぐるみの片腕がもっている事に柊は気付く。

そして、柊は片腕の取れたクマのぬいぐるみを見つけると同時に、その隣で倒れている柚子を見つける。

（良かったです。早く、ここを抜け出して家に帰るです……）

ああ、良かった、助かった。2人とも無事に助かったのだ。柊は、数週間前の幸せだった時間を思い出す。あの時は、全然そんな風には感じなかったけれど、いまとなつては、あれが一番自分が望んでいた世界だったのかもしれない。柊は、のし掛かるコンクリートから足を抜こうと力を入れる。

「っ！？」

抜けた足を引きずりながら、柊は狭苦しいガレキの隙間を移動する。ずさりずさりと這いずる柊に体の至るところから痛みが走る。どうやら、爆発で体を強く打ち付けたようだ。柊が少しの距離を移動するだけで体のそこら中に痛みが走る。

(……もう少しです。もう少しで柚子に手が届くです)

だが、それでも柊は動きを止めない。ずっと、気になっていた。どうしてだろう。自分は柚子に言い様のない安心感を覚えている。何故だろう。自分にも分からないこの気持ち。柚子も同じ気持ちなのだろうか？

柊はそんな事を考えながらずさりずさりと少しずつ柚子の倒れる場所へと向かう。と、そこで柊は気付く。柚子の周りの異変。詳しく言うなら、柚子が自分にやや背中を向けて倒れる地面にある異様。何やら色が、赤くないか？何か水みたいな物が地面に湿って、まるで雨で濡れたように、それでいてつんと鼻を貫く鉄の匂い……これは一体？

(……血だ)

ぐちゃりと濡れるそれは血。時間が少し経過しているためか、柊が指先で触れるとネバリとそれは凝固しはじめていた。しかし、これは誰の？そこまで考えて柊に言い様のない寒気が背中を襲う。

(ゆ、ず……ゆず、柚子！？)

言わずもがな、それは爆発から身を挺して柊を助けてくれた柚子のもの。彼女の背中では火傷を追い、さらには無数の傷痕が痛々しい程に残っていた。

「くっ！？」

柊は頭痛のする頭でいまだ定かではない記憶の糸を辿る。爆発があったあの時。柚子は自分を衝撃から守るために覆い被さり、そして、風圧で飛ばされた後も爆発で飛んでくるいくつもの尖った瓦礫から自分を守ってくれていた。

（そんな、柚子？……は、早く、早くっ！！）

柊は柚子の体をゆさゆさとゆする。息は、しているようだ。だが、息をする柚子の表情は、やはり苦しそうだ。早く助けなければ、傷を早く手当てしなければ。柊はガクガクと震える口元を一生懸命に食い縛る。

怖かった。柊はとても怖かったのだ。柚子が血を流している。それも大量に、死にそうなくらいに。人が目の前で死を迎えようとしている。柊は普通ならばこんなあり得ない非日常な状態に恐怖感を覚える。

（死んじゃう……死んじゃうよ……柚子が、柚子が、柚子が……柚子が死んじゃうよ！？）

涙が出てくる。鼻水が出てくる。止まらない嗚咽と震え。死なないで、死んでしまう、死なないで、死んでしまう？あまりの突然の状況で柊は何をしたらよいかわからない。ただ、ガチガチと止まらない口元の震えが舌を噛みそうだ。ただ、ガタガタと震える体は今にも吹き飛んでしまいそうだ。

どうしよう？どうしよう？どうしよう！？どうしたらいい！？何も思い浮かばない。どうしたら良いのか考えられない。

「シバの部隊は、徹底的にこの街を潰していくつもりでしょうね」

「ああ、どうやら、そのようだな…」

と、そこへ瓦礫の向こうから人の声。1人は女性で、もう1人は男性。

（ああ、神さま…）

助かった。柊は偶然か奇跡の出会いに感謝した。人がいる。瓦礫を抜けた向こう側に助けを求められる人間がいる。

（待っていて柚子。私が、私が助けをいま呼んで来ますからね）

柊はいまだ爆発の影響でズキズキと痛む体に鞭を打って瓦礫の山から這いずり出ようと体を動かす。

「ビシュヌ、もう良いだろう？行くぞ！？」

だが、そんな柊の思いとは他所に2人は先を急ごうと歩き出す。

（待つて！？私たちはここにいる！！助けて！？柚子が、妹が、怪我をして…）

ビキビキと傷んだ体から所々に痙攣が走る。痛い！痛いけど、それどころじゃない。助けて！待つて！柚子だけでも、彼女だけでもいいから…。柊は痛むからだを動かし必死に瓦礫の山から這い出る。

（待つてお願い、お願いだから、お願い、だから……）

やっとの思いで瓦礫の山から這い出た柊は先ほどの2人の人物を探す。

どこだ？どこにいる？と、柊はすでに百メートルは離れてしまった3人の人影を見つける。一番前に白い服の男性。次に桃色の服の女性と最後にスーツを着た男性。彼らはいまだ瓦礫の山から這い出た柊には気付かない。立ち上がらなければ。柊は必死に力を入れて立ち上がろうとする。が、足に力が入らない。どうやら、爆発の影響

で腰から下の体が思うように動かないようだ。

しかし、そんなことをしている間に3人は遠くへと行ってしまふ。立ち上がることが出来ないのなら、声を出すまで……。柊は地面に這いつくばったまま3人に助けを求める。助けてくれと声を出そうとする。

「……………あつ!？」

だが、声が思うように出ない。助けてくれと言つ一言が柊の口から出てこない。どうやら、ここにも爆発の影響があるようだ。喉がやられて柊の声が声にもならないかすれ声として商店街に響く。

「……………けてっ……………たす……………」

だが、届かない。無情にも一番後ろにいるスーツ姿の男性にさえ柊の声は届かない。もう駄目だ。3人とも自分が見える位置にいない。声が聞き取れたとして倒れる自分の体は瓦礫の山で見えない位置にある。

（……………助けて、助けてよ……………助けてよ、あにいいいいっ!？）

体が痛い。骨が折れているのかもしれない。ズキズキとわき腹に痛みが走る。信じられないほど足に感覚を感じられない。だけど、それがなんだ。頑張るべきはいまなんだ。柊は必死に立ち上がる。ビキビキとひきつる体に言うことを聞かせて、去り行く3人に助けを求めるために立ち上がる。

「（たす、けて…たす…けて）」

聞こえてない。振り向かない。一番後ろにいる男性は全く振り向こうともしない。駄目だ。もう駄目だ。力が湧かない。立ってられない。声が、もう、出てこない。

「（ふぐう、ふええ、うええっ……）」

助けての一言さえ言えないのに、出てくる鳴き声だけは一端だった。涙が止めどなく流れる。鼻水がだらだらと出てくる。悔しい、悔しい、悔しい！！こんな自分が悔しくて堪らない。柚子は自分を助けてくれた。身を挺して爆発から、飛び交う鋭い瓦礫から守ってくれた。なのに、なのに、自分はどうか！？何も出来ない。傷付い

た柚子を助けることも、助けを呼ぶことも自分は何1つ出来ない。

「（…たす…て…ねがい…おねがい…から…）」

もう、駄目だ。もう、聞こえない。もう、気付いて貰えない。

「（…おねがい…らから…おねがい…らから…）」

自分はいいから、自分は助からなくていいから。助けて、おねがいだから。助けて、おねがいだから。柚子を、大切な妹を助けてよ！おねがい、だから……

「たす…けて…」

いままで1番大きな声だったであろう。かすれた声の中、柊が絞

り出すように出した声。でも、届かない。結局1番後ろにいる男性に柊の声は届かなかった。ふらふらと柊の体が揺れる。もう、立ってられない。声も出ない。もう、どうにも、ならない。

「あつ…」

そんな消えそうで切ない声が聞こえた。それは自分の声じゃない。自分の声じゃない。では、それは誰の声？柊はふらふらと力が入らない足で踏ん張り、顔をあげる。

綺麗な女性。金色の髪を靡かせて、ゆっくりとゆっくりと近付いてくる女神さま。それは、先ほどの3人の内、真ん中にいた女性。

「いま、いま行きます。大丈夫ですか？怪我をしているのですね？大丈夫。もう大丈夫ですから…」

その女性はそう言うといふらふらと倒れる柊を抱き抱えようと手を伸ばす。

良かった。柊の頭にそんな言葉が思い浮かぶ。役にたった。柚子を助けてあげられる。柚子のために助けを呼んであげられた。柊は

ゆっくりと自分を抱えようと手を伸ばした金色の女性に身を任せようと前へと倒れる。

（良かった、助かる。柚子は助かるんだ…）

だが、そう思ったと同時に柊は目にする。信じられないものを目にしてしまう。先ほど金色の女神と一緒に歩いていた白いマントをした男。その男は腰にさした剣を取り出すと、思い切りに真上へと振りかざす。

（危ないっ！？）

柊は金色の女性が狙われていると、彼女にそれを告げようと口を開く。だが、声が出ない。声が出せない。ああ、どうして！？なんで！？柊はいま起きている状況が分からない。仲間であるはずの金色の女性に何故、白いマント服の男性は剣を向けるのか…。柊は必死で金色の女性に伝えようとする。声にならない声で、思うように動かない体で…。

だが、それは金色の女性を狙ったものでは無かった。その振りか

ざされた剣は金色の女神を切り裂くものでは無かったのだ。禍々しくも振りがざされた白いマント服の男の剣。それは……

「!？」

それは、いましがた助けを求めた自分。柊へと向けられた斬撃であつた。

(……ゆ、ず)

ざしゅっ!!と、斬られた柊の体のはね上がり、金色の女性が驚いた表情ではね上がった柊のその体を抱き抱える。

「ぶ、ぶらぶま?…ブラフマー?…ブラフマアアアッ!？」

金色の女神がそんな白いマント服の男に怒号をあげる。叫びもとれる怒号で男に怒りをぶつけている。そんな金色の女神の叫びを聞きながら柊はゆっくりとゆっくりと、真っ暗な闇へ意識を落とし

ていくのであった。

「どういっつもりだ、飛鳥？」

紺のスーツに身を纏ったやや厳つい顔の男が赤ん坊を抱えた白ス
ーツの男に話かける。

「ですから、この娘を預かって頂きたいのです…」

「この子は、お前の娘なのだろう？」

「はい。アルテシアとの間に出来た双子の娘です」

白スーツの男は紺のスーツの男に自分の娘を渡す。渡された男はやや困惑した表情を見せるが、ぱちくりとまん丸の目玉をさせた赤ん坊にその厳つい顔を緩めてしまう。

「飛鳥、お前。あの時、イレイサスでの戦いの後、俺たちの前からトムと一緒に消えちまった後に何があった？もしかして、いま世間を騒がしているテロ犯罪組織『crown』となんか関係あるんじゃないだろうな？」

「それは…」

「あるんだな？なら、教えて。このテロ犯罪組織『crown』は、イレイサスで俺たちがぶつ潰した兵器開発機関となんか関係あるのか？いや、率直に聞く。こいつらはあの時と同じ奴らなのか！？」

紺のスーツの男は、益々に顔を厳つくしかめて白スーツの男を睨み付ける。白スーツの男は何も語らない。ただじっと紺のスーツの男を見ている。

「お前が『c r o w n』なのか？」

それに対し紺のスーツの男は容赦なく質問を問いかける。だが、やはり白スーツの男は答えない。

「答えろ、飛鳥^{あすか}流^{ながれ}！お前がテロ犯罪組織『c r o w n』なのかと聞いている！？」

怒号をあげる紺のスーツを着た男。だが、それでも白スーツの男は答えない。

「……答えろ、流」

「流……か」

白スーツの男は呼ばれた自分の名前にゆっくりと息を吐く。

「貴方だけでしたね？私の名前を下の名前で呼んでくれたのは…。
他の人たちは、名字の飛鳥が私の名前だと思ってそちらばかりを呼んでいましたから…」

白スーツの男はそう言うと紺スーツの男に背を向ける。

「待て、流！！話はまだ…」

「いずれ、また出会えます。その時は、テロ犯罪組織『crown』の飛鳥流として、貴方の敵として」

男はゆっくりと歩き出す。振り返ることなくただ前を見て。

「娘を頼みます。私が頼れるのは貴方だけですから…。名前はまだありません。貴方が付けてあげて下さい。貴方が名付け親なら妻も喜びます」

「一体、何だつてんだ…」

「次期に分かります。では、また会いましょう、玄治先輩」

そうして、白スーツの男は消えていく。残されたのは紺のスーツを着た厳つい顔の男と、くりくりとまん丸目玉でその男の顔を凝視する小さな赤ん坊。

「ちっ、こっちにだつて都合つてもんがあるんだぜ、なあ、流よく？マリアの奴が居なくなっちゃって、それで夏樹がぶっ壊れちゃって、しまいには養子をお願いしてた施設から、女の子が家に来ちゃって……」

がりがりと男は頭を掻きむしる。全く、どうなつてやがる。本当は飛鳥流にもつと話を聞きたかった。テロ犯罪組織『crown』について洗いざらい吐いて貰うつもりだった。赤ん坊の話を聞く前の自分はそれほど怒りに燃えていた。妻のマリアとイレイサス王国と組織『crown』。

だが、それもこの表情いっばいに笑う赤ん坊の前では消え失せてしまった。それほど、それほどの笑顔。そう、まるで、天から降り

た天使のような…。

「あうー…うー…」

「ふっ、夏樹もこの子に触れればぶっ壊れた心も治るかもな…」

妻が自分たちの前から消えてしまった。それは、分かっていたことだった。想定していたことだった。ただ、母を無くした息子があれほどに心を壊すことになるとは、自分でも予想外であった。

「やつぱり、あいつの中にあるんだな。奴らが作った最も忌々しいモノが…」

息子に背負わせた十字架。取り返しの付かない運命。あの時は良い方法だと思っていたのに、まさか、いまになって息子の方にその症状が表れるとは…。

「……ううー…あうー…」

「あー、よしよし、家に帰ろうな。これからお前は空海家の娘だぞ」

男はゆっくりと歩き出す。後悔したところで始まらない。一度歩んだ道を振り向けど、戻ることは許されない。ならば、まだ見ぬ未来で取り返せば良いだけの話。だから、男は立ち止まらない。決して、歩みを止めようとはしない。真っ直ぐに、ただひたすら真っ直ぐに…。

「ああ、そうだ。決めた…」

男は手にある新たな家族を抱え天を仰ぐ。にっこりと笑う赤ん坊の笑顔の下に空海玄治は、その娘に名前を付ける。

「鬼をも退け、魔を祓う。幸せを運ぶクリスマスの日、必ず飾る幸福の象徴」

娘はいまだくりくりまん丸の瞳を輝かせ、自分を天に掲げる男を

凝視する。そんな娘に男はにこやかに笑い一言告げる。

「お前の名前は柊だ」

第五十九話：繋がる2つ（後書き）

こんにちは。

お久しぶりのオオトリでございます。いままで散々言ってきたキーワード、お分かり頂けたでしょうか？つまり、月影とブラフマーが合い対峙した場所と柊柚子の修羅たちとの対峙の場所が同じ商店街の一角であり。それを繋げる物が八百屋・加賀の看板、であったという訳なのですか？

そして、ついでに言うとしシュヌがその時、助けたピンクのトレーナーを着た少女、それが…。

とりあえず、第五十九話目でございます。繋がる2つ。繋がったのは何も話だけではございません。その話に出てくる2人の人物。数奇な彼女たちの運命。そして最後にそんな彼女たちを待つ、驚きの波乱の予感。……あくまでも予感（笑）

ああ、もうそろそろ大詰めだっ感じてなのに、また変な所で話が大き…。本当にこれ終われるのでしょうか？途中で投げっぱになりそうなヘタレな自分が居ます（笑）。

しかし、ここまで読んで下さっている皆様の期待と自分の欲望の限り、この小説・心からを書いていきたいと思えます。皆様、変わら

ぬ暖かい視線と応援のほどをよろしくお願い致します。（よろしければ、感想欄やメッセージにでも感想を書いて頂けると作者の意欲と力になりますのでそちらもよろしくお願い致します）

それでは、今回はこの辺りで失礼致します。ありがとうございました。

そして、残るは桜子の出生…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7486c/>

心から

2010年10月17日03時21分発行